
天使の溜息、108っ！

青楓ユーカリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の溜息、108つ！

【Nコード】

N4645T

【作者名】

青楓ユーカリ

【あらすじ】

普通の高校生花嵐は、ある日、天使と名乗る謎の生物と遭遇する。天使の名はリンネ。天使の卵・テナタマである彼女は、正式な天使になるための108の試練を受けるため、地上へやって来たのだと言う。何の因果か、リンネのパートナーとなり彼女のテナタマ試練を手伝う羽目となった花嵐。
そんな二人による、ちよつと非日常なご近所ファンタジー。

各話がそれなりに長いので、それなりに暇な時、それなりの覚悟

で
お
読
み
下
さ
い
。

第0話「花と嵐と天使の溜息　〜花嵐の場合〜」

花に嵐　…　物事には、とかく支障が起こりやすいという意味の諺

第0話　「花と嵐と天使の溜息　〜花嵐の場合〜」

季節は春。

いつもの時間、いつもの場所で、いつもの目覚まし時計の、いつもの音声が部屋中に響き渡る。

「おはようございます、今日もいいお天気ですね。さあ、今日も一日頑張りましょう」

録音された某声優のその美声に、いったいどれだけの目覚まし効果があるのかは甚だ怪しいところではあるが、いつも通りに、三度その聞き慣れたセリフが繰り返された後、辺りは再び静寂に包まれる。

が、それも束の間。

目覚ましから数秒後、大きな衝撃音と共に「ぎゃあああああ」という、およそ朝には似つかわしくない少年の奇声が部屋中に響き渡った。

それは、とある一家のいつもと変わらぬ騒がしい朝の1シーン。

ここは某県、某市、花家。

目覚まし代わりにみぞおちにヒップドロップを食らい、痛みと反

動でベッドから転げ落ちて目を覚ます。

そんな朝の恒例行事を一つこなし、僕はいつも通り制服に着替え、いつも通り朝食へと向かった。

どうやら今朝も僕がビリけつ。リビングには、僕以外の家族は既に全員集合しているようだった。

「にひひひ、お早うにいいい。今朝の目覚ましの加減はどうだった？」

朝から僕にヒップドロップをプレゼントしてくれた張本人であり、非常に兄想いな僕の妹、「団子」が僕に確信犯的な笑みを向ける。

いかに小学生とは言え、ゆうに30キロはあるう体重が毎朝毎朝僕のみぞおち目掛けて落下してくるのだ。僕の骨と臓器達が今日の今日まで平穩無事でいられたこと事態、ある意味奇跡だと言えた。

「おはようダンゴ。その目覚ましだけど、もう少しだけ手加減してくれないかな？ お前のお尻と体重は凶器なんだから。というよりもっと普通に起してくれないかな。僕の命に関わるから」

そんな僕の必死の懇願を受け、すかさずダンゴが反撃する。

「そんなの知らないもん、れでいの前でお尻とか、体重の話をするにいいが悪いんだもん。それにダンゴじゃなくて団子だかんね」
彼女は名前の話をする、とたんに機嫌が悪くなる。それを失念していた僕は、早々に話を逸らすべく視線をキッチンの奥へと移した。

上の妹「有須」が淡々と朝食の用意をしながら言った。

「兄さん、毎朝毎朝いい加減にしてくださいね。お願いですから、二度寝せず自分でさっさと起きて来ててください。兄さんの奇声は、近所迷惑そのものなんですから」

有須の右手に持つ包丁が不気味に煌めく。その顔は確かにニッコリ微笑んではいるものの、目の奥はまったく笑ってない。

怖い。怖いです。有須さん。そして、お願いだから一旦包丁は横に置いておこう。それじゃ、脅しにしか聞こえないから。洒落にならないから。

「ぐわはははは、相変わらず朝から元気だな」嵐は「いやいや、あんたが一番元気だよ、親父。」

「ところで、高校の方はどうだ？ 勉強はついていけるか？」

その質問は昨日も一昨日も聞いたよ、親父。

「ぼちぼちだよ。至って普通」

僕は適当かつ投げやりに答え、目の前に並べられた朝食に手をつけていく。

この春から、僕は高校2年生になった。いい加減高校生活にも慣れきった今日この頃。少なくとも僕は、二度寝が出来る位にたるんだ日常生活を送っていた。

唐突だが、我が家は花屋を営んでいる。「花」なんて、妙に可愛らしい苗字だけに、花屋である。非常にシンプルで分かりやすい暴露ついでに、改めて僕の家族の紹介。

まず、花家の長男である僕の名前は「花嵐」という。ちなみに、僕はこの名前と苗字が大嫌いだ。

小学生の頃なんて、男の癖に花なんて女々しい奴と笑われ、中学ではその顔で嵐？ いっぱしにジャニーズ気取りかよ、という実に中学生らしい理不尽さでさんざん馬鹿にされた黒歴史。思い出したくもないトラウマだ。

朝からぐわははは、なんてテンションMAXで笑っているのが僕の父、「花見琴」。名前すらも豪快な、実に分かりやすい単純熱血下品な、だらしない親父である。

お次は我が妹その1、「花有須」。親父と兄がこんなだからなのか、やたらしつかりしている中学3年生。ただし、怒ると恐ろしく怖い。僕なんて尻にしかれまくり状態。親父を差し置いて、この家の影の支配者といっても過言ではない。

最後は妹その2、「花団子」。通称ダンゴ。毎朝僕にヒップドロップをかましてくれる元気すぎる小学生。どんな事でも、大抵は笑って誤魔化せると思っっている未っ子体質。結果、ハイジもびっくりわんぱく少女に成長。

さつきもちよつと触れたけど、我が家は花屋をやっている。あんな豪快親父が顔に似合わずお花屋さんなのだから、世の中とは本当に不思議なものである。

記憶が曖昧で殆ど覚えていないのだが、花屋の経営は今では亡き母さんとの約束らしい。母さんは、団子を産んで直ぐに亡くなってしまった。そんな母さんの夢が家族で花屋をやることだったらしい。

その母さんが亡くなった後、親父は1週間引きこもった。今思い出してみても、それはもうあの豪快親父からは想像できないほどの衰弱っぷりだった。が、1週間後、何を思ったのか、家族になんの相談もなく勝手に仕事を辞め、勝手に花屋を開いてしまった。なんともワンパクな親父である。ちなみに今は、何とか家族がやっつけられるくらいの繁盛はしている。

「…さん、兄さん、どうしたんですか？ 箸を持ったまま固まっちゃって」

「ああ。こうしてみると、ウチの家族って変わった名前が多いよなーって思ってる」

「にいにい、それって団子のこと？」

ダンゴがギロリと睨んできた。まあ、たかが小学生に睨まれたくらいで動じる僕ではない。

「そうそう、だってダンゴだろ？ 十分変な…って、ゴフオあッ」
ダンゴの拳が宙を舞う。ついでに僕の噛み掛けの玉子焼きも宙を舞う。

僕としたことが、ついついモノローグが口をついていたらしい。というより、食事中に拳が飛び交う家族団らんがどこにあるのか？
僕は頬を摩りながら再び玉子焼きに手を伸ばした。

「だんちゃん、食事中は静かに！ それに良い名前じゃない、団子って」

美味しそうで。そう小声で呟いた有須を、僕は見逃さなかった。

「ぐわはははは、そうだぞ、多少変でも気にするな団子。それが

個性というやつだ」

親父が近所迷惑も考えず、能天気にも全力で笑う。

「おいおい、あんたがつけたんだろ。まあ、親父だって十分変な名前だけどね」

僕がそう言い終わるか終わらないかの間に、団子の拳は親父へと放たれた。が、流石は親父。箸と茶碗を持ったまま、ひょいと避ける。とどまることを知らないダンゴの拳は案の定、僕のところには。

残念無念、生まれ着いての文系もやしっ子体質の僕には、二人のような超人運動スキルは持ち合わせていない。

僕は壮大にお茶を吹きながら吹っ飛び、椅子から転げ落ちたのだった。

何だか体中が痛い。それに、心なしか頭がに霧が掛かったような、何だかぼーっとした気分がさっきから続いている。

僕は、朝から重苦しい足取りで、高校への通学路をひたすらにダツシュしていた。

なんでウチの家族って朝からあんなに元気なんだろう。某海鮮系家族も真っ青なワンパクっぷりである。

微妙についた寝癖を気にしながら、坂道を登る。あれ… そういえば、何かとてつもなく重要な事を忘れていたような気がする。何だろう？

鞆を漁ってみるものの、財布もケータイもある。数？の宿題は持ったし、英語の辞書も持った。… ダメだ、思い出せない。

その思ったのも束の間、いかにも重く鈍そうな擬音を放ちながら、僕の後頭部をナゾの衝撃が襲った。まるで鉄板で思い切りぶん殴られたような、そんな衝撃。

ああ、目から星ってホントに出るんだ。

「あ、ごめん、嵐、大丈夫？ でも、酷いよ、嵐、私を、置いて行

「っちゃうなんて」

目はチカチカ光っていて見えないけど、この声は。

「おはよう月美ちゃん、それとっておくけど、僕を殺したって何のメリットも無いぞ」

「うん、知ってる。でも嵐が、一人で行っちゃうのが、悪いと思うの」

女性にしては長身で、綺麗な黒髪をポニーテールとして束ね、僕の前に現れた制服姿の人物。彼女の名は十五夜月美。我が家のお隣さんで、世に言う幼馴染ってヤツだ。

我が家の女性陣と違い口数こそ多くは無いものの、無口キャラってわけじゃない。ただ、ちょっとだけ語り口が独特で、ちょっとだけ不思議ちゃんが入っているだけ。いわゆるマイペースな人なのだ。まあ、恥ずかしげもなく言うならば、ちょっとくらいの天然は許せてしまうくらいの、僕の自慢の幼馴染だった。

「ごめんごめん、今日は朝からちょっとぼーっとしててさ。それと、カバンに鉄板を入れるのは辞めようね？ …… 命に関わるから」

「エスパー？」

僕の後頭部を殴打したカバンから、謎の鉄塊を取り出すお茶目な月美ちゃん。と言うか、本当に入れていたらしい。

無骨な鉄塊と女子高生との間に、どんな素敵な関係があるのか是非とも知りたいところではあるけど、今は命に関わるのでとりあえず没収。

「それはそうと嵐。嵐がぼーっとしてるのは、いつものことだけど、私を忘れるなんて、やっぱり、今日は、可笑しいと思うの」

僕以上にマイペースな月美ちゃんにそれを言われるのは、ちょっと納得出来ないところもあるけど、彼女の言う事も一理有る。

普通、何年も一緒に登校している幼馴染を置き忘れるなんてことが有り得るのだろうか？ これはもはやぼーっとしているとか、寝ぼけていたというレベルを逸脱している気がする。

「本当にごめん、でも確かに可笑しいかもしれない。朝から有須に怒鳴られるわ、ダンゴに潰されるわ、殴られるわ…」

「うん、嵐。それ、いつものこと、だよ？」

悲しいかな、確かにいつもの事だった。

「うーん、でも何か変なんだよ。いつもと違うと言うか、体に妙な違和感があると言うか」

「…何かあるのかも。気をつけてね、嵐。私の予感、宝くじの未当くらい、当たる、から」

月美ちゃん、それって微妙。

こうして、僕の人生において最も数奇な1日が、その幕を開けた。

桜ヶ丘第二高校2-1A教室

「おはようさん。今日も揃って登校とは相変わらずだな、メガネ夫婦」

のっけから実にツマラン冗談を飛ばすこの男。一応、僕の友人でありこのクラスの委員長であるこの男。名前を堅氷至と言う。

古今東西。委員長と言えば、お下げが似合う真面目な優等生と相場は決まっている。誰だっけと思う。僕だっけと思う。

それなのにこの男ときたら、そんな僕の思いを知ってか知らずか、自ら率先して委員長になるといふ暴挙に出た。何と言う鬼畜の所業とどのつまり、男の委員長なんて誰一人として得しないですよって、う、そんな話。

「よっ、イタル。僕も月美ちゃんも普通にメガネ掛けてるっただけだ。それで夫婦だなんて、いささか安直すぎるぞ」

僕は目が悪くなりメガネをかけるようになった、ほどなくして月美ちゃんもメガネをかけるようになった、ただそれだけの話。

「ひゃっひゃっひゃっ。そうか？ まあ、別にメガネだけってわけじゃないんだけどな」

まだ何か言いたげなイタルを放置して、ふと月美ちゃんの様子を伺う。

「と言うか月美ちゃん。頬を染めてるのは何故？」

「べ、別に、何でも無い、よ？」

そう言っただけでそそくさと席へついてしまふ月美ちゃん。やっぱりマイペース。

そんな僕らを尻目に、イタルが藪から棒に言う。

「そう言えば嵐、聞いたか？ 流石にお前でも雨守三姉妹って知ってるだろ？」

「いや、知らない。誰それ、芸能人か何か？」

雨守？ そういえばどこかで来た事があったようなないような。

正直言っただけは、人の顔と名前を覚えるのが苦手なのだった。

「お前って相変わらずこの手の話に興味が無いのな。俺達の一つ上の学年の美人三つ子姉妹の話だよ」

この男、普段は委員長なんてやっててかなりの堅物。っぽい見た目とは裏腹に、この手の噂話やゴシップネタが大好きなのだ。

まあ、人の趣味にとやかくいうのも野暮というもの。僕は黙ってイタルの言葉に耳を傾ける。

「雨守春雨、五月雨、小雨の三つ子ちゃんでさ。それぞれ学術、運動、芸術の分野でウチの高校じゃ超がつくほど有名なんだよ。で、3人ともこれまた超美人なわけよ。この三姉妹目当てでここに入学したやつなんてざらにいるんだぜ？ あ、ちなみに俺は次女の五月雨さんが好みなんだけどな。ひゃっひゃっひゃっひゃ」

「へえ、そんな有名な人達が居たんだ。この学校に一年以上も通ってるのに、全く知らなかったよ」

オーバリアクション気味に溜息をついたイタルは、さらに続けて語る。

「それと、もう一つ。この三姉妹、超がつくほどの雨女なんだよ」

「雨女？ それって、雨男とか雨女のアレか？ 肝心な時に雨が降るアレか？」

「そうそう、先輩達が出る大きな大会や、大きなコンテストがあるときなんかは、何故か必ずといっていいほど雨が降るんだとよ。ちよつとミステリアスだろ？ 謎めいているだろ？ そこがまたいーんだよ。分かるか嵐？ お前なら分かってくれるよな？ な？」

それってミステリアスというより、ただ単に迷惑なだけだろ。一瞬だけそんな風に思ったものの、イタルがあまりに真剣な顔をしていたため、僕はその言葉を飲み込んだ。

「いや、僕にはその良さが全く理解できないね。それより、その三つ子ちゃんがどうしたんだ？ 喧嘩でもしたの？」

「え、良く分かったな。お前が時々見せる感の良さってやつを、何かに生かせないか考えちまうね、俺は。で、だ。そうなんだよ、あくまで噂なんだけだよ、喧嘩したらしくて。事実、今まで1日たりとも学校を休んだこと無かったその三姉妹が、今日は揃って休んでるんだよ。それによ、何と言っても今日は雨。こりゃ、何か有ると思うだろ？ 絶対何かあったんだって」

ますます理解できない。僕は溜息を一つついてイタルに言い放つ。

「何かって何だよイタル、それに雨くらいいつだって降るし、喧嘩くらい誰だってすると思うけど。お前も知ってるだろ？ うちの妹達だって」

と、そこで僕等の担任が教室へと入ってきた。

「おつ、話はここままでだな。ほら嵐、お前も席についとけ」

委員長が珍しく委員長らしいことを言ったので、僕はその言葉に素直に従うことにした。

さて、今日の一限目は何だったかな？ ああ、数？か。朝から数学とはついてない。これはもう間違いない眠くなりそうだ。

「チユッ」

僕がそんなことを思っていたその瞬間、僕の頬に何か柔らかいものが当たった感触共に、僕の体を強烈で急激な睡魔が襲いかかる。

あれ、何だろう、まだ授業が始まったわけじゃないのに、意識が…
それに瞼が自然に下りてくる…。

まるで何かに誘われるように、導かれるようにして、僕は、その意識を深き眠りの底へと手放したのだった。

「嵐。嵐、起きて、嵐」

聞き慣れた月美ちゃんのその声で、僕の意識は一気に覚醒していく。

「うううう、ここどこ？ 今何時？」

「嵐、登校してから、ずっと眠ってたんだよ。ちなみに、今は、お昼休み」

何だか体が凄く重い。気分も悪い。眩暈もする。理由は分からないものの、僕のステータスはそんな最悪な状態だった。

「ごめん、月美ちゃん。ずっと眠っておいて何だけど、体調が良くないみたいなんだ。今日は早退するね」

「うん、分かった。無理、しないで。ノート、嵐のぶんも、とっておくから」

流石は月美ちゃん。どっかの悪ノリ委員長にも見習わせたいくらいだ。

「ありがとう、月美ちゃん。この借りはいつか返すから。それと、じゃあなイタル、委員長として先生に報告頼むよ」

僕はそれだけ言い残すと足早に教室を後にして玄関へと向かった。

「何なんだこの状況は。今まで風邪くらいしか引いたこと無いってのに。こういうときはやっぱり病院に行ったほうがいいのか？ とにかく、一旦家に帰ろう」

お昼休みということで、廊下は生徒で溢れかえっている。

「ねえねえ聞いた？ 雨守先輩、今日学校休んだんだってー。珍しいよね」

「あー、聞いた聞いた。姉妹で喧嘩したってという話だよ。あんなに仲のいい姉妹でも喧嘩ってするんだねー」

偶然にもそんな会話が僕の耳に入ってくる。

雨守。確かイタルからそんな話を聞かされたっけか。

どうやら雨守3姉妹ってのは、僕が思っている以上に有名で、その噂も想像以上に広まっているらしいかった。

僕は傘を広げ、玄関から校門を出る。

それにしてもこの雨、梅雨にはまだ早いつて言うのに、ここ数日ずっと降り続いている。この時期の雨ってなんて言うんだっけ？

時雨？ 春雨？ ああ、五月雨か。この雨が晴れば、きつと五月晴れが広がることだろう。

「それにしても疲れた。本当、何だろうこのけだるさ。まるで何かにとり憑かれたかのような」

重い足取りで、我が家へと向かおうと足を踏み出したその刹那。

その声は、どこからともなく聞こえてきた。

「とり憑くななんて失礼ね。あたし、幽霊じゃんだから」

「え？」

「え？」

「ごだまでしょうか？ いいえ誰でも。」

慌てて後ろを振り向いたものの、辺りに人気はない。そして前方にも、同じく人気はなかった。

「気のせい、なのか？」

「まずい、これはちよつとまずい。幻聴まで聞こえてきた。何だ？」

「次は金縛りか？ まさか本当に幽霊でも出てくるとか？ ってこ」とは僕、まさか憑かれてる？

僕がそんな風に思考を巡らせていたその時、再び幻聴が聞こえて

きた。

「上見てよー、上」

その幻聴に従い、僕は視線を上に向け。

「上？ ……は？」

その光景を見た途端、瞬間的に凍り付く僕。

どうやら僕の予想には若干の修正が必要なようだった。まあ、幽霊にしろ宇宙人にしろ、僕のこのリアクションは恐らく変わらなかつただろうけど。

「は？ はあ？ はあああ？」

僕の目の前には、腕組みをした一人(?)のコスプレ少女が…

浮かんでいた。

「こんにちは、あたしは天使なのです。えっへん」

「これはご丁寧に、どうもこんにちは。僕は普通の人間です、有難い事に」

そうじゃない、そうじゃないだろう、僕。

目の前のあまりに受け入れがたい光景に、ついつい普通に挨拶を返してしまった。何だろうコレは。どういうことだ？ 幻聴の次は幻覚と来た。

「まさかダンゴのヒップドロップを毎日毎日くらいすぎて、僕は本当に可笑しくなったのか？ それも相当重度に」

「にやははは、違う違う… まあ、それも少しあるけど」

「あるんかい！」

僕は涙目になりながらも反射的にそう突っ込んだ。相手が何であり、僕はそう突っ込んだ。我ながら、悲しき突っ込み属性である。

「でも良かったー、やっとあたしを認識^{みて}くれたね」

さて、ここでちょっと状況を整理してみよう。今、眼の前の物体Xは何て言った？

そう、天使だ。てんし、テンシ、天使？

言われてみれば、天使の代名詞である白い翼が生えているし、ご丁寧に頭にはワツカまで浮いている、おまけに純白のワンピース着

用。これは確かに、天使だと言われれば疑いようも無く天使だ。それに、ぷかぷか浮かんでいる時点で間違いなく、普通の人間じゃない。

眼の前の自称天使は、僕にそれ以上に考える時間を与えず、半ば一方的に話を続ける。

「でねでね、突然なんだけど、あたしに力を貸して欲しいんだ。天使のお願い、勿論聞いてくれるよね？」

自分の頬をつねるくらいじゃ到底足りないかと判断した僕は、たまらず自らの頬を3度平手打ちした後、進行方向を変えた。

「あれ、どこ行くの？ 君の家はそっちじゃないでしょ？」

「ちよつと待て、何で僕の家場所を知ってるんだよ？ それに、これから僕が向かうのは家じゃない、病院だよ、病院」

平穩をこよなく愛しているはずのこの僕が、極々普通の日常生活を何より望んでいる筈のこの僕が、一体どうしてこうなった？

どうやら月美ちゃんのカンが当たったらしい。

ああ、これから僕に待っているのは、長く苦しい入院生活と、気の遠くなるようなりハビリの日々には違いない。

さよなら、皆。さよなら、僕の青春の日々。こんなことならもつと青春つばいことしておくべきだった。例えばあんなことや、こんなこととか、ふひ、ふひひひひひ。

「待って、待ってよ。ちゃんと説明するからー。脅かす気は無かつたの。君ならきつと信じてくれると思っただよー」

その根拠がいったいどこから出てきたものなのか、僕には到底理解できなかつた。

そもそも天使？ 今の御時世、そんなの小学生だって信じちゃいない。

疑問と疑惑が次から次へと溢れて来る。

が、そんな僕の疑問を吹飛ばすかのように、天使と名乗る謎の少女型浮遊物体は、まるで人間の少女のようにえんえんと声を上げ泣き始めた。

「ここだけ集中豪雨ですか。そうですか。」

「って、え？ 泣いてる？ 泣いてるのか？ 僕が泣かせたのか？」
相手が天使と名乗る得体の知れない謎の生命体だと言うことも、
そもそも今が異常な状態だということも忘れて、僕は酷くうるたえ
てしまっていた。とある事情により、僕にとつて、女性の涙はトラ
ウマといつてもいい代物だったからだ。

顔は青ざめ、全身から汗が噴出し、震えが止まらなくなる。

「分かった、聞く、聞くよ天使様。聞くからさ、お願いだから泣か
ないで」

僕は必死の形相で懇願した。それこそ、手を合わせて拝むように
して懇願した。自称とはいえ、天使に対してこのポーズをとるのは、
かなりシニールな光景のような気がした。

体調は最悪、おまけに雨。そんな中、天使と名乗るわけの分から
ない生物に、わけの分からないことを言われる。

むしろ泣きたいのはこちらの方である。が、僕のそんな気持を知
つてかしらすか、自称天使は言う。

「ほんと？ いえーい、やったねー」

彼女はくるくるとその表情を変える。つまり。

「嘘泣きかよド畜生！」

僕は力なくぐったりとその場に座り込んだ。だが、そんな僕に対
して天使様は、後悔の時間すら与えてくれないらしい。

「それじゃ、まず自己紹介からだね。あたしの名前はリンネ。天使。
もちろん本物だよ」

彼女は得意気にまくしたてる。

「あ、そうそう、言い忘れてたけど、あたしの姿は君にしか見えて
ないからね。取り敢えずは」

「… え？」

辺りを見回すと、いつの間にか集まっていた通行人達が、僕の方
を見ながらひそひそ話をしていた。

あまりの異常事態に、僕は周りの事が全く見えていなかったらし

い。

つまり僕は、衆人環視の中、先ほどからずっと一人芝居を繰り広げていたことになる。天使云々より、これでは僕が不審人物。

「そういうことはもつと早く言えよ、ド畜生め！」

顔を真っ赤にした僕は、嬉しくも無い本日2度目となる本気ダッシュでその場を離脱したのであった。

一先ず人気の無い路地に避難した僕は、自称天使を問い詰める。

「そうか、分かったぞ。今朝から頭がぼーつとしてたのも、この体調の悪さも君のせいなんだろ？ 絶対そうだ。間違いない」

例えば、もしも朝からの変調がこの天使のせいだったとして、他の人になんて説明すればいいんだろう？

いやー、うっかりうっかり。実は僕、天使にとりつかれちゃいましたねー。まいったまいった。

… そんな事、死んでも言えない。言えるわけがない。

そう考えると、天使のせいであって欲しいような、無いような。

僕の気分は若干複雑だった。

「んー、たぶんそうかも。まず、頭がぼーつとしてたつてのは、嵐の… そうだ。ねえ、君の事これから嵐って呼んでいい？」

「別に構わないけど。っていうか、当然の如く僕の名前も知ってるんだな。本当に何者なんだ君は？」

「良かった、それでね？」

僕の疑問はスルーですか、そうですか。

「君と私のラインを繋げたんだ。だからこうやって天使であるあたしと会話が出来るとってわけ。どう？ これまでのあたしの話、ついてこれてるかな？ 信じてくれたかな？」

はっはっは、はっはっはっは。はあ？

「そんな胡散臭い話、そう簡単に信じられると思うか？ 悪いけど、

僕はそんな話を簡単に信じちゃうような電波人間でも、厨二病患者でもないんでね」

「絶対ホンとのホンとだよー、だってさー、流石に天使が嘘ついちゃまずいでしょ？」

彼女は、飛び切りの笑顔で僕にそう言い放った。

うっ、良い笑顔だ。少なくとも彼女の笑顔については、確かに天使のソレだった。

とはいえ、このままでは埒が明かない。一刻も早く開放されるためにも、ここは一先ず、彼女を本物の天使と認めて話を進めるしかないようだった。

「分かった、一万歩譲って君が天使だったのは認めるよ。で、その天使さんが平凡な人間代表であるこの僕に、一体何のようがあるの？ まさかと思うけどさ、僕はもう死んでるってオチじゃないよね？」

仮にとはいえ、彼女の存在を認めてしまった以上、もう何を言われても驚かない自信が僕には有った。

「にはははは、大丈夫大丈夫、ちゃんと生きてるよー嵐は。それに、あたしの事は天使じゃなくてリンネって呼んでよ、折角パートナーになっただからさ」

「それだ。さつきからラインとか、繋げたとかいつてたけど、僕は正直言つて全く理解出来てません。それに、パートナーになった覚えもありません」

僕は拒絶を示すように、びしっとそう言い放った。

「まーまー、落ち着いて。ちゃんと順番に答えていくから」

自称天使のリンネさんは、ふふんと鼻を鳴らしながら得意げに語り始めた。

「まず、あたしは天使っていつても正式な天使ってわけじゃないんだ。簡単にいうと天使の卵、テナタマだね」

「卵？ 修行中ってことか？」

「そうそう、あたしは本物の天使になるため、この地上へ降りてき

たの。この地上で108つの善行を積むっていう天使の試練を突破すると、正式な天使になれるって仕組みなんだ」

「ちよつと待った。何だよ108って、108と言えば煩惱の数だろ。思いつきり仏教じゃないか」

色々と言いたいことはあるが、とりあえずそこに突っ込みを入れてみる。

「いいのいいの、気にしないで。天界ではよくあることだよ。深く考えちゃダメ」

成る程、どうやら天界って場所は、僕が思っていたよりずっといい加減でテキトーな場所らしい。

「それにね、ラインを繋げたって言っても別に難しい話じゃないよ。さっきも言ったけど嵐にあたしのパートナーになって貰ったから、その証みたいなものなんだ」

「なあ、リンネ。つまりそれって試験なんだろう？ 天使になるための。パートナーと言っても、僕みたいな人間が手伝ったりしていいのか？」

「いやいや嵐さんや、仮にもあたしは天使なんだよ？ 普通の人間にはあたしの姿は見えないし、触れない。それにテンタマだから、この世界に干渉できることも物凄く少ないの。このままじゃどうしたって試験を突破できないわけ。そこで、一人の人間にこの試験の間、天使を手伝ってもらうんだ。そのパートナーとなる人間を選んで、試験の間ちよつとだけ自身の力を人間に貸し与えることをラインを繋げるって言うんだよ」

いつの間にか僕は、既にそのラインってやつを繋がられてしまっていたらしい。プライバシーの侵害も甚だしい事態である。

「ラインを繋げた人間は天使を見ることが出来るし、触れることも出来る。勿論、こつやつて会話することも出来るよ。他にも色々あるんだけど… それはそのうち分かると思うから。百聞は一見にしかずってね」

四字熟語を会話にとり入れる天使。僕の中の天使のイメージって

やつが、音を立てて崩れていくのが分かる。

「そもそも、このパートナーとなる人間を選ぶ時点で、試験はもう始ってるんだよ？ 嵐はあたしに選ばれたんだ。もつと喜んでいいんだよ？」

へえ、そうですか、そりや選ばれて光栄、な訳が無い。あるわけがない。そもそも僕に、選択の余地すらない。

「そういうわけだから、一緒に頑張りましょうね、あ・ら・し」
にぱーっと笑うリンネ。

どうしていいかわからず、ただただ呆然と立ち尽くす僕。

「あ、そうそう忘れるところだった。嵐にとっては一番大事な話かもしれないから良く聞いてね。無事試験を突破して、テンタマが天使になったとき。そのパートナーの人間にご褒美として、一つだけ何でも願いを叶えてもらえるの。どう？ すごいでしょ？ やる気出たでしょ？」

何でも？ 何でもだった？ もしその話が本当なら、確かにすごいけど。

元々胡散臭い話な上に、さらに胡散臭さを上塗りしたようなそんな胡散臭さの塊のような話を、果たしてそう簡単に信じていいものか？

でも実際、僕の目の前にいる少女型浮遊物体が、どうやら人間でないことは見るに明らか。

「一番大事なことなら他にあるよ、リンネ。そもそもどうして僕なのかって事。先に言うておくけど、僕は何か特別な力があるわけでも、特別な才能があるわけでもないぞ？」

「にはははは、分かってるよー、そんなの」

あ、そうなんだ。やっぱり僕には何も無いんだ。実は隠された魔力があるとか、実は勇者の子孫だったとか、ちよつとだけそんな厨二病丸出しな展開を期待していたのに。愚かなる僕の夢は、脆くも崩れ去ったわけで。

そんな僕の落胆っぷりを見てリンネが答える。

「ごめんごめん嵐、そんなに落ち込まないでよー。でもさー、何でとか言われても困るんだよね、これが。強いて言えば、あたしの力。天使の力ンってやつかな？ 嵐の姿を始めてみたとき、びびってきたの。それにね、嵐ってば天使であるあたしから見ても、十分才能はあると思うよ。」

「やっぱり？ やっぱりそうなのかな？ 持つてる持つてるといわれ続けてはや十数年。今、このとき、この瞬間、僕の真の力ってやつがようやく明らかにされる、らしい。」

僕は再び目を輝かせ、リンネに問う。

「そ、そうなの？ はは、そっかそっか。… で、何の才能なのかな？ ん？」

僕はあくまで平静を装いながら、そう尋ねた。

「うーん、トラブルに巻きこまれる才能とか、人間以外に好かれる才能とかかな？ ぷぷっ」

「はいはいワロスワロス。どうせ、そんなことだろうと思ったよ。というか馬鹿にしてない？ 明らかに笑ったよね、今。馬鹿にしてるよね？ これ。」

「とは言え、花家の家訓に「困っている人がいたら意地でも助けろ」つてのがある。」

小さい頃からあの熱血親父にさんざん叩き込まれてきたことなので、僕の思考は否応無しに反応してしまう。リンネの場合、果たして人としてカウントしていいのかって疑問は残るけど。

さて、どうしたものか……………。

僕は大きな溜息を一つつき、覚悟を決めて答えた。

「君の言いたいことと、今の状況は大よそ理解したよ。こうなった以上、取り敢えずは、君を手伝ってもいいよ、リンネ。と言っても、何をすればいいのかさっぱりわからないけどね」

そんな僕の答えに対し、天使リンネは大きな大きな安堵の溜息を一つついた後、満面の笑顔で言う。

「ほんと？ 良かったー、さっすが嵐、あたしが見込んだだけ
のことはあるよー」

勢いよく僕に抱きつくリンネ。

さらば僕の平穩。さらば僕の日常。

こうして、僕のちよつとだけ非日常的で、ちよつとだけ不思議
な天使との毎日が、幕を開けたのだった。

第1話「花と嵐とレイニーアンサンブル」雨守三姉妹の場合」

第1話 「花と嵐とレイニーアンサンブル」雨守三姉妹の場合

僕がリンネの試練とやら手伝うことを承諾してから、ほんの数秒後。まるでその様子を見ていたかのようなタイミングで、それは突然起こった。

「きた、きたきたきたきたー」

リンネが突然叫んだかと思うと、彼女のアホ毛… もとい、アンテナのように一本だけぴんと伸びた前髪が突然光り出し、矢印のごとくある一定方向を示し始めた。

「どうしたの？ 今度は何？」

正直、僕は早くも彼女の手伝いを買って出たことを後悔し始めていた。

「ふふふ、嵐、覚悟してね。早速始めるみたい」

ということは、つまり。

「最初の試練だよ」

僕とリンネは、彼女のアホ毛に導かれるまま、目的地も分からずひたすら走っていた。

ちなみに、彼女のアホ毛はタダのアホ毛ではなく、天使センサーなる代物で「手助けを必要とする人物」つまり天界から指示される次の試練の場所を指し示してくれるものらしい。とはいえ、所詮アホ毛はアホ毛。カーナビとはわけが違う。だからこそ、僕は本日3度目となる本気ダッシュで町を疾走しているわけだった。

しかも、雨のおかげで全身既にびしょぬれ状態。寒い。5月だったのにこの寒さ。

「で、リンネ、その人物ってやつは、まだ、なのか、遠い、のか？

「はあ、はあ」

僕らは、リンネのセンサーだけを頼りに雨の町をを駆け抜ける。気がついてみれば、既に日が沈みかけていた。

計3度に渡るダッシュは、筋金入りの文型人間でありもやしっ子であり、インドア人間である僕にとって、拷問以外の何ものでもなかったわけだ。

僕の持病の貧血が、今にも発動せんばかりのこの状況。そりゃ、僕だって困っている人がいるのなら救ってあげたいのは山々。

けれどその前に、どなたか僕を、この状況から救ってやってください。

「んもう、だらしのないなー嵐。でもでも、近い、近いよ。あつ、この辺りだよあらしー」

彼女のアホ毛の光がよりいっそう強くなる。その加減からして、どうやら相当近いようだ。

とはいえ、この辺りーとか言われても、辺りにはあるのは錆びれた小さな公園だけ。

その公園だつてこの雨の中、人っ子一人いない… いや、居た。雨の降り掛からないドーム型遊戯の中に、ぽつんと座る女性が一
人。

ん？ あの制服、良く見ればウチの高校のものじゃないか？ それに、あのリボンの色。あれは確か三年生のものだ。

リンネのアホ毛がよりいっそう強く反応する。つまり、どうやらあの女性で間違いないということ。

こんな雨夜の中、体育座りで一人佇む先輩が一人。

何というか、相手は見るからに訳有りっぽいし、そもそもこんな雨の中に、こんな時間、ぽつりと一人でいる時点でただ事ではないはず。

目の前に広がるその光景に、どう声をかけていいものか戸惑うへ
タレな僕。

どんな風に声をかけるかより、困っている人にはまず声をかける

ことの方が重要なはず… うちの親父理論だけだ。

えーい、もういい。どうにでもなれ。

「あのー、こんな雨の日にこんなところで、どうかされましたか？」
僕の言葉に反応して、チラリとその顔をこちらに向けてくる女性。

彼女の髪はかなり長いらしく、その前髪が雨のおかげで顔に張り付き、ちよつとだけホラーチックなお顔になってしまっている。
が、そんなことを気にする余裕は、僕にも彼女にも無いようだった。

彼女はその前髪をちよつとだけ横にずらし、僕の顔をじーっと眺めている。怖い。正直言つてかなり怖い。

「あ、すみません。僕の名前は、花嵐と言います。あなたと同じ、桜ヶ丘第二学園の生徒で、その…… 天使の使いをやってます。もし、何かお困りでしたら力になりますよ。」

天使代行。天使の使い。自ら名乗っておいて何だけど、そのセリフのあまりの恥ずかしさに思わず赤面する。

重ねて言うが、僕は電波つてわけでも、厨二病をこじらせているわけでもない。

僕だつて、好き好んでこんなこと言っているわけじゃないのだ。
そもそも、僕は自分の名前も苗字も大嫌いな人間。

そんな僕が顔を真っ赤にしてそう名乗った理由。実はここに来る途中、試験の対象者である手助けする相手には、必ずそう名乗るようにと、リンネに念を押されたためだ。

なんでも、僕がそう名乗ることが、要救助者にも天使であるリンネの姿が見えるようになるための条件の一つ、なのだそうだ。

僕は詳しく理解する暇もないまま、言われるがまま、愚直にそう名乗っただけだった。

それにしても、恥ずかしい。穴があつたら入りたい。むしろ今、この場で穴を掘ってそこでもう死にたい。

そもそも何だよ、天使代行つて。絶対、コイツ頭可笑しい人だつ

て思われてるよ。大爆笑もんだよ。明日には学校中に噂が広がるよ。やっぱり引き受けるんじゃないやなかった。後悔先に立たずとは、正にこういうことを言うんだらうな。

と、僕がそんなこと思っているうちに、今まで僕の顔をじつと凝視していた先輩が、今しがた僕の発したあるワードに反応した。

「てん… し？ … てんし、なの？ … やつときてくれたあ、ウチの天使様」

突然僕にがばつと抱きついてくる名も分からない黒髪ロングの先輩。

何だろう、この状況。

突然のことに呆然としてしまう僕。この僕が、女性に、抱きつかれているだと？

ははは、あつはははつはははは。べ、別に嬉しくなんか無いんだからね？

役得じゃー、天使様のお力じゃーとか思っていないんだからね？

僕がニタニタと気持ち悪い顔を醸しているうちに、リンネがその女性に向かって突然キスをしたのが目に入った。

… え？ 何？ どういうこと？ 何のために？

僕の妄想は膨らむばかりである。

「ちつつちつつ、本物の天使はこっちだよ、こっち。あたし、天使のリンネっていうの。ねえ、まずはあなたの名前教えてよ」

天使リンネが、その見事なまな板を張りながらそう言った。

余談だが、僕は貧乳がステータスだなどとは思わない。断じてだ。自称天使を見ながら、僕はついついそんな事を考えてしまうわけで

「あー、名前？ 名前かあ。えーとね、ウチの名前は、雨守小雨つて言うんだよー天使さん達」

驚くべきことに、彼女にも天使が見えているらしい。

つまり、どうやらさっきのキスは、天使の姿を見せたための儀式のようなものだったのかもしれない。

いや、待て。と言うことはまさか、あいつ、僕にもアレをやったのか？ 僕にもキスをしたってことか？ 月美ちゃんにもされたことないのに。

そう考えた瞬間、僕の顔は、まるで沸騰したようにぼっと赤くなる。

キスぐらいで赤くなる、僕はそんな高校生なのである。ああ、笑いたければ笑うがいいさ。ド畜生。

「？ どーしたの嵐。もしかして、こんな雨の中走らされて風でもひいちゃった？」

「え？ あははは、何でもない。全然全く問題ないから。むしろ有難うございました？」

一瞬だけ脳みそがショートしたものの、僕は気を取り直し、改めて先輩の顔を見る。そう言えばさっき、雨守って名乗ってたよな。

ん？ 雨守？
その瞬間、今朝のイタルとの会話が脳裏をよぎる。

間違いない、彼女は今朝方イタルに聞いたあの雨守3姉妹の一人である小雨さんだ。まさかこんな形で実物と対面するはめになるとは。

僕は彼女の近くに座り、話しかける。

「あ、僕は別に天使ってわけじゃないんです、雨守先輩。僕はあくまでも天使代行、天使の使い。よーするに使い走り、らしいです。といいますか、いくら同じ学校の生徒とは言え、いきなり見ず知らずの男からこんなわけの分からないことを言われて、自称天使だなんていう不思議生物を見せられて、それでも混乱するどころか、すんなり受け入れてくれるとは。凄いですね先輩は」

僕なんてリンネのことあれだけ疑いまくっていたし、現に今だって全部を全部信じているってわけじゃないのに。

心か？ 人間としての器の差なのか？

「えー？ だって嵐くん、さっき自分で言った事じゃなあい。それとも嘘だったのー？ それにね、ウチ、天使って絶対に、いるって

昔から思ってたから。ウチ、天使の絵を描くのが好きなんだー」

どこか眠たげな、それでいて甘ったるいような、そんな独特な喋り方をするこの雨守小雨先輩。

イタルの話だと確か、美術部の部長でそっち方面で有名な人らしい。うん、そう言われると、確かにそんな雰囲気醸し出している、ような気がしないでもない。

「ねー、嵐くんてさー、天使さんの使いなんでしょ？ おねーさん、ちょっと助けてほしいなー、なんて思ってるんだあ」

おねーさんって言っても年齢は僕と一つしか変わらないはずである。おねーさん。姉。おねーちゃん。僕の心をグサリと抉るワード。

思い出したくない過去が想起される。が、今は関係ないので一先ず捨て置く。

「ええ、勿論です。僕とリンネはそのために来ましたから。それで、こんな時間にこんな場所で、一体どうされたんですか？」

「うんうん、実はさあー。ウチってこう見えて三つ子なんだ」

こう見えて、とか言われても正直反応に困るけど、三つ子ってことはやっぱりあの雨守三姉妹に間違いないらしい。

先輩には悪いけど、こんな強烈なキャラクターが後二人もいるのかと思うと、ちょっとだけ気が重たくなる。

「三姉妹でもウチは末っ子だから、おねーちゃんが2人いるの。でね、実はその二人と喧嘩しちゃってねー、あはは」

ちょっとだけ恥ずかしそうに舌を出す小雨先輩。

あの噂、どうやら事実だったらしい。となると、どうやらこの先、三姉妹全員が絡む話になりそうだ。全員雨守先輩って呼び方だと分かりづらいということ、僕は彼女を下の名前で呼ぶことにした。

「喧嘩ですか？ 僕にも妹が2人いますけど… やっぱ喧嘩はしますよ。と言っても、いつも一方的に僕がやられて終わりますけどね」

「あー、そーなんだあ。でもねー、ウチらの場合、これが生まれて始めての喧嘩だったんだー。普段は皆仲がいいんだよ？ 本当だよ

？ それでね」

そう言いかけた刹那、小雨先輩の方から巨大な爆音が発せられた。一瞬、音の発生源が分からず焦った僕だったが、直ぐにそれが小雨先輩のお腹から発生された音だと気が付く。

はい、ここでリンネが大爆笑。何が天使だ、小学生かお前は！
空気を読んでくれ、空気を。

僕は慌てて尋ねる。

「あ、小雨先輩、もしかしてお腹すいてますか？」

「あははは、ごめんねー。ねえ、嵐くんっ家って今日の晩御飯にかな？」

「カレーですよ、小雨先輩。昨日材料の買出しに行かされましたから」

「うわー、いいなーいいなー。お腹すいたよお、嵐くん」

成り行き。これはあくまで成り行きだ。

「…あの、小雨先輩。このまま立ち話もなんですし、そもそも雨に濡れたそんな姿じゃ風邪引いちゃいますし。その、もし良かったら、うちに来ますか？」

リンネが、にやにやしながらこちらのやりとりを伺っている。言いたいことがあるならはつきり言えばいい。

言い訳じゃないけど、下心なんて断じて無い。全く無い。ただ単純に困っている人を救いたいという純真な想いから出た言葉なのだ。やましい気持ちなんて、あるわけがない。…でも神様には誓えません。僕だって純粋な高校生男子だから。

それはそうと、僕のその提案に対し先輩の反応はと言えば。

「うわあ、嵐くん。見かけによらず大胆だねー。そんなこと言われたら、おねーさん、何だか緊張しちゃうなー」

どこまでが本気なのか、何だか掴めない先輩相手にすっかりペースを握られてしまっている僕。

「いえ、うちの家族とかもいますから。ああでも、先輩のご家族の方が心配してるんじゃないですか？」

「それはだいじょーぶい。だって、一応喧嘩中だし。それにウチ、放浪癖あるんだ。あはは。きつといつものことだと思ってるよお」

それはそれで逆に問題が有るような。

「じゃ、じゃ行きましようか。リンネもそれでいいよね？」

リンネが頷いたのを合図に、僕らは小雨先輩を引き連れ、一旦家へと戻ることにした。

花家

「ただいまー」

「ただいまあ」

僕の挨拶の後、当然のように同じ挨拶をする先輩。

「いや、ただいまは可笑しくくないですか小雨先輩？」

「あははは、まあまあ嵐くん。細かいことはきにしない、きにしないーい」

まだ会ったばかりだというのに、すっかりペースを握られてしまっている。

僕らが玄関でそんなやりとりをする間に、家の奥から禍々しいオーラが立ち込めてくるのを察知した。

このオーラ、間違いない。僕は、全身から嫌な汗が流れるのを感じた。

「に、い、さん」

まるで僕を待ち受けていたかのように、我が最愛の妹、有須が立ちただかる。その声を聞いただけで、蛇に睨まれたかえる状態の僕。正直言って、震えが止まらない。

「一体どうということなんですか？ 学校を早退したという連絡があったかと思えば、突然いなくなり、今度は町を全力疾走していた、

なんて目撃情報があったかと思いきや、この雨の中こんな時間までぶらぶらとほつつき歩いている。いいですか、兄さん。きちんと分かるように説明してください。分かるようにですよ。ごまかそうとしても無駄ですからね。私が納得する説明をするまで、晩御飯はおろか、この家に入ることさえ許しませんよ。だいたい兄さんは花家の長男なんですから、私達のお手本になるような行動をとるべきだと言つのに、いつもいつもその間逆の身勝手な行動ばかりなんです。だから兄さんはいつも」

まるで早口言葉のように、有須の口から言葉が流れ出てくる。

毎度の事ながら、こういう時の有須の饒舌さには関心してしまう。きっと女子アナも舌を巻くレベルだろう。まあ、毎回こんな怒っているような女子アナなんていたら嫌だけど。

と言つか、目撃情報って誰からの情報だよ。有須のやつ、一体どんな情報網を持つてるんだ。

有須のお説教はまだまだ続く。

……………そろそろか。

「なんですよ、分かりましたか？ 兄さん、兄さん、聞いているんですか… う、ううう、ぐすん… にいには、にいには、私をどれだけ心配させれば気が済みますか」

怒っていたと思ったら、急に泣き出す有須。彼女の僕に対するお説教は、毎回最後はこのパターンで終わる。

実のところ、有須の「これ」が僕のトラウマの原因でもある。彼女の場合、この状態になるとちょっとだけ幼児退行してしまうからただ事ではないのだ。

ダンゴは、今でも僕のことを「にいにい」と呼ぶが、有須が僕のことをそう呼んでいたのはもう随分昔のこと。だから、有須の口から「にいにい」というワードがたら危険信号であるとともに、お説教タイムの終わりのサインでもある。

「ごめん、本当に悪かったよ有須。もう絶対にお前を心配させたり

はしないから、だから、ね、涙を拭いて、一緒に家に入ろうな？」
「今回はかりは、多少の後ろめたさを感じないわけにはいかなかった。」

「ううう、本当ですか？ にいにい、約束してくれますか？ 指切りしてくれますか？」

目を晴らし、顔を真っ赤にし、涙目かつ上目遣いでのお願い。そんな風にお願ひされては、僕は彼女からのどんなお願いだろうと断れる気がしない。

男にとって女性の涙ってやつは、いつだって一撃必殺のチート兵器なのだから。

「分かったよ、勿論だ。さあ有須、小指を出して」

コクンと頷いた有須は僕とゆびきを交わした後、キッチンへと戻っていった。

どつと力が抜け、僕はその場に倒れこむ。

普段から僕は、こんなにも有須に心配をかけていたのかと思うと、心がチクリと痛んだ。

「ところで… こちらはどなたでしょう？」

キッチンへと戻ったはずの有須が、何かを思い出したかのように急に戻ってくる。そりゃそうだ、先輩に気がつかないはずがない。

すると、今まで僕らのやりとりを黙って見守っていた先輩が、やんわりと言う。

「いやー、何だか凄かったねえ。愛されてるなあ、嵐くんってば。」

「でもお、雨守だよ、美人の妹さん」

「いえ、そんな。その、美人だなんて。って、二人ともびしょ濡れじゃないですか、ちよっと待っていてください、今、タオル持ってきますから」

そう言っつてパタパタと走り去る有須。

「やー、ちよつとアレだけいい子だねえ。すんすん、あ、ホントだ。カレーの匂いがするね。カレーだあ、カレーだあ」

アレな先輩にアレっつて呼ばれてしまふ有須がちよつとだけ不憫な

気もするけど、それにしても凄い自由奔放な人だな、この先輩は。

この感じはどこぞの天使と通じるものがある気がする。

「サメサメ、なかなかのやり手ね。これはあたしも負けてられない」
何だか良く分からないが、闘争心を燃やすリンネ。

それはそうと、サメサメって小雨先輩のことだろうか？ いくらなんでもサメサメはないと思うんだ、サメサメは。センスの欠片も感じられない。

タオルを取りに行ってくれた有須と入れ替わるように、何故か親父が顔を出す。

「なんじゃい、騒がしい… うお貞子！」

親父。そりゃ僕も最初そう思ったけどさ、わざわざ口に出すなよ、口に。脳と口が直結してんのかよ。

そんな親父の声を聞きつけて、僕の妹その2であるダンゴまでやって来てしまった。

「なになに、どうしたの？ おとーさん… うえ、貞子！」

お前もか、お前もなのか？ って言うより、何でいきなり親子コメントしてるの？ この人達は。それじゃ先輩に対して、あまりに失礼だろ。

「あつはははは。おもしろいなー嵐くんの家族は」

わりと酷い言われようなはずなのに、全く気にしていない様子の小雨先輩。良かった、先輩がちょっとアレな人で。

「がはは、いきなりすまんかったな。で、嵐。こちらの貞… ごほん、こちらの素敵なレディは？」

「素敵だ何て、いやはや正直者ですなあ。ウチは雨守小雨って言います。嵐くんの彼女だよ、おとーさん」

訂正しよう。この人、皆に姿が見えている分、リンネより性質が悪いかもしれない。やっぱりアレな人だよ、先輩は。

「イエスイエスイエー！ うおおおおおおおお、良かったぞ、嵐。そうじゃったかー、いやー、お前もなかなかやるもんだなー、がははははは。よおうし、今日は祭りだ、宴だ、朝ま

で飲むぞワシは」

「えええええ、ウツソだー。有り得ないよそんなの。にいにいに彼女が出来るなんてぜつつつつつたいに、無いよ。壺か？ 宗教か？ 狙いは何だ貞子めー」

「に、兄さん、どういうことなんですかこれは。か、か、彼女だなんてそんなの、い、いつの間に？ いつの間に？」

小雨先輩の爆弾発言を受けて、三者三様の答えが返ってきた。

一方リンネはと言えば、またもや空中で大爆笑している。はは、好きなだけ笑うがいいさ。

「嘘だよ、嘘。違うからね。小雨先輩の小粋なジョークだからね？」

あー、もう、ほら、よし、カレー食べよう、ね、カレー。美味しい美味しい、有須ちゃんお手製カレー。いやーもう、楽しみだなーコンチクシヨウ」

「あはははは、嵐くんも、嵐くんの家族もおもしろいなーもう」

それから数十分。ようやく事態を収拾させた僕は、揃ってテーブルにつき有須のカレーを頬張っていた。

「んぐんぐ、んーおいしいなあー。有須ちゃん、やるねー」

「がははは、そうだろうそうだろう。有須の料理は最高だからな、がはははは、あ、ワシおかわり！」

親父、相変わらず食べるの早すぎ。フードファイトをやるうってんじゃないんだから、もつとゆっくり食べればいいのに。

「おとーさんに負けられるかー、有須ねえ、団子もおかわりー」

お前もか。この体育会系親子が。

「ウチもウチもー」

いつも騒がしい食卓だけど、そこに小雨先輩が加わったおかげで、いつも以上に騒がしい食卓となった。

「げふっ、もおー食べられないよー、嵐くん」

「そりゃ、あれだけ食べれば十分だと思いますよ、小雨先輩。その細い体のいったいどこにあれだけの量が入ったのか」

「もー嵐くん。スタイル抜群だなんて、言いすぎだよー正直者なんだからあ。どうもー、ごちそーさまでしたあ」

それはいくらなんでも歪曲しすぎです先輩。突っ込む気にもなれません。

「それじゃあ、ひとまず僕の部屋で例の話を聞きますよ」

リンネの言う試練ってやつが始まってるというのに、天使らしい仕事はおろか、僕たちときたらまだカレーしか食べてないじゃないか。

果たして、こんなゆるゆるでだらだらな展開でいいんだろうか？

こんな体たらくでいいのだろうか？ 正直言って僕には良く分からない。

「やー、ごめんねえ、すっかりご馳走になっちゃって。そうそう、これからが本番だもんねー」

僕は残っていたコップの水をぐいっと飲み干し、立ち上がることにした。

「嵐、ファイツ」

そう言って、ここ一番の笑顔でグツとサムズアップしてくる親父。気がつくとは僕は、口に含まれた水を盛大に噴射させていた。

水はやがて虹を作り、親父の笑顔に華を添える。

「は？ え、な、ば、ち、ち、違うから、そういうのじゃないからね？ 勘違いも甚だしいからね？ というか何言ってくれちゃってんのこの馬鹿親父は？」

僕の言い分を無視し、さも訳知り顔、もといにやけ顔、ドヤ顔で頷きながら続ける親父。

「あーあー、何も言うな嵐。分かっとる。ワシには全部分かっとるよ。これからが本番なんじゃろ？ コイツめ」

僕の顔は怒りと羞恥でみるみるうちに赤くなっていた。繰り返すが、僕はこんなことで顔を真っ赤にするような、それはもう残念な感じの高校生なのだ。笑いたければ笑うがいいさ。

「あっははははははは。く、苦しい、嵐くんってば、最高だよお。」

これ以上笑ったら、か、カレーがー」

「先輩もいつまで笑ってるんですか、ほら、行きますよ」

僕は爆笑する先輩を引きずりながら、自分の部屋へと向かった。

疲れた。ただ夕飯を食べただけなのに、何だろう、この疲労感は何て長い一日なんだろう、今日と言う日は。

「ふーっ、先輩、もうさっきまでのことは忘れていいですからね、ここからが本番なんですよ?」

「そうだよー、やっとあたしの出番ってわけね。さあー、サメサメ、思いのたけを思う存分ぶちまけちゃってー」

天使は地上で食事はしないらしく、先ほどのキッチンでは僕らの頭上で終始ぶかぶか浮いていて、僕らのやりとりを暇そーに見守っていたのだった。

先ほどまでと違い、ちよつとだけ神妙な顔をした小雨先輩が、こくん、と頷く。

…と、その前に。僕はおもむろに部屋のドアを開けた。

「うおら、お前ら！ いいからあっちいけ」

わー、と階段をかけ下りていく親父とダンゴ。全く、子供か。つてダンゴは子供だった。

「ごほん、すみませんでした先輩、ではどうぞ」

「えーと、公園でどこまで話したかなあ？ あ、そうそう、喧嘩したんだ。いやー、はるちゃんとさみちゃんがあんなに分からず屋だったとはねー」

「はるちゃんと、さみちゃんっていうのは小雨先輩のお姉さん、つまり春雨先輩と五月雨先輩のことですよね?」

「んー、そうだよ。あれー嵐君、もしかしてファンだった？ おねーさんというものがあながら、酷いなあ」

僕は小雨先輩の一部の言動を華麗にスルーして続ける。

「いえ、僕の友達に五月雨先輩のファンな奴がいますね。そいつ

から聞いたんですよ、先輩達のこと」

「ふーん、そうなの？ でね、今となって何が原因だったのかわからないんだけど、その喧嘩が思いのほか長引いちゃって。何だかさあ、家に居づらくなっちゃってねー。で、ウチの別荘に避難してたんだあ。あはは」

そう言うてはにかむ小雨先輩。ん？ 別荘？

「あの、別荘ってまさか公園のドーム型遊戯のことじゃないですよ
ね？」

「わああ、良くわかったねー嵐くん。ウチ、公園で絵を描くのが好きなんだあ」

リンネが憐みの表情を浮かべ答える。

「変わってるのね、サメサメって」

いや、先輩もお前にだけは言われたくないと思うぞ、きっと。

「だから今日もあんなところにいたんですね、通りで。それで先輩、お姉さん達と仲直りがしたいって事ですよね？」

「ぴんぽーんぴんぽーん。さっすがあ、嵐くん。ウチが見込んだだけのことはあるよー。おねーさん嬉しいなあ」

姉妹喧嘩の仲裁か。小雨先輩の言い分は分かったけど、これって果たして天使の仕事なんだろうか？

これが本当にリンネの言う天使になるための試練なのだろうか？

僕はたまらずリンネに問いかける。

「リンネ、これってどういうことだ？ 喧嘩の仲裁が君の言う試練なのか？ まあ、君のセンサーが反応した以上、先輩達が絡んでいるのは確実なんだろうけど」

「嵐。言い忘れてたけど、あたし達天使の主な仕事は、人間に取り憑いた <伝承> を取り被う事なの」

「伝承？ 悪魔とか幽霊じゃなくて？」

「ちつつち。あたしが天使だから相手は悪魔だー、なんてのはちよつと軽率すぎだよ、嵐。伝承って言い方のほかには、フォークロア、都市伝説、スーパースティション、民話なんて言い方をする場

合もあるけどね」

天使が出てきた時点で悪魔も出てくる可能性は大いにあるとは思っていたけど、どうやら事実には僕の予想の斜め上を飛び越えて行っただらしい。

どこから持ってきたのか、リンネは黒板を使って伝承についての説明を始めた。

「いえーい。リンネ先生の授業の始まり始まりー。いい？ 二人ともよく聞いてね？」

「はい先生」

僕は思わず反射的にそう答えていた。

眼鏡に白衣に黒板にチョーク。のりのりな天使に対して突っ込む気にもなれない僕なのだった。

「あたし達天使の言う伝承は、人間が長い年月や強い想いで語り継ぎ、想像した空想上の生物や現象の事ね。広義で解釈すれば、あたし達天使だって、嵐がさつき言った悪魔だってそう。日本で言えば、鬼だとか天狗だとかね」

「分かったような分からないような。で、そいつらが何だって言うんだ？」

「人間の言葉には言霊が宿るなんて言うでしょ？ それと同じで、伝承にも力が宿る場合があるの。同じ伝承一つとっても、人の解釈や、語られる地方によってもその力のベクトルが異なってくる。あたし達天使が払うのは、そんな負の力を宿ってしまった伝承達なの」

「人間に取り憑くって言ったけど、具体的には？」

「これがちょっと説明しにくいんだよね。そもそも伝承によって違うからさー。共通して言えるのは、人間の心に空いた隙間に勝手に入り込んで、宿主の行動を助長させたり、時にはその宿主の体を狂わせたりしながら、人の心に寄生する影みたいなイメージかな」
ここで僕は、最も気になる疑問をリンネにぶつける。

「つまり、小雨先輩は、その伝承ってやつに取り憑かれてるってこ

と？」

「ピンポンピンポーン」

嬉しくない。全然嬉しくない。というか本人が目の前にいるんだからさ、もっと空気を読め……って先輩寝てるよ！

流石は小雨先輩。物凄く強いメンタルである。ハガネの精神力である。むしろ一番空気を読めてないよこの人。

仕方がないので、当事者睡眠中のまま話を続ける。

「それで？ 具体的には、どうすれば先輩の体からそれを追い出せるんだ？ まさか、僕に戦えとか言い出すんじゃないだろうなリンネ？ 自慢じゃないが、僕は小学生の妹との喧嘩さえ、一度も勝った事がないんだぞ」

小学生に本気で泣かされる高校生。笑いたければ笑うがいいさ。何度だつて笑うがいいさ。

「ぶぶぶ、分かってるわ。それに私は天使よ？ そもそも体を張った戦闘なんてナンセンスね」

明らかに馬鹿にされたのが気になったけど、どうやら戦闘は無いらしい。良かった良かった。

「それじゃあどうするんだ？」

「いい？ 伝承や民話、都市伝説に元となる逸話があるように、取り憑かれた人間側にも何らかの理由があるものなの。つ、ま、り、サメサメがこの伝承に取り付かれたのにも何か原因があるってこと。まずはそれを探りましょう？ それに、今回に限って言えば、その原因も解決方法もはつきりしてるでしょ？ ここ最近降り続けているこの雨。この雨はね、サメサメが降らせてるんだよ。正確には、サメサメに取り憑いた雨女の伝承が降らせてるんだけど」

「雨女？ 雨女ってあの雨男とか雨女とかの？ 何かの行事のときにタイミング悪く雨が降ったりするアレ？」

そういえばイタルのやつが言っていたっけ、先輩達3姉妹はとてつもない雨女だつて。

「そうだよ。その話の元となるのが、雨女って妖怪。知ってる？」

雨女って。子供を失った女が妖怪になって、その涙が雨となって降り続ける。今回の場合、恐らくサメサメ達の姉妹喧嘩が原因で取り憑かれた可能性が高いかも。つまり、その喧嘩を止めない限り、今降っているこの雨が止むことは無いわ」

「もしかして、小雨先輩のお姉さん達、つまり春雨先輩と五月雨先輩も同じ伝承に取り憑かれてるってことじゃないか？」

「うんうん。鋭いね、嵐。アタシもそう睨んでるの」

「どうやら僕達は、最初の試練からとんでもない大物を釣り上げてしまったらしい。」

その上、相手はあの雨守三姉妹で、僕の先輩達だ。果たして、僕に何とか出来る問題なのだろうか？

僕は、大きく溜息をつきながら横で眠る小雨先輩を揺り起こす。

「先輩、先輩、起きてください。先輩、雨女に取り憑かれてるらしいですよ」

先輩はぼけーとした顔で目をこすりながら言う。

「なにそれー、怖いなー、もう」

全然怖がってそうに見えないのは、僕の気のせいではないはず。

「この喧嘩ってさあ、ウチが思っていた以上に色々複雑みたいだねー」

そう言って立ち上がる小雨先輩。

「ウチ、今日は一旦帰るね。ねえ、嵐くん。明日はウチも学校行くからさ、その時まで二人の様子を見てみるよー」

「分かりました。それまでにこちらも、何か対策を考えておきますから。それじゃあ、明日学校で会いましょう」

見送りは玄関までで大丈夫だという小雨先輩を送り出し、僕はふと考える。

3人がお互いにいがみ合っているとすれば、まずそれぞれの言い分を聞きだす必要がある。そして、何よりもそもそも喧嘩の原因を探る必要があるわけだ。

が、さっきの小雨先輩の話聞く限り、喧嘩の原因はほんの些細

な事柄らしい。そこはやはり伝承とやらが事を大きくした可能性が高い。

解決を望むには、僕らがフォローしつつ小雨先輩に直接動いてもらい、姉二人に働きかけていくしかないのかもしれない。

何にせよ、このままこの雨が降り続くようなら、規模の大きい問題に発展しかねない。早急に何とかする必要がある。

それにしても、まだ見ぬ春雨先輩と五月雨先輩とは、一体どんな人物なのだろう。

小雨先輩の強烈なキャラクターから察するに、共に一筋縄ではないかない気がする。イタル情報によれば春雨先輩は、試験で常に学年1位をキープし続ける秀才らしい。五月雨先輩は確か、運動系の部活で有名な人だったような。うーん、どう考えても一癖も二癖もありそうだよな。

僕は大きなあくびをしつつ、時計を見上げる。いつの間にやら、もうすぐ日付が変わる時間になっていた。

そう言えばあれだけ騒がしかったリンネが、今は随分と静かだ。気になった僕は、部屋を見回す。

すると、空中でぶかぶか浮きながら気持よさそうに寝ているリンネを発見。

どうやら天使ってやつは空中で浮かびながら寝るものらしい。

魚って水中で泳ぎながら眠るらしいけど、リンネの姿を見ていてふとそんなイメージが頭をよぎった。

そんなことを考えながら、僕は、自らの意識の手綱を手放した。

「昨日はお楽しみでしたね」

腹が立つほどの満面の笑みを浮かべながら、開口一番親父はそう言い放った。

朝から鬱だ。猛烈に鬱だ。

呆れて突っ込む気にもなれない僕は、そのまま椅子に座る。

「ねえ、おとーさん。お楽しみつて何さ？」

ダンゴが純真無垢な瞳で親父に尋ねる。親父のせいだ。全部親父のせいだ。

「がははは、つまりだな、嵐と昨日の貞… 小雨お譲ちゃんが、セ」
はいアウトー。

と言うか小学生に向かって、よりもよってド直球かよエロ親父。
「だー！ーっ。朝から何言い出すんだよ、馬鹿親父。それに、小雨先輩あの後すぐに帰っただろ？ 何にもありませんでしたよ？ 本当に」

僕達の馬鹿騒ぎを聞きつけたのだろう。キッチンの方から、有須が朝飯片手にやってきた。

「もっつ、兄さんも父さんも、朝から何大きな声出しているんですか。近所迷惑ですよ。まったく、子供じゃないんですから。… で、本当のところどうなんですか、兄さん」

「勘弁してくれ。花家唯一の良心がそんな親父みたいなこと言わないでくれよ、有須」

「ふふっ。すみません、冗談ですよ。さあ、早く食べないと遅刻しちゃいますよ」

いやいやいや、冗談では済まされないような鋭い目つきでしたよ、有須さん。

リンネはまだ僕の部屋で寝ている。

多少の不安はあたものの、彼女を部屋に残したままにして、僕はいつものように月美ちゃんを迎えに行くことにした。

「おはよう、嵐。今日も、雨、降ってるね」

「おはよう月美ちゃん。そうだねー、もしかしたらの話だけど、まだしばらくは降り続くんじゃないかな？ ははは」

もしも、解決が長引いたら、ね。

「そうだ、月美ちゃんは雨守三姉妹って知ってる？」

「うん、常識、だよ？ 有名人、だし」

やはり、月美ちゃんでも知ってるレベルの有名人だったんだらしい。それほどの人物を知らなかった僕の学園生活は、よほど残念なものだったようだ。

月美ちゃんと話しているうちに、やがて教室へと到着。

「おはようさん、嵐。早速だが聞いてくれ。こいつはたった今仕入れた情報だが、例の雨守三姉妹。今日は三人とも登校してるって話だぜ。結局、昨日の喧嘩の話はデマだったってことか？」

仕入れたとかいつてるけどイタルのやつ、恐らく三年の教室まで確かめに行ったのだろう。

まあ、こつちも助かるからいいけど。というより、本当にデマだったらどれだけありがたかったことか。

「ふーん。そういえば、その3人ってそれぞれ別のクラスだったよな？」

イタルがずいといこちらに近づく。

「お、何だ何だ。嵐にしては珍しく興味津々じゃないか。まさかお前も偵察に行く気か？ ちなみにだが、長女の春雨さんが3のA。次女の五月雨さんが3のC。三女の小雨さんが3のDだぜ、心の友よ」

昼休み。

結局名案は浮かばなかったものの、ひとまずは小雨さんに会いに行かねばならない。

そう言えば、小雨さんと学校で会う約束をしたのはいいが、どこで会うかまでは決めていなかった。

さて、どうするべきだろう？

一先ずは小雨さんのクラス、えーと、今朝のイタルの話だと確か

3のCだったつか。そこに行ってみるしかない。

そんな事を考えながら、正に僕が席から立ち上がったその瞬間、教室のドアが勢い良く開いた。

「おまたせえー嵐くん。おねえーさんが迎えに来たよー。あーいたいた。やー、嵐くんが2ーAで良かったよー。昨日嵐君のクラス聞いてなかったから、二年の教室を端から順番に訪ねて行こうかなーなんて思ってたんだあ。さーさー、おねえーさんと一緒にいきましようねー」

2ーAで良かった。本当に良かった。僕は、生まれて初めて神に感謝した。

「うおおお、どこの美女かと思えば、雨守小雨先輩じゃないですか。どうしてこのような場所に？ つーか嵐貴様、コラ。小雨先輩とどいう関係なんだこの野郎」

突然の珍客にクラスが一気に騒がしくなる。

今はとにかくこの場から離脱すべく、小雨先輩の手をとり教室を飛び出た。

後ろから響いてくるイタルの罵詈雑言はきつと幻聴ではないはず。

「嵐くん、こつちだよ、こつちい」

僕は、小雨先輩に案内され、三階隅の美術準備室へとやって来ていた。

一息ついた僕は、入り口近くの椅子に腰掛け先輩に尋ねた。

「それで小雨先輩、お姉さん方の様子はどうでしたか？ こちらの話は聞いてもらえそうですか？ 仲直り出来そうですか？」

先輩は可愛らしく小首を傾げ、笑顔で答える。

「んーとね、わかんない」

そんな、身も蓋もない。小雨先輩は僕の近くの椅子に座り、続けて答える。

「やっぱりさー、ウチ一人じゃ無理かもねー。だから、呼んじやつた」

「え？ 呼んだって、誰をです？」

とても嫌な予感がする。そして、ここ最近の僕の嫌な予感ってやつは、悲しいかな大抵の場合当たってしまうのだった。

その時、準備室のドアが突然開くとともに、その人物と僕の目線があう。

いや、この場合ガンをつけられたという方が正しい。

「おまえ、何モンだ」

リボンの色からして小雨先輩と同じ三年生なのは確か。加えて、初対面の人物に開口一番そんなことが言えちゃうようなこの人物はまさか。

「あ、さみちゃん。良かったあ、ちゃんと来てくれて」

ぶんぶん手を振って答える小雨先輩。

さみちゃん。つまり、雨守三姉妹の次女である五月雨先輩の事だろう。まさか、当の本人を連れてくるとは思いも寄らなかった。

作戦会議に来たつもりが、いきなりぶっつけ本番になってしまったらしい。

「ふん、小雨がアタシに謝りたいっていうからわざわざ来てやったんだ。つーかさ、謝るんだったら、普通そっちから来るのが常識なんじゃねーの？」

やはり喧嘩中ってのは事実らしい。初対面の僕でも分かるくらい、見るからに機嫌の悪そうな先輩。

三つ子のはずなのに小雨先輩とはあまり似てない気がする。ぶっちゃけ小雨先輩より背丈が大分小さいのだ。その口調とは裏腹に小動物チックなオーラを醸しだしている。

「まあまあ、ひとまず落ち着いてくださいよ、先輩」

五月雨先輩が再びギロリと僕を睨む。

とはいえ、悲しいかな有須のそれと違いたいした威力は無い。

小動物に睨まれたところで、恐れるに足らない。威力が無いどころか、逆に和んでしまいそうなくらいだ。

「だ、か、ら、お前は何モンなんだよ」

試験の最中、しかもその関係者に何者だと聞かれたらば、例の「

あのセリフ」を言わざるを得ないわけで…。

どうしようかなー。この人、シャレが通じ無そうだし、何よりこの場にリンネも居ないし。

「呼んだ？ 嵐」

何もない空間から、いきなりボンと現れるリンネ。

呼ばれて飛び出て何とやら。天使つてのは何でも有りな存在らしい。

「何驚いちゃってるの。あたし達つてばラインが繋がってるんだから、嵐が心の中で願えばあたしはいつでもどんなに離れていても、こうして隣に瞬間移動出来ちゃうんだよ？ にやはははは、天使つて便利だよねー」

恐るべきご都合主義。

覚悟を決めた僕は、例のセリフを語ることにした。

「… ども、初めまして五月雨先輩。僕は二年の花といいます。ヒジョーにお節介だとは思いますが、御三人方の喧嘩の仲裁に馳せ参じた天使の使いでございます」

五月雨先輩はニコリと笑い答える。

「そうか。よし、帰れ」
酷っ。

とはいえ、姉妹喧嘩にこの他人が出てくれば、そりゃそうも言いたくはなる気持ちも分かる。その上、自分のことを天使の使いとか名乗っちゃう電波野郎となれば尚更か。

「そんなー、酷いよおさみちゃん。ウチがせつかく連れてきた大事な仲介役さんなんだからあ」

「仲介役なんていらぬ。それに、いきなり天使がどうか言い出すんだぜ？ ぜってー頭可笑しいだろ。流星はお前が連れてきただけはあるよ、小雨」

返す言葉も無い。この時点で僕の胃は既に限界寸前だった。

リンネはおもむろに五月雨先輩の真横に移動し、間髪いれずに頬にキッス。

天使の姿を目視出来る様にするためのものだと分かってはいても、
見ているだけの僕が思わず赤面してしまう。

加えて、何のつもりか、五月雨先輩の目の前、顔と顔がくっつき
そんな距離でじつと五月雨先輩の顔を凝視するリンネ。

いくらなんでもそれは近すぎだろ。天使の考えることは、さっぱ
り分らない。

「わーわー、天使のキッスだあ。ウチもあんなことされたのかなあ。
あはは」

「あ？ 急に何言い出すんだよ、小雨？ ってうおわ、何だ、何だ
コイツは。幽霊か？ 幽霊なのか？」

物凄い速さで部屋の隅へと飛び退いた五月雨先輩。見掛け通りか
なり素早い動きだ。

その時、小雨先輩がぼそつと僕に耳打ちしてくる。

「さみちゃん、ああ見えて実は幽霊とか怪奇現象とか大の苦手なん
だあ」

「むっ、あたしは幽霊じゃないよ、天使だよ」

そういつて頬を膨らませるリンネ。

こんな風に頭に輪っかを浮かべた謎の浮遊生物なんて、五月雨先
輩にとっては幽霊でも天使でも大差ないのかもしれない。

「こ、ここここ小雨、こ、こここれはどういうことだ？」

部屋の隅ですっかり震えてしまっている五月雨先輩。

先輩のその質問に小雨先輩に代わって答えるリンネ。幽霊と呼ば
れて機嫌を損ねたらしく、わざわざ五月雨先輩の目の前にずいとい
寄っていく。

「あなたがサメサメの姉その1ね。よし、何だかつんつんしてるか
ら、つんさみと命名するわ。ぷぷぷぷ。震えてないでよく聞
いていね、つんさみちゃん。あなた達3姉妹は今、伝承にとりつか
れてる。そのおかげで、あなたたちの姉妹喧嘩はただの喧嘩じゃな
くなってるの。ほら、外を見てよ」

そう言っ窓の外を見るよう促すリンネ。

こうしている今現在も、勿論雨は降り続けている。それどころか、その勢いが増してきているような気さえする。

「何だよ、ただの雨だろ？ アタシ達と何の関係があるってんだよ。だから、それ以上寄るなつて。くんな、こっちくんな」

まるで獲物をじわじわと追いつめるように、徐々に先輩を壁際に追い詰めていくリンネ。

こいつ、天使のくせに意外と根に持つタイプのようだ。

「さっきあなた達が取り付かれてるって言ったでしょ？ その原因が雨女。その名の通り、雨に纏わる多くのエピソードを生み出した伝承ね。今回のシナリオは、あなた達3人に取り付いてその喧嘩を起因として雨を降らせてるってわけ。だ、か、ら、さっさと仲直りしてね？ つんさみちゃん」

「伝承？ 雨女？ そ、そんなの知るかよ。アタシ達が喧嘩しようとして、仲直りしようと、そんなのアタシ達の勝手だろーが。いいか？

オカルト研究会なら、お前らだけで勝手にやってくれ。アタシには関係ないからな」

そう言い放つと、逃げるようにして部屋から飛び出ていく五月雨先輩。あーあ、やつちまったな、リンネの奴。

「こんの分からず屋ー。待てやこらー」
すぐさま後を追うリンネ。

どうやら、先輩のことがよほどお気に召さないらしい。

「うおわああああー、ついてくんない」

五月雨先輩の悲鳴が、廊下中に響き渡る。そんな中、ぽつんと準備室に取り残されてしまった僕と小雨先輩。

「はっ。そういえば僕達、追いかけてよかったですかね？
ついつい二人を見送っちゃいましたけど」

「あはは、そうだねー、さみちゃんにはちょっと気の毒だけど、たぶんすぐに戻ってくるんじゃないかなあ」

などと悠長なことを至ってマイペースに言い放つ小雨先輩。

その根拠がどこにあるのかさっぱり分からないが、喧嘩中とはい

え三つ子の姉妹である。そんな先輩が言うんだから、きつと問題はないはず。たぶん。

でもなあ、あのリンネだからなあ。このまま放っておいたら、何をしでかすかわかったものじゃない。

僕はいてもたってもいられなくなり、おもむろにイスから立ち上がった。

その瞬間、再び準備室のドアが勢い良く開かれる。

「うおい、お前ら何とかしてくれ。アタシ、本当に幽霊にでもとりつかれちゃったのか？ この浮遊物体、アタシ以外誰にも見えねーみたいなんだよ」

小雨先輩の言った通り、すぐに戻ってきた五月雨先輩。と言いうか、既に半ベそ状態。恐るべし、暴走天使リンネ。

「分かりました。分かりましたから、まずは落ち着いてくださいって先輩。それに、リンネ、お前ちよつとやりすぎ、先輩から離れなさい。これじゃまともに話も出来ないだろ」

何とか二人を落ち着かせることに成功したが、これじゃあ、誰と誰の仲裁をしにきたのか分かったものじゃない。

「やり方にはちよつと問題がありましたけど、これでさっきの話は信じてもらえましたか、五月雨先輩？」

五月雨先輩は髪の毛をぐしゃぐしゃとかきあげ、溜息をつき答える。

「ああ、分かった、もう十分かったよ。怖いくらいに分かったから。… えーと、花だっけ？ お前、今後一切そいつをこっちに近づけるなよな。話くらいは聞いてやるからよ」

未だ膨れ面のリンネ。この二人、相当相性が悪いらしい。

「分かりました。それと、本題の方なんですけど、そもそも3人は何故喧嘩なんてしたんですか？ これまでに喧嘩なんて一度もなかったそうじゃないですか」

「ああ、そっだよ。こう見えてもアタシ達は案外仲が良かったんだ。あんま似てないけど、一応三つ子だしな。それと、喧嘩の原因？」

それがよく覚えてないんだよ。ちよつとしたことが原因だったとは思っただけだよ。いつの間にか、喧嘩が始つてき、良く分かんないけど、とにかくイライラしてたんだよアタシは。つーかさ、小雨の場合はアタシと春ねえの喧嘩に巻き込まれただけかもしれないねーけどな」

確かに、このほんわかした先輩が怒りに身を任せている姿なんて想像できない。

「ともかくさ、アタシもその、雨女？ ってのにとりつかれたまま ってのは気分が悪い。それによ、何かもう色々メンドクセーわ。やっぱりよ、慣れない事はするもんじゃねーよな。喧嘩なんてよ。おい、小雨。アタシ達は一応、ここで仲直りしとこーぜ」

小雨先輩に握手を求める五月雨先輩。

先ほどから黙つて僕らのやりとりを見ていたはずの小雨先輩が、何やらふるふる震えている。

「…う、う、うわぁー！ー！ー！ーん。良かったぁー！ー良かったよぁー！ー。寂しかったよぁー！ー！ー」

五月雨先輩に抱きつく小雨先輩。顔中、涙と鼻水でえらいことになつてる。

やっぱり内心かなり不安だったのだろう、その感情が一気に爆発してしまつたらしい。

「うわっ、小雨、お前酷い顔になつてるぞ。汚っ、鼻水つけんなよ。ほら、このティッシュ使え」

僕とリンネはしばらく黙つて二人をの様子を見つめていた。残すは長女、春雨先輩か。

二人と春雨先輩が仲直りすれば、この事件は解決。あと1歩だ。僕はそんな暢気なことを考え、窓の外を見た。

は？ 何だか雨の勢いが強くなつてないか？

「おいリンネ、雨の勢いが強くなつてるみたい何だけど、これってどういうことだ？ 少なくとも二人を和解させたんだから、この雨だつて少なからず沈静化に向かうはずじゃないのか？」

しばらく思索した後、リンネは答える。

「たぶんだけど、今までサメサメ、つんさみ、姉その2つという3人に、雨女の力はそれぞれに並列状態で繋がっていたんだけど、二人が和解してその輪から外れたでしょ？ 今は、姉その2に、直列に近い形で力が繋がっちゃってるんじゃないかな？」

成程、分散されていた力が一つに集束されたってわけか。こうなってくると、今日中に何とかしないとまずいかもしれない。

僕らはここで一旦別れ、放課後再び会う約束をし解散した。

五月雨先輩いわく、姉妹で一番厄介なのはその春雨さんだとか。とはいえ、二人が喧嘩の原因を覚えていない以上、春雨先輩がそのカギを握っているという可能性が高いわけだ。

午後の授業は全く頭に入らず、僕はただただ窓の外の雨を眺めていた。

そうこうするうちにあつという間に放課後。雨は依然降り続けている。このまま雨の勢いが強くなり、何日も降り続くことになってしまったら、この町はいったいどうなってしまうのだろうか？

何だが、当初思っていた以上に大ごとになりそうな予感がしてきた。

僕はぐっと握りこぶしを作り、席から立ち上がる。その瞬間、教室のドアが今日1番の勢いで開かれた。

「おい、花、いるか？ 迎えに来てやったぞ、さっさと出てこい」
今日、このパターン多くない？

「うおおおお、おおおお、五月雨先輩、きたああああああ。つて、き、貴様嵐コラ。お昼の時は小雨先輩で、放課後は五月雨先輩だと？ 一体お前何をした。俺の知らぬ間に、一体何があつたんだああああ」

吠えるイタルを無視し、僕は五月雨先輩と小雨先輩の元へと向かう。ああ、そういえばあいつ、3人の中では五月雨先輩が好みだつていつてたっけ。

うーん、確かにボーイツシュでそれでいてちっこくて小動物的で可愛いけど、言葉遣いがどうもなあ。

「ん？ 何だお前？ もしかして今、物凄く失礼なこと考えていなかったか？」

「ははは、そんな滅相も無いですよ。それより、よく僕のクラス分かりましたね。小雨先輩に聞いたんですか？」

「いや。あいつには春雨との交渉にあたってもらったからな。お前を連れてくる担当がアタシ。んで、小雨から聞くの忘れちまってな、2ーAから順番に訪ねて行こうかと思つてたんだが、いやー、お前がAでよかつたぜ、手間が省けたからな」

流石姉妹。考え方もやり口もそっくりだ。心底2ーAで良かった。僕は、本日二度目となる神への感謝をした。

「それで、春雨さんは来てくれそうなんですか？」

「まあ、一応な。でもよ、仲直りするつてのはよ、互いに非を認めて謝りあうことだろ？ あのエセお嬢様が素直に頭下げるとは思えねーけどな」

エセお嬢様？ 何だか不安げな単語が五月雨先輩の口から出てきたのが気になるけど、僕達は再び美術準備室へとやってきた。

「そういえば、ここつて放課後部活で使われたりしないんですかね？」

「あー、それはだいじょーぶいだよ、嵐くん。美術部は皆普段から第2準備室の方を使ってるからあ」

準備室で待つていた小雨先輩が答えてくれる。

と、その隣にいる、ウェーブのかかった茶髪の女性。成程、お嬢様なオーラや雰囲気は漂っている。漂いまくっている。

「ふうーん、あなたが花嵐さん？ わたくし、雨守春雨と申します。何やら、妹達がお世話になつたみたいですね」

その頭をちょこんと下げる春雨先輩。その物腰からはとても彼女が喧嘩の主犯とは思えない。どちらかと言えば、三姉妹の中でも常識人な人のようだ。

これなら事件解決もすぐそこではなかるうか？

「いえいえ、お世話だなんてとんでもない。二年の花です。訳あって、先輩方の喧嘩の仲裁役をやらせてもらってます」

「それでさ、春ねえ。別にこいつのおかげってわけじゃ全くないんだけどさ、アタシと小雨は、まあ、その、何だ、一応、くだらねえ意地を張るのは辞めたんだ。ま、アタシもちよつとどうかした部分もあつたしな。それでよ」

「悪いですけど、わたくしは謝りませんわよ？」

五月雨先輩の言葉をさえぎるように、春雨先輩が早口でそう答えた。

やはりと言うべきか、どうやら一筋縄ではいかないようだ。

それに、例のセリフもまだ春雨先輩に対しては言っていないしな。

それにしても、まさか一つの試練で三回もこのセリフを言うことになるなんて思いも寄らなかつた。

いい加減、このセリフを言うときの恥ずかしさつてやつもマヒしてきちゃったよ。

「あの、それともう一つだけ」

「何です？ 外野はちよつと黙っていてくださる？」

ギロリと僕を睨みつけてくる春雨先輩。うわ、これは五月雨先輩と違い、有須タイプの睨みだ。つまり、僕にとって効果抜群ってこと。

「春ちゃん、お願い、嵐君の言葉を聞いてあげてよお」

小雨先輩ありがとう、今はあなたが天使に見えます。というより本物の天使は一体どこで道草食ってるんだ。

そう思った瞬間、ぼんつと音を立てて僕の目の前に現れるリンネ。「うわっ出た」

過剰なまでにリンネに対し反応する五月雨先輩。先輩にとってお昼の出来事はトラウマ級だったらしい。

「失礼ねー嵐つてば。いつ呼びだされてもいいように、こうしてあたしなりに準備してたんじゃない」

何故か、枕とナイトキャップ持参のリンネ。

「つまり、寝てたんだな？」

「にはははは、そうとも言おうよね」

そんな僕とリンネの不毛なやり取りをよそに、今はまだリンネの姿が見えていない春雨先輩が答える。

「分かりましたわ。小雨がそこまで言うのなら、一先ず仲裁役さんとやらの話、聞くだけ聞きましょう」

僕は一度深呼吸し、春雨先輩の目を見ながら話していく。

「ズバリ、先輩方三人は… 雨女の伝承に取り憑かれています」

僕は窓の外を指さして続ける。

「今、雨が降っていますよね？ ね？ この雨っていつから降り出したかご存知ですか？ 実は、丁度先輩方が仲たがいを始めてからなんです」

そんなの偶然でしょ？ そんなことを言いたげな顔をしている春雨先輩だが、一先ずは最後まで僕の話の話を黙って聞いてくれるようだ。

「つまりですね、この雨は雨女の伝承により、先輩方3人の喧嘩を起因として降っている雨なんです。僕はですね、そんな雨女の伝承を払うためにやってきた天使の使いなんです」

僕その言葉をきっかけに、すかさず春雨先輩にムチユツと接吻を施すリンネ。

「うげ、あたしもあの不思議生物にあんなことされたのかよ」

「あなた先程から一体何を言ってる… きゃあああー！ー！ー！ー」

五月雨先輩のとき同様、春雨先輩の顔面5センチのところに顔を異常接近させ、にいつと笑っているリンネ。

「にははははは、ごめんごめん。ずっと待ちぼうけだったから退屈だったんだもん。ちよつとだけからかったただだよー。んで、あたしが天使のリンネです。ハルルン。あなた達の伝承を払いに来ましたー」

「あ、あなた、どこからやって来たんですの？ いえ、そんなことよりどうやって浮いてるんですの？ それ以前に、そもそも何者で

すの？」

案の定、ちょっとヒス気味にまくし立てる春雨先輩。

「えー、天使だもん、天界からだよ。どうやって浮いてるかって言われたら、この輪っかだよ」

「は？ それは個人的に聞き捨てならない。僕はすぐさま反論する。嘘だろ、リンネ。じゃあ、その羽根は？ 羽根は一体何の為にっいてるんだよ」

「何よ、嵐。そんなにむきになっちゃって？ この羽根は、いわば補助輪みたいなものなんだよ。よーするに飾りねー。だってー、一応天使だしー、翼は必要でしょ？」

知らなかった。そんなの全然知らなかった。というか知りたくなかった。僕の中の天使像が音を立てて崩れていく。

「い、言いたいことはそれだけですの？ 天使だか悪魔だか知りませんが、わたくしには関係ありませんわ。わたくし、あなた達に従う気なんてさらさら有りませんから」

「やっぱりな、こうなると思ってたよ春ねえ」

大きな溜息をつく五月雨先輩。

「それに、あなたがたの謝罪も、わたくしは受け取りませんから」
「あー、横からすいませんけど、これだけは教えてもらえませんか？ そもそもこの喧嘩の原因は一体何だったんですか？ 実は、

小雨先輩も五月雨先輩もよく覚えていないという事だったので」

仲裁役としてこれだけははっきりさせおく必要があるということ
で、僕は思い切って質問した。

「原因？ さみに小雨、わたくしにあれだけのことをしておいて覚えていないの？ やはり、仲直りへの道は遠いようですよ、花さん
そう言い残し、すたすたと帰ってしまう春雨先輩。

「あーあ、行っちゃった。にやははは、どーしよっか、嵐？」

僕は春雨先輩が出て行ってしまったドアを見つめながら言う。

「やっぱり、というか思った通りというか。向こうはしっかり覚えているみたいですね、この喧嘩の原因」

「あはは、そうみたいだねー。うーん、どうしよつかあさみちゃん」「いや、どうしよつって言われてもな。どーすりゃいいんだ?」

「先輩方は本当に覚えていないんですか? 原因」

僕のその問いかけに、揃って腕組みして考え込む先輩2人。

「そう言われると、もしかしてっと思っことがあるようないなような」

「そうだねー、あるようないなような」

「でも、確信は出来ない?」

同時に頷く二人。

駄目だ。原因が分からない以上、何か他の解決方法を探すしかない。

雨は、相変わらずその勢いを弱めることなく降り続けている。

「僕、とりあえず春雨先輩の後を追いかけてみます。その間、お二人は原因を思い出してみてください」

僕は急いで春雨先輩の後を追う。悪あがきかもしれないが、今はこうするほか手がないのも事実。

と、ちょうど校門を出るところの春雨先輩を発見。ここで、声をかけてみるのもいいけど、しばらく様子を見てみるでしょう。

僕は、先輩の後ををそつとつける。雨が降っているのが幸いして、ちよつとやそつとじゃ気付かれそうに無かった。

「リンネいるか?」

「いるいる。いるわよー。ねえ、嵐。気が付いてると思うけど、この雨、結構強くなってきてるよね」

「ああ、ゲリラ豪雨ってやつだな。このままいくと、シャレじゃなく交通機関に乱れが出そうだ。ゲリラ豪雨ってやつは、都市機能が麻痺するような被害も出るやつかいな雨なんだよ」

こうして話している最中にも、雨は降り続く。

確か時間雨量50ミリを超えると、内水氾濫、つまり都市機能が麻痺するって聞いたことが有る。この時点で既に、雨水は僕の膝辺りまでせりあがってきていた。

雨音は強く、その勢いは留まる事を知らない。

学校を出た時点ではまだ歩ける程度だったものの、気がついてみれば、普通に歩くことすら困難なほど、足元の雨水は増加していた。春雨先輩が怒って教室を出てしまってから一段と雨の勢いが増している。やはり、彼女の感情をさかなでてしまったのがまずかったのかもしれない。

それにしても、とんでもないことになってきてしまった。これじや交通機関の麻痺どころか怪我人が出ても可笑しくない。

僕は、水浸しとなった靴とズボンを気にするまもなく、ひたすら眼の前の対象を追いかける。

と、そのとき、前方を歩いていたはずの春雨先輩が突然姿を消した。

しまった、気づかれたか？

「嵐、あそこあそこ」

リンネの指差す方向に慌てて目を向ける。いた。確かに春雨先輩だ。

が、なにやら様子が可笑しい。

作戦変更。何だか嫌な予感がした僕は、尾行を辞め、春雨先輩に走ってかけより慌てて声をかけた。

「春雨先輩、大丈夫ですか？」

恐らく、この豪雨で流がされてきた漂流物で切ったのだろう。

先輩の右足ふとももはぱっくりと割れていて、見るからに深そうな傷口からは大量の血液が流れ出ていた。

「やっぱり。あなた達、わたくしの後をつけていたんですね。…

ご覧の有様、わたくしの自業自得ですわ」

「自業自得？ 先輩、とりあえず病院へ行きましょう。この傷はちよつと深すぎます。ちよつと痛むかもしれませんが、我慢してくださいね」

僕は自分のシャツを引き裂き、彼女の足に巻きつけ、一先ずの応急処置とした。

かなり痛むはずなのに、あくまで気丈にふるまい弱みを見せない春雨先輩。

「さあ、先輩どうぞ」

そう言つて、僕は先輩をおんぶする体勢になった。

「い、いやですわ。そんな、おんぶだなんて… は、恥ずかしいもの」

先輩、そんなこと気にしている場合じゃないでしょうが。

彼女をおぶることを諦めた僕は、有無を言わさず先輩をお姫様だっこする格好で運び出した。

「え？ ちょ、ちよつと、お姫様だつこだなんて、これならおんぶのほうがましですわー。今すぐおろしなさい、おろせー」

僕の腕の中でじたばた暴れる春雨先輩。

ただでさえ雨のせいで張り付いているすけすけ状態のその制服。

当然、下着までもがくつきりと浮かび上がっている。

流石は春雨先輩。思った通り、黒だ。

僕は、なるべく平静を装いながら答える。

「駄目です。漢のプライドにかけても、絶対におろしませんからね。それに、そんなに暴れたら足の怪我に響きますから、じつとしてください」

最初のうちは文句を言いつつ暴れていた春雨先輩だったが、諦めがついたためか、今は素直に僕に運ばれている。

そんな春雨先輩が、僕の腕の中で言う。

「ねえ、花さん。先ほどわたくしの足を応急処置してくれた時、その手つきが随分手馴れていたように見えましたけど」

「ああ、あれですか。実は以前にも同じような経験があつたので。

まあ勿論、こんな豪雨の中つてわけじゃないですけど。いつだったかなあ、妹が足を怪我したことがあつたんです。その妹ってヤツがめちゃくちゃ元気なやつでして、怪我ばかりしてるんです。1度や2度じゃないから始末に終えない。だから、この手の処置に慣れたたつてのは確かですね。お前は男であり兄貴なのだから、お前が

妹たちを守れって、この手の技術をたっぷりと親父に仕込まれましたから」

小さい頃はボーイスカウトや少年団、山林キャンプ何かに無理やり連れて行かれたものだった。

根っからのインドア派の僕にとってまさに悪夢でしかなかったわけだけど、今となってはその技術がこうして役になっっているのだから、あのエロ親父にも多少は感謝するべきなのかもしれない。

「そう、あなたにも妹さんがいらっしやるのね。花さんもご存知のように、わたくしたちは3姉妹。しかも3つ子です。先ほどわたくしが自業自得と言ったのを覚えておいで？ わたくしあの場で、今回の喧嘩の原因はあの2人にある、なんて言ってしまったけど… 二人が喧嘩の原因を覚えていないのも当然ですわね。だって、具体的な原因なんて、本当はありませんもの」

やっぱりか。小雨先輩も五月雨先輩もその原因が分からないなんてこの状況は、どう考えても可笑しいと思っではいたけど。

「そうですね、それでもあえて原因があるとしたら… わたくし、あの二人に嫉妬していたのかもしれませんが」

力なく笑う春雨先輩。相変わらず、右足からは血がにじみ出ているが、どうやら彼女の顔色が悪いのはそれだけが原因というわけではなさそうだった。

「花さん、学校でわたくし達がなんて呼ばれているかご存知？ 才色兼備の雨守三姉妹。そうね、確かにそうかもしれない」

自嘲気味に笑う先輩。僕は、言葉を挟まず黙って耳を傾け続ける。「さみは、わたくしたちに比べて小柄ですけど、抜群の運動神経を持っていて、スポーツなら何をやらせても大抵こなせてしまう才能を持っています。小雨は、独自のセンスと類稀な表現力で将来を有望視される美術部のエース。羨ましい事に、あの2人には才能があり、そしてわたくしには無い大きな夢を持っている。… それに比べてわたくしは、わたくしは、からっばなんですの」

春雨先輩の声が涙声へと変わっていく。

「わたくしは、そんな2人と肩を並べるために、いえ、一緒に居ても恥ずかしくないように、必死になって自分にできること、必死になって勉強に励みました。わたくしには、それしか出来なかったから。わたくしは、不安で不安でたまらないんです。三姉妹、三つ子、そんな風にいつでも比較され、セツト扱いされるわたくしたち姉妹。わたくしは、わたくしは、足手まといなんじゃないかって、いつかおいてけぼりにされてしまうんじゃないかって」

僕は、慎重に言葉を選びつつ口を開く。

「僕なんか偉そうなこと言えませんが、でも、春雨先輩の努力は決して無駄じゃないと思います。むしろ、春雨先輩の努力は今じや皆が認めていますし、現に結果として現れてるじゃないですか。むしろそれは、姉妹である五月雨先輩と、小雨先輩が一番良く分かっているんじゃないですかね？ 兄弟が一番近い他人だ何て言う人も居ますけど、僕はそうは思いません」

春雨先輩は、黙って僕の話聞いてくれる。

「さっきお話ししましたけど、僕にも妹がいますから分かるんですが、兄弟の絆はそんな柔なものじゃないと思います。時には友達のように、時にはライバルのように、時には叱られて、時には助け、助けられて。大丈夫、先輩が思ってる以上に、先輩達の絆は深いと思いますよ。部外者の僕が言うのもなんですけどね。と、すみませんでしたが、説教臭くなっちゃいましたね」

「いいえ、そんな事有りませんわ。今のセリフ、わたくし、ちよつとだけあなたを見直しましたもの。ふふつ、年下の男の子にこんなこと言われるなんて、わたくしもまだまだね」

そう言うのにこりと微笑む春雨先輩。そういえば先輩の笑顔を見たのはこれが初めてかもしれない。

そんなわけで、すっかり気の抜けてしまった僕。

「あ、やば、持病の貧血が」

「え？ ちよつと、あれだけ威勢のいいこと言ったのだから、最後までしっかりなさい」

先輩が僕の顔をぼかぼかと叩いてくる。

あれだけクサイセリフを吐きまくったくせに、今は先輩に叱咤されながらふらふらと歩く僕。我ながら、涙が出るほど情けない虚弱体質っぷりである。

人一人を抱えて歩くだけでもかなり大変なのに、その上この豪雨で足場も悪く視界も悪い状態。

ただでさえ体力のない僕の貧弱ボディは、忌々しいことに限界に近づこうとしていた。

どうする？ どうすればいい？

姉妹喧嘩を解決していない現状、この雨は止まないわけだし、まずは先輩だけでも無事病院へと送り届けなければ。

試練だとか、雨女だとか、そんなのはもう関係ない。ここからはもう、僕の漢としてのプライドの問題なのだ。

僕は体力を振り絞り雨の中を突き進む。ただひたすらに突き進む。歯を食いしばり突き進む。背中に当たる先輩の見事な双丘を微妙に意識しながら突き進む。

その時、僕の右手の甲に痛みが走り、閃光を放つ。

「う？ 何だ？ え？ は？」

僕の頭上には天使の輪っか、僕の背中には六枚重ねの天使の翼。

まるで天使のような格好。

成る程、どうやら僕は飛べるらしい。

「ちよ、ちよっと花さん。あなた翼が」

「ははは、何ですかねコレ」

「何ですかねって、あなた自分の身に起こったことなのに理解してないんですの？ 仮にも天使の使いなんでしょう？」

「ええ、まあ、一応そうなんですけど。実は、先輩方の事件が僕とリンネが受け持った最初の事件だったもので。自分でも何が何だかさっぱり」

とはいえ、十中八九リンネの仕業に違いない。

もしかしたら僕らを助けるために、何かしてくれたのだろうか？

「先輩、良く分かんないですけど、僕飛べそうです。アイキャンフライです。こうなったら、一か八か、このまま病院まで飛んでみま
す」

「飛ぶっていつてもそんないきなりそ… きゃああああ」

僕は必死になって翼を動かす。

「おお、浮いた、浮きましたよ、先輩」

そう思ったのもつかの間、すぐにバランスを崩し思わず先輩を落とすようになる。

「ちょっと嵐さん、しっかりなさい。わたくしを落としたら承知しませんから」

「そんなこと言われましても、どうにもうまく飛べないんですよ先輩。あ、もしかして先輩がおもた」

あ、しまった。が、時既に遅し。

その口を滑らせた瞬間、僕の顔面に拳が飛んでくる。

「特別に、聞かなかったことにしてあげます」

先輩の有難いお言葉を噛み締め、再度飛行にチャレンジする。

そう言えばリンネのやつ、羽根は飾りだって言ってたよな。本当は確か、この輪っかで飛んでいるとか。

僕は試しに輪っかに意識を集中してみる。

「きゃっ、また浮きましたわ。… 今度はちゃんと飛んでください
ね」

「大丈夫、いけそうです。まさか本当に羽根じゃなくて輪っかで浮いていたなんて」

そう、これは飛ぶというより、浮くといった方が正しい。恐らくこの輪っかの正体は、重力を操る装置か何かなんじゃないだろうか？ つまり、羽根はその補助輪。この二つを合わせることで宙に浮き、飛ぶことを可能にしているのかもしれない。

「しっかり捕まっけていてくださいね、先輩。それじゃ、れっつゴ
ー」

先輩を抱えたまま見事に空中を舞う僕。にわかには信じられない

光景だ。

「こ、こわつ。自分で飛んでおいて何ですけど、これ怖いです。下見ちゃだめだ下見ちゃだめだ」

「わ、わたくし、超常現象の類はまるで信じていなかったのですけど、こうして目の当たりにしてしまつた以上、考えを改める必要があるようですわね」

空中浮遊にも少しだけ慣れてきたその頃、眼の前に見知つた病院が見えてきた。

「や、やつた。何とかつきましたよ、先輩。病院です」

霧霞総合病院。この町一番の大きな病院である。

地面に降りると同時に、僕の輪つかと羽根はいつの間にか消えていた。全身から力の抜けた僕は、病院の玄関でへたれこむ。

と、僕達の姿が見えたためか、病院の中から飛び出してくる人物が2人。五月雨先輩と小雨先輩だ。

「さみに、小雨。あなた達、どうしてここに？」

「さつき僕が連絡しておいたんです」

「なによー、嵐。実際に二人に伝えに行つたのはあたしなんだからねー」

そう言つて頬を膨らませるリンネ。

あの状況下、もしものことも考え、僕はリンネに二人を呼ぶようお願いしていたのだ。

すぐにケータイ番号を聞いておけばよかつたわけだけど、僕にそんな手際のおさががあるわけもなく。結局リンネに頼んでいたのだ。

「大丈夫か春ねえ。ごめんよ、完全にアタシらの責任だよな。ごめん、何でもするからさ、許してくれよ」

「ううええええん、春ちゃん。ウチ、こんなのもういやだよおー。仲直りしようよおー、ね？ ね？」

春雨先輩にすぎりつき泣きじやくる小雨先輩。

「… わたくしこそ、ごめんなさい。2人に迷惑を掛けてしまつて。全てはわたくしの責任ですわ。この喧嘩だつてそもそもわたくしが」

僕はそんな春雨先輩の口に手を当て、口を塞いだ。

「春雨先輩。一先ずは、その怪我をなんとかしましょう。それに、喧嘩両成敗って言うでしょ？ これでいいじゃないですか、ね？」

春雨先輩は、一筋の涙を流しながら、大きく一度頷いた。

あれだけの勢いで降っていた雨もいつの間にか止み、雲間から一筋の光が彼女達を照らしだしていた。

僕はその光景に思わず見入ってしまう。何と云うか、凄く神秘的な光景。

僕がアホ面下げてその光景を見つめていたその刹那、空から雨の代わりに珍妙なものが降ってきた。

飴玉？

「うわっ、飴玉だ、雨の代わりに飴が降ってきたよ。とんだ親父ギヤグダけど、これって、ファフロツキーズってやつか？」

「へえ、よく知ってるね嵐。大正解。これが雨女の最終段階。間に合ってよかったー」

ファフロツキーズ、つまり「何故降ってきたのか分からないもの」

例えばオタマジヤクシが空から降ってきたり、魚がふってきたりってやつが有名。アニマルレイズなんて言葉もあるくらいだ。

当然、飴玉が降ってきたなんてパターンは初めてに違いないだろうけど。

もし、僕らが姉妹の喧嘩の仲裁に間に合わなかったら、雨女の伝承の力によって、一体なにが降っていたのか：考えただけでぞつとする。

やがて、三姉妹が泣き止み、治療のため病院に入っていくと同時に、その飴玉の雨も止んでいた。

空には眩しいくらいに五月晴れが広がっていた。

その空を見上げながら、リンネが言う。

「人間同士を喧嘩させることなんて、案外簡単な事なのかもねー。心にちよつとだけ疑心と違和感を与えてやればいいんだもん。ましてや、元々心の底に黒いものを抱えていたのなら尚更だよ。でも、

そこから立ち直ることが出来るのもまた、人間の力なんだよねー」
「妹達への嫉妬心が、雨女の伝承の力によってしらずしらずのうちに不協和音へと変わっていったってわけか。それにしても、雨の中の先輩を抱えての進軍はやっぱりちよつと疲れたかな。一先ず帰ろつか、リンネ」

気力も、体力もどちらも酷使した僕は、ぐったりしつつ帰路へとついた。

リンネの話によると、突如として僕に生えたあの翼と輪つか、アレもやはり天使とラインを繋いだ事によるものだったらしい。

つまり、リンネの天使としての力の一部を僕が引き出し使ったというこらししい。

いきなりそんなことができるなんて凄いや、なんて言われたものの、僕もかなり必死だったためか、一体どうやったのか良く覚えていない。

まあ、ここは一つ結果オーライということだ。

翌日。今日は土曜と言うことで学校は休み。

僕とリンネは小雨先輩の別荘、つまり例の公園へとやって来た。僕らの目の前には、五月雨先輩をモデルにして絵を書いている小雨先輩と、近くのベンチでその様子を見守る春雨先輩の姿があった。僕とリンネの姿に気がついた春雨先輩がこちらに歩いてくる。

「先輩、足は大丈夫なんですか？ 結構深そうな傷でしたけど」

「ええ、痛みはまだ引きませんが。この通り、日常生活に支障はありませんわ。花さん、リンネさん、昨日はありがとうございました。わたくし、自分のことばかり考えていたというのに、妹達はそんなわたくしをあんな風に心配してくれていて。わたくし、自分が恥ずかしかった」

「でも、それに気がつけたって事は、変わったって事です、春雨

先輩」

そんな僕の臭いセリフに対し、やさしく頷いてくれる先輩。

「さーて、3姉妹。最後の仕上げをやるわよ」

リンネの号令の下、公園のブランコにそれぞれ座る三姉妹。

「いい、三人とも、これから最後の仕上げをするわ。つまり、あなた達の中にいる雨女の伝承を被うってこと。原因を取り除いた今、雨女は大分弱ってる。こうして雨も止んだわけだし、今が絶好のチャンスだってわけ。ではでは、今から何がおきても絶対に目を開けちゃダメだよ。あたしと嵐を信じて、落ち着いてリラックスしてー」

「ええ」「ああ」「はぁーい」

三者三様の答えが返ってきた後、互いの目を見合わせ、同時に目を瞑る三人。

リンネの話によると、これからその件の伝承ってやつを取り除く作業に入るらしいけど、実際その作業を見るのも初めてなわけで。

僕はどうしたらいいかわからず、リンネの行動を見守るしかなかった。

そうする間に早速始まるその儀式。

リンネが何かの呪文を唱えた後、一体どこから取り出したのか、金色に光り輝く大きな弓を取り出し、春雨先輩、五月雨先輩、小雨先輩の順番に云っていく。

矢が見事にそれぞれに命中した後、三人の体から、黒いもやが出現する。あれが伝承？ 雨女？

やがてそれぞれ三人分のもやが一つに重なり、巨大な大きなもやが出現した。

「リ、リンネ、これがそうなのか？」

「そう、これが負の力を持った伝承だよ。あたしの矢が命中してその本体が出てきたんだ。さ、嵐、ここからはあなたの出番だよ。手を、こう伸ばしてみてください？」

僕はリンネに言われるがまま、右手をぐっと伸ばす。

「イタッ」

またもや、右の手のひらにチクリと刺激が走った後、何故か、光り輝く傘が僕の右手に出現した。

「さあ、嵐、最後の大詰めだよ。ちゃちゃっとあいつにぶちかましちやって」

僕が、あれを？

ちよつと、ちよつと待つてくれ、そもそも何で傘なんだよ。仮にも天使の武器だろ、コレ。もつとこう、剣とか、槍とかさ。せめて僕にもリンネみたいな弓をブリーズ。というか、この水玉模様は誰の趣味なんだよ。

「おいおいおい、聞いてないぞリンネ。お前、体を張った戦闘なんてナンセンスだとか言つてたじゃないか」

「やだなあ、嵐。別に戦闘するわけじゃないんだって、あの伝承にもう力なんて残つてないもん。そうね、いわば儀式の一つみたいなもの。いくら天使と言えど、伝承を払うのはテンタマー人じゃ出来ないの。最後の大詰めはやっぱパートナーであるあなたがやるんだよ、嵐。さ、覚悟は決まった？」

儀式？ 儀式だつて？ そもそもこの世界に傘を使う儀式があるつてんだよ。いや、ちよつと有りそうな気もするけどさ。

僕は一度大きく深呼吸した後、気合を入れて傘を握りなおす。というか、傘をどうすりゃいいんだ？ 相手が雨女だから、傘つてのは何となく分かるんだけどさ。実際どうすりゃいいんだ？

僕がそんな事を考えていると、閉じたままだった傘がみるみるうちに変化し、傘型の剣へと変化した。

つまり、これで切れつてことらしい。というかだつたら最初から普通に剣でもよかつたのでは？ とか思つてしまつわけ。

ええええい。こうなりゃやけくそだ。

僕はその傘剣、アンブレラソードを件の黒靄に突き立てる。

いい加減な天界の、いい加減な武器らしく、いい加減に切つても良い加減に命中するらしい。

一際大きな音を立て、空中で離散する黒い靄。それはさながら

黒い花火のように、五月晴れの蒼く大きな空に凜と咲いていた。

役目を終えたためか、同時にアンブレラソードも、音もたてず消えていった。どうやら、うまくいったらしい。

「お疲れさまー嵐。よかったー、うまくいったね」

僕はほつと肩をなでおろし、思わずその場に座り込む。すると、ぐったりとうなだれている三姉妹が目に入った。僕は慌てて彼女達に近寄る。

「先輩、先輩、大丈夫ですかー。先輩達にとり付いていた雨女の伝承ってやつは僕らがぶっ飛ばしましたよ。もう大丈夫ですから」

三人ほぼ同時に目を覚まし始める。

良かった、どうやら三人とも無事らしい。

春雨先輩が答える。

「これで、本当に終わったのね。今でも嘘みたいな話だけれど、何だか心の奥底がすつとした感じがしますわ」

「そうだねえー」

「なあ、自称天使。お前さ、アタシらの記憶とか、やっぱり消したりすんのか？」

記憶を消す？ そうか、彼女らの伝承は取り払われたとはいえ、天使が見えるという効果は続いている。それに、天使に関わったなんて記憶は、平穩な日常生活を送る上で何らかの妨げになる可能性が無くは無いわけで。

「ダメダメ、消さないわ。例え、消してくれと頼まれても消してあげない」

だが、リンネからは意外な回答が返ってきた。

「逆に、あなた達にはこれから一生、自分達が伝承に取り憑かれたという記憶、天使と出合ったという記憶を心に刻んでもらうわ。それが対価の一つでもある。そうするれば、これから先また伝承にとり憑かれるなんてことにはならないでしょ？ それに、折角こうして出会ったのに記憶を消して全て無かったことにしちゃうなんて、寂しいでしょ？」

出た。リンネの天使スマイル。

相変わらずいい笑顔、思わず拝みたくなる。ありがたやー。

「そうか、ならいい」

微笑みを浮かべる五月雨先輩。どうやら先輩は記憶を消して欲しかったわけではないらしい。

リンネはそんな彼女達を見ながら、満足そうに呟く。

「見てよ嵐。あたし達が救ったんだよ？ 彼女たちの満点の笑顔を」
そう言っつて、ほっと可愛らしい溜息をつく天使。

果たして僕は、この先何度「天使の溜息」を聞くことになるのだろうか？

とはいえ、あんな笑顔が見られるのなら、それも悪くは無いかもしれない。

そんな気分になりつつ、こうして僕と天使の初試練は幕を閉じたのだった。

END

第2話「花と嵐と透明色の少女」～雷九透の場合～

第2話「花と嵐と透明色の少女」～雷九透の場合～

季節は初夏。

雨守先輩の件から数日後、そこには天使のいる生活にすっかり順応してしまっている僕がいた。

リンネと出会ってもうすぐ1週間。

たった1週間のはずなのに、リンネとは随分昔から一緒にいたよ
うな、そんな不思議な気分には陥ってしまうから不思議である。これ
も天使の力の成せる技なのかもしれない。

さて、そんなリンネはといえば。

雨守三姉妹を助け、最初の試練を無事に突破してすっかり気が抜
けたのか、相変わらず僕の部屋でだらだらと墮落した生活を送って
いる。

そんな僕等をあざ笑うかのように、僕たちの二度目の試練は、意
外な形で幕を開ける。

「あーらーしい、どうしようアレがこないの」

リンネの口から発せられた呪詛にも似たその言葉は、僕の心臓と
脳みそを瞬時のうちに凍りつかせた。

断じて違う。まず、それだけは言わせてほしい。いや、是非言わ
せてください。お願いします。

リンネのアホ毛こと天使センサーに、次の試練の反応が来ない。
これが本来の正しい意味。

断じてやましい意味ではない。断じて。

「リンネ、お願いだから妙なところで省略しないでくれ。それだと

色々とまずい意味になっちゃうから。本当、洒落にならない。漢として」

きよとんとした顔で、こたらをまじまじと見つめるリンネ。やめて、そんな無垢な瞳でこつちを見ないで。

「どうしたの？ そんなに慌てちゃって、変なの。それより嵐、ぱとろーるに行こうよ」

やっぱり出たか、リンネの無茶振り。このところ妙に大人しかつたから、そろそろ来る頃かとは思っていたが。

「ぱとろーる？ 見回りをしたいのか？」

「うんうん。天使たるもの、例え試練以外でも人助けをして何ぼだと思っんだ。それに、町に出れば何かしら反応があるかもしれないよ」

突拍子も無いことだと思いきや、成程確かにそうかもしれない。

少なくとも、こうして僕の部屋で漫画を読みふけているより、ずっと天使らしい行動だと言える。

とはいえ、そうなると勿論この僕も一緒に行かなければならないわけで。

「正直、こんな良い天気の外に出るのは僕のポリシーに反するんだよね。でもまあ、君が僕の前に現れた時点で、僕の平穩は崩壊したわけだし。仕方ない。パトロールでもスイスロールでもロツクンロールでも、いつちよやってみっか」

「嵐がギャグを外したところで、それじゃあ善は急げ。早速行こっか」

意気消沈の僕を尻目に、やる気満々な天使殿。

僕は、死んだ魚のような目で玄関へと向かった。

「あら、兄さん。珍しいですね。お出かけですか？」

丁度掃除機掛けを終えた有須と遭遇した。

「うん、ちよつとね。そうだ、何かおつかいがあればついでに買ってくるけど、手伝うことある？」

「ふふ、やっぱり珍しいですね。兄さんからそんなことを言い出し

てくるなんて。そうですね、ちょっと待っていてください」

「ぱたぱたと台所に向かう有須。いつも迷惑掛けてばかりな僕なので、たまにはこうして兄としての沽券を保ってみる。」

「ホント、嵐から言い出すなんて珍しい。今日は雨でも降るのかな？」

「いや、雨は暫く勘弁願いたい。」

「お待たせしました兄さん、はいコレ。今日はハンバーグです。自分から言い出したんですから、忘れずに買ってきてくださいね」

「おいおい有須。幾ら僕でも子供じゃないんだからさ、これくらい楽勝ですよ？」

有須から預かった買い物メモを携えて、僕らは町へと繰り出した。

「でもさ、人助けって急に言ってもな。そんな都合よく困ってる人なんているのかな？」

「ちつつち。天使も歩けば棒にあたるって言うでしょ？」

「いやいや、言わないから。そんなツツコミを入れる間もなく、僕の声は思わず止まってしまった。」

リンネと出会ってからというもの、多少なり耐性がついた僕だけど、少なくともそれは、僕のツツコミを止めるには十分過ぎるほど強烈な光景だった。

同時に、リンネの天使センサーが強烈に光りだす。

「きたきたきたー。やっぱり町に出てみて良かったね？ 嵐、次の試練だよ。私たちの助けを待っている人が近くにいるよ」

興奮気味にそう答えるリンネを尻目に、務めて冷静に僕は答えた。「そうみたいだね。まあ、直ぐ近くっていつかさ、きっと目の前だよ、リンネ」

僕を凍りつかせた光景の正体。

僕の目線の先に佇んでいたのは、今にも消えてしまいそうなほど

に儂げな「半透明」な一人の少女だった。

「これって言うまでも無く」

「伝承ね。とり憑かれてるよ、間違いない」

意外にも、僕らが近づこうとする前にその少女はこちらに走り寄ってきた。

「よ、良かったー。あ、あの、私のこと、見えますよね？ 見えますよね？」

背格好からして、中学生くらいの、有須よりちょっと小柄なその少女は、何故かまるでガラス細工のように半透明で、彼女の後ろの景色まではずきりと見て取ることが出来るほどだった。

気を抜けばそのままいなくなってしまうのではないだろうか。その姿は、僕をそんな風に思わせた。

「うん、大丈夫。僕には君の姿が見えてるよ。まあ、半透明にだけ」

僕は、その透明な少女を連れて一先ず人混みから抜け出した。

「さて、まず君の状況を確認したいんだけどさ。何故透明？」

透明少女はどこか落ち着かない様子でおどししながら答える。

「あの、その。私、私、朝起きたらこんな姿になっちゃって。それで、それで誰も私に気づいてくれなくて。誰も私を見てくれなくて。それで私、わたし、どうしたらいいか分からなくて」

眠りから醒めたら、こんな涼しげなスケルトンになっちゃっていて、誰の眼にも映らない姿になっていた、と。

僕がかるうじてでも、彼女を見てとることが出来るのは、やはりリンネの天使の力のおかげなのだろう。

「そっか、それは不安だったね。僕に何が出来るか分からないけど、君の力になるよ。あ、そういうえば自己紹介がまだだったね。僕の名前は花嵐。何の因果か、天使のお手伝いをやってます」

一瞬ぼかんとした表情を見せたものの、次の瞬間には笑顔を見せてくれた透明少女。

「天使… なんですか？ ふふふ、全然そうは見えませんかよ」

そりゃそうだ。もしもこれで僕が天使なんぞに見えていたら、それはそれで大問題なわけで。

何にせよ、とりあえず笑ってくれて良かった。さっきなんて、本当に今にも消えちゃいそうだったもんな。

僕らがそんなやりとりをしている隙に、リンネはちゃっかりと例の口づけを透明少女に施していた。

「安心して、あたし達がちゃんと助けるよ。なんてったってあたしこそが、本物の天使なんですから」

そう言っただけで胸を張ってみせる天使。リンネお得意の、根拠の無い自信ってやつである。

「わわ、こっちは本物の天使様っぽいですね。コスプレですか？」

「コスプレ違うー。本物だよ。本物」

ん？ 今一瞬彼女の姿が急にくっきり映ったような。僕の気のせい
いか？

「とりあえず落ち着いた？」

彼女はにっこり笑顔で答える。

「はい、先ほどはいきなり泣きついてしまっただごめんなさい。私、雷九透つていいいます。朝起きたら、こんな風に体が透明になってしまっただ。それで、私の姿が見える方たちにやっとな出会えたので、ついつい初対面にもかかわらず泣きついてしまっただ。あの、私、いったいどうなっただしまっただでしょうか？」

「伝承の仕業よ、トオルン。今回は間違いなく透明人間ね」

リンネのやつ、また勝手に変なニックネームつけて。毎度センスの欠片も無いな。

「と、透明人間って、映画とかドラマとか小説に出てくるアレですか？」

再び泣きそうな顔になりながら雷九が問う。

「うんうん。トオルンってばそのままだと透明どころか存在自体が消えちゃうかもねー。残念でした」

おいおいそんなはずばと。もう少しオブラートに包んだ方が。

「うつ、うつ、うええーん」

ほら、言わんこつちやない。

雷九は声を上げ、えんえんと泣き始めてしまった。

出会ったばかりの僕でも、今の彼女の精神状態や第一印象を考えれば、そんな風に直球で言われれば耐えられないだろうなと予想は出来たのに、この天使ときたら何をやらかしてくれてるんだか。

それにしても、気のせいかな雷九の姿がさっきより薄くなってるしまっているような。

「リンネ、雷九の姿がまた薄く、さらに透明になっていくぞ」

「あちゃー、やっぱりそつかー。この透明人間の伝承、トオルンの精神状態に合わせて透明化を進行させているみたいね。っと、このままじゃまずいかも。あらしーお願い、ちゃちゃっと彼女を元気づけて、笑わせてあげてね。よろしくー」

リンネの伝家の宝刀、無茶振りである。

只でさえ、トラウマである女性の泣き顔を前にしているだけで、既にいっぱいっぱいの状況の僕に、その上笑わせるだなんて。

元はと言えば彼女を泣かせたのはリンネだ、こうなったらリンネにも責任の一端を担ってもらわねば。

僕は、素早くリンネの後ろに回り込み、そのやわらかほっぺをぐにーっと引き伸ばし、上下させた。

「ほべっ、いふえふえふえ、ひよっほあらひー、なにふんのよー」

リンネの言葉をとりあえず無視し、僕は雷九に呼びかけた。

「雷九ー、ほら、見て見て、変顔天使だぞー。こんな顔でも天使だぞー」

今思えば、仮にも神様の使いである天使にこんなことやって、天罰の一つも下りそうな感じだけど、いっぱいっぱいの僕にそんなことを考えている余裕なんて1ミリも無かったわけ。

「ぶっ。あははははは、変な顔。本当に天使なんですかー」

良かった、本当に笑ってくれた。こんな子供だましで笑ってくれるとは、よほどの純真なのか、それとも単純なのか。

それにしても出会ったばかりだと言うのに、泣いたり笑ったり。何だか表情がころころ変わる子だ。

「あ、ら、っしー。酷いんだからまったくもう。後でお返ししてあげるんだからね」

僕につねられていたほつぺをさすりながら、アカンベーしつつこちらを睨むリンネ。何だか後が怖そうだ。

「ごほん、えーとねトオルン。トオルンが透明になっちゃったのはあなたにも何か原因があるからなの。伝承に付け入られる隙があったってことなの。何か、心当たりはある？」

雷九はうんうんと唸りながら必死にその原因を探っている。

「リンネ、何も雷九が悪いってわけじゃないだろ？ たまたま運が悪かっただけかもしれないし」

僕のそんな意見を聞いたリンネは、珍しくまじめな表情をしながら答える。

「あのね、嵐。三姉妹のときもそうだったけど、偶然や運が悪かったからってだけで伝承は人にとり憑かないし、とり憑かれないの。ほんの些細なことでも、その人には取り憑かれるだけの理由があったってことなんだよ」

そういえば雨守先輩達の時もそんなこと言ってたっけ。それじゃあ、今回も透明になるだけの理由があったってことか？

とは言え、そもそも人が透明になっちゃう理由って一体何だろう。「あの、関係ないかもしれないですが、私、ドジで、何か失敗しちゃったりしたときには良く消えちゃいたいって思うことはありますけど」

雷九はドジっ子か。確かにそんな雰囲気はひしひしと伝わってくるけど。いや、ありだな。うん。

「ははは、雷九、そういう経験なら僕もしょっちゅうあるよ。その場から逃げ出したいとか、消えちゃいたいってことくらいなら」

リンネが間を割って答える。

「嵐の言う通り、それだと理由としてはちょーっと弱いかな。嵐な

んてそんなことしよつちゆうありそうだしー」

「やははははと屈託無く笑うリンネを横目に、僕はとあるを提案した。

「ここにいっても答えは出なそうだし、何より、急に雷九がいなくなつたわけだから、君の家族も今頃心配してると思う。雷九、一旦君の家に戻ってみないか？」

雷九は表情暗くし答える。

「それは、大丈夫です。あの、私を心配してくれる家族なんていませんから」

「えっ、と？ ご、ごめん。そうだと知らずに僕はまたデリカシーのないことを」

気を使つたつもりが逆に地雷を踏んでしまったらしい。相変わらぬのダメ人間っぷりである。

「いえ、別にそういう意味じゃないんです。確かに、両親は私が幼い頃に亡くなりましたけど、私には祖母がいてくれましたから」

「今はそのおばあちゃんと暮らしてるのか？」

僕はさっきより慎重に質問していく。地雷は一つとは限らないのだ。

「私、この春から中学生になったんですが、小学校卒業するまではおばあちゃんと兄との3人で暮らしていました。ですが、つい数ヶ月前、今まで私を育ててくれた祖母も亡くなってしまつて…。今は社会人の兄と二人暮らしです」

そこで一旦話を区切る雷九。

何だか少しずつだけ雷九の抱えた隙間が見えてきた気がする。

とはいえ、先程の件がある以上、こちらから突っ込んで聞くつても難しい。

そんな僕の思いをよそに、リンネが率直に質問する。

「トオルン、今頃そのお兄さんが心配してるんじゃないの？」

「いえ、それはいいです。兄は、殆ど家には帰ってきませんから。

だから私、殆ど一人暮らしのようなものかもしれません」

そう言い放った雷九の姿は、明らかに先ほどより薄くなっていた。まずい、このままじゃ本当に消えかねないぞ、彼女。

原因を探るためにも、解決の手がかりを見つけるためにも、僕は僕の提案通り一旦雷九の家に向かうことにした。

ずーんと重たい沈黙と空気が漂う中、僕は一先ず話題を変えようと必死に辺りを見回した。

と、道すがら丁度有須が通う中学が見えてきた。

「おっ、桜ヶ丘第二中学か。この辺に住んでるって事は、雷九が春から通ってるっていう中学校もここだろ？」

「はい。あの、もしかして嵐さんはこの卒業生ですか？」

どうやら雷九の興味を引く事に成功したらしい。よし、この調子だ。

「そうそう、ほんの2年前まで通ってたよ。だからちよつと懐かしいかな。ちなみに、僕の妹も今ここに通ってて、春から3年になったところなんだ。それにしても、相変わらず大きい桜の木だよな」
僕はフェンス越しに校庭に植えられた大きな1本の桜の木を見上げていた。

「知ってるか雷九？ この桜の木って色々噂話があるんだ。例えば、この木の下で告白すると必ず成功するとか、ね」

ま、どこの学校にもありそうな七不思議的な話である。勿論、真偽の程は二の次だが。

「今日は土曜日だから学校休みだけだし、出来ることなら何とかこの週末で解決出来ればいいんだけどな。急に雷九がいなくなったら、友達や先生達だって心配するもんね」

解決のめどころか、原因さえもよく分かっていないにも関わらず、とりあえず決意表明のごとくそんなことを口にしてみる。

が、雷九からは意外な角度から意外な回答が返ってくる。

「… いんです」

「え？」

その声はあまりに小さく、僕は思わず聞き返してしまった。

「いないんです。友達。私、こんなふうにいるもつじうじしてるし、暗いから」

ジーザス。僕のバカああああああ。

悉く、二つ目の地雷を踏んでしまった。

「そ、そうなのか、まあまだ入学して1ヶ月だもんね。そんなの、これからどんどん出来るさ。はは」

馬鹿あらしー。リンネがぼそつと呟いたのを僕は聞き逃さなかった。

それと同時に、雷九の様子が明らかに可笑しいことに気がつく。いや、透明の時点で明らかに可笑しいとかは一旦置いておくとして、つまりは更なる異常事態が発生したと考えていたきたい。

つまり、僕が何を言いたいかといえど… 雷九の服が、体が…。

「あ、あははは。あの、雷九さん？」

挙動不審な僕の様子と視線に気がついたのか、雷九は僕の視線の先、つまり自分自身の体を見た。

「え！ きゃつ、何で、や、やだ、どうし… う、う、うううううううえええええん」

顔を真っ赤にしましたもや泣き出す雷九。

解説しよう。今まで雷九の体はその服ごと透けていた。が、今の雷句は、何故か服の透明化がより強く発現し、雷九自信のボディが、はつきりと見えてしまうという、何ともけしからん状態になっているのだ。

「これはまずいわ。思ったよりも時間が無いかも」

「ああ、確かにこれはけしからんな」

ギロリと僕を睨みつけるリンネ。

まさか、天使にまでガンつけられるとは。妹達と違って拳が飛んでこないだけマシだけど。

「嵐サイテー。このままじゃ、嵐のせいで本当にトオルン消えちゃうよっ」

そ、そんな、今のは不可抗力なんだよ。

… イヤ、今回ばかりは僕は全面的に悪いです。
というわけで、何とかせねば。何とかせねば。
リンネの顔弄りが二度も通じるかは分からないし…。

追い詰められた僕は、一つの結論に達した。これだ。これしかない。

「聞け、雷九。うおおおお、3・14159 26535 897
93 23846 26433…」

いきなり何かって？

これは僕の特技の一つ。円周率暗唱だ。

効果は抜群、雷九はびっくりした様子でこちらを凝視している。

「どうやら透明率も元に戻っている様子で、残念ながら… ごほん、一先ずは服も体も同じく透明化している。つまり、最初の状態に戻っていた。よくはないけど、一先ず良かった。」

「嵐さん、今のって円周率ですよ？ 凄い、良く覚えられますね。数学の先生みたい」

そういつて、僕の手をつかんで握手し上下にぶんぶん振る雷九の顔は、先ほどの泣き顔から一遍笑い顔になっていた。

「ころころ表情が変わる子だなと思っていたが、これって情緒不安定というやつじゃないだろうか。」

もしかしたら、これも雷九がとり付かれた原因の一因かもしれない。

「うん、そうだよ円周率。別に数学は得意ってわけじゃないんだ。ただ、何か暗記するのが得意、というより好きだけ」

実は以前、この手で親戚の赤ちゃんを泣き止ませたことがあった。まさか中学生にまで通じるとは思っても見なかったが。

僕らがそんな会話をしていると後ろからリンネが小声で話しかけてきた。

「嵐、トオルンが彼女の感情の変化によって透明化が進んでいたのは分かったと思うけど、そのバランスが崩れてきてる。彼女の服だ

け透明化が進んだり、嵐は気づいたか分からないけど、さつきトルンが嵐の手をつかんで上下に振っていたとき、一瞬だったけど、嵐の手まで透明になっていたの。トルンの透明化の対象が無差別になってきているわ」

馬鹿な。つまり、このまま彼女の透明化が進行すれば、自身だけでなく周りまで巻き込んで透明にしてしまっつてことか？

「それともう一つ。嵐、走った方がいいよ」
しまった。

前回から何も学んでないのか僕は。普通の人に二人の姿は見えない。いや、それ以前に、公衆の面前でいきなり円周率を叫ぶ人間を見たらどう思う？ 僕だったらきつと、ああ、春だなあと思う。つまりは、そんな状況。

僕は、メロスのようになりふりかまわず、走った。

「嵐ー、まっつてよー」

後ろからリンネの音がする。

「えーい、止めるなリンネ。僕は、僕は、人間の屑なんだよおおお」
お

またもや後ろから声が聞こえてくる。

「そんなの知ってるけど、そっちはトルンの家とは逆なんだつてばー」

僕は、泣いた。

そんな重苦しい空気の中、僕らは何とか雷九の家に着した。

「どうぞ、上がってください。何も無いところですが」

「じゃ、遠慮なくー。さーてトルンのお部屋はどっここかなー」

リンネはドアをすり抜け、ずいといと一人先へ行ってしまった。

「…びっくり。コスプレじゃなくてやっぱり本物の天使様なんです」

「そうだね。僕も最初信じられなかったけど、あれを見せられると流石に信じざるを得ない」

雷九は目を輝かせこちらをじーっと見てくる。

「ごめん、雷九。そんなに期待してもらって悪いけどさ、僕には無理です。代行なんて名乗ったけどさ、あれは便宜上であって、僕なんて所詮天使の使い走りだから。とてもじゃないけど真似できないよ」

必死に否定する僕だけど、リンネの力の一部を借りているっていうのなら、三姉妹の時の翼のように、いつか僕もあれ出来るようになるんだろっか？

「ふふ、分かっていますよ。嵐さんは天使というより、どう見ても普通の人間ですもん。さ、嵐さんも入ってください」

そう言っただけで微笑む雷九。彼女は自分のこと暗いなんて言っていたけど、とてもそうは見えない。確かに色々辛いことがあったようだけど、こちらが本来の彼女の姿なんじゃないだろうか。

僕は居間に居たリンネを捕まえて雷九の部屋へと向かった。

「ね、ね、嵐。居間に天使の絵が飾ってあったんだけど、見た？

ねえ見た？ あたしさー笑っちゃった。だって、すっ裸な赤ん坊の天使が」

「そんなの知りません。というか、フリーダム過ぎだぞリンネ。それより、解決方法は見つかりそうか？」

「ぶーぶー、ちゃんと聞いてよー。え？ うん、何となくだけど、原因は分かってきたわ。これから幾つか検証は必要だけど」

僕らを部屋に案内した後、雷九は台所へと向かった。そんなわけで、僕らは雷九の部屋で待機中。

「どうしたの嵐？ さっきから妙にそわそわしちゃって。トイレなら階段の横にあったよ？」

「別に我慢してませんから。ちょっと緊張してるだけだよ」

雷九の部屋は年相応に女の子の子供の部屋で、可愛い小物やぬいぐるみが幾つも並んでいた。

「ぷぷぷつ。女子中学生の部屋に入っただけでもじもじしちゃって、嵐ったら可愛いんだからー。でも、妹ちゃん達の部屋くらい入ったことくらいあるでしょ？ 年だってそんなに変わらないんだし、だったらそんなに珍しいこともないと思うけどなー」

僕は引きつった笑顔を浮かべ、リンネから視線を微妙にずらし、虚空を眺める。

そんな僕の様子から何かを察したのか、リンネは申し訳無さそうに答える。

「ごめんね。嵐も苦労してるんだね、色々と」

お願いだから謝らないでください。

年頃の妹を持つ兄の、戦々恐々としたこの気分をどうか分かってやってください。

正直、妹達の部屋なんてここ何年も足を踏み入れていない。単に僕が意識というか警戒しすぎなのかもしれないが、もしも僕が入るうものなら、どんな罵声を浴びせられるか分かったものじゃない。男兄弟と違って、女兄弟なんてそんなものである。

僕らがそんな不毛なやりとりをしているうちに、飲み物をもった雷九が部屋にやってきた。

やはり姿は見えかかっても、物を持つことも触れることも出来る様だ。つまり姿が半透明な以外、普通の中学生そのもの。

僕らの前にお茶を置くと、雷九は唐突に質問してきた。

「あの、リンネさんは天使様なんですよね？」

「えっへん、そうだよ」

リンネが偉そうに答える。

本物の天使なら、もう少し謙虚さってやつを知ってほしいものがある。

「私、このままだとどうなってしまうんでしょうか？」

こうしている今でも、少しずつだけど確実に薄く透明になっていく雷九の体。と、なるとその成れの果てといえば。

「本当に消えちゃうかもね」

だ、か、ら。もう少しオブライトに包んで言えっというのに。

案の定、雷句の顔は見る見るうちに悲しみに染まっっていく。

「今の状態でも、私たちは天使の力であなたを見る事が出来るけど、既に一般人にはあなたの姿は見えないレベルまで来てしまっているわ。トオルンが消えちやうのも時間の問題かもね」。勿論、私たちがそんなことさせないけど。だから安心してよ、トオルン」

天使のスマイルを浮かべるリンネ。

「そのためにも、まずあなたが取り憑かれた原因を探らなければならいの。そうだね」。まず最初にあなたのことを聞かせてよ、トオルン。どんなことでもいい、あなたの話が聞きたいな」

「あの、本当にそんなことでいいんですか？ そんなことで私、本当に元に戻るんですか？」

不安そうにこちらの様子を伺いながら、そう答える雷九。

僕自身も何とかしてあげたいけど、ここはリンネの言葉を信じるしかない。

リンネは何も語らない。その代わりに、優しく雷九を見つめている。その姿を見て、何かを決意した雷九はその口を開き始めた。

「先ほどもちよっとお話したことなんです。小さい頃は両親と兄と私の4人でごく普通に幸せに暮らしていました。両親は優しくかつたし、兄は私と年が離れていたものの、よく一緒に遊んでくれました。でも、そんな日々も長くは続きませんでした。私が小学1年の頃、あれは忘れもしない、私の初めての授業参観日のことです。両親はとてもはりきっていて、父は会社を休んで見に来てくれると約束してくれました。ですが、当日その時間になっても一向に両親は現れませんでした。両親は、私の授業参観に出席するため、車で小学校まで向かう途中、居眠り運転のトラックに衝突されて……。何だか、B級ドラマみたいなお話みたいですよ。それからの時間は、あっという間でした。変わり果てた両親と対面して、生まれて初めてのお葬式に出席して、親族間で私の処遇が話し合われました。最初は、兄が私の面倒を見ると言ってくれたそうですが、まだ若かつ

た兄に私を育てるのは無理だと判断されて、結局、祖母が私を引き取って一緒に暮らすことになりました」

自身の苦い思い出と向き合っている雷九。そんな彼女の頬には涙が伝っていた。

「両親を亡くし、兄とも離れて暮らすことになってしまった私は、自分の殻に閉じこもってしまい、学校でも一人で居ることが多くなりました。それでも祖母は毎日私を励まし、元気付けてくれました。祖母がいてくれたから、私はどうにかやっていくことが出来たのですが、その祖母も私が中学に上がると同時に病で亡くなってしまいました。そんな折、今度こそはと兄は私を引き取ってくれて、一緒に暮らすようになったのですが。兄は変わってしまいました。両親が亡くなったとき、兄弟二人で暮らすなんて無理だと親族から言い放たれてからというもの、兄は私を引き取るため、親族を見返すため、たぶん凄く頑張ったんだと思います。一緒に暮らすようになって、朝は早くから家を出て、夜も帰ってくるのは遅いので、殆ど顔を合わすことは有りません。私、このままじゃ兄まで倒れてしまふんじゃないかと心配で」

今までじつと黙って雷九の話を聞いていたリンネが口を開く。

「トオルンありがとう、頑張ったね。参考になったわ」

そう言ったリンネは、ふと窓の外を見ながら続けて言う。

「ね、トオルン。ちょっとしんみりしちゃっただろうけど、折角のいい天気だし、散歩でもしない？」

また唐突な申し出だけど、リンネなりに何か考えがあるようだし、ここまできたらリンネにとことんついて行くしかないか。

「散歩、ですか？」

「そ、散歩だよ。いこ？」

雷九が玄関に向かう中、僕はリンネに尋ねた。

「なあ、リンネ。僕には心なしか雷九の姿がさつきよりはつきり映って見えるんだけど。どういうことだ？もしかして今なら、普通の人にも見えるんじゃないか？」

「えへへ、よく気が付いたね嵐。その通り、トオルンの体、今は安定してるからたぶん普通の人間にも見えるレベルまでに戻っていると思うよ。あたしのキッスの効果とあたし達に話した事でちよつとすつきりしたんじゃないかな？ でもねー、これはほんの一次的なものだよ。根本的な解決にはまだまだだ。これから勝負よ」

土曜の午後という休日真っ盛りな時間帯に、僕らは揃って散歩に出かけた。

それにしてもいい天気。コレだけの天気なら、確かに部屋に籠っているのはもったいないかもしれない。

特に予定なんて無くてもふらつと外に出たくなってしまおうような、そんな天気。

このところ雨が続いてたつてもあつてか、若干恋人同士やカッブルが多いように見受けられる。

いつもならそんな様子に間違いなく毒づいている僕だけど、今回は一味違う。

右側には自称天使。左側には女子中学生という多少変則的でありながらも、両手に花状態なのだ。世間様に負ける気がしない。

「しっかし、本当嫌味なくらいいい天気だよ。この間までの雨が嘘みたいだよな。それで、リンネ。僕達は何処へ向かっているんだ？」

日の光を浴び、パタパタふわふわと気持よさそうに飛んでいたリンネが答える。

「にははは、大丈夫、目的地ならあるよー。あ、ほら見えてきた」
僕らの視線の先に有るもの、それは… 桜ヶ丘第二中学校だった。

「え？ ここ来る時にさつき通った中学だぞ？ 本当にここでいいのか？」

「いいのいいの。ね、トオルン。あなたの教室に案内してくれる？
あたし、トオルンの教室が見てみたい」

天使の考えることは、さっぱり分からない。

「分かりました。特に面白いところでもないですけど、案内します」
雷九の言い方がちょっとだけ引っかけたものの、僕は彼女の案内で校内へと入っていった。

「そういえば、幾ら休日とはいえ、僕なんかが勝手に入っていいのかな？」

リンネは見えないからいいとして、幾ら卒業生といっても、僕なんか勝手に侵入してもいいものだろうか？

「ぶぶっ、なに言っちゃってるの嵐。その見た目なら全然問題ないと思うよ、あたしは」

「あーそうですか、そうですか、どうせ僕はチビですよ。高二にもなって未だに中学生と間違えられることもしばしばですよ」

有須はもとより、団子にさえ身長抜かれるんじゃないかと日々戦々恐々としてますよ。

笑いたければ好きなだけ笑うがいいさ。頑張れ僕の成長期。

「ふふっ。お二人は仲がいいんですね。何だかちょっと羨ましいです」

雷九の教室は一階ということもあり、早々に到着してしまった僕は、それぞれ自由行動をとっていた。

雷九はそこが自分の席なのか、一番後ろの奥の席に座っていた。ついでに言うと、リンネは黒板に落書きをしている。

休日とはいえ、校舎には部活動に勤しむ生徒達の姿があった。僕とはいえば、教室の窓から外をぼけつと眺めていた。

「へえ、やっぱり土日とはいえ結構生徒が居るね。これが正しい青春ってやつなのか、皆輝いて見えるよ。僕のくらい中学時代とは大違いだ」

「嵐さん、中学時代に部活は何かされていたんですか？」

「いやー、お恥ずかしい話、やっぱり帰宅部だったよ。今考えると相当恥ずかしいんだけどさ、当時の僕ってばちょっとひねくれててね。皆と同じことなんてやりたくねー、とか、僕は皆とは違うんだ、

部活なんてやってられるかよ。なんて思ってた、さ」

そんな僕の独白を聞いたリンネと雷九は、顔を見合わせ同時に笑いだした。

「にやはははは、嵐ってば最高。その思春期丸出しの中学時代は反則だよー。そりゃ、妹ちゃん達も苦労するはずだよー」

分かってるよ。僕の中でも一番の黒歴史さ。妹達にもそれはもうウザがられたもんさ。今思い出しただけでも転げ回りたくなるレベル。夜中に奇声を上げながら転がりまわりたくなるレベル。

… それでも月見ちゃんだけは、彼女だけはそんな僕に対して変わらず接してくれたけど。幼馴染って偉大だ。

僕は顔を真っ赤にして黙り込む。

そのとき、この教室の扉が突然開かれ、一人の女生徒が入ってきた。

ユニフォームを着ていることから、運動系の部活をした帰りなのかもしれない。

「笑い声があったから誰か居るのかと思っただけど。意外ねー、雷九さんだったんだ？ どうしたの？ 珍しいね、お休みの日に学校にくるなんて。あ、もしかして何か部活に入ったりしたとか？ それと、そちらは誰？ も、し、か、し、て、雷九さんの彼氏とか？ きゃーっ」

何だかめちゃくちゃ元気な子だ。しかもこちらに答える隙すら与えてくれない。

「う、うん。教室に忘れものしちゃって、それを取りに来ただけだよ。あの、あと、こ、この人は」

雷九のやつ困ってるな。そりゃそうだ、僕みたいのが彼氏だなんていい迷惑だもんな。ここは一つ助け舟を出そう。

「どうも、雷九の「友達」の花って言います。君は、雷九のクラスメイトかな？」

「はいはい、そうですよ。あたしラクロス部に入っていて、たまたまその帰りに教室に寄ったんですけど。ふーん。雷九さんのお友

達ですか… 本当にー？ 本当に唯のお友達ですかー？ って失礼でしたね。あははは。実はあはは、雷九さんが笑っているところ今日初めて見たんです。雷九さんが色々辛い思いをしてきたっていう話は風の噂で聞いています。そのせいか彼女、いつも表情が浮かなくて、元気が無かったから。ちよつとこつちも声をかけずらかったってのもあります。折角のクラスメイトですもん、この1ヶ月、ずっと何とかしたいなって思ってたんですよ。でも驚いちゃったな。雷九さん、あんな顔で笑ってるんだもん」

クラスメイトのその子は一気にまくし立てる。うん、話を聞いているとどうやらすごいイイ子っぽい。

「そうなの？ 雷九、僕の前では結構笑ってくれたけどな」

「むふふふ、だからですよ。だからてつきりあなたのこと、雷九さんの彼氏だと思っただけです。本当にただのお友達ですかー？ と、冗談はさておいて」

ちえー冗談かー。

「ねえ、雷九さん、もっと笑って？」

「そう言いつつ、自身もにっこり微笑むクラスメイトちゃん。」

「こ、こつ？」

「言われるがまま、にっこり笑って見せる雷九。」

「雷九さん、その方が絶対いいよ。ね？ えーと、花さん？」

「そうだね、確かにこつちの方が可愛いよ、雷九」

嵐のすけべー。そんな声がどこからともなく聞こえてくる。

「そうだ、雷九さんってラクロス興味有る？ もし良かったら見学していかない？ それに、もっとお話ししたいし」

「そういえば、雷九の部屋の隅にラクロスの本が数冊あったような気がする。」

「雷九、折角こうして話せたんだ。僕の話は気にせず行って来なよ。大丈夫、また後で会おう」

僕の言葉を受け、ちよつとだけ逡巡した後、雷九はこくりと頷いた。

「本当？ やったやった。良かった、それじゃ早速いこつか？ あとで花さんとの関係も詳しくきかせてね？」

一度だけこちらを向いてぺこりと頭を下げた後、二人は運動場へと向かっていった。

「なあ、リンネ。これで良かったのか？」

二人を見送った後、僕は教卓の上で何故か偉そうに突っ立っているリンネに向かって言った。

「僕達、雷九に何かしてあげられたのかな？ 今回僕、何もしてないぞ？」

リンネは教卓から僕の座る雷九の席の方を見ながら、まるで道德の時間の教師のように優しく語りかけてきた。

「天使の仕事って言うのは、何も荒療治ばかりじゃないわ。一番大切なのはね、今一步を踏み出せないでいる人達の、その背中をそっと押してあげること。それだけだよ」

リンネは黒板に向かい、雷九の似顔絵を描き始める。

「今回のトオルンの場合、必要だったのは繋がり、絆なの。つまり、正確に言うとな彼女は姿が透明になっていたというより、その存在が希薄になっていたのね。早くに両親を亡くし、お兄さんとも別れ、おばあちゃんと暮らしてきたトオルンだけど、その心の拠り所だったおばあちゃんが亡くなってしまい、お兄さんともうまくいかないおまけに頼れる親友もいない。それが災いして、元々不安定だったトオルンの精神面は更に不安定になっていた。そのせいもあって、新しい中学校での生活でも新しい絆を作ることが出来なかった。結果、彼女は孤立してしまった。勿論、天使もそうだけど、人間も一人では生きていけない。今回の場合、そんな心の不安定さと、存在の稀薄さってやつに透明人間の伝承がつけこんだのね。あたし達に出来るのは、さっきの話通りトオルンの背中をちよっと押してあげるだけ。切っ掛けをつくってあげるだけだよ」

僕は手を上げて答える。

「はい、先生。それじゃあこの後僕達に出来ることは、雷九を信じ

て待つだけなんでしょうか？」

「嵐くん、正解。クラスメイトとの絆、部活仲間との絆、お兄さんとの絆もトオルン次第。でもね、人は繋がりを持つこと、絆を作ることで変わることが出来る。きつと、トオルンも、ね」

「そっか、でも雷九なら大丈夫だろう。それに、あのクラスメイトの子もいいやつそうだったし。あの子、帰り支度をするために教室に寄ったつてのに、わざわざ雷九を見学させるため戻っていったろ？ 彼女なら、雷九ともうまくやっていけるんじゃないかな。雷九は無色透明だった。でもそれは、これから何色にも染まる事が出来るってことだ」

「にははははは、嵐、クサイ、そのセリフ、臭すぎだよー」

僕らは校庭で楽しそうにクラスメイトと話す雷九を確認した後、懐かしの桜ヶ丘第二中学校を後にした。

辺りはすっかり夕暮れ時。オレンジの夕日を見ながら今日の出来事を反芻する僕。

「何だか今日は振り回されっぱなしで、全然カッコイイとこなかったなー」

「そうかな？ トオルンにとっては、きつとそんなことなかったと思うよ？ たぶん」

たぶんかい。そこはこう、もっと励ましてくれたりするものなんじゃないの。

僕は心の中で毒づきながら、我が家の玄関の扉に手をかける。

「あー、おなか空いたな。今日の晩飯は何だっけ…ん？ 晩飯？ そう言えば何か忘れてるような」

「あ、お帰りなさい兄さん。随分遅かったですね？ ちょっと心配しちゃいましたよ私」

「ははは、相変わらず心配性だな有須は」

と、僕の手元に視線を移した有須が固まっている。

「兄さん、買い物は？」

「え？ ……あ」

いつの間にか加勢にやってきたダンゴも加わって、二人分の拳が僕に襲い掛かる。

「兄さんの、」

「にいにいの、」

「馬鹿ーーーーー」

「今日のおかずー」

「にはは、頑張つてねー、嵐。」

どこからともなく聞こえてきたリンネの声を聞きながら、僕の意識は夕暮れの彼方へと飛んだ。

この日、学校の帰り路、僕とリンネは再び雷九の部屋を訪れていた。

雷九の姿ははつきりくつきりと映っていて、この前まで今にも消えてしまいそうな人間だったとは思えないほど回復していた。

「嵐さん、天使様、この前はありがとうございました」

そう言う雷九の顔は実に晴れやかで、以前のような不安げな表情は何処にも無かった。

「あの、私、ラクロス部に入っただけですよ。実は、部活紹介のときから興味あつたんですが、自分から動くことが出来なくて。これまでじつと窓から様子を見ていただけだったんですが、この前みやちやんに練習風景を見せてもらって、私決意したんです。クラスメイトとも、少しずつ話をすようになりました。… 兄とは、まだ完全に話し合えたわけじゃありません。でもいつか、また以前のように本音で話が出来るように、私、諦めませんから」

「凄いで、雷九。みやちゃんってのはきつと、あの時のクラスメイトのことだろう。」

「そんな雷九の言葉が嬉しくて、僕はニコニコしながら頷く。」

「そっか、でも僕達は何もして無いよ。雷九が頑張つたからさ。僕

らはほんのちよつと切つ掛けを作っただけだよ」

「嵐、それアタシのセリフ。ずるいー」

そういつてその小さな頬を膨らませるリンネ。

「ごほん、それじゃあ今から最後の仕上げをするよ。トオルン、大きく深呼吸してゆつくり目を閉じて？ それと、何があってもあだし達信じて、ね？」

こくん、と一度頷いた雷九は言われたとおり深呼吸した後、目を閉じる。

三姉妹の時同様、リンネが何か呟くと同時に、どこからいつの間にとりだしたのか、珍妙な弓矢が出現し、雷九の心臓目掛けて一気に引き放つ。

矢は雷九に見事命中。雷九の体から黒い煙出てきて、自らの体を形成していく。

「出たな、透明人間の伝承」

僕はリンネの方を向き、こくんと一度頷く。

僕の右手が一度ズキンと痛んだのち、突然発光し何かの形を形成していく。

今回は前回と違い… 何故か火炎放射器。

「うおい。何で火炎放射器なんだよ！ 仮にも天使の武器ならもつとほかにもあるでしょーが」

「え？ 何言つてんの嵐。透明人間と言えば火炎放射器でしょ？ あたし映画で見たんだから」

ドヤ顔でそう答えるリンネ。

というか何の映画だよ、何の。しかも火炎放射器なんて当然ながら使った事無いぞ、僕。

つまり、今回も、気合いで何とかするしかないらしい。

仕方ない。今回はいいとこなしなんだ、せめて最後までいいは。

僕は雄たけびとともに、スイッチを入れる。

その瞬間、思わずひくくらの白い炎が放射され、あっという間に黒い靄を跡形もなく飲み込んでいく。なにこれ、スゲー威力。

とはいえ、どうやら今回も何とかうまくいったようだ。

「ふうー！。やっぱりこの瞬間は緊張するよ。あらしー、じくろーさまー」

大きな安堵の溜息をつき、へなへなと力が抜けるリンネと僕。

ゆっくりと目を開き、その目を潤ませながらこちらを見つめてくる雷丸。

「本当にありがとうございました。お二人には何てお礼を言っているのか。やっぱり私にとって、嵐さんや天使様と出会えたこと、お二人との繋がりが一番の宝物です」

そう言う彼女の笑顔には一点の曇りも無く、まるで今日の青空のようにどこまでもどこまでも、透き通っていた。

END

第3話「花と嵐と月の裏側 ～十五夜月美の場合～」

第3話 「花と嵐と月の裏側 ～十五夜月美の場合～」

季節は初夏。いよいよ梅雨本番の季節に差し掛かるうという5月下旬。

降り続く雨は人を憂鬱な気分させるけど、そんな僕をさらに憂鬱のどん底に突き落とすような、とある一つの事件が起こる。

僕はこの事件を経てようやく、「天使」という仕事の本当の意味を知ることになる。

「ねえ、嵐。これまで二つの試練をこなしてきたけど、そろそろあたしや天使の仕事を理解してくれたよね？」

帰宅後、自分の部屋に戻ったばかりの僕に、そんなセリフを問いかけてくるリンネ。

「まあ多少は。全部を素直に受け入れるってのはまだまだ難しいけどさ、リンネの力にはなりたいと思ってるよ。そう言えばお前、最近ふらつといなくなることが増えたけどさ、何やってんだリンネ？」
僕は肩に下げていたバックをベッドへと放り投げ、近くの椅子に腰かけながら能天気にもう聞き返した。

突然、リンネは神秘的な顔つきになる。

そんな彼女の顔を見て僕は、堪らなく嫌な予感がした。

「嵐。あなたの幼馴染、十五夜月美は…人間じゃないかもしれな
い」

人間じゃないかもしれない。

僕は、リンネの発したその言葉の意味が理解出来ず、ただただ気が遠くなるのを感じていた。

月美ちゃんが、人間じゃない？

人間じゃないだつて？ だったら、何だつて言うんだよ。幽霊か？ 宇宙人か？ 未来人か？ いや、まさかそんな、嘘だ、絶対に嘘だ、有り得ない。

「実は、彼女を初めて見たときからちよつとした違和感を感じていたの。でも、その違和感の正体までは掴めなかった。だから…ここ数日間、勝手に彼女を調べさせてもらったわ。それでわかった事なんだけど。まず一つ、彼女はあたしの姿が見えている」

リンネの姿が見える？

そんな馬鹿な。天使を見ることが出来るのは、そのパートナーと、試練の関係者と、過去に天使と関わったもの、そして或いは、リンネと同じ…。

「嵐、ズバリ結論から言うわ。あなたの幼馴染、十五夜月美は…堕天使よ」

僕は、自分の血の気が一気に引いていくのが分かった。

月見ちゃんが堕天使？ 嘘だ。そんなの嘘だ。有り得ない。

彼女は僕の幼馴染で、小学校からずっと一緒に、確かにちよつと変わっているけど、何の変哲も無いごく普通の少女じゃないか。

そんな彼女が堕天使だと？ ふざけるな。そんな話があつてたまるか。

「そんなの嘘だ。だったら月美ちゃんは、わざわざ僕の前では、今までずっと人間のふりを続けてきたとでも言うのかよ？ 僕をずっと騙していたつてのかわ？」

僕は、自分でも気がつかないうちに、声を荒らげ、力の限りそう叫んでいた。叫ばずにはいられなかった。

そんな僕とは対照的に、リンネが努めて冷静に僕をなだめる。

「嵐、落ち着いて。十五夜月美が、嵐にとって大切な人物だつてこ

とはあたしにも分かる。だからこそあたしも、これまで一人で調べていたし、確実なことが言えるまでは嵐には内緒にしていたの。お願い、まずは落ち着いて」

一気に血が上り、勢い良く立ち上がったせいも、急激な立ちくらみに襲われる僕。こんな時だって言うのに、流石もやしっ子だよ。

僕はふらふらよろめきながら、その場に座り込む。

皮肉にもこのインドア体質は、炎のように一気に燃え上がった僕の心をクールダウンさせるにはもってこいだった。

「嵐、大丈夫？ ごめんね。でも嵐には分かって欲しいの。あたしだってこんなこと言いたくなかった」

慌てて僕に駆け寄り、心配そうにこちらを見つめてくるリンネ。

リンネに気を使われてしまうだなんて、僕は相当らしくない行動をとってしまったらしい。我ながら実に情けない姿である。

「いや、こつちこそゴメン、いきなり怒鳴っちゃったりして。月美ちゃんのこととなると、つい」

立ち上がるうとする僕を制し、リンネが言う。

「そのままでもいいよ、それじゃあ話を続けるね。嵐は、墮天使って何だと思う？ あなたのイメージでいいから言ってみて？」

僕は暫く考えを巡らせた後、率直に答える。

「また笑われそうだけどさ、僕の持つてるなイメージだと…何かの理由で天界を追放された天使のことだろ？ 天使って言うより悪魔に近いとかかな？」

笑うどころか、僕の回答をいつにもまして真剣に聞くリンネ。

「30点ってところかな」
30点？

どうやら僕は、天使学赤点らしい。つまり僕の抱くイメージと事実に相当のギャップがあるようだった。

「まずはじめに、墮天使は悪魔何かじゃないわ。それだけは決して間違えないで欲しいの。特に、代行者であるあなたにはね。でも、天界を追放された天使ってのは正解。意外に思うかもしれないけど、

あたし達天使が天界を追放される理由はね、実は一つしかないの」

僕の顔をまじまじと見つめながらリンネが言う。

「それはね、あたし達テンタマがこの試験に失敗したときだけ。つまり、試験に落ちたから墮天使ってわけ」

そんな。それは今の僕達にも大いに関係有る話じゃないか。それじゃあ、もし僕達がこれからも続くであろうこの試験に失敗したら、リンネも天界を追放されちゃうってことなのか？ 墮天使になっってしまうってことなのか？

僕は、自分の肩に掛かったプレッシャーの大きさを、改めて自覚させられる。

「厳しいと思う？ 酷いと思う？ でもね、テンタマの試験はちょっとやさつとでは、そう簡単には失敗にはならないわ。それに、実を言うと制限時間つても無いの。だからよっぽど無制限のことが無い限り失敗扱いにはならない」

「待ってくれ。それじゃつまり、そのよっぽどのことを、月美ちゃんが生かしたってのか？」

一瞬の沈黙の後、リンネは重たい口を開いた。

「そうだね。彼女は、テンタマにとって、一番のタブーを犯してしまった」

僕は、その話の続きを聞きたくは無かった。思わず耳を塞いでしまいたい、正にそんな気分だった。

リンネは、そんな僕の気を知ってかしらさずか、しっかりと僕を見据えたまま答えた。

「十五夜月美は、テンタマにとって一番重要な存在「自分のパートナー」を死なせてしまったの」

死なせた？ 月美ちゃんが？

「何があつたかは、今はまだ言えないけど、十五夜月美が自身の代行者を死なせたのは紛れも無い事実。そうして天界を追放されたのも事実。でもね、嵐。勘違いしないで欲しいのは、天使が天界を追放されるのは単なる罰というわけじゃないの」

「罰じゃない？ それじゃあいつたい何のために、月見ちゃんは天界を追われたっていうんだよ」

「さつき嵐が言っていたことにも関係してくる話なんだけど。天使が天界を追放されるとき、その天使は天使の力と記憶をほぼ剥奪されて、代わりに人の体と記憶が与えられるの。つまり、あなたの幼馴染は、体は確かに人間だけどその中身は天使のそれってわけ。だから、普通に人間として成長するし普通に人間として生活だって出来る。安心して、彼女との記憶は作られたものや嘘偽りなんかじゃない。そうやってただの人間として生活することにより、人間のことをより深く識るつてのが目的ね」

「その話が事実だとして。追放つてやつは、いつまで続くものなんだ？ 普通の人間として生活するって事は、まさか人として死ぬまでとか？」

リンネはふるふると首を左右に振り、神妙な顔つきで言う。

「天使の大切な仕事の一つに、人間界へと追放された墮天使を、再び天界へと送り返すつてのがあるわ。それは、テンタマだけに許された仕事なの。逆に言えば、墮天使を天界に送り返すことができるのは、テンタマだけ」

墮天使を送り返す？ 待つてくれ、だとしたら、月美ちゃんは…。

「墮天使は、その墮天使が人間として生きていくのに、都合のいい場所や環境に落とされるらしいけど。嵐、私が何を言いたいかわかる？」

僕は答えの代わりに、沈黙を持って答える。

「本物の十五夜月美は… とつくの昔に死んでるのよ」

僕の中で、何か音が立てて壊れたのが分かった。それでも、リンネが止まる事は無い。

「彼女の場合、交通事故だったらいいわ。記録上は奇跡的に一命を取り留めたつてことになってるけどね。実際はその時、追放された天使の魂が、十五夜月美の体に入つたつてわけ。亡くなつた十五夜

月美の記憶を引き継いでいるし、見た目も十五夜月美そのものなんだけど、中身は記憶の無い天使。いくら記憶を引き継いでいても、以前の十五夜月美とは全く違う存在ね。十五夜月美の両親は、その事故のせいで月美が変わってしまったって思ったみたいだけ。だからこそ彼女の環境をリセットするために引越しをした。そこが、花家の隣だったってわけね」

僕の頭はますます混乱していた。言いたいことや反論したい事も多々あった。けれど、リンネに対して、今、一番言いたいことは。

「何故それを僕に言うんだ？ 僕に、僕にどうしろっていうんだよ……」

僕の目は、焦点を捉えてはいなかった。その視線の先に、何があったとしても。ただ一点、虚空だけを見つめていた。

「墮天使を送り返すには、あたしと嵐、両方の力が必要だからだよ。それと、あたしはね、このテンタマ試験をあなたと一緒に突破して本物の天使になりたいって、心の底からそう思ってるの。だから、だからこそ十五夜月美の中の天使にも、2度目の機会をあげたいと思ってる」

リンネの言いたい事は分かるし、恐らく正しいのだろう。けれど、それでも、僕は。

「でもね、それって完全にあたしのエゴだし、完全に天使目線のお話なんだ。結果として、嵐から大切な幼馴染を奪ってしまう事になる。だから、十五夜月美を天使に戻すか、あえて見過ごしてこのまま人間として生きるか。……それを決めるのはあなたよ、嵐」

全く、酷い天使もいたものである。

こんなの、僕に決められるわけ無いって、知ってるくせに。

「もしも天使に戻すなら、彼女は人間界を離れ天界に行くことになる。二度目のチャンスが与えられることになるけど、その後は中の

天使次第ね。逆に、人間としてこれまで通り生きて欲しいと願うなら、あたしは、彼女に関しての一切にもう二度と関わらない。それは約束するし、嵐を責めたりなんかしない。いずれにしても、あたし一人の力では彼女をどうすることも出来ないわ。だから、決めるのはあなたよ、嵐。でもね、これだけは言わせて？　あたしは、彼女を天使として天界に戻したいと思っている。彼女にチャンスをおげたいの。同じ、天使として」

その時、まるでタイミングを見計っていたように有須の声が聞こえてきた。

気がつけば夕刻過ぎ。どうやら夕食の時間らしい。

「まだ時間は有るわ、ゆっくり考えてくれればそれでいいよ。さあ、妹ちゃんが呼んでるわ、早く行ってあげて？」

ごめんね、嵐。

最後に天使がそう呟いたのを、僕は聞き逃さなかった。

シンキングタイム一日目

いつも通り、いつもの時間に月美ちゃんを迎えに行く。情けない事に、結局昨日は一睡も出来なかった。

リンネのヤツ、月美ちゃんの処遇を僕に決めるだなんて、今までで一番酷い無茶振りだ。

そんなの、僕に決められるわけが無い。このヘタレな僕に。

花家から時間にして約10秒の位置にある十五夜家。そんな彼女の家の前で立ち尽くす僕。

十五夜家の玄関チャイムを押す手がいつもより重い、確実に重い。まるでここだけ重力が違うように重たい。

僕は、大きな溜息を一つつき、長年押し続けてきたそのチャイム

を押した。

「あら。お早う、嵐ちゃん。ごめんねえ、月美ったらまだ準備が出来てないみたいなの。ちよっと待っててあげてもらえる？」

僕を出迎えてくれたのは、月美ちゃんの母である月子さん。

…もし、僕が月美ちゃんを天界に還してしまつたら、残された月子さんやおじさんは一体どんな思いをすることになるんだろう。それ以前に、2人は月美ちゃんが既に本当の月美ちゃんじゃないってことすら知らないはず。

そう考えると、僕は月子さんの前でどんな顔をしていいのか、それすら分からなくなつてしまった。

「あ、すみません月子さん。今日はいつもよりちよっと早く来すぎちゃつたかもしれません」

「あら、すみませんだなんて。こつちこそ、いつもいつも月美を迎えに来てもらつて助かつてるんだから。まつたく、嵐ちゃんには迷惑掛けっぱなしねあの子つたら。そうね、こうなつたらいつそのこと、嵐ちゃんに一生面倒見てもらつてのも」

月子さんが冗談交じりにそんなことを言いかけたとき、家の奥からこちらに向かつてくる足音が聞こえて来た。

「おかーさん、何、言ってるの。は、恥ずかしいこと、言わないでよ。わ、私は、別に、そんなこと」

いつもと変わらない月美ちゃん。それなのに何故だろう？ 何故僕は、この場から逃げ出したい気持ちでいっぱいになっているんだろう。

「あらあらー月美つたら、そんなに顔を真っ赤にしちゃってー、それじゃ説得力が無いわよ？」

「こ、これは、怒ってるからだよ。本当、だもん」

果たしてこの僕に、彼女らの日常を壊す権利なんてあるのだろうか？

なるべく平静を装いながら、いつも通りの笑顔で僕は言う。

「それじゃあ行こつか、月美ちゃん。忘れ物はないよね？」

「あ、カバン、忘れた。ごめん、嵐、もう少しだけ待ってて」

すたすたと階段を駆け上がってく月美ちゃん。そんないつも通りの彼女を見て、どこか心が痛んだ。

「全く。相変わらずね、あの子は。それと… 嵐ちゃん、何かあった？ 今日ちょっと元気が無いみたいだけど」

実はこの人、あの月美ちゃんの母親とは思えないくらいに勘が鋭かったりする。

それに、小学校の頃からほぼ毎日こうして顔をつき合わせているわけ。

もしかすると家族の次くらいに、僕のことには詳しい人物なのかもしれない。

恥ずかしい話、早くに母を亡くした僕にとって、母親に近いような感覚すら抱いている。そんな人物なのだ。

… だからと言って、おいそれと真実を言えるはずも無く。僕はおどけて答える。

「いやー、流石は月子さん。相変わらず鋭いですね。実は、ちょっと寝不足でして」

「あら、それは良くないわ。でもね、それでもこうして時間通り月美を迎えに来てくれるんですもの。嵐ちゃんになら、安心して月美を任せられるわ。冗談抜きで、いつでもあの子貰ってくれていいのよー。ね？」

爆弾発言を投げつけ、ウインクまでかましてくる月子さん。僕は、思わず照れ笑いを浮かべてしまう。

そんなやり取りをするうちに、階段から月美ちゃんが下りてきた。「嵐、おかーさんから、また変なことでも、言われた？」

「失礼ねー月美。そんなことばかり言っていると私が嵐ちゃん、とっちゃうわよ？」

でた、月子さんの口癖。

小学校の頃から散々言われてきたこのセリフ。月子さんが月美ち

やんをからかうときには必ず使われるこのセリフ。

毎度、月美ちゃんの反応が面白くて、その度に僕と月子さん二人して笑いあっていた。

「だ、駄目だよ、そんなの。嵐は、駄目、あげないもん。それに、お母さんには、お父さんが、いるでしょ」

「なによームキになっちゃってー、あら、もうこんな時間ね。さあ2人とも、気をつけていつてらっしゃい」

そんなお茶目な月子おばさんに送り出され、学校へと向かう僕達。「嵐、お母さんが言ったことは、忘れていいから、ね」

「月美ちゃん、僕は月子さんの言ってたこともまんざらじゃないよ?」

「……え?」

ぼん。

と、まるでそんな音が聞こえてきそうな勢いで、顔を真っ赤にする月美ちゃん。全く、からかい甲斐があるんだから。

「あ、あの、あ、あ、嵐、で、で、でも、でも」

「なんてね?」

「酷い。嵐、酷いよー」

赤い顔をさらに赤くして怒る月美ちゃん。こうして彼女を弄るのが、僕の密かな楽しみだったりする。

「ゴメンゴメン月美ちゃん。機嫌直してよ、ね?」

「知らないもん、嵐、なんて」

すっかりご機嫌斜めになってしまった月美ちゃんを諷めるうちに、あつという間に学校到着。

とはいえ、意外と気持ちの切り替えが早い月美ちゃん。教室に入る頃にはすっかり元通り。

「おつ、メガネ夫婦の登場だ。お早うさん、2人とも」

「お早うイタル。だからさー、別にかけたくて掛けてる訳じゃないんだよコレ。目が悪いんだから仕方なくだよ。ね、月美ちゃん」

「え? ……勿論」

「何、その間は？ 伊達なの？ そのメガネってまさか伊達なの？
月美ちゃん」

僕の質問をスルーしてスタスタと自分の席に向かう月美ちゃん。
「っーかお前ら、夫婦ってのは毎度否定しないのな。ひゃっひゃっ
ひゃ」

いつも通りの日常。

ちよつと前までの僕は、こんな何気ない日常がいつまでも続くと
思っていた。勝手にそう思っていた。

でも、今の僕は違う。この日常を自らの手で壊してしまうかもし
れない。

天使としての幸せ、人間としての幸せ。

僕は、どうすればいいんだろう？

あつという間に昼休み。

僕は、気分転換がてら校内をあてなく徘徊していた。

気がつくと、いつの間にか校舎の一番端である例の美術準備室の
前まで来てしまっていた。

ついでとばかりに、なんとなく中を覗くいていみる僕。すると。

「あれえー、嵐君だあ。どうしたのー？」

案の定、雨守小雨先輩がいた。

「あ、すみません。特に用件は無いんですが、考え事しながら歩い
ていたら、いつの間にかここまで来ちゃいました」

「あはははは、ウチもよくやるよー、それ。そうだあ、折角だから
ちよつと寄って行ってよお」

言われるがまま準備室へと入る。

「その椅子に座ってねえー。はい、じつとしてえー」

そう言うなりペンとスケッチブックを構える小雨先輩。

どうやら、僕の似顔絵を描いてくれるらしい。

普段の彼女からは想像も出来ないくらい素早く、そして激しくペ

ンを動かす先輩。

そう言えば、小雨先輩がちゃんとした絵を描くところって初めて見るけど、やっぱり凄い。

「嵐くんさあー、何か悩み事？」

「… はい、実はちよっと」

「ふうーん。ウチはさあ、こんな性格だから、嵐君の相談にうまく乗ってあげられないけどさー、っと、出来たあ」

そう言って、出来あがったスケッチブックを見せてくれる先輩。

そこに描かれていたのは、満面の笑みを浮かべた僕の顔だった。

「例え悩んでいてもさあ、こうやって笑っていたらいいと思うよー。うまく言えないけどお、笑う門には福来るって言うでしょ。ね？

はい、コレ」

いましてがた書いてくれた僕の似顔絵を手渡してくれる小雨先輩。

満面の笑顔の僕の絵。きつと、先輩なりに僕を励ましてくれたのだらう。

「そうか。僕ってこんな風に笑ってたんですね。ありがとうございます
ます小雨先輩。危うく忘れるところでした」

似顔絵通りの笑みを浮かべてみせる僕。

「おねえーさん、昼休みは大体ここにいるから、いつでも会いに来ていいよお。嵐君ならいつでも大歓迎だあー」

小雨先輩と別れて教室に向かいながら尚も考える。

小雨先輩にも気を使われるくらい、僕は酷い表情をしていたらしい。

駄目だな。確かに月美ちゃんの問題は難しいけど、こうして1日中難しい顔をしていては、答えなんか出ない。出ないどころか、周りにも気を使われてしまう始末。しっかりしろ、花嵐。

一日目は、そんなことを考えるのが精いっぱい、明確な答えを出すことが出来ず暮れて行った。

シンキングタイム二日目

昨日と違い、ちよいと遅めに十五夜家へと向かう。あまり早く行ってしまう、月子さんと顔をあわせるのが何となく躊躇われたためだ。

相変わらずの軟弱思考。駄目人間的逃げの思考である。

チャイムを鳴らしたその瞬間、勢いよくドアが開かれる。

運動神経が皆無の僕は、当然避ける事も出来ず顔面強打。玄関でうづくまる僕に、月美ちゃんが言った。

「遅いよ、嵐。昨日は遅れちゃったから、今日は、早めに、待ってたんだよ… おなか痛いのか？ 嵐」

「ごめんごめん月美ちゃん。今日はちよっと遅過ぎたよね、もしかして結構早くから待っていてくれたの？」

その時、奥からぬーっと出てくる人影。月子さんだ。

「聞いてよ、嵐ちゃん。月美ったら、昨日は遅れて嵐ちゃんに迷惑かけちゃったからって、今朝なんて七時からここで待ってるのよ！ 極端よねーこの子って」

「え、嘘？ それは幾らなんでも早すぎでしょう月美ちゃん。ちゃんと朝ご飯食べた？ 疲れてない？」

「愛のなせる技よ、嵐ちゃん」

そんな月子さんの言葉に、顔を赤くして反撃する月美ちゃん。

「おかーさん、余計なことは、言わないでよ。それより行こう、嵐。遅刻しちゃうよ？」

そんないつも通りのやりとりをしつつ、学校へと向かう僕ら。

「そう言えば、もうすぐ実力試験があるよね。はあー、高校も2年ともなると、やっぱりテストや追試はどうしても増えるよね」

「うん。この間、終わったと思ったら、もう、次のテスト。早い」

「月美ちゃんさ、勉強してる？ 僕、今日はちよっと図書室で勉強

していこうかな」

「うん。頑張つて、嵐」

サムズアップで答える月美ちゃん。まるで他人事みたいなリアクション。

放課後

結局のところ、僕は一人で図書室へとやって来ていた。

ただでさえ、考え事で授業に集中できていない今の状況。少しでも集中して勉強しないと、次のテストで地獄を見ることになる。

天使の使いである前に一学生である僕。…ごめんね、月美ちゃん。今だけは勉強させて。

適当な席につき、テキストを開く。

が、やはり集中なんて出来るはずもなく。開始五分たらずで思わず頭を抱える僕。

「あら、こんなところで会うなんて珍しいですわね、花さん」

うんうん唸る僕を見かねて話しかけてきた人物。それは雨守春雨先輩だった。先輩とはあの事件以来の再会となる。

「ははは、僕だって勉強ぐらいますよ、春雨先輩」

「それは失礼しましたわ。でも、あまりはかどっていらっしやらないようですわね？」

そう言つて、白紙に近い僕の問題集を指さす先輩。

「考え事で、勉強が手につかないといったところかしら？」

流石春雨先輩、非常に鋭い。

「意外ですわ、あなたにも悩みなんてあったんですね？ いいですわ。わたくし当ててみますわ、あなたの悩み」

僕を上から下まで見渡し後、頷きながら答える先輩。

「分かりましたわ、ズバリ、その身長ですわね！」

泣いていいですか？ 図書室で号泣してもいいですか？

「その年にしてその身長、確かに平均から逸脱していますわね。でもね花さん、大切なのは周りがどう思うかではなく、あなた自身がどう思うかよ。周囲を言い訳にしてはダメ、大切なのはあなた自身の気持ち。ね？」

ずれているようで、ずれていない。

それは、今の僕にズシンと響くアドバイスだった。

「そうですね、確かに。僕は周囲を言い訳にして、自分の気持ちを覆い隠していたのかもしれませんが。助言、ありがとうございます先輩」

「あら、いいのよ。だってわたくし、あなたより歳上で先輩ですからね」

そう言って胸を張る先輩。つまり、あの事件の時、僕に説教じみたことを言われたのが相当悔しかったらしい。

「それと、花さん。こちらの問題集の問2、間違ってますわよ？」

確か、二年はもうすぐ実力テストがあるんでしたよね？ いいですわ、こうなったら、この間のお礼も兼ねてわたくしがビシバシ鍛えて差し上げますわ。さ、ペンを持ってください、始めますわよ」
えええーっ。

春雨先輩の勉強会は、日が沈むまで続いた。

あの春雨先輩と一対一の勉強会、見る人から見れば相当羨ましい光景なのかもしれないが、春雨先輩は僕に対して容赦がまったく無かったわけで。

おかげで勉強ははかどったものの、答えは未だに出せず仕舞い。でも、あと少し。あと少しで解を導ける筈。決断出来る筈。

僕は、自分自身にそう言い聞かせる。

一昨日と昨日の教訓を生かし、ベストな時間に月美ちゃんを迎えに行く。彼女の行動パターンからして、間違いない時間。完璧な時間。

僕は自信満々にチャイムを鳴らす。

「ナースタイミング、嵐ちゃん」

サムズアップで僕を迎える月子さん。相変わらず、朝一からめちゃくちゃテンションが高い御仁である。

逆に、月美ちゃんがあれくらいのテンションに成長したのも何となく分かる気がする。

「やっぱり嵐ちゃんは月美のこと良く分かってるわー。幼馴染は伊達じゃないわね。それとも、二人の間にはそれ以上の何かがあるのかしらー、むふふふふふふ」

「おかーさん、朝から、何言ってるの？ 恥ずかしいこと、言わないで」

「あらあらあらー、朝からだなんて、それじゃあ朝じゃなければ言ってもいいってことかしら？」

にやにや笑う月子さん。思わず僕も照れてしまい、月美ちゃんと一緒に顔を赤く染めながら、互いに顔を見合わせる。

これまで何百回と繰り返されてきた光景。僕にとって当たり前の日常であり、決して外すことのできない日々の一コマ。かけがえない、大切な生活の一部。

月美ちゃんが、僕にとっぴか大切な存在で、僕の生活の一部を担っているということは今更ながらに痛いほどに理解する。

僕は一体どうしたいのか？ 彼女をどうしたいのか？ 僕は、本当に決断する事が出来るのだろうか。

そんなことばかり考えているうちに、午前中の授業はあつという間に過ぎさつていく。どうやらいつの間にか3時限目が終わっていったらしい。にも関わらず、僕のノートは依然として白いまま。

全く集中できない。こうなったら、いつそのこと保健室で時間を潰していた方がましかもしれない。

「ごめん、月美ちゃん。ちょっと気分が良くないから保健室へ行つてくるよ。ノートお願いできる？」

「うん。大丈夫？ 嵐」

「大丈夫、いつもの貧血だよ」

月美ちゃんに続けてイタルにも言伝。

「委員長様も先生に伝えといてくれよ」

「お、何だ？ サボりか？」

「いつものもやしっ子の持病だよ」

そう言い残し教室を出た直後、思わずノートを月見ちゃんに頼んでしまったという事に気がつく。

今更ながら、自分がいかに彼女に頼りきっているかを自覚させられる思いである。

何もかも投げ出して、どこかへ逃げだしてしまいたいような気分。どん底ブル！。

月美ちゃんにとって何が一番なのか？ たったそれだけの問題。

その筈なのに。

戻すべきか、戻さすべきか、二つに一つ。

こんな大切なことを僕に決めろというリンネ。勿論、天使と代行者二人の力が必要ということもあるが、リンネが僕を信頼してくれているという証でもある。条件だけでみれば、どう考えても月美ちゃんを天使に戻すのが正解なのだろう。それでも、僕がそう即答出来ないのは…。

そんな不毛な思考を巡らす間に、僕の足はいつの間にか保健室へと達していたらしい。

こうしていつまでも、扉の前で突っ立っていても仕方ない。

僕は頭を抱えたまま、ノックをしつつ中へと足を踏み入れた。

「あ？ 誰かと思えば花じゃねえか。ホント、お前もサボり魔だよな」

雨守五月雨先輩である。先輩とは事件以来、何故かこの保健室で会うことが多々あった。

僕の場合は貧血7割、サボり3割だけど、先輩の場合は、100%サボりにきているわけで。

「だから貧血ですって五月雨先輩。先輩みたいにただ単にサボりに来てるわけじゃないですってば」

「はん。相変わらずのもやし野郎だな。もっと体鍛えろよ」

「疲れるから嫌です。それに、保健室登校な不良先輩に言われたくはないですね」

「お前、殴られてーのか？ 別にいーんだよ、アタシは。ちゃんと出席数日数管理くらいしてるからな」

流石は雨守3姉妹、腐ってもそういうところは抜け目がない。

「先輩らしいですよ、そういうところ。まあ、先生はいないみたいですし。勝手に寝ます」

僕は、五月雨先輩から二つ離れたベッドに横たわりカーテンを閉める。

どうやら、僕と先輩以外に、ベッドを使用している人物はいないようだった。

先輩のベッドからは、早くもいびきが聞こえてくる。毎度の事とはいえ見事な早業である。

そんな先輩を尻目に、どうやら僕は眠れるような気分ではないらしい。授業が終わるまで後数十分。これじゃ、教室にいるの何もう変わらない。

僕は大きな溜息をつき、真っ白な天井を見上げ寝返りをうつ。

そんなことを繰り返しているうちに、僕の口からは自然と言葉が出ていた。

「五月雨先輩、もし、もしもですけど。自分の大切な人が、遠くに

行ってしまうとして、それを止められるのが自分だけだとしたら、先輩ならどうします?」

曖昧な質問。帰ってくる筈の無い答え。僕は再び天井を見上げ、目を閉じる。

「随分曖昧な質問じゃねーか。アタシだったら、そうだな、その理由にもよると思うぜ。もしそいつが、例えば自分の夢や目標を叶えるために、自分から離れていつちまうんだとしたらよ、そりゃ、めそめそしてねーで、笑顔で送り出してやるってのが漢ってもんじゃねえのか? 後先のことや周りのことなんて、考えたってしょうがねえからな」

先輩から寄せられた実に漢らしい回答。いや、五月雨先輩らしい回答。

僕はベッドから飛び起き、カーテン開けばなしでベッドの上であぐらをかく先輩を見つめる。

「あ? 何だよ?」
「流石は先輩。実に漢らしい回答です。僕、先輩のことちょっとだけ見直しましたよ」

気がつけば僕は、保健室を飛び出していた。
「ま、一応先輩だからな。でもよ、幾ら何でも漢らしいってのは失礼だろ、っておい、どこいくんだよ、ためーこら、逃げんなー」
後ろから先輩の怒鳴り声が聞こえてくる。

僕は振り向かず言う。

「先輩、ありがとございましたー」

授業終了まで後、十分。僕は屋上へと向かっていた。

幾つかの階段を上り、幾つかのドアを開けた先。

そこは、突き抜けるような青空が広がる我が校の屋上。

天使の一人や二人飛んでいても可笑しくないほどのどこまでも続く快晴。

通り抜ける風が実に気持ちいい。捕まえて手元にずっと持っていたいくらいに。

僕は、答えを決めていた。

僕は、覚悟を決めていた。

この三日間、あれやこれやと考えて、雨守三姉妹にも助けられながら、僕は何とか決断することが出来た。

帰宅後、僕はリンネに答えを告げた。

「リンネ、僕は、僕の中で答えを得た。覚悟を決めたよ」

僕の言葉を聞いたリンネはにっこりとほほ笑んだ後、優しく語りかける。

「嵐なら、きつと答えを導き出せると思ってた。それにね、あなたが納得して出した答えなら、それがどちらの選択肢でもあたしは何も言わないわ」

「ありがとう。その前に一度、月美ちゃんと二人で話をさせてくれないか？ 月美ちゃんと、きちんと向き合いたいんだ。もう、逃げたくないからさ」

「いいわ、もしあたしが必要になったらいつでも呼んで。いつてらっしゃい、嵐」

笑顔の天使に見送られ、僕は例の公園へと向かった。ケータイで連絡を取り、月美ちゃんとここで待ち合わせをしたのだ。

僕は、これまでの自分が嘘のように落ち着いた気分で、彼女が来るのを待った。

「ごめんね、嵐、待った？」

恐らく、学校の帰り道からここまで急いで来てくれたのだろう。仄かに息を切らせ、頬を上気させた制服姿の月美ちゃんが僕の前に現れた。

「いや、こっちこそごめん。何だか急がせちゃったみたいだね」

辺りを一度見回した後、月美ちゃんが静かに言う。

「懐かしいね、ここ。小さいころ、嵐と、ここで、良く遊んだ記憶がある」

「そうだね。月美ちゃんが隣に引っ越してきた頃ってさ、僕の母親が亡くなつたばかりの頃でね。すっかり元気をなくしちゃつた僕は、外で遊ぶこともほとんどなかつたんだ。そんなとき、月美ちゃんが突然家にやってきて、無言のまま僕の手を引っぱってさ、公園まで無理やり連れてかれたんだよ。月子さんと一緒に挨拶にきてたから、隣に自分と同年の女の子がいるってのは知ってたけどさ、幾らなんでもいきなりだつたからね。あれにはびっくりした」

顔を真っ赤にした月美ちゃんが慌てて弁解する。

「あ、あれは、おかしさんが、そうしろつて言うから。それに、私も、どうしたらいいのか、分からなくて」

「それで無言で僕を引つ張つたの？ 月美ちゃんらしいよ。あの頃はさ、まあ、今もなんだけど、月美ちゃんの方が身長が高かつたからね、小さい頃は特にその差が大きかつた。だから、あれは引つ張るつて言うよりか、拉致だよな」

「も、もう言わないで、恥ずかしいよ」

「公園に着いたらさ、今度はシーソーを指さして、「あれに乗るの」の一言、日が暮れるまでずっと二人でシーソーに乗つてたよね。まあ、乗つてたというか、おろしてもらえなかつたというか」

「だつて、思つてたよりずっと、楽しかつた、から。今思うと、かなり強引だつた」

「でもね、そんな月美ちゃんのおかげで悲しい出来事も忘れられたし、立ち直れた。大げさかもしれないけど、月美ちゃんがいなかったら、今の僕はいないんだよ」

「わ、私も、毎日嵐と一緒に、嬉しかつたし、楽しかつた。勿論、今だつて、そうだよ？」

自分の眼から自然と涙が溢れてくるのが分かる。

自力では止められそうもないし、そもそも止める気もない。

そんな僕の顔を見て、黙って涙を拭いてくれる月美ちゃん。そんな優しい沈黙が僕らを包み込む。

「月美ちゃん。僕が君を呼びだした理由、聞かないんだね？」

長い沈黙の後、月美ちゃんは口を開く。

「このところ、嵐、ずっと悩んでるみたい、だったから。苦しそう、だったから。私、小さいころから変なもの、見えた。今でも、そう。それに、知らない誰かの記憶や、知らない景色が、頭をよぎることもあった。それも、どう見ても、現実とは思えないような、光景ばかり。私は、なんとなくだけど、普通じゃないって思ってた。それでも、嵐といるときは、そんな気分も忘れられた。でも、最近になって、嵐が、わたしの知らないところで、変わった生き物と一緒にいるところを見るようになった。だから、なんとなく、こんな日が来るんじゃないかと、確信してた」

そして、月美ちゃんは、決定的な一言を発する。

「嵐、私。人間じゃ、ないんでしょ？」

その質問に対して僕は、黙って頷くことしか出来なかった。

僕は、唇を血が出るほど食いしばり続け、何とか涙を止める。

「月美ちゃんの言う不思議生物ってのはね、天使なんだ。丁度僕たちが二年に進級した頃、僕はリンネっていう天使と出会ったんだ」
僕の話も黙って真剣に聞いてくれる月美ちゃん。

辺りが、オレンジ色の光に覆われてくる。

「月美ちゃんはね、そのリンネと同じ天使なんだ。とある理由で天使としての記憶と力を封印されて、こうして普通の人間として暮らしている、元天使なんだ」

僕が突拍子もないことを言っているのは重々分かっている。それでも、彼女と真剣に向き合うと決めた以上、僕の口から全てを語るのが、僕の責任であり義務だ。

「月美ちゃん、本当の自分を知りたいと思う？ その覚悟が出来る？」

「私、小さいころから、自分は何者なんだろう、って考えてた。本

当の自分の正体を、知ることは、怖くない。それに、嵐はずっと、私の事で、悩んでいてくれたんでしょ？ 覚悟は、とっくに出来るよ」

月美ちゃんは、僕が考えていたよりずっと強い人間だったらしい。僕は一度頷いた後、リンネを呼びだした。

ぼん、という音とともに何も無い空間から突然現れる天使リンネ。「嵐、この答えでいいんだね？」

僕は黙って一度頷く事で、その答えを返した。

「あ、不思議生物。私の本当の姿も、こんななのかな？」

やはり、月見ちゃんにはリンネの姿が見えているようだ。これで、最後の迷いもふっきたよ。

「リンネ、月美ちゃんの記憶を戻してあげて。彼女を天界へ戻そう」
「あなたの意思、確かに受け取ったわ」

リンネのアホ毛が強く光を放ち始める。いつもと違い、虹色の光を帯び美しく七色に輝いている。

「十五夜月美、あなたはこれから本当の自分を知ることになる。それには、嬉しいことや楽しいことだけでなく、悲しい記憶やつらい記憶も含まれているけど、覚悟はいい？」

一度だけこちらを振り向いた後、静かに頷く月美ちゃん。

その様子を見届けたリンネは、大きな弓を構え、一気に月美ちゃんを貫く。

その刹那、辺りが虹色の光で溢れた後、月美ちゃんの姿は跡形も無く消え、その後には、三日月形の月美ちゃんのペンダントと眼鏡だけが地面に残された。

必死に辺りを見回す僕。そんな僕に向けて誰かが言う。

「上だよ、嵐」

その声の持ち主は、紛れもなく月美ちゃん…… だった天使のものだった。

リンネと同じような格好、つまり光の輪っかと純白の羽根携えた月美ちゃんが、そこに居た。

そんな月美ちゃんの姿に、思わず息をのむ僕。

「月美ちゃん。その羽根、凄く似合ってる。それに綺麗だ」

まるで天使みたい。そんな言葉が喉から出かかって、寸前で止まった。だって、それってもしかや褒め言葉じゃなくて、ただの事実だから。

「ありがとう嵐。私、全部思い出した。私が何者なのか何をしてきたか、どうして墮天使になったのか」

人間だった時の月美ちゃんの特徴である、独特の間のある言葉遣いはすっかりなくなっていた。

そんな変化が、どこか悲しい。

「リンネ、ありがとう。私を天使に戻してくれて、こんな私に二度目のチャンスをくれて」

「にははは。いいってことよ。あなたがあたしの立場でもきつと同じことしてくれたでしょ？ それに、最後に決断してくれたのは嵐だし」

「嵐、ありがとう。あなたには、今までも含めて、言葉では言い表せないくらいに感謝してる。勿論、人間として私を育ててくれた両親にも感謝しているけれど、やっぱり私にとって嵐は特別だったから」

照れながらにつこり笑う月美ちゃん、だった天使。

その時、彼女の足元が徐々に消え始める。

「あちゃー、天界への転送が始ったみたいね。もう、あんまり時間がないよ」

そんなリンネの言葉にも、消えていく足元にも動じず、月美ちゃんは続ける。

「知ってた？ 私ね、私、ずっとあなたの事が好きだったんだよ？ 可笑しいでしょ？ 天使のくせに人間を好きになるなんて。私、毎日あなたと過ごせて幸せだった。私の本当の名前は、ルナって言うの。私が天界に戻ったら、人間だったころの私を覚えていくれる

のは、嵐だけになると思う。でもね、嵐が覚えていてくれたら、私はそれだけで十分」

皆の記憶から月見ちゃんの記憶が消去されてしまっただけのことか？
そんなの、あんまりだ。

「私のしてしまったことは、決して消えることじゃない。私の罪は消えない。それでも、嵐とリンネのくれたこのチャンスを、絶対に無駄にはしないから。いつか必ず、正式な天使になって、必ずまたあなたのもとへ……も……ど……」

もう殆ど消えかかったその姿で、最後に彼女は言う。

「嵐、大好きだった。また会えたらいいね」

微笑を浮かべ、消えるルナ。

オレンジ色の夕陽を見つめながら、僕は呟いた。

「そんなの、ずっと知ってたよ」

僕とリンネは、辺りが完全に暗くなるまで、その場に立ち尽くしていた。

一体どんな手段を使ったのか想像も出来ないが、僕達が家路につくころには、天界による記憶改変・記録改変は既に終わっていた。

花家の隣に十五夜家はなく、ただただからっぽな空き地だけが広がっていた。

最後に彼女が言っていたことはこういうだったようだ。

「大天使の力が働いたみたいね。あのクラスともなると、何でもありだから」

程なくして、僕の心にぽかんと穴があいたような大きな喪失感の波が押し寄せる。

僕は、疲れ果てた体で玄関を開ける。

「あ、兄さん、お帰りなさい。ってどうしたんですか？ 何だか、疲れ切った顔してますけど」

「有須、うちの隣ってさ、十五夜さんっていう家が建ってなかったか？ 十五夜月美っていう僕と同級生が住んでただけだよ」

有須はぼかんとした顔で答える。

「十五夜？ 何を言ってるんですか、兄さん。隣は私が生まれる前から今まで、ずっと空き地ですよ？」

「そっか、うん。そうだよな。ごめんごめん、変なこと聞いて」

「はあ、別に良いですけど。疲れてるなら、晩御飯まで寝てていいですよ兄さん。時間になったら起きてあげますから」

「ありがとう有須。そうだね、お言葉に甘えさせてもらうよ。ちょっとだけ休むから」

分かっていただけだけど、いざ、事実に向面するとやはりシヨックを隠しきれない。

それでもこれは、僕が自分自身で決めたことだ。

こうなることは分かっていたはず。覚悟はしていたはず。

「嵐、あなたは今日、天使代行としてまた一つ成長したと思うわ。

「伝承を被うだけが天使の仕事じゃない。あなたは、それを知ったの」「うん。分かってる、分かってるよ、リンネ。それに、これからは月美ちゃんを毎朝迎えに行くことも無ければ、朝から月子さんにかかわれることも無い、一緒に授業を受けたり、お昼を食べたりすることも無いんだってことも、分かっている。全部分かっているはずなのに、何で涙が出るのかな？」

僕は、彼女がその場に残した彼女の眼鏡とペンダントを持ち帰っていた。

ペンダントの方は、僕が高校入学の祝いに月美ちゃんにプレゼントしたもので、月美ちゃんの名にちなんで、月の形を模したものであった。

感傷に駆られた僕は、月美ちゃんの、その黒ぶち眼鏡をかけてみることにした。当然、度数が違うわけだから、見えるはずなんて無いわけだけど。

「…月美ちゃんの嘘つき。これってやっぱり、ただの伊達眼鏡じゃないか」

そんな僕の姿を見ながら、リンネは窓の外を指差して言う。

「見てよ嵐。今夜は満月だよ」

涙で濡れた月美ちゃんの眼鏡を胸に抱き、すっかり暗くなった外を眺めた。

夜空に浮かぶその満月に、月美ちゃんの照れ笑いが見えたような、そんな気がした。

END

第4話「花と嵐と覚めない夢の眠り姫」

（霧霞夢の場合）

第4話「花と嵐と覚めない夢の眠り姫」

（霧霞夢の場合）

季節は初夏、今年の梅雨入りは例年よりちょっと早い6月上旬。じめじめしとしと、連日雨ばかり降り続けている今日この頃。

十五夜月美という存在がこの世界から消えて既に2週間が経過。自分で決め、自分で実行したことに関わらず、未だにふとした瞬間あの顔を思い出しては、溜息をついたりするヘタレな僕。

そんなただでさえ落ち込んでいる時に、この長雨。僕の小枝のような細かい心は、真つ二つに折れる寸前である。

そんな僕の気持を知ってか知らずか、ここ数週間、何故か天使の試練は小康状態。

こんな日々がいつまで続くかと思っていた矢先、ブルーな気分をよりブルーにさせるような、そんな一人の少女が僕の前に現れるのだった。

「今日も雨。昨日も、その前も雨雨雨。きつと、明日も雨だよー嵐。まったくー、毎日毎日よく降るねー」

僕の部屋でぷかぷかと浮かびながら外を眺めていたリンネがぼつりと呟く。

「ん？ んー。そうだねー」

ベッドでごろごろしていた僕は、こちらも呟くようにぼつりと答えて、また一つ、大きな溜息をつく。

「ちょっと嵐ー、ちゃんと聞いてよー。それに、最近溜息ついてば

「つかりだよ？ まだ引きずってるの？ ルナのこと」

「そんな話なんて聞きたくないとばかりに、ベッドの上で布団にくるまる僕。」

「確かに、嵐にとっては苦渋の決断だったと思うけどさー。決めたのは嵐自身なんだから。それに、別にルナだって死んだってわけじゃないんだよ？ 彼女が立派な天使になれば、いつかまた会える日だって来るかもしれないもん。だから元氣出そうよ、ね？」

「のほほん暢気な、おとぼけ天使のリンネさんにここまで心配される僕。」

「我ながら相変わらずのヘタレっぷりである。いつその事、もつと罵ってくれた方が大手を振っていじけられるのに。」

「んー、頭では分かっているつもりんだけど、どうにもこう、ぼっかり穴が空いちちゃったような気分だね。実際、生活リズムまで変わっちゃったし。なかなか慣れないんだ」

「そう言ってもぞもぞと布団から顔を覗かせる僕。」

「次の試験でも始れば、気持の切り替えが出来るかもしれないのに、こんな肝心なときに限って次の反応が全くないのよねー。これってルナを送り返したと何か関係有るのかなー？」

「さあ？ どうだろうね。でもさ、確かに次の試験が始れば否応無しに気は紛れそうな気がする。でも、そんなに都合よく」

「その直後、まるで計ったかのようなタイミングで、リンネのアホ毛が力強く光を放ち始める。」

「キッターー。やーん、何日ぶりかなー？ さあ嵐、これで言い訳できないよ」

「そろそろ夕飯時って時間帯。」

「その上、外は土砂降りの雨。正直言って気乗りしない。とはいえ、やる気満々なリンネを前にして、行かないわけにも行かないし、いつまでもくよくよじうじうじしては月見ちゃんに会わず顔が無い。ここは一丁、僕も気合を入れて望まねばなるまい。」

「僕は両の頬を勢いよくバチンと叩き気合を入れると、興奮気味の

リンネを見上げていった。

「ほら、リンネ。いつまでそこで浮いてるつもりだ？ 置いて行っちゃうぞ？」

「うん！ あは、やる気まんまんだね。よし、頑張ろうねー」

僕たち二人は彼女のアホ毛に導かれるまま、雨の街を目的地も分からずとりあえず走っていた。

一応、レインコートを着てきたものの、この雨の中では殆どその役目を果たしていなかった。

僕がそんな事を考えているうちに、リンネのセンサーの光がより一っそう強くなる。

彼女がすつと指で指し示した先にある建物、それはこの町一番の総合病院である霧霞総合病院だった。

僕が最初の試練の時、足を怪我した春雨先輩を連れてきた場所である。

僕たちはそんな「霧霞総合病院」という大きな看板を通り抜け、院内へ入っていった。

相変わらず、院内には大勢の患者たちが存在していた。

「さて、病院にいるってのは分かったけど、まさかこの大勢の患者さん達の中から探せっていうのか？」

病院に来ているくらいだから、全員何かしら助けて欲しいことがあるというのは確かだが。まあ、真顔で天使に助けて欲しい、なんて言う人がいたら、それこそ医者に見てもらったほうがいいとは思っただけ。

そんなことを考えるうちに、リンネはどんどん奥へ上へ突き進んでいく。そっちは姿が見えないからいいけど、病院内なのでこちら

は走ることすら出来ないのだ。

そここうするうちにとうとう最上階に到着。

この病院には何度も来ているが、流石にというか、幸いにか最上階にきたことは一度も無かった。

じりじりと緊張感が増してくるのが分かる。

そんな時、ある一室の前でリンネが立ち止まり僕を手招きしている。

「リンネ、本当にここであってるのか？ 最上階だぞ、ここは。どう見ても普通の患者がいるような場所じゃないと思うけど」

「間違いないよ、あたしのセンサーもバリサンだもの」

ああ、あのアホ毛ってやっぱり天界との通信用アンテナなんだ、などと關心しながら僕は、部屋の入り口に張られたネームプレートに目を通す。

霧霞夢、か。… え？ 霧霞だった？ ということは、この病院の関係者ってことか？

「さあさあ、入り口でつたつたって早く入ろーよ」

「ちょ、ちょっと待ってよ、まだ心の準備が」

僕が言い終わる前に、ドアをすり抜けて先に行ってしまうリンネ。いまさらだけど、普通病院の面会って受付で手続きしたり、面会時間の制限があったりするものでは？

まあ、天使相手に愚痴っても意味なしか。僕も急いでドアを開ける。

直後、いかにも機嫌の悪そうな、僕と同年くらいの一人の少女の姿が目飛び込んできた。

「… あなた誰？ 私に何か用？ 変質者？」

確かにいきなり部屋に入ったのは不味かったけど、まさか開口一番初対面の人間に変質者と罵られるとは思わなかった。

僕は、この時点で早くも頭が痛くなってきた。

「えーと、すみません、病室を間違えちゃったかなー、なんて」

僕は必死に考えをめぐらせようと試みた。が、彼女はその隙すら

与えてくれなかった。

「間違えた？ へえ、この近くのフロアには病室はこの部屋しかないし、患者も私しかいないわ。あなたはいつたいたいどこの誰と間違えたのかしら？ 実に興味深いわ。変質者さん」

彼女の鋭い眼光と涼しい笑顔が僕の心をえぐっていく。

彼女と出会ってまだほんの数分だけど、一つだけ確信したことがある。間違いない。彼女はDSだ。

「あははは、ばれちゃったか、うん。実は霧霞さん、君に用が会って来たというか、何というか」

僕は涙目になりながらリンネの方を見上げる。

そこはかとなない理不尽さを感じながらも、僕はリンネにアイコンタクトを送った。

どうにかしてくれ。

声なき声で必死にそう訴える僕。その間も彼女の質問攻めは続く。「あなた、私に用があつてきたの？ それじゃあ、あなたは私を知っているのね、でも私はあなたを知らないわ」

彼女の言いたいことを理解した僕は、慌てて自己紹介を始めた。

「すみません、怪しいものじゃありません。勿論、変質者でもありません。僕の名前は花嵐。天使の使いの者です、はい」

「天使の使いの花嵐さん。…あなた、ぶつとばされたいの？」

そういつて再び鋭い眼光を向ける彼女。彼女のそれは、明らかに有須のものより断然強力だった。強力無比だった。

「あくまでふざけた態度をとるつもりなら、私にも考えがあります。それに、あなたみたいな不審人物に霧霞さん呼ばわりされたくないわ」

その直後、リンネがそつと霧霞さんの真横に移動して、天使のキッスを施したのが分かった。

そして、一体何を考えているのか全く理解できないが、リンネの奴、自らの顔をぐにと引き延ばし変顔を披露している。

僕が雷九のときにやってみせたあの顔である。

「ぶっ」

思わず吹き出してしまふ僕。

「やっぱり変質者で間違いないようね。突然何？」

僕の視線につられて後ろを振り向く霧霞さん。

「…… そっ」

リンネの姿にも、その変顔にも動じず、突然、全てを悟ったかのように押し黙りうつむいてしまふ霧霞さん。

「分かったわ。ついに時間切れってわけね。いいわ、私もこの生活にウンザリしていたところだし」

僕とリンネはわけが分からず一緒に首をかしげる。と言うよりリンネ、お前も分からないのか。天使の癖に。

「どういう意味？」

思い切つてたずねてしまふ僕。

「とぼけなくてもいいわ、覚悟は出来ているつもりだから。あなたたち、天使なんでしょ？ まさか漫画やドラマみたいに天使が直々にお迎えに来てくれるなんて、流石に予想もしていなかったわ。誰の場合でもこうなのかしら？ それともこの病気のおかげ？」

どうやら彼女は、あまり愉快でない勘違いをしているようだ。先ほど、霧霞さん呼ばわりされたくない、という彼女の発言を真に受けた僕は、何をどう勘違いしたのか、彼女を呼び捨てにするという暴挙に出た。

「霧霞、君の事情は良く分からないけどさ。結論から言うと、君はまだ死んでない。それと、僕は天使じゃない。ただの使い走り。だから君を迎えに来たわけじゃない。で、こっちは」

僕が紹介しようとした刹那、リンネは勢い良く霧霞の前に飛び出る。

「じゃーん、天使のリンネちゃんです。キリキリ、あなたを助けにきましたー」

リンネはここが病室とは思えないほどの声量と元気のよさで彼女に挨拶した。

彼女の顔がみるみるうちに、初対面時の不機嫌そうなしかめ面に戻っていく。

リンネの奴、さっきの変顔から続けて二発も滑りやがったな。どうしてもっと普通に登場出来ないんだ？

「助ける？ 私を助けるですって？ やっぱりあなたたち私をからかっているのね。いったいどうやって助けてくれるの？ 私は何をすれば助けてもらえるの？ 賛美歌でも歌えばいいの？ それとも毎日協会で礼拝でもする？ いっそシスターにでもなればいいのかしら」

彼女の勢いは止まらない。そして僕たちにとって、彼女にとって、決定的な一言を言い放った。

「不治の病と宣告され、どんな医者からも匙を投げられたこの私を、あなたたちはどうやって救ってくれると言うの？」

僕は全身の血の気が引き、目の前が真っ暗になるのを感じた。

彼女の名前は霧霞雨、どうやら不治の病にかかっているらしい発光の少女。

僕とリンネはそんな彼女を巡って、早くも一つの壁に直面しているのであった。

不治の病、およそ日常生活では聞き慣れないその言葉の響きを反芻しながら、僕は淡い希望と期待を込めてリンネに尋ねた。

「リンネ、頼む、治せると言ってくれ。奇跡を見せてくれ」

さっきまでの勢いはどこへいったのか、今度はリンネがすっかり黙り込んでしまっていた。

「無理だよ。幾ら天使といえども、テンタマのあたしじゃ不治の病を治すなんて奇跡、到底無理」

僕もリンネも勇んで病室に入り込み、あれだけの啖呵を切った以上このまま無理でしたじゃ済まないし、そんなの身勝手すぎる気がした。

「そう、やっぱり無理なのね。ありがとう。たとえ天使の力でも私

を治すことは不可能だつて分かっただけでも、もう十分よ。それに、いずれにしろ、私はもう長くは無いみたいだから。だからお願い、私をこれ以上巻き込まないで。私に淡い期待を抱かせないで、私は残りの時間を静かに過ごしたいだけなの」

彼女は力なくそう答えるとベッドに横になり、その日二度とこちらの方を向くことは無かった。

つまり、僕たちに残された選択肢は、そのまま病室を後にする以外無かったのだ。

つい数十分前の勢いが嘘のように、僕らは重い足取りで病院を後にして、あてもなく歩き始めた。

「なあ、リンネ。彼女、本当に不治の病なのか？ 本当に君の力じゃ治せないのか？」

そんな僕の力無い質問に対して、意外な回答が返ってきた。

「勿論、違うわ。彼女はただの病気なんかじゃない。当然、不治の病でもない。そもそもあたしのセンサーが反応したんだよ？ 答えは一つしかないでしょ、嵐」

「やっぱり取り憑かれてるのか？」

「そうだよ。そりゃ伝承が原因の病気だとしたら、普通の医者じゃ治しようがないもの、不治の病扱いされても可笑しくないわ」

「やれやれだよ。いずれにしても、まずは彼女のその病気を探る必要があるそうだな。本人からは聞き出せそうもないし、こっちで調べられないか。まあ、名前も分かっているし、時間はさほどかからないだろうけど」

「本当？ それじゃあ、そっちは嵐に任せるね。あたしは、キリキリに取り憑いた伝承についてももう少し探ってみる。後である病院で合流しようか？」

時刻は午前6時。僕はいつもより一時間も早く、目覚ましすら使

わず目が覚めてしまった。

昨日は霧霞についての情報を集めるためあれやこれやと探りを入れ、整理するうちに結局そのまま部屋の床で寝てしまったらしい。僕は体をほぐしつつベッドを見上げると、リンネは静かに寝息を立て眠っていた。

昨日、あれからずっと姿の見えなかったリンネだったけど、どうやらいつの間にか部屋へと戻っていたらしい。リンネの事だ、何か手掛かりをつかんで来たに違いない。

僕は、二度寝する気分にもなれず暫く部屋をうろろした挙句、結局昨日集めた霧霞についての情報を改めて整理することにした。

霧霞夢。彼女は霧霞総合病院の現院長の娘であり、3兄妹の末っ子。年齢は僕より一つ上ということらしい。

小さな頃から成績優秀だった彼女はこの病院の跡取りとして、いずれ兄二人と病院を継ぐはずだった。

しかし、彼女が高校二年になった17歳のころ、その病気は突然発症した。

彼女の発症した病気、それは睡眠に関するものだった。

端的に説明すると、彼女はいわゆる眠り姫なのだ。

彼女は自分の意思、場所、時間に関係なく、いつでもどこでも自分の意識のタガは外れ、睡眠へと陥ってしまうという奇病気を煩っているらしい。

そして、更なる問題はその睡眠時間。

最初のうちは、早い時間に眠たくなったり、朝早く起きられなくなるという程度のものであった。

しかし、やがて彼女の睡眠時間は増加していき、1日、2日、3日、今では1週間眠り続け、その後活動できる時間はたった1日、そんなレベルまで到達してしまっているらしい。このまま彼女の睡眠時間が増えていけば、いずれ昏睡状態に陥りそのまま意識が戻ら無くなる。そんな日が訪れるのも遠くは無い。

確かに、普通じゃない。だが、これも何らかの伝承の仕業だといえれば納得の出来る話ではある。

どれくらい思考していたのだろうか？ 誰かの階段を登る音が聞こえたかと思うと、勢い良く僕の部屋のドアが開いた。

「にいさ… って、え？」

有須は完全に意表を疲れた様子で、ぽかんとこちらを見つめてくる。

「や、おはよう有須」

僕は普段よりちょっと得意げに朝の挨拶をした。

「お、お早うございます、兄さん。どうしたんですか？ 今朝はやけに早いですね。この時間に一人で起きてるなんて、私、ちょっとびっくりしちゃいました」

そういつて僕に微笑みかけてくる有須。そこまで驚かれたのはちょっと心外だけど、たまには早起きってやつもいいかもしれない。

僕らは揃って部屋を後にした。

そういえば部屋を出る直前、リンネの姿がベッドから消えていたのがちょっと気になったものの、空腹には勝てずそのまま朝食へと向かうことにした。

「ありやりや、にいにいが自分の力で起きて来るなんて珍しいね。

これじゃあ、今日もまた雨？」

小学生にもこんなことを言われている始末。普段の僕っていったいどれだけ情けなくうつうつしているのかちょっと不安になってきた。

「お早うダンゴ、今朝は自慢のプロレス技をかけられなくて残念だったね」

いつも通りの朝の団欒風景。そんな中でも僕の心の中は霧霞に対してどしてやるのが一番いいのか、何をしてあげられるのか、という考えで満たされていた。

「なあ、有須。例えばの話だけど、もし自分が不治の病に掛かっていて、誰かに何かしてもらうとしたら、何をしてもらうのが嬉しい

？」

僕は花家一番の常識人である有須に助けを乞うことにした。

「何ですか、突然？　ま、まさか兄さん……」

おっと、ここで下手に振舞っても怪しまれるだけだ。ただでさえ心配性の有須に心配させては兄失格。

「あ、別に深い意味はないんだ、それに僕のことでもない。ちよつと有須の意見を聞いてみたかっただけなんだ」

「良かった。もう、びっくりさせないでください。でも、そうですね、私だったら勿論病気を治してもらうのが一番でしょうけど、それが無理だとすれば……誰かに一緒にいて貰えたら嬉しいです。私だったらきつと、不安で押しつぶされそうになってしまふと思うから」

一緒にいること、か。

霧霞が同じくそれを望んでいるとは限らないけど、確かにそれは霧霞にとって正しい回答のように思えた。

放課後

僕は再び霧霞の病室へと向かっていた。

「嵐、待っていたわ。さあ一緒にキリキリを助けましょう」

病院入り口で待ち構えていたリンネ。昨日のしおらしさはどこ吹く風、どうやらやる気まんまんのようだ。

「リンネ、そういうば朝から姿が見えなかったけど今日1日どうしていたんだ？　何か分かったか？」

「うーん、確かに解決策といえば解決策かな。そうだ嵐、そっちの方はどう？　キリキリについて何か分かった？」

ちよつと言葉を濁されたのが気になったけど、何か秘策があるのは間違いないようだ。

となると後は霧霞次第といったところか。
僕らは緊張しつつ、再び霧霞の病室へと向かった。

霧霞夢の病室前

そもそも昨日の今日だっというのに、一体どんな顔して彼女に会えばいいんだろう？

駄目だ、やっぱり緊張してきた。

リンネは僕の後ろで僕がドアを開けるのをじっと待っている。

今の霧霞はリンネが見える状態にある。だからなのか、昨日のようにドアをすり抜けて一人先に入るといふことはしないらしい。

覚悟を決めた僕は、2度ノックをした後病室へと入った。

「また来たのね。昨日、私に構うなと言ったはずだけど」

僕が調べた彼女に関する情報が正しければ、彼女の今の生活スタイルは1日活動した後は、1週間眠り続けるといったものはず。

が、しかし。

今、僕の目の前にいる彼女は紛れもなく目覚めているし、こうしてと僕と会話さえしている。

「良かった、今日も起きていてくれたんだね」

「ええ。こんな体になっただけから、二日続けて目が覚めるなんて珍しいわ」

やっぱりそうか。これで少し希望が見えてきた。加えて、昨日に比べて彼女の機嫌も若干良い様に見える。

「だからといって、あなたたちと話すことも会う理由も無いわ。帰ってくれるかしら？」

「夢魔よ、キリキリ」

霧霞の冷たく鋭い眼光をものともせず、リンネは良く透る凜とし

た声で答えた。

普段聞き慣れたその単語に、僕は思わず聞き返した。

「夢魔だつて？」

「そう、夢魔。英語で言うとナイトメア。一般的には黒い馬の姿が有名ね。それがキリキリに取り憑いた伝承だよ」

「またそうやって私をからかうのね。あななたち、本当に何者なの？」

「キリキリには悪いけど、あたしの話は、全部本当の事だよ」

自信満々のリンネをよそに警戒心丸出しで、訝しげに僕らを睨む霧霞。

そりゃ、いきなりこんな話をされれば怪しむのも当然だ。へたすりゃ宗教の勧誘かと思われても仕方が無い。

「昨日はあなたの奇抜な格好を見て、不覚にも本物の天使だなんて思ってしまったけれど、普通に考えればまずそれが一番怪しいわ。」

その上、さらにそんな不審な話を聞かされて、はいそうですかと信じられると思う？」

彼女の言うことはあまりにももつともなことなので、反論のしようもない。

僕だつて今でもリンネのことを100%天使だと信じているかといえは嘘になる。そもそもリンネの存在自体、そういうレベルの話なのだ。

そんな僕らの気持を知ってか知らずか、リンネはほおを膨らませ不満感をあらわにしている。

「ふーん、あくまで信じてくれないのねー。いいわ、キリキリちょっと耳貸して」

そう言つて霧霞に近づいていくリンネ。いったい何をするつもりなんだ？

「じいよじいよじいよじいよ」

「！ど、どうして、どうしてあなたがそれを知ってるのよ」

リンネが何やら耳打ちした後、霧霞の顔が見る見るうちに赤くな

っていく。いったい彼女に何をいったのか気になる。実に気になる。「ふ、ふ、ふ。言ったでしょ？ あたしは天使だって。この部屋に忍びこむことくらいわからないもの。どう？ 信じて見る気になった？」

まだ何か言いたげな彼女をよそに、不適な笑みを浮かべるリンネ。お前はいったい何を見た？

暫くベッドに顔を埋めていた霧霞だったが、何かが吹っ切れたように顔を上げ、こちらを睨みつけてきた。

「仕方ない。いいわ、信じます。そもそも頭にわっかを浮かべて二本の羽で浮いてる人間なんて、もはや不審人物ってレベルじゃないもの」

不審人物っていうより、そもそも人間ですらないんだけどね。

「良かった、じゃあ話を次に進めるわね。昨日も言っただと思うけど、私たちはあなたを救いに来たの。私はテンタマ。つまり天使の卵だから、確かに不治の病や大きな怪我を治すことは出来ないわ。でもね、その原因が夢魔の伝承によるものだとしたら、それを取り除くことは出来る」

「それで、具体的には私は何をすればいいの？ どうすれば私の体からその、夢魔を追い出せるの？」

「それはにほまず」

リンネがそう言いかけた刹那、霧霞は突然倒れるようにして、眠りの世界へと誘われてしまった。

「お、おい霧霞？ 霧霞さん？ 寝ちゃったのか？」

「あちゃー。やっぱりこうなっちゃったわね。最初から想定していた事態だったけど。もしかしたら、あそこへ行かなくても済むかもなんて考えは甘かったみたいだね」

「あそこ？ それに行くって誰が、どこに行くんだ？」

僕は、堪らなく嫌な予感がした。

「にはははは、分かってるでしょう？ あらし」

駄目だ、このパターンは駄目だ。僕は冷や汗が出るのを感じなが

ら、リンネに続きを尋ねた。

「つまり？」

「つまりー、嵐が実際にキリキリのここに行って伝承を被うんだよ？」

そう言っつてリンネが指さす先。

それは、霧霞の頭部。彼女が今眠っているという状況を考えるなら、辿り着く答えは一つ。

「霧霞の、夢の中？」

「ピンポンピンポン、花嵐選手、大正解です」

昔、小型化した医者が自ら患者の体内にはいつて、病気の原因を取り除くなんてSFものを読んだことがあったけど、今回の場合、それに近い話なのかもしれない。

「にはははは、嵐、顔がひきつってるよ？ まあまあ、そんなに心配しないでよ。何も彼女の体内に直接入るなんてわけじゃないんだから。っていうか、いくら天使でもそれは無理だよ」

良かった。どうやら僕の想像とは違うらしい。

「今回嵐に行ってもらうのはね、あくまでキリキリの夢の中。うーん、そうだね、嵐が知ってるか分からないけど、天使の仕事の一つに、夢の中で人間にお告げを授けたり、母親に赤ちゃんの誕生を知らせたりする事が有るの。その場合、天使は自らが直接その人間の夢の中に出向いていく事になるんだけど、今回はそれを応用する形ね」

「ようするに、僕に霧霞の夢の中に入り込めって言いたいのか？」

そんな無茶な。そもそも天使の代行者なんて名乗っちゃいるけどさ、僕なんてただの人間だぞ。何の変哲もないただの凡人だ」

「でも、あたしの大切なパートナーだよ？ それに、ほら。雨守三姉妹の試験のとき、サメサメを助けるために天使の力を使ったでしょ？ それと似たようなものだよー、たぶんね」

たぶんですか、そうですね。

それにしてもリンネのヤツ、大切なパートナーだなんて恥ずかし

いセリフをさらつと言ってくれちゃって。そんな事言われたらやる
しかないじゃないか。

「で？ 具体的にはどうすればいいんだ？」

「あは、さっすが嵐。そこなくっちゃね。それじゃあ、ちよつと
だけ目を瞑って？」

妙に嬉しそうなリンネの言葉に従い、素直に目を閉じる。

「もういいよー、さあ、目を開けてみて」

早いな。もういいのか。

ぱつと見た限りでは別段、体に変化が起きたようには見えないし、
特に何も感じなかった。

「上見て、上」

上？

リンネの言葉に従い、そのまま上を見上げる僕。その直後、僕の
目に飛び込んでくる本来あるはずの無いもの。それは。

「これって天使の輪？ しかもこれ、雨守先輩達の時とは違う種類
の輪だよな？」

「そうそう、良く分かったわね。前は重力制御用、つまり飛行用
ね。んで、今回は夢世界進入用。いいなあー嵐。テンタマはね、ま
だ人の夢の中に入る事が出来ないの。だ、か、ら、代わりに嵐に頑
張ってもらわなきゃね？」

いやいや、ね？ なんて言われても。

それにしても、天界つてもっとメルヘンな場所かと思っていたが、
天使のワツカの秘密や空を飛ぶ仕組み、通信用センサーなどを知る
たびに、実はかなりハイテクな技術を持ったところだったらしい。
少なくとも現代のこの世界より百年は技術的に進んでいると思う。
それは、僕の抱いていたイメージとは大分かけ離れているわけで。
そんなことを考えているうちに、唐突に急激かつ強烈な睡魔に襲
われる。

「…ん何だろう、僕も、何だか、眠くなってきた… た…」

そいじゃあ、頑張つてねー嵐！。

そんなリンネの声援を最後に、僕の意識は、夢の中へと飛んだ。

「起きて、起きてよ嵐ー」

頭がずきずきする。それに、体が妙にふわふわする。まるで、自分の体が自分のものではないような違和感。

それに、先程から誰かに呼ばれている気がする。誰かって…誰だ？ 確か、僕は病院にいて、それから…。

直後、僕の記憶が一瞬にして復活する。

「そうだ。僕は確か、天使のワツカをつけて」

「あ、気がついた？ 嵐。あたしの声、聞こえてる？ どーぞー」

リンネの姿は見えないものの、確かにリンネの声は聞こえてくる。どうやらここは、霧霞の夢の世界らしい。

「そのワツカ、あたしとの通信機にもなってるから。何かあったら遠慮なくあたしを呼んでー」

「分かったよ。それで、リンネ。ここに来てから尋ねるのも何だけどさ、そもそも僕はこの夢の世界で、何すればいいんだ？」

「にはははは、ごめんごめん。まだ説明してなかったね。でも簡単だよー。その世界のどこかにいるキリキリを見つけて一緒に帰ってくればいいの。それだけ」

それだけって。簡単に言ってくれるよな、リンネのやつ。

それにしたって僕は、この夢世界でどうっやって霧霞を見つければいいんだろう。

ふと、周りを見回してみても、一面白の世界。白い空間。加えて遠くの方は霞がかってよく見えないと言う人探しにはどう考えても向かないような最悪な環境。

「なあ、リンネ。この世界でリンネのセンサーとかって使えないの？」

「ごっめーん嵐。当然、使えないよー。だってあたしはキリキリの

病室に居るわけだしー。だから、頑張つて探してね。夢の中だから疲れることは無いんだしー」

なるほど、夢の中だけに疲労は感じないってわけか。

「分かった。取り合えず霧霞を探してみるよ」

それにしても不思議な感覚。この世界、何も無い。何も無いのだ。こんな中でどうやって霧霞を探せばいいんだろ。そもそもここ、何も無いじゃないか。本当に夢の世界なのか？

僕は戸惑いながらも歩いていく。

辺りは一面真っ白。ただし、霞がかつた遙か遠く前方方向に、一点だけ光が見えた。

「リンネー、聞こえるかー？ 何にも無いぞーここ。どうなってるんだ？ どーぞー」

「聞こえるよー嵐。何も無いって事は、今はキリキリが何も夢を見てないって事だよー、どーぞー」

「夢を見てないのに、僕は夢の世界にいるのか？ 何だか混乱してきたよ、どーぞー」

「にははははは、深く考えちゃ駄目だよ嵐。とにかく夢の世界に慣れるためにも、その辺てきとーに歩いてみたら？ どーぞー」

やっぱり天使ってヤツは、いい加減だ。

僕は一先ず遠くに見える一点の光を目指してみようと、一步を踏み出した。

が、その瞬間、世界が暗転する。

ここは、どこかの部屋？

一瞬の暗転後、突如出現したまるで現実のような空間。いや、現実の世界そのものだ。

つまり、霧霞が夢を見始めたってことなのだろう。

さて、立ち止まっても仕方が無い。霧霞探しを始めよう。

しかし、部屋のドアノブを掴もうとした瞬間、そのドア自体をすり抜けてしまう僕。

思わず呆気にとられる。

… そうか、ここはあくまで霧霞の夢の中の世界。どうやら他人の夢の中では何も干渉する事が出来ないらしい。
これじゃあまるで幽霊にでもなったような気分だ。

仕方が無いので、リンネのようにすーっとドアをすり抜けていく僕。

落ち着かない。実に落ち着かない気分。やっぱりドアってやつは開けるものであってすり抜けるものじゃないよね。

そんな事を思いつつ、幾つかのドアや壁をすり抜けた先、その先で誰かの声が聞こえてきた。

もしかして霧霞か？

僕はその声の発生源に近づいていく。すると、一つのとある部屋に行き当たった。間違いない、ここから声が聞こえてくる。しかも二人分の声。

僕は、思い切って部屋に侵入した。

「いいか、夢。お前は将来、この病院を継ぐ人物だ。だからこそ、お前にはそれに相応しい人間になって欲しい。分かるな？」

「はい。お父様」

僕の目に、ある親子が映った。

父親らしき人物の発した夢という言葉から、その幼女が幼き日の霧霞だということが伺える。

流星は夢の中である。時間も空間も関係無しらしい。それに加えて、当然ながら、向こうにはこちらの姿は見えないようだし、こちらにも向こうに干渉出来ないらしい。

それにしても霧霞のやつ、小さいころから既にあの目つきなんだな。あの年にて既に可愛らしいと言うより、氷のような冷たいオーラを発している。やっぱり霧霞は、こんな小さなころから病院を継ぐつもりだったんだな。僕なんかとは人間としての器が違うのかも

しない。

僕がそんな事を考えるうちに、再び世界が暗転する。

「夢、何だこの点数は！ まだ理解できないのか？ お前は私の跡取りなんだぞ。… あまり私を失望させてくれるな。」

「ごめんなさいお父様、ごめんなさい。もう二度と、しませんからっ」

霧霞の親父さん、幾ら夢の中とはいえ容赦がないな。

またもや世界が暗転する。

「お前は私の言う通りにしていればいいんだ。夢、お前に選択肢なんて無い」

目を背けてはいけなさと分かっているけど、僕はこんなシーンの連続を見ていらなかった。

何故、彼女が眠りに取り憑かれてしまったのか。それをまざまざと見せつけられたようで、気分が沈む。

ただし、これはあくまで彼女の見た夢であり、現実世界の出来事とは関係ない… と思いたい。

まあ、チキンな僕の希望的観測だけだ。

正直に言ってしまうと、恐らく僕が見たこれまでの夢シーンは、現実にこれまで彼女が体験してきたことなのだろう。

何というか、僕の幼少時代とは大違いだ。比べる事すら憚られるレベルだ。見ているだけで胃がよじれてくる。

霧霞の夢、と称したスパルタ劇は続く。終わる気配すら見られない。

彼女は、毎日毎日目覚めることなく、こんな悪夢を見続けていたってことか？

気がつけば僕は、訳も無く走り出していた。

これはあくまで霧霞の夢だ。ただの夢なんだ。僕が探しているのはこんなトラウマだったか？ 彼女の傷だったか？ 当然違う。

僕が探しているのは彼女自身。霧霞夢、そのものだ。

僕は、この彼女の夢の世界において唯一の希望の光のようにさえ見える、遠くに浮かぶ一点の光源を目指し疾走する。

どれくらい走っただろうか？ 夢の中なので疲労感は無いもの、いつまでたっても光に辿りつけない。

辿りつけないどころか、近づける気さえしない。

「リンネ、リンネ聞こえるか？ どーぞー。リンネさーん。リンネ？ リンネー。おいおい、冗談だろ？」

唐突にリンネとの通信が途絶えてしまった。

これでは、霧霞を探すどころか無事にこの世界から脱出する事すら危うくなってしまった。

焦った僕は、走った。とにかく走った。走りながら叫んだ。力の限り叫んだ。

「霧霞ー、君が、君がこれまでどんな人生を送ってきたか、どんな道を行ってきたのか、僕はこの夢の世界で見た君の極一部しか知らない。でも、それでも君がこの夢に、眠りにとりつかれた理由は、何となく分かった気がしたんだ」

突如、僕の目の前に光が広がる。

どうやら僕は、いつのまにか光へと辿りついていたらしい。

「分かったですって？ ふざけないで！ あなたに、あなたに私の何が分かるって言うのよ！」

光の中心には、霧霞がいた。正真正銘、今現在の霧霞だ。

「霧霞、君が親父さんの病院を継ぐため、小さいころから必死に努力してきたってのは痛いほど分かった。ただ」

「ただ何？ 私にそれだけの能力が無く、結局は落ちこぼれてしまった能無しだと言いたいのか？ 才能が無いって罵るのか？」

「違う！ 僕が言いたいのはそんな事じゃない」

霧霞がその鋭い眼光でキツとこちらを睨みつける。

内心震えあがりながらも、僕は構わず続ける。

「君は、本当に医者になりたかったのか？ お父さんの後を継ぎたかったのか？ それは、本当に君の意志なのかい？」

バチン

白の支配するこの空間に、たった一度だけ響き渡る鋭い衝撃音。

霧霞のビンタは、涙の味がした。

疲労はおろか、痛覚すらも今の僕には無いはずなのに。それなのに、何故僕はこんなにも痛みを感じているのだろうか？

「願ったわ。私は、醒めない夢が欲しいと願った。永遠に眠っていかかった。朝が来なければいいと思った。現実を直視しなくなかった。悪い？ それの何がいけないのよ？ 私は逃げたかった。周りの目から、期待から、重圧から、境遇から、そして、自分自身から」
自信の塊のようだった彼女の口から、およそ彼女らしからぬ弱気な言葉が語られていく。

「小さい頃から決められたレールを進み、優秀な兄と比較され、それでも父さんや母さんに褒められたい、兄と同じように期待されたい、そんな思いでがむしゃらになって努力したわ。自分を捨てて、自由を捨てて。選択肢なんて、他にはなかったわ。そんな毎日に疲れ果てて、ふと気がついたときには、私はあまりにも空っぽだった。空洞だった。そんな自分に気がついてしまっただけからは、もう元のレールには戻る気になれなかったわ。でも、もう遅すぎたのよ、何もかも。もう戻ること、進むことも出来なかった。だから私は、夢の世界へ逃避するしかなかった」

そして、霧霞は、とうとう決定的な一言を言い放った。

「私は、病院なんて継ぎたくなかった。本当は医者になんてなりたくなかった。そんな風に考えるようになった私の体は、それ応える

ように長い眠りに落ちるようになった。元々才能なんて無い私は、さらに両親や周囲から見放されるようになった。この病室は、言わば私の牢獄。私は、私の全てを否定されたの。あなたに分かる？ この気持が」

そこまで一気にまくしたてた霧霞は、両の手で顔覆い隠し、倒れるようにその場へ座り込んだ。

それに呼応するように、世界は白の世界から一転、漆黒の闇に覆われた。

「だったら、そんなルールとつと外れちゃえば良い」

そんな彼女に対して、僕は覚悟を決めて話し始めた。

「生まれた環境も、親の期待も、周囲の目も、そんなの霧霞を形成するほんの一部でしかない。そんなもののために、自分を偽って自分を追い詰めて、自分を犠牲にするなんてあんまりだ。確かに君は色々なもの縛られていたのかもしれない。でも、君を見て僕が感じた事、それは、自分で自分を縛ってしまっているってことだ。勝手に自分で決め付け、勝手にあきらめて、自分から逃げている」

尚も、闇は刻一刻と深まっていく。既に、眼の前の霧霞の姿さえ視認することが出来ない。それでも、僕は語り続ける。

「自分が空っぽだって感じたんだったら、これから君のやりたいことをやりたいようにやって、自分で自分を埋めていけばいい。少なくとも僕は、そんな人を否定なんかしない。人間、再スタートを切るのに早いも遅いも無いと思うよ？」

そんな僕の言葉に反応するように、世界が再び白に包まれていく。眼の前に浮かび上がる霧霞のシルエット。

良かった。どうやら霧霞は僕の眼の前に来てくれたらしい。僕の話をちゃんと聞いてくれたらしい。

僕はいつもの癖で妹を撫でるように、俯いたままの霧霞の頭をそつと撫でた。

「なによなによなによなによ。わ、わたしだって、わたしだって本

当は、やりたいことくらいあったわよ。人並みに夢くらいもってたわよ。でも、お花屋さんになりたいなんて、言えなかったんだもん」霧霞さんよ、その見た目やキツイ言動とは裏腹に、まさかそんな女の子っぽい夢があったとは。

このご時世、小学生でも花屋になりたいなんて子は少ないってのに。花屋の息子として、何とも言えない感情がこみ上げてくる。

「霧霞、花屋になりたかったの？」

「そうやって笑えばいいわ。あなたもそうやって馬鹿にすればいいのよ」

「いや、馬鹿にするも何も。言つてなかったっけ？ 僕ん家、花屋なんだ。だったらさ、うちでバイトでもしてみろ？」

彼女は、まるで緊張の糸が切れたかのように涙を流しながら声を上げた。

「今だ。離れてー、嵐ー」

え？ リンネ？

聞き返そうとした瞬間、光の矢が僕の鼻先をかすめ、霧霞に命中する。

直後、霧霞から黒い靄が広がっていく。

これって、リンネが伝承を被うときいつも使っている矢だ。リンネの奴、いったいどこから射ったんだ？

というより、危うくもう少して僕に命中するところだった。

そんな文句を言う暇も無く、僕の右手には問答無用にいつもの痛みが走った。

「嵐、言い忘れてたけど、あなたがその世界から脱出するにはキリキリの伝承を被うしかないの。といっても嵐が頑張ってくれたから、後は最後の仕上げだけだよ。さ、張り切っていつてみよー」

「り、リンネ。お前、知つててわざと言わなかっただろ？ しかも途中通信が途絶えてたのもお前の仕業だな。あれも嘘か？」

「テヘツ。どーぞー」

「霧霞。いや、夢。僕が君をここから連れ出してやる。この世界から、病院から、君自身から。君のいるべき世界はこんなところじゃないだろう。だから掴んでくれ、僕の手を。最後の一步は君の手で、君のその手で掴むんだ！」

既に下半身が消えてしまった僕の腕を、霧霞のその白く細い腕が、力強く掴んだ。

「き… か、み、霧霞。僕の声が聞こえるか？ おい、しっかりしろー大丈夫かー」

「… ここは、現実？ それともまだ夢の中なの？」

「安心して、ここは現実だよキリキリ。ほら、目の前に天使だっているでしょ？」

「こんな怪しげな天使がいるのなら、少なくとも天国ではなさそうね」

そう言っ て微笑む霧霞。

そうか、彼女もこんな風に笑えたんだな。いや、むしろこれが本来の彼女なのかもしれない。

「キリキリ、あなたの中の伝承は確かにあたし達が払ったわ。でもね、伝承に奪われたあなたの体力や精神はすぐには戻ってこない。キリキリの場合、取り憑かれていた期間が長かったから。恐らく、まだちょっとした間は入院生活を続けてもらうことになるわ。でも安心して？ あなたの体調は必ず元通りになるよ」

そうだよな。霧霞のやつ、1年近くも眠りと悪夢の世界に蝕まれ、闘って来たんだ。

その奪われた一年という時間は、残念ながらもう返っててくる事は無い。

それでも、彼女ならこれから新しい路が出来るはず。ここから再

スタート切ることだって出来るはず。

「やれやれ、良かったな霧霞。少なくとも、君を眠りの世界に縛っていたものは消えた。君が本当の意味で自由になれるかどうか。後は、君次第だ」

彼女はくしゃくしゃにした顔をリンネに向けた。

「ありがとう…。でいいのよね。そんな感謝のセリフを言うのも久しぶりだから。どんな風にどんな顔をしていえば良いのかも、忘れてしまったわ」

彼女の口から感謝の言葉が聞けるとは、感無量である。まあ、僕にじゃなくてあくまでリンネに向けた言葉だけだ。

「えへへっ、いいっていいって。なんてったって私は、天使なんだから」

そう言っってえっへんと胸を張るリンネ。と言うか今回に限っていえば、僕も結構頑張ったと思いませんか？

「あ、嵐」

霧霞に突然、しかも初めて名前で呼ばれ、心臓が飛び出るほどビビるチキンな僕。

あ、そう言えば僕、彼女の事ずっと年下にも関わらず呼び捨てで呼んでたな。

しかも夢の中では名前で呼び捨てにしちゃったし。

まあ、何も言っってこないっことは霧霞も気がついていないのだろう。たぶん。

「あ、あなたは私を夢の世界から、私の世界から連れ出したのよ？

その責任、とってくれるの？」

せきにん？

そりや確かに、夢魔を払ったのは僕だし、夢の世界から連れ出したのも僕だ。でも、責任っつて、何すりゃいいんだ？

「あ、あはははは。そんなの当たり前だ。うん。僕なんかで良ければいくらでもね」

お互い、訳も分からず顔真っ赤。

そんなほほえましい僕らのやりとりを、少し離れてにやにやしな
がら見つめるリンネ。

物知り顔でにやにやするのは止めてください。と言うか何か言え
よ。見てないで何か言えよ。

「本当？ 本当に本当？ じゃ、じゃあ、また会いに来てくれる？」
上目遣いで不安げにそんなセリフを吐く霧霞。

今の彼女にそんなことを言われて、断れる男が果たしてこの世界
にいようか？ いや、いまい。断じていまい。

少なくとも僕は、断る自信が無い。そもそも断る理由が無いわけ
で。つまり、僕の答えは。

「勿論。君が無事ここを退院するまでお見舞いに来る。何度でも来
るから」

「ええ、ありがとう。楽しみにしているわ。不思議ね。私、今夜は
いい夢が見れそうな、そんな気がするわ」

安心しきったためか、はたまた夢魔を払った事による疲労のため
か、彼女はやすらかな顔ですうすうと寝息を立て始めた。

願わくば、今夜の彼女の睡眠が、彼女にとって心穏やかな眠りで
あらんことを、彼女にとって幸福な夢であらん事を。

僕は最後に一度だけ、霧霞のその寝顔を確認した後、彼女の病室
を静かに後にした。

END

第5話「花と嵐とキャットウォーク猫日和」クロマルの場合」

第5話「花と嵐とキャットウォーク猫日和」クロマルの場合」

季節は初夏。梅雨に入って早2週間。

こう毎日雨が降っていては、たまの晴れ間はやっぱり貴重。

キングオブインドアの称号を持つこの僕でさえ、思わず散歩に出かけたくなる今日この頃。

人間だってそんな風に考えるんだから、きつと動物達だって同じ事を考えているに違いない。

犬も歩けば棒にあたる。

それじゃあ、猫が歩けば……？

暇さえあれば部屋に引きこもって読書に、ゲームに、DVD鑑賞。リンネとの出会いは、そんなインドア気質だった僕を少しだけ変えてくれた。

例えば、ちょっとした暇時間を有効利用し、散歩をするため町へと繰り出たり。

最初こそ、パトロールをしたいと言うリンネにせがまれ、いやいや付き合っているだけの状態だった僕だが、数を重ねることに、この散歩という行為の持つ魔力にすっかり惹きつけられてしまった。

神様の嫌がらせは、結果的に僕に新たな側面を与えてくれたのだ。った。

神様の嫌がらせという話なら、今、僕が直面しているこの事態も、きつと神様の嫌がらせに違いない。

それも相当性質の悪い、もはや悪ふざけの領域。

リンネと出会ってからというもの、実にさまざまな事件に巻き込まれてきた僕だけど、それでもこんな事態に遭遇してしまったならば、そりゃあ、神様のせいにもしたくなると言つもの。

だって、猫が喋るだなんて学校では教えてくれなかっただろ？

そりゃ当然だ。

もしもそんなことを言い出すやつがいたら、そいつはきつと極めて普通じゃないやつだから。例えば、僕みたいに。

「いい加減認めましようぜ、だんにゃ。この現実ってヤツをにゃ」

そう言つて、2足歩行でこちらに歩み寄ってくる1匹の猫。

そう、猫。何というか、不気味というより相当シュールな光景である。

勿論、ネコ型ロボットなんてオチじゃないし、猫っていう名前の人間ってわけでもない。僕の目の前で華麗に二足歩行しているのは、一見、どこにでもいるようなごく普通の黒猫だ。

「あつしの事なんて、この際どうでもいいんでさ。重要なのは、だんにゃがあつしのお話を理解できる人物だつてとこにゃんですから。

ま、もつとも、今のあつしの場合、日本語つてやつを喋ってますからね、言葉だけなら他の誰でも理解は出来ると思いやすが」

そう言つて僕の隣へ、トコトコとやつてくる猫。

僕だけが理解出来て、他の人には分からないこと。つまり、天使関連か。

「天使、もしくはは伝承に関する話つてことか？」

「流石はだんにゃ。話が早くて助かりますにゃ」

「ちよつとまつてくれ。こつちからすればさ、言葉を喋る猫だなんてそりゃ、伝承が絡んでるんだろつて想像はつくけど。お前はど

うして僕が代行者だって分かったんだ？ 僕が知らなかっただけで、天使の使いつて一般人と何か違うところがあるのか？」

リンネのやつは何も言わなかったけど、まさか、僕が気がつかなかっただけで頭に角でも生えてるって言うんじゃないだろうな？

そんな僕の素朴な疑問に対し、猫は一度眼を細めた後、僕というより僕の背後を見ながら答える。

「ふむ、光、でしょうかね。ご存知かもしれませんが、あつしら猫の目ってやつは人間のそれとはちよいと違ってましてね。例え、極僅かな光でも物を見ることが出来るんでさ。ほら、犬は人間の何十倍も鼻がきくっていうでしょ？ あれの目版ですにゃ」

よくみてみればこの猫、オッドアイだ。左右の眼の色が異なっており、どこか不気味な感じがする。これって取り憑かれたことによる影響なんだろうか？

ここで僕は、頭に浮かんだ疑問を何の躊躇も無く猫にぶつけた。

「車のヘッドライトに当たった猫が車に引かれたりすることがあるけど、あれって逆にまぶしすぎて、シヨックで動けなくなってひかれちゃうって事なのか？」

「まあ平たく言えばそうにやんですが、猫の前でそんな話をするにやんで、デリカシーってもんが欠けてますぜ、だんにゃ」

猫にたしなめられてしまった。僕のダメ人間っぷりもついにここまでできてしまったか。もはや引き返せない領域。

「ご、ごめん悪かったよ。えーと、で、その光がなんだってんだ？もしかして、僕に後光でも射してるってのか？」

「そんな神々しいもんじゃにやいですけど、でもそれに近い感じですよにゃ。ちよいと眩しいって程度ですが。それと、先に言つときますが、猫の世界において、天使や伝承の話は一般常識にやんですよ、だんにゃ。何と言つてもあつしら自体、そりゃー色んな迷信や伝説やエピソードをもつてやすからね。だからこそ、人間たちみたいに取り憑かれるにやんで猫はほとんどいにやいんです」

猫と天使と伝承の関係性。

知りたいような知りたくないような。もしそれを知ってしまったら、もう今まで通りの目で猫を見れない気がする。

「まあ、その話は後でゆっくり聞くとして。つまり、お前は本来取り憑かれるはずのないその伝承に取り付かれてしまい、急に人間の言葉を喋れるようになってしまった。そこでお前はその伝承を被つてもらうべく、僕みたいな人間を探していた。そういうことではないのか？」

猫は、あぐらに腕組みという妙にオヤジ臭い恰好で、僕の話を読まながら聞いていた。

「素晴らしい。その通りです、だんにゃ。ただ一つだけ訂正するとすれば、人間の言葉を喋れるようにやったのと同時に、猫語が喋れなくなっちゃいまいましたね。鳴き方まで忘れちゃう始末。にゃー、まいったまいった」

そう言つてにゃははははと豪快に笑う猫。

こいつは今、猫の言葉を忘れ人の言葉を話す状態。つまり一般人にもこいつの声は聞こえるわけで。

ふと、気配を感じ後ろを振り返ってみる。案の定、一人の少女が僕らのやりとりをじっと見つめていた。

気がついたときには後の祭りというわけで。

「あ、あははは。さあーとと、今日の腹話術の練習はここまで。今年の隠し芸大会、優勝は貰ったようなもんだな。あっはっはっは」
大量の冷や汗をかきながらも、何とかその場を後にしようとする僕。

少女はそんな僕の独り語を聞いて、母親のもとへとかけよる。

「おかーさーさーさーん。あのねーあのねー、猫さんとおはなししてるへんなおにーちゃんがいるよー」

「しっ、見ちゃいけません。絶対近付いちゃだめよ。このところ暖かい日が続いたから」

僕は、泣きながら小脇に件の猫を抱え走り出す。

「だんにゃ、元気出してください。だんにゃは間違いなくまともで

すげ、あつしが保障しやす」

「何が保障だド畜生。そもそも、お、ま、え、のせいだろーが、というより、お前みたいなお気味猫に保障されたってなんの意味も無い。全然うれしくない。ぐすん。暫くこの公園にこれなくなっちゃったじゃないか。僕のお気に入りプレイスだったのに」

ここは例の雨守小雨先輩の別荘、もとい公園だ。

あの雨の夜、小雨先輩と出会ったこのドーム型遊戯の中で読書をするのが、最近の僕のお気に入りだった。

「しっかしだんにゃ、いい年こいた健全な男子が、朝っぱらからわざわざ公園で一人読書ですかい？ あつしも仲間内じゃ変わってるにやんて言われてますが、だんにゃも相当の変わりもんですぜ」

「は？ 一人？ そういえばあの騒ぎのおかげで、とてつもなく重要な何かを忘れてしまっているような」

その直後、人のものとはとても思えぬ強烈な殺気とオーラを感知した僕。

先程とは明らかに周囲の温度と空気が変わった。一気に張りつめた、とも言える。こんな気配を醸し出せる人物を、僕は一人しか知らない。

「この私との約束を忘れるなんて。相変わらずいい度胸ね、嵐」

後方から聞こえるそんな聞き覚えのある声。

振り返らずとも分かる。そう、霧霞夢だ。

結論から言うと、霧霞は彼女の病院を退院した。

何だかんだ言われつつも、健気に彼女の病室へと通い詰めていた僕。

今日はその退院祝いと、直接お礼が言いたいという彼女の申し出を受け入れ、あの公園で待ちあわせをしていたのだ。

「だんにゃ、だんにゃ。こちらさんもしかして、だんにゃのこれですかい？」

そう言って自身の小指をこれみよがしに立てて見せる猫。と言っ

ても猫の手だけに、ただ単に肉球を見せているようにしか見えない。僕は、そんな品のない猫を無視して答える。

「いやー、ごめんごめん霧霞。ついさっきまで公園で待っていたんだけどね。ほら、急にこんな珍妙な猫に遭遇しちゃってさ」

霧霞は呆れたように、僕が小脇に抱えたままになっっている猫を見つめる。

「そう。あなた、性懲りもなくまた可笑しな事件に首をつっこんでいるのね。それって、あなたの趣味なの？」

「いやー、しいていえば体質かもね……え？」

唐突に、というか会話の最中にごくごく自然の流れで、まるでそうなるのが当たり前のように、霧霞の拳が僕目掛けて飛んできた。

その拳は、見事僕の鼻へとクリーンヒット。僕は盛大に鼻血を放出しながら、放物線を描きながら吹っ飛んだ。

「ひ、ひりふあふみ、ふいきなりなにふんふあよ」

「ふん、罰よ罰。嵐の事情は分かったわ。でもそれはそれ、これはこれ。私を待たせておいて、むしろこのくらいですんで良かったじゃない」

あははは。病室でしか会ってなかったから知らなかったけど、霧霞ってこんななヴァイオレンスなヤツだったんだ。あははは。

「くつくつく。だんにゃ、こりゃこれから苦労しますぜー。間違いなく、だんにゃは尻に敷かれるタイプでさあ」

ギロリンと猫を睨みつける霧霞。出た、霧霞の絶対零度。

僕はこれまで出会った人たちの中で、彼女以上の眼力の持ち主を知らない。

「こ、こいつは強烈、思わずちびっちゃいそうだにゃ」

そう言つととっさに近くの壁へとよじ登る猫。猫が壁をよじ登って光景は初めてみるけど、やっぱりシユール。

そして猫は、まるで風来人のようなポーズを取った後、前口上を述べ始めた。

「どなたさまもおひかえなすつて、おひかえなすつて。手前生国と発しますは桜ヶ丘で産湯をうけ、名はクロマル。人呼んで、黒き彗星とはあつしのこと。以後、お見知りおきを」

どっかで聞いたことあるようなセリフだけど、そんなセリフを猫から聞く日がくるとは正に驚き以外のなにものでもないわけで。

そんな僕に対して霧霞が一言。

「さあ、行きましよう嵐。私、久しぶり外にでられたんだもの、ぼーっとしては勿体ないわ」

こちらもちちらで貴重なセリフ。あの霧霞からこんなセリフがきけるとは、感無量である。

「ちよつとちよつと姐さん。そりやにやーでしょーが。後生ですから、にやーの話を聞いてやってくださいよー、ね、ね?」

クロマルのやつ、必死すぎてすっかり素が出ちゃってるよ。何故だろう、ちよつとだけ他人とは思えなくなってきた。

「まあまあ、霧霞。こいつを放置しておいたら何しでかすかわからないしさ、とりあえず話だけでも聞いてやろうよ」

必死に頷き、その大きな眼を輝かせながらこちらを見つめてくるクロマル。そんなちよつと可愛い光景。

「仕方ないわね。とつとと話さない、その猫」

「はは、よかつたな。で、そもそも何者なんだよ、お前は?」

ぼんつと言うお決まりの擬音を響かせ、いつものようにリンネが突然現れた。

「それってネコマタじゃないかな、嵐。コピーキャットってやつ。

それと、やつほーキリキリ、何だか久しぶりだね。元気してた?」

そう言つて霧霞に手をふるリンネ。

病院は嫌いだし、あたしは空気が読める天使なのーとか言つて、結局あのの事件以来、彼女の病室へ顔を出すことの無かつたリンネ。「相変わらずテンションの高い天使ね」

「伝承か。まあ、猫と言ったらネコマタが妥当か。コピーキャットって確か模倣って意味だったよな？」

僕の話を全く聞いていないリンネは、何故か滅茶苦茶嫌そうな顔をしつつ、クロマルに天使のキッスを施した。

やっぱり、というか当然というか。どうやら次の試練の対象者はこのクロマルらしい。

「にゃにゃ？ 何か今触られたような感覚が… む、天使」

「どーも、くる猫さん」

いつもならテンション高く自己紹介を始めるリンネのはずなのに、何だろっ、二人の間に流れるこのちよっただけ険悪な空気は。

「だんにゃ、さつき猫は昔から天使とちよっとした接点があるって話をしたでしょう？ 言い忘れてやしたが、それは悪い方向について意味にやんです。天使と猫は昔から犬猿の仲にやんでさ。特に、あつしみたいにや黒猫とはなおのことですにゃ」

リンネがため息をつきつつ補足する。

「ま、そーゆーことね。種族として仲が険悪だったのはもう遠い昔の話のことだけど。それでもやっぱりお互い顔を突き合わせていてあんまりいい気分がしないんだよねー。それって理屈じゃなくて、本能レベルの問題なのかもね。結構毛だらけ、猫灰だらけってやつよ」

リンネがウンザリした顔を並べつつ僕に言った。

「と、いうことで嵐。今回は全面的にあなたに任せるわ。もちろん、バックアップや仕上げにはあたしも参加するけど、それまでお願いね。実はあたし、ちよっただけ用事があるんだ。そうそう、嵐一人じゃ不安だし、キリキリ、あなたさえ良かったら駄目駄目な嵐を手伝ってあげて。その方が嵐もやる気出るだろーし」

こちらに向き直り、わざわざウィンクしながらリンネが言う。

「それじゃ、嵐、あなたを信じてるから。後、お願いねー」

一気にそうまくしたてたリンネは、早々に姿を消したのだった。

おいおいおい。幾ら相手が人間じゃないからって、僕一人で何とかなるようなものなのか？ 大丈夫なのか、これ。

不安だ。実に不安だ。

「まるで台風ね、あの天使」

「本当だよ。えっと、霧霞。君には申し訳ないけど、やっぱり僕一人じゃ不安だからさ、出来れば手伝ってほしいなーなんて」

僕の苦笑いのお願いに対し、ふっとため息をつく。そして、あの日病室で見せてくれた笑顔で答えてくれる霧霞。

「しょうのない人ね、あなたは。分かったわ、二人でこの猫また事件を解決しましょう」

「本当ですかい？ あっし、一時はどうにやるもんかと思ひやひやしましたよ。よっ、ご両人」

クロマルのひげをひっぱりながら、ちょっとだけ照れる霧霞が答える。

「い、いいからさっきの続きを話さない、猫また」

「にゃにゃ、そうでした。実はあっし、自分がこうなっちまった原因にちよいとあてがありやして」

「へえ？ だったら話が早いよ。で、それって何？」

「そこでだんにゃたちの出番なんですさ。百聞は一見に如かず。お二人にちよいと連れて行ってほしいところがあるんですにゃ」

猫が伝承に取り付かれるに至った原因、そして言葉を話すようになった理由。

霧霞には悪いけど、僕はこの猫に対しちよっただけ興味が沸いて来ていた。

「だんにゃ、町はずれに小さな病院がありやすよね？ ひとまず、そこに連れて行ってほしいんですにゃ。理由は道中にお話ししやすので」

町の中心部にある病院なら、ここにいる霧霞の病院だけど。町はずれの病院だって？

僕が首をひねっていると、見かねた霧霞が答える。

「それって、桜病院のことかしら？ 町はずれにある病院なら、確かそうだと思うけど」

流石は大病院の娘さん。町にある病院くらい把握済みってわけですね。それとも僕が無頓着なだけか。

「それですよ。確かそんな名前だったとおもいます。いやはや、あつし、猫なんでもいちいち名前までは覚えていにかつたもので、助かりやした、姐さん」

僕らは一路、その桜病院へと向かった。

「で、クロマル。その病院に何の用があるんだよ。そこ動物病院つてわけじゃないんだろ？ もしかしてお前の飼い主でもいるのか？」

「だんにゃ、それは勿論違いやすぜ。あつしは天涯孤独の一匹猫。飼い主にやんで、おりやせん。ただ、こんにゃあつしをまるで自分の家族のように接してくれて、あつしにクロマルという名前まで与えてくれた御仁がいるんですよ。いわば、あつしの命の恩人。その方が、その桜病院に入院してるんですよ」

入院中か。さすがに、猫じゃその人の病状や病名までは知ることができないってわけだ。

「ふーん、僕らはこれからその人に会いに行くってわけか。いやまてよ、お前今までもその人の元へ通っていたんだろ？ だったらなんで今回に限って、僕らが一緒じゃなきゃだめなんだ？」

「それは、幾つか理由があるんですが、一つはこれですよ」
そう言っただけで自分の足を指し示すクロマル。そのクロマルは今、霧霞に抱かれる形で件の病院まで移動しているのだった。

「あつし、この通り、人の言葉を喋るようににやっただと同時に、2足歩行も出来るようににやっただけですが。厄介なことに、その際あつしの猫らしい運動能力ってやつが失われちゃったらしいんですよ」

それって、つまり高い木にひよいひよい上れたり、高所から落ちても割と平気だったりするあれだろうか。

「あっしの命の恩人のその御仁のいる病室ってやつが、病院の2階にありやして。これまでは木から木へ移ることによって病室まで辿りついて

いたんですが、こんにゃ珍妙な姿にやっつてからはそれすら難しく。それどころか、こんにゃ体じゃ、病院にすら辿りつけにゃい始末にやんでさ。それで、どうしたもんかと途方にくれていたんですにゃ」「つまり、猫の手も借りたい状況って事ね？」

霧霞がぼつりとそう呟いた。

一瞬の静寂。吹き抜ける風。照りつける太陽。

自分で言った癖に、みるみるうちに赤くなる霧霞。固まる僕ら。

「悪い？」

全力で首を横に振る僕とクロマル。

「言わなければ良かった、言わなければ良かった」

そう言っつてクロマルを踏みつけようとする霧霞。勿論、猫だけにである。

「ふ、ふん。何にしてもマヌケな話ね」

「そりゃ酷つてもんですぜ、姐さん。あっしにとってはおかにやり重大な問題だったんですぜ」

人間の言葉と2足歩行能力を手に入れた代わりに、猫の言葉と猫の運動能力を失ったわけだ。何だか、人魚姫みたいな話。

でも、そうまでしてクロマルが会いたい人物ってどんな人なんだろう。俄然興味がわいてきた。

「見えてきたわよ。桜病院」

「にゃにゃ、ここですにゃここですにゃ。いやはや助かりました御二方。では早速」

とてとてと、2足歩行で病院の入口に向かおうとするクロマル。猫まつしぐらである。

「ちよっとまで、クロマル。お前まさか、そのまま堂々と入口から

入るつもりか？」

そうでしたにや、どうすればいいんだにやー。とクロマル。

病院の中で猫をつれて歩くわけにはいかないわけで。ましてや、2足歩行で入るわけには尚更いかない。

「… 仕方ないわ。このバッグの中にお入りなさい」

「おお、恩にきります、姐さん」

霧霞のその申し出のおかげで、何とか病院の中に入ることができた僕たち。

「確か2階だったよね、クロマルの命の恩人さんってのが入院してるのって」

「そうですね。一番南の病室ですにや」

「名前は？ その人の名前はなんて言うんだ？」

「にやー、黒木さんとおっしゃる方ですにや」

黒木、黒木、黒木。… 無いぞ。黒木という名のプレートが見当たらない。どこにもそんな人はいない。

「クロマル、本当にこの病院で間違いないんだよな？ 2階で間違いないんだよな？」

「間違いありませんぜ、だんにや。何度も何度も来たんです。間違えるはずがねえ」

念のため、1階、3階の病室も探したもののやはり見つからず。

「嵐。こつちもいないわ。もしかしたら、その人はもう」

「そんなに、馬鹿な」

頭を抱えて悶えるクロマル。

考えたくはないけど、これだけ探してみつからないとなると、そういうことも視野に入れる必要があるのかもしれない。

最終手段として、近くにいたナースさんに声をかける。

「すみません、この病院に黒木さんという方が入院されていると思うんですが。どこの病室か教えてもらえませんかでしょうか？」

20代くらいの若いナースさんが答えてくれる。

「あら、あなた達黒木さんのお知り合い？ 御見舞にきてくれたのかしら。でもごめんね、ちょっと遅かったみたい」

僕たちの脳裏に最悪の状況がよぎる。

そんな思わず声を失ってしまった僕らに、ナースさんが慌てて付け加える。

「あ、やだ。別に黒木さんが亡くなっただって意味じゃないのよ。ただ、病状が悪化してしまつて。この病院の施設では十分な治療が受けられないから転院したのよ」

どうやら、とりあえず最悪の事態だけは避けられそうだった。

「あの、黒木さんがこの病院に転院したか教えてもらうことは出来ますか？」

「いいわ。黒木さん、いつも一人だったから。是非お見舞いに行つてあげて、彼女も喜ぶと思うから」

彼女？ クロマルの言う命の恩人とは、どうやら女性らしい。

と、さっきのナースさんが何やらメモをもってこちらに戻つて来てくれた。

「はいこれ、彼女の転院先の病院の住所だから。そういえば黒木さん、いつも1匹の黒猫に向かってお話してたわ。きつと寂しかったのね。あたたちが御見舞に行つてくれればきつと喜ぶと思うから、彼女のこと、お願いね」

そう言つて僕にメモを渡してくれたナースさん。

そこに書かれていた転院先。それは。

「霧霞、せつかく退院したところ悪いんだけど。また病室にいくことになりそうだよ、しかも君の家の」

黒木さんの転院先、それは霧霞総合病院だった。確かに、この地域で一番大きくて施設も充実している病院と言つたら、まずこの霧霞の病院の名が出てくる。

「そう。黒木さん、あそこに転院したのね。私なら問題ないわ、早速行きましよう」

こうして桜病院を後にした僕ら。

「病気が悪化してたにやんて。ねえ、だんにや、大丈夫ですかね？」
「うん。さっきのナースさんの話しぶりからすると、命には別条ないような感じだったけど。それと、今から行く霧霞総合病院はね。まあ、名前からも分かる通り、この霧霞の親父さんが院長を務める病院なんだよ」

僕の言葉に、驚いたように霧霞を見上げるクロマル。

「姐さんの？　そうですかい。そいつは何だか不思議な縁だ。世界ってヤツは、猫の額のように狭いもんにやんですなあ」
確かに。何だか出来過ぎというか、作為的というような気がするの、はたして僕の気のせいだろうか？

一路、霧霞総合病院を目指す僕ら。

その道中、霧霞が真剣な表情で僕に語りかける。

「嵐。私ね、あの事件の後、両親と話し合ったの。そこではっきりと宣言したわ。あの病院を継ぐ意思がないこと。医者になる意思がないこと。私は、私のしたいことをして生きていくということ。思えば、私が両親に逆らったのってこれが初めてだったの。幸いにも私には優秀な兄が二人もいるから。最初は困惑していた両親だったけど、最後には認めてくれたわ」

力強い眼差しで、僕に語りかけてくれる霧霞。

「そっか。うん。そっか」

「あの時、私を助けてくれたあなたには、一応報告しておこうと思つて。…」
「ありがとう、嵐」

そう言つて、その頬を赤く染めながらも僕にお礼を述べる霧霞。

そんな霧霞に対して僕は、不覚にも涙していた。

「ちょ、ちよつと、嵐、何であなたが泣いてるのよ……馬鹿」

再び、霧霞の拳が僕の顔面に飛んでくる。が、僕はそんなことお構いなしに感動に浸っていた。

「やれやれ、まだ夏には早いつていうのに、何だか今日は一段と暑いですよー。って痛い痛いですから、あっしのひげを引っ張るのはやめてくださいませ、姐さん」

微笑みながらクロマルのひげをひっぱる霧霞。
僕の涙は、まだ止まりそうもなかった。

そうこうするうちに、目的地である霧霞総合病院に到着した僕ら。「あのナースさんの話だと、病状が悪化しているらしいからね。恐らくは個室だろうけど、最悪面会謝絶なんてこともありえるし、正直、意識があるかどうかも分からない。覚悟はいいか？ クロマル」クロマルが静かに1度頷いたのも見届けた僕らは、再びクロマルをバッグに詰め込み、病院へと入っていく。

何度も何度も霧霞の御見舞にきた結果、僕はこの病院ですっかり顔なじみになってしまったわけで。

僕は顔見知りのベテランナースさんをつまえて尋ねる。

「あら、花君。それに、夢お嬢様も。お揃いでどうしたの？ もしかして、デートかしら？ 若いってのはいいわねー」

デート？ 確かに、そう言えば。そんなこと考えもしなかったけど。朝から待ち合わせして、二人でどこかに出かけるって、これ、完全にデートじゃん。これ、完全にデートじゃん。… 大事なことから、思わず2回も言ってしまったわけで。

言われてみれば確かにそうかもしれないわけで。

そっかー、これが世に言うデートってやつか。

そう考えてみると、霧霞のやつはどんな気持ちで今日、あの公園にやってきたんだろうか？ もしかして、最初からこのつもりで？ そんなこんなを考えるうちに、僕の脳はオーバーヒート。みるみるうちに赤くなってしまいうちキンな僕。

「あら、やっぱ若いわねー」

そう言って笑うナースさん。

またも見るに見かねた霧霞が助け船を出す。

「この病院に最近、黒木という女性が、桜病院から転院してこなかったかしら？ 私たち、その人の御見舞にきたのだけれど」

「ああ、はいはい。黒木さんなら3階の305号室ですよ。でも意

外ねー、お嬢さんと黒木さんがお知り合いだったなんて」

「ええ、ちよつとね。さ、行くわよ、嵐。ってあなた、いつまでそうしているのよ！」

本日3度目となる霧霞さんの拳を浴びながら、僕らは黒木さんの病室へと向かった。

残念だったな霧霞。ここは病院だからね、例え何度殴られようが、治療には困らないさ。そんな強がり可言える僕は、まだ何とか霧霞についていけそうだった。

305号室。かつて霧霞がいた部屋より、一回り小さいもの、思った通り個室部屋だ。それに面会謝絶の札は出ていない。

「黒木、黒木。おつ、ここか。覚悟はいいか？ クロマル。それじや入るぞ。…失礼しまーす」

見ず知らずの人の病室にいきなり入るってのは、やはり何度経験しても緊張する。霧霞のときを思い出す。

ベッドで半身を起し、じっと窓の方をみつめる一人の老婦人。どことなく品がいいというか、儂げな感じを纏っている。

この人が黒木さん？

僕らが部屋に入ってきたことに気がついた老婦人が、こちらに目を向けてくる。

「あら、どなたかしら？ わたしにお客さんなんて、珍しいこともあるものね」

「えと、あなたが黒木さんですか？ 僕、花嵐と言います。で、こっちが霧霞夢。あなたに、会いに来ました」

「あらあら、そうだったの。こんなおばあちゃんのために、わざわざありがとう。さあ、そんなところに立っていないで、こちらにおいでになって？」

僕らは黒木さんのベッド脇の椅子に腰かける。

「はて、わたしあなたたちどこかでお会いしましたかしら？ 単に私が忘れていただけなら、ごめんなさいね。何しろ私も年が歳だから」

僕は単刀直入に黒木婦人に質問していく。

「いえ、ご心配なく、僕たちこれが初対面です。それと、いきなり現れてこんなぶしつけな質問をして恐縮ですが、黒木さん、ちょっと前まで桜病院に入院されてましたよね？」

「ええ、確かに。少し前から、私の心臓の具合が悪化してしまって先生の紹介でこちらの病院に転院させてもらったのよ。どのみち、わたしはもう長くないし、あの病院には色々と思入れがあったものだから、出来れば離れたくなかったのですけどね」

そう言っただけで病室の窓から外を眺める黒木さん。思入れか。それってやっぱりクロマルのことなんだろうな。

「それじゃあ、クロマルって猫を御存知ですか？ ちょっと変わりの黒猫なんですけど」

僕の口からクロマルというワードが出た瞬間、眼を輝かせ、こちらを振り向く黒木さん。

「まあ、あなたたち、クロマルを御存じなの？ あの子、今頃何処で何をしているのやら。元気ならいいのだけれど」

黒木さんは昔を思い出すように、思い出に浸るように、すっと眼を閉じ答える。

「私はね、あの子がほんの小さな子猫のときから、あの子をずっと見てきたの。最初の出会いは、そうね、4年くらい前だったかしら、ある日突然、窓からクロマルが私の病室にふらっと入ってきたの。ガラスにでも追いかけられ回されたのか、ひどく傷だらけだったわ。私は、クロマルを介抱し傷が癒えるまで私の病室のすみで匿っていたの。勿論、先生には内緒でね」

そう言っただけで笑う黒木さんの笑顔は、まるで少女のそれのようだった。

「しばらくして、傷が治って私の病室から出ていった後も、クロマルは私の病室を訪れてくれるようになったわ。あ、そうそう。クロマルという名前はね、わたしがつけたの。名前に深い意味はないのだけれど、私のベッドの上でまるまって眠る姿、みたままの名前ね。

きつと、クロマルは私に恩義の一つでも感じてくれたのかもしれないし、病室で一人さびしくぼつんとしているわたしを、不憫に思ってくれたのかもしれない。クロマルは私の病室へと頻繁に訪れてくれたわ。わたし、元来おしゃべり好きなものでして、そんなクロマルをすっかり話し相手にしてしまってますね。勿論、私がクロマル相手に一方的に喋るとい意味ですけど。それでもね、あの子はいつでもわたしの話をじっと聞いてくれましたの。ときどき、この子人間の言葉がわかるんじゃないかって思ったほどよ」

猫は三年の恩を三日で忘れる何て言うが、クロマルのやつ、やはりというか想像通りというか、猫にしては珍しく義理堅いやつらしい。

「こうして私がこの病院に移るまで、そんな日々が数年続いたかしら。あの子と会えなくなってしまったのはさびしいけれど、どうせ私も長くはない身ですもの。こんなおばあちゃんに毎日毎日、束縛されるといのもクロマルにとって、きつと良くないと思った私は、結局こちらに転院してきたの」

「あの、詳しいことは言えなくて本当に申し訳ないんですが、その、クロマルがあなたに会いたがってまして。… それと、黒木さんの知っているクロマルとちょっと違うかもしれないですけど、驚かないでくださいね」

ただでさえ心臓の悪い黒木さんだ。人の言葉を喋るクロマルを目の当たりにして、ショックで心臓が止まるなんて事態に陥ったら、正直目も当てられない。

だからこそ、ここまできて本当に今のクロマルと黒木さんを会わせてもいいものかどうか、判断に迷っている僕。

と、その時。今までの黒木さんの話を聞き、いてもたってもいられなくなったクロマルが、自分で霧霞のバツクから勢いよく飛び出した。

「うおおおーん。黒木殿。あにゃたというお方は」

2足歩行、鼻水と涙垂れ流し状態で黒木さんに歩み寄るクロマル。

本来なら感動的なシーンなんだろうけど、相変わらずシユール。

一瞬何が起こったか分からないという顔をしていた黒木さんだったが、その後笑顔で答える。

「あなた、クロマル？ クロマルなのね？」

そう言っつてクロマルを思い切り抱きしめる黒木さん。

「ぐ、ぐるじい。うれしいけど、ぐるじいじゃ」

「黒木さん、若干強く締めすぎみたいですよ。クロマルがアオマルになってます」

冷静に良く分からないツツコミを入れる僕。

「あら、ごめんなさい。私ったら、あまりに嬉しかったのもだからつい。でもどうして？ クロマルが人の言葉を喋るなんて」

「じゃ、いつだったか、黒木殿が言ったでしょう？ 本当にあつしとおしゃべりが出来たらいいのにな、って」

こいつ。その願いの為に、わざわざ伝承に取り憑かれて、僕たちを頼ってまで黒木さんに会いに来たってのか？

猫にしておくにはもったいないくらい義理がたいやつだな、コイツは。

「そうね、そうだったわ。いつもいつも、わたしが一方的に喋るばかりだったから。あなたとお話が出来たらなつて。こんな年でそんなことを考えているなんて、おかしいでしょう？」

そう言っつてはにかむ黒木さん。

「そんなことない。少なくとも私は、素敵だと思います」

僕が答えるより早く、霧霞がそう答えた。バカバカしいつて一蹴するかと思っつていただけに、ちょっと意外な解答だ。もしかすると、かつての自分と重ね、霧霞なりに思うところがあったのかもしれない。

「ありがとう、お嬢さん。でも、こうして実際にクロマルとお話が出来た日があるなんて、まるで夢みたいだわ。こんな年まで生きてみるものね」

そう言っつて目を細める黒木さん。

いつの間にかあたりは夕闇につつまれつつあった。

「クロマル、どうやら僕らの出番はここまでみたいだな。明日、もう一度ここに会いにくるよ」

「すまねえだんにゃ、姐さん。お二方にはなんとお礼を言っているのやら」

そう言つて一先ず病室を後にした僕と霧霞は、そのまま階段を下り、1階の売店横の待合室で隣会つて座った。

「霧霞、今日はごめんな。せつかくの君の退院祝いだつたのに、すっかり僕に付き合つてもらつちやつて」

霧霞はしばらく僕の顔をじつと眺めた後、答える。

「いいわ、許してあげる。その、私も結構楽しかったから。だから、後のことは私に任せて。猫1匹くらいなら、私でも隠し通せる。ここまで来たんですもの、私も最後まで付き合つわ」

「ありがとう、霧霞。今回、君がいてくれて本当に助かったよ。僕一人だったら、どうなっていたか分からない」

「こ、これくらい、どうつてことないわ。私が勝手にしただけ。あなたに何かしてあげたかつただけだから」

そう言つて笑顔を見せてくれる霧霞。

「そつか。やつぱりさ、霧霞はいいやつだよ。それに、そうやつて笑つてたほうが君らしい」

「ば、馬鹿言つてないでとつと帰つたら？　そろそろ今日の面会時間も終わりよ」

本日4回目となる霧霞の拳をうけつつ、僕は答える。

「うん。そうする。明日必ずまた来るからさ、それまで二人を頼むよ、霧霞」

僕は二人を霧霞に任せて、一旦家へと戻ることにした。

「あ、兄さんお帰りなさい。今日のお散歩はどうでしたか？」

そういうばリンネの奴、今日1日僕にまかせきりで何やってたんだろう。後でじっくり問い詰めてやる。

「うん。結構面白かったかな、色々と新発見もあったし。そう言えは有須って、猫好きだったっけ？」

「何ですか藪から棒に。でもそうですね、どちらかと言えば私は猫派ですけど。それがどうかしましたか？ 兄さん」

「んー、いや、特に深い意味はないんだけど、今日ちょっと変わった猫と知り合ったもんでね」

「変わった猫、ですか。私に言わせれば、猫なんてみんな変わつてると思いますがね。人に懐かないし、自由奔放だし、何考えてるのか分からないです。それって、何だか兄さんにちょっと似てますね」

猫と僕が？ こんなにも従順で人懐っこい僕は、どちらかと言えは犬じゃないだろうか。

「おいおい、そりゃ言いすぎだろ。僕はいつだって皆の事を考えてるんだぞ」

「ふふつ、冗談ですよ。もうすぐ晩御飯ですから、それまでもう少しまっていてくださいね」

僕はそのまま自分の部屋へと向かう。

すると、リンネが浮かない顔で僕の帰りを待っていた。

「嵐、あのね」

「リンネ、お前今日は何してたんだよ。何か用事があるって言うってたけど、もうすんだのか？ こっちの方も何とかかなりそうだぞ？」

何か言いたげだったリンネだが、しばらく考えた後、その言葉を飲み込み、いつもの笑顔で答える。

「にはははは、ごめんね。それにしても、一人でなんとかしちゃうなんて、さっすが嵐。あたし見直しちゃったよ」

「そう？ まあ、実際は霧霞に大分助けてもらったけどね」

「それでも、よ。今の嵐になら… いえ、何でもない。それじゃ、

明日が仕上げね。頑張つて、嵐」

このとき、リンネが言いかけたこと。それは、この事件を解決した後、僕の身にふりかかってくることであり、それは痛いほどに僕を苦しめる

ことになるわけだけど、それはまた別の話。

このときの僕は、ただただ翌日のクロマルの件で頭がいっぱいだつたのだつた。

翌日、早々に黒木さんの病室を訪れる僕。病室には黒木さん、クロマル、霧霞3人の姿があつた。

「にや、まってましたぜ、だんにや。さあ、最後の仕上げといきやしょう」

「もういいのか？ 覚悟は決まつたんだな？ クロマル」

「こうして黒木殿と話すことも出来ましたからにや。それと、実を言うとあつしの体力も割と限界に近付いてましてにや。みん様の前で、ぽっくりいっちまうつても、カツコワルイですからにや」「そういうことなら、分かつた」

黒木さんが不安げに言う。

「良く分からないけれど、この言葉を話すクロマルとは、もうお別れなのね？ こんな年よりのお願いを聞いてくれて、本当に嬉しかったわ、クロマル。それと、花さんに霧霞さんも、私とクロマルのために、ありがとうございました。これで思い残すことはないわ」「そんなに、黒木殿、弱気なことを言わにやいでください。確かにこの姿のあつしとはお別れですが、にやにも今生の別れってわけじやにやい。また、かにやらず会いに来ますよ」

「ありがとう、クロマル。でもね、その気持ちだけで十分よ。こんなおばあちゃんにかまつてないで、あなたはあなたの為に生きなさい」

「……にやー。分かりやした。こにれてしばしのお別れ。黒木殿もどうかお元気で。では、さらば」

「ふん。最後まで生意気な猫ね」

そんな霧霞のセリフとともに、僕らは黒木さんの病室を後にした。

霧霞病院近くの川原。

「にやにや、それではだんにや。最後のもう一仕事、お願いしやす
僕は静かに頷き、心の中でリンネに呼び掛ける。

おい、リンネ。最後の仕上げだ、出番だぞ。

そんな僕の要請に答え、どこからともなく現れるリンネ。

「呼んだ、嵐？ む、くる猫」

「むむ、てんし」

二人の仲は相変わらずのようだ。

「それじゃあ、とつととやっちゃいましょう。くる猫さん、分かっ
てると思うけど、眼を閉じて心を落ち着けてね。何があっても、私
たちを信じて、絶対に眼を開けちゃだめだよ」

「言われるまでもにやい。さ、覚悟はとつくの昔に出来てますぜ。

あつしは逃げも隠れもいたしやせん」

そう言っって胡坐をかき、どっしりと構えるクロマル。

「猫にこれを放つのは初めての経験ね、出来ればこれっきりにして
ほしい、わっ」

そう言っって力いっぱい矢を放つリンネ。矢は一直線にクロマルを
目指し、その心臓に見事命中。

同時に、クロマルの体から黒い煙が出現する。

「流石あたし、猫も杓子も関係なし、百発発百中なんだから。さ、
嵐、仕上げだよ」

一瞬の痛みの後、僕の右手が光り出し、やがて何かの形を作り収
束していく。

……って何だこれ、巨大な、猫じゃらし？

これがれっきとした天使の武器なのだというのだから、まったく

もって世も末である。

「というか、今回のリンネさんは相当やる気がないご様子。」

「何だか締まらないな、これ」

「とはいえ、武器は武器。どんな形であれ、傳承を被うために必要なのであれば、それを使うのみである。」

「僕はちよつとだけ文句を言いつつ、勢いをつけたのち、その猫じやらしを黒霧に向かって振り下ろす。」

「見事猫じやらしがクリーンヒットしたのち、内部から光を放ち、やがてコピーキャット、猫またの傳承は離散していった。」

「やれやれである。」

「お疲れさまー嵐。何だか随分と様になってきたよ。嵐にも、代行者としての自覚が出てきたってところかな」

「自覚が出てきたかどうかは、わからないけど、そう言われてまんざらでもない僕は少し照れながら答える。」

「そうか？ だったらいいんだけどね」

「御謙遜を。だんにゃは立派な代行者ですぜ、あつしが保証しますよ」

「ははは、クロマルまで、ありがとう。って、え？ なんで？ お前、何でまだ喋ってるんだよ」

「霧霞が確かめるように、答える。」

「何言ってるの？ この猫またなら、私にはもうニャアニャア鳴いているだけにしか聞こえないけれど」

「え？ それじゃあ何故僕にはまだクロマルの言葉が聞こえるんだ？ リンネ、お前もまだ聞こえるだろ？」

「別に聞きたくないけどね。ほら、傳承を被った後も、その対象者には天使の姿が見えたままでしょ？ それと同じで、このくる猫の言葉が、あたしたちだけには聞こえるみたいね」

「そう言っつて、けだるそうにくる猫を見るリンネ。」

「まあ、そーいうことなんで。それに、だんにゃにはまだ恩返も出て来ませんから、あつしに出来ることならなんなりとおっしゃって

ください。

あつしにもやにかお手伝い出来ることがあるかもしれやせんから

そう言つてペロリと舌を出すクロマル。その仕草は確かに猫そのもの。どうやらクロマル自体は無事にただの猫に戻つたらしい。

「そうそう、だんにや、早速一つだけアドバイスを。昨日、姐さんのバッグに入つた時にやんですが、にやんと手作りのお弁当が入つてやした。それも二人分。勿論、猫ばばにやんてしてやせん。ありや間違ひなくだんにやと食べるつもりだつたんでしようね。昨日はあつしたちが邪魔しちまいましたから、もしかしたら、今日も用意しているかもしれやせんぜ？ だんにや、幸いにも今日もいい天気ですし、姐さんをデートつてやつに誘つてやつてくださいよ。姐さんも、あんな性格ですから。自分からは言いづらいんじゃないかと思ひますし。ね？」

このお節介猫が。そんなこと教えられたら、誘わずにはいられないじゃないか。

「ははは、ありがとよ、クロマル」

「にやんのにやんの、なんだかんだでお似合いの二人だと思ひやすよ、あつしは。それではだんにや。また会いましょう」

そう言つて去つていく一匹の猫の後姿を見送る僕。

やつぱり変わった猫だ。今にして思へば、あいつつてホントに唯の猫だつたんだろうか？

変なところ、妙に人間くさかつたし、猫にしては変な知識を持つていたり、その素性に謎の部分が多かつた。実は猫型の地球外生命体とかだつたりして。いやいやいや。それは無いか。ないない。

まあ、クロマルが去つてしまつた今では、それを確かめるすべもないんだけどね。

「嵐、あたしもちよつとだけ確かめたいことがあるから、先に帰るね」

リンネの奴、やはり昨日の用事はまだ終わつていながつたみたい

だ。

「ああ、昨日の続きか？ 僕も何か手伝おうか？」

「あたし一人で大丈夫。少なくとも「今」はね。近いうちに、嵐にも関係する話になる可能性はあるけど」

意味深な言葉を残し、あつという間にいなくなったリンネ。

その場に残される僕と霧霞。こうなってしまうては、やはりクロマルの助言通り、霧霞を再び誘うしかないじゃないか。デートってやつに。

「さつき、あの猫またと何を話していたの？ まさか、私に関係することじゃないでしょうね？」

「こういつときの女のカンって、どうしてここまで鋭いんだろう？ 僕は覚悟を決め、霧霞に話しかける。

「あのさ、霧霞」

こうして、僕にとって、長い長い一日が幕を開けた。

空は快晴、眩しいくらいの青空がどこまでも広がっている。

そう。今日という日は、まだ始まったばかりなのだから。

END

第6話「花と嵐とアリスの休日　〜花有須の場合〜」

第6話「花と嵐とアリスの休日　〜花有須の場合〜」

季節は初夏。長かった梅雨も唐突に終わりを告げ、気を抜けば一気に夏本番がやってきてしまっくらしいの晴天が続く今日この頃。そんな今日の日付は6月下旬。そう、今日から僕らは3連休。別に、僕がサボっているとか、ついに不登校にまでなり下がっちゃまったとか、そういう類の話ではない。断じてない。

単に、土日と創立記念日が重なっただけ。それだけの話。本来ならば祝日の無い6月という月に訪れた、神からの小粋なプレゼントなのである。

とは言つものの、天使の代行者たる僕に平穏な休日など訪れるはずもなく。

次の試練の足音は、着実に確実に、すぐそこまで聞こえてきていた。

「お早う」

休みの日に限って、何時もより早く目が覚めるのは何故だろう？僕は7時10分前という奇跡の時間に、居間のテーブルで一人新聞を読む親父に声をかけた。

「おう、今日はやけに早いな、嵐。まさか、連休が楽しすぎて眠れなかったのか？　ぐわはははは、まだまだガキだな、嵐も」

そういう親父の顔には、くつきりとクマが浮き出していた。

花屋に創立記念日は関係ないにも関わらず、である。

僕は突っ込む気にもなれず、親父の言葉をスルーして言った。

「起きてるの親父だけ？　珍しいね、有須がまだ寝てるなんて。ま

あ、折角の連休だもんな。たまにはゆつくり休んだ方がいいよね有須は」

ちなみに、妹達の通う小学校や中学校も同じ創立記念日だったりする。ここいら一帯の学校は全て同一人物が建てたものなので、創立記念日が同じでもなんなら可笑しくはないのであった。

「そうだな、あいつは母さんやミズキの代わりになるうと、いつも頑張ってくれてるからな。有須は兄妹のなかでも一番かあさんに似とる。だからなのか、あいつを見とるとわしは時々心配になる。あいつは常に自分より家族を優先するからの」

親父が珍しく真面目なことを言うもんだから、思わず真剣に聞き入ってしまった僕。

そして、その実親父の言う通り。有須にとって自分のことは二の次三の次。あいつは、誰よりも家族を大切にしているやつなのだ。

ちなみにだが、ミズキというのは僕の姉の名。今は理由あって花家を離れている真正正銘の僕の実姉。まあ、彼女に関しては今は関係ないので割愛する。

「いやー、すまんすまん。朝から男同士でするような話じゃなかったな。うし、嵐、一緒にラジオ体操でもするか？」

僕はその暑苦し申し出をぞんざいに断り、二度寝をすべく部屋へと戻ったのだった。

リンネは相変わらず空中でふわふわ浮きながら気持よさそうに寝ている。

クロマルの事件から数日。次の試験が来るとすればそろそろかもしれない。連休とかぶってしまいそうだが、別段予定の無い僕にとって、それについては完全にノープロブレムな状態だった。

それはそれで虚しいのも確か。だからといって、どこかに出かける気にもなれない。

この時期どこにいても人、人、人だろうし、何より僕には先立つものが無かった。実に由々しき事態だ。

いっそのこと連休の間、短期のアルバイトでもやってみようか？

いや、世間が楽しそうに休日を謳歌するなか、それを尻目に働くことなんて、きつと僕の狭い狭い心では耐えられまい。つくづく駄目人間だな僕は。

そんなことを考えているうちに、やがて僕は再び眠りへと落ちていった。

「あらしあらしあらしあらし。お、き、てー。ねーおきてよー」
僕の耳元で天使の囁き、もとい、天使の騒音が聞こえてきた。
僕はうんうん唸りながら、近くにある目覚ましを引き寄せる。

時刻は朝10時ジャスト。

んー、二度寝にしてはちょっと寝すぎたか？ それにしても、リンネのヤツ、朝から一体何を騒いでるんだ。

まさか連休だからどこか行こうなんて言い出すつもりか？ 絶賛寝ぼけ中の頭でそんな事をぼーっと考える。

ん？ いや待てよ。そういや、今朝自分で言ったじゃないか、次の試験が来るとしたらそろそろだつて。まさか。

「あらしつてばー、次の試験なんだよー起きてよー。見てみて、ほら、センサーが反応してるよー。しかも近い。ここから凄く近いよ」
僕はその言葉を聴いて一気に眠りから覚醒した。

リンネのヤツ今なんて言った？ ここから近い？ すぐ近く？
嘘だろ、ここから近いなんて言ったら…。

嫌な予感がした僕は、急いで階段を駆け下りた。

が、そこにいたのは相変わらず親父だけ。僕は早口でまくし立てた。

「親父、有須は？ ダンゴは？ まさか月美ちゃんとか来てないよね？」

「おいおい、どうした嵐。幾らいい天気だからつてよ、ズボンぐらいいはいたらどうだ？」

あまりに慌てていたせいでズボンをはき忘れていたらしい。

が、今はそんな事はどうだっていい。

「団子は朝から友達と出かけたぞ。有須は… 珍しいな、まだ降りてこん。それに月見ちゃん？ そりゃ誰じゃ？ わしは初耳だが、まさかコレか？ コレなのか？」

下品に小指を立てて見せる親父を無視し、考える。

あの有須がまだ寝ているだって？ 可笑しい。有り得ない。我が家の電波時計こと有須がこんな時間まで寝ているだなんて、有り得るわけが無い。

嫌な予感がするというより、嫌な予感しかしない。僕は慌てて有須の部屋まで走った。

部屋の前までくると、丁度リンネと出くわした。

「ぶーっ。起きたと思ったら急にいなくなっちゃうんだもん。ひどいよ」

「ごめんごめん。ちょっと確かめたいことがあってさ。リンネ、一つだけ聞きたいんだけど。まさか、そのセンサーが指し示す場所って、ここじゃないよな？ 違うよね？ お願いだから違うって言うて」

そんな僕の願いも虚しく。

「え？ 凄い。良く分かったね嵐。ここだよ。まさか次の試練が嵐ん家の中で起こるとはあたしも予想外だったなー。そういうえばここって、妹ちゃんの部屋だよな？」

ジーザス。

ド畜生め。

こんなの有りか？

神様酷い。酷過ぎる。

何で、何で有須が…。

いつになく動揺しまくる僕。当然だ、今回の相手は他ならぬ最愛の妹なのだ。

直後、僕の頬に強烈な痛みが走る。どうやら僕は、リンネにビンタされたらしい。

「な、いきなりなにすんだよリンネ」

「目が覚めた？ というより落ち着いた？ 助ける側の嵐がそんなに動揺してどーすんの。ましてや今回はあなたの大切な妹。失敗は許されないんだよ。ね？ 落ち着いて冷静に行こーよ。まだどんな様子かも確認してないんだから」

リンネの言う通りだ。確かにこの事態は想定外だったけど、ここで僕が落ち着かなければ。

それにしても、リンネにそんな事を咎められる日が来るとは予想外だったものの、確かにおかげで目は覚めた。

僕は覚悟を決め、有須の部屋をノックする。

「有須、起きてるか？ 大丈夫か？ 何でもいいから、返事をしてくれないか？」

正直な話。僕は妹達の部屋に入ったことが数えるほどしかない。だからこそ躊躇してしまうものの、今はそんなことを言ってる余裕もない。

僕は部屋のノブに手をかける。幸いにも鍵はかかかっていないらしい。ならば尚更迷っている暇はない。

「ごめん、有須。入るぞ」

僕は一気にドアを開け、有須の部屋へと進入した。

又イグルミがずらりと並ぶ何ともファンシーな世界が目飛び込んできたものの、そこに肝心の有須の姿は見当たらず。

「嵐、あそこあそこ」

リンネに促されベッドに目を向ける。するとそこには、不自然に丸まった布団。

恐らく、有須だ。

「有須、いるのか？ 勝手に部屋に入って悪かったけど、大丈夫か？ どこか具合でも悪いのか？」

布団がもぞもぞと動いた後、中からチラリとこたらを伺う有須らしき顔が一瞬見えたものの、またすぐに布団にもぐってしまった。

「え？ 兄さん？ 兄さんですか？ どうして私の部屋に」

「どうしてって、センサーが、いや、有須が珍しく起きてこなかったから、ちよつと心配になつて」

「… そうでしたか、すみません。心配をかけてしまつて」

何故だろう、さつきから有須の声に妙な違和感がある。何と云うか、いつもの有須というよりダンゴに近い声とでも言えばいいのか。「えーと、大丈夫なんだな？ 何かいつもと様子が違うような気がするんだけど。僕のきのせいかな？ もし、何か困つてるんだつたら、言つてくれ。僕に出来ることなら何だつてやる」

そう言いながら、僕はチラリとリンネの方を向く。依然、リンネのアホ毛こと天使センサーは力強く発光を続けている。

つまり、次の試練の対象者がこの部屋にいるという事実を示しているわけで。

僕は深い溜息をつき、両手で顔を覆う。

既にちよつと泣きそうな僕。頑張れ負けるな僕。兄として、男として、リンネのパートナーとして、妹のために出来ることがあるはずだ。

「分かりました。あの、兄さん。絶対に、絶対に誰にも言わないでください…… 後、絶対笑わないでくださいね」

「え？ ああ、勿論約束する。僕は有須の力になりたいだけだよ」
笑う？

いまいちその言葉の意味が理解できなかったものの、僕の言葉を聞き、何かを覚悟したように有須がゆっくりと布団から出てきた。
が、有須の姿を見た瞬間。僕は、出掛かつていた全ての言葉を失った。

確かに、そこにいたのは紛れもなく僕の妹である有須だった。

ただし、どこか懐かしさを感じさせるその姿は、まるで10年前の有須の姿そのものだった。

驚くべき事に、有須は、ロリ化していた。

成る程。どうやら僕は、まだ夢から醒めていないらしい。
やれやれ、折角の休日と思いつき2度寝をってしまったせい罰
があたったのかもしれない。

僕は思い切り自分の頬をつねる。

痛い。凄く痛い。

それが意味するところは一つ。つまりこれは現実。紛れも無い現実だということ。

一人でうんうんと唸っている僕に向かって有須が言った。

「やっぱり兄さんにも、私の姿、その、変に見えますか？」

「変というか、ロリ…… ごほん、まるで小さい頃の有須を見ているようだよ。懐かしいというか、可愛らしいというか」

5、6歳の姿かたち。有須よ、お前はどうしてそんなロリっ子になっちゃった。

だが、そんな有須の顔には涙の後がくつきりと見て取れた。

何とかしてあげたい。僕は、心の底からそう思うのだった。

とはいえ、ここで僕が一人で悩んでいても答えは出ないし助けることも出来ない。これはどっからどう見ても何らかの伝承の仕業だろう。

僕は有須には見えていないであろう、リンネをちらりと見た後、

例のセリフを言い放つ。

まさか、有須に向かってこのセリフを使うことになるとは思っても寄らなかつたな。

というか正直かなり恥ずかしいし、こんな状況とはいえ、有須がどんな反応を示すか非常に気になる。

「あのさ有須。さっきの有須の言葉をそっくりそのまま返すようだけど、今から言う事は全部真面目な事だからさ、笑わないで聞いてね」

「何ですか。もしかして私のこの姿と関係有る話ですか？」

「うん、関係有る。凄く関係あるよ。ごほん、じゃあ行くぞ？」

僕は大きく深呼吸した後、一気にまくしたてた。

「にわかには信じられないだろうけど、僕さ、何の因果か天使代行、天使の使いなんてやってるんだ」

「ぶっ」

ああ、お笑い番組を見ても殆ど笑わない鉄面皮のあの有須が噴出した。酷い。

「兄さん、頭大丈夫ですか？ 私の姿があまりにシヨックだったせいで可笑しくなっちゃったんですか？ 私がこんな姿になってしまったばかりに、兄さんまで、私の兄さんまで」

いつの間にか有須の後ろに移動していたリンネが大爆笑しながら天使のキツスを施す。

「にはははははは、やっぱりは嵐の妹ちゃんだね」

リンネのヤツ、何もそこまで笑うこと無いのに。

突如現れた天使の姿に戸惑う有須。そう、それが普通の反応だ。

「あ、え？ これってどういう？ え？」

ただでさえ自分の姿がロリ化しているというのに、その上、兄はいきなり変なこと言い出すわ、目の前に天使は出てくるわで有須のやつすっかり混乱状態のようだ。

「やー、嵐の妹ちゃん。あたし天使のリンネっていうの。よろしくねー」

相変わらずあっけらかんとした挨拶を交わすリンネ。さて、これからどうするべきか。

「天使？ 兄さん、これはどういうことですか、この人誰ですか？ きちんと分かるように説明してください」

あ、姿はロリロリだけどその言動だけはやっぱり有須のそれと相違ないようだ。

と言ってもいつもと違って全く迫力が無いけどね。

「う。だからさ、人じゃなくて天使なんだよ、一応。で、僕は何故かこのリンネの仕事を手伝うことになってね。だから天使代行なんて名乗ったってわけなんだけど」

すかさずリンネが割ってはいる。

「妹ちゃん、妹ちゃん、あなたがそんなロリロリな姿になったのは、あなたが伝承に取り憑かれちゃったからなの」

「天使の次は一体何ですか？　あまりに非現実的な話で頭が痛いんです。正直、兄さんが私をからかっているとは思えません。…と
言いたいところですが、私のこの姿と、あまりに真剣な兄さんの顔と、どんな原理かわかりませんが、宙を浮いてる自称天使さんの言葉
を信じるしかないみたいですね、この状況では」

流星は僕の妹。実に物分りがいい。

「ありがとう有須。ここで信じてもらえなかったら、僕、本当にただの頭の可笑しい人になっちゃうからね」

「ふふ、兄さんはいつでも可笑しな人ですけどね」

そっいつて笑う有須。

どうやら気分的にも大分落ち着きを取り戻したようだ。

雷九の時のように、媒介者の精神状態により症状を進行させる場合もありえるからな。ここは一つ慎重にいかないと。

リンネが真面目な顔で言った。

「話を戻すけど、妹ちゃん、あなたに取り憑いた伝承は…　アリス。不思議の国のアリス。有須って言うあなたのその名前も、ただの偶然じゃないと思う。因みに、妹ちゃんのその姿は若返ったというより、縮んだという表現が正しいわ。伝承に憑かれる人には、それなりの理由があるものなの。その原因を見つけることが、被うための第一歩。今回の場合は、妹ちゃんのその姿そのものに何かヒントが有りそう」

「待て待て待て、不思議の国のアリスってルイスキャロルのあれ？

児童文学のあれか？」

「勿論そう。文学だって立派な伝承だよ。しかも聖書の次に世界中で読まれている本だったら尚更よね。知らない？　薬を飲んだアリスが小さくなるエピソードがあるんだよ？　後、不思議の国のアリス症候群って病気もあるくらいだし」

知ってるさ、どっちも知ってるけど、まさか有須がアリスに取り

憑かれるなんて洒落にすらならないわけで。

「取り憑かれた理由……」

有須はその言葉を反芻するように呟いた。

今の有須の見た目は5、6歳くらいか？

だいたい10年ほど昔の姿ということになる。

10年前。

僕はとある事件が頭をよぎり、顔をしかめた。

10年前、有須にとっては一番幸せだった時期なのかもしれない。

そして何より、母さんも姉さんも一緒だったのが10年前。

「有須、もしかして」

僕がそう言いかけたそのとき、1階から親父の大声が聞こえてきた。

「うおーい、嵐。どうだー、有須のやつはまだ寝とるのかー？ いい加減飯にしようぜー」

あー、そういえば朝飯まだだっけ。確かにお腹がすいた……なんて悠長なことを言っている場合じゃない！

有須のこんな姿親父やダンゴに見せるわけには行かないのだ。

が、そんな思いとは裏腹にどたとたと階段を登ってくる親父。そして、ドアのノブに手をかけた瞬間。

…… 今だ。僕は有須の手を取り、思い切りドアを開けた。

「おい、あら……ぶへえええあああ」

親父の顔を思い切り強打してドアを開く。

「すまん親父。突然だけど有須とちよつと出かけてくるよー。朝飯はてきとーに食べて」

僕は有須をお姫様だっこして外へと飛び出した。

そんな僕らの後ろ様子見て、親父が鼻をさすりながらぼつりと呟く。

「何じゃ、嵐のやつ。なんだかんだいってもやっぱり楽しみにしとったんじゃないか、3連休」

その場の勢いで、とりあえず町へと出てきた僕達。勿論その後のことなどノープラン。

「兄さん、兄さんっ！ あの、この格好淒く恥ずかしいんですが」「ん？ そう？ 確かに今の有須にはちよつと大きすぎるかもしれないけど、似合ってるぞ。そのパジャマ」

水玉模様が可愛らしいく、涼しげで清楚な感じが有須によく似合っていた。

「え？ そうですか？ 良かった、それは嬉しいです。… 違って違います！ いつまで私をお姫様抱っこしているつもりですか。それに、私パジャマ姿なんですよ？ 似合ってる似合っていないという問題じゃ有りません。確かに、父さんにこんな姿を見られたら、余計話がややこしくなっていたかもしれないけど、だからといっていきなり家を飛び出して何か考えが有るんですか、兄さん？」

「そーだよ嵐。只でさえ連休で人がいっぱいいるのに、そんな格好じゃ目立つちゃうよ？ 今の嵐はどう見ても児童誘拐の変質者ロリコン野郎にしか見えないよ？」

相変わらず酷い言われようだが、確かに二人の言う通り。

このまま町をさまようわけには行かないし、さて、どうしたものか？

ああ、こんなとき月美ちゃんがいてくれれば。だが、相変わらず我が家の隣は空き地のまま。月美ちゃんは遥か空の上。

だったらイタル… は今頃別荘か。何だかんだいってもぼんぼんなイタル。連休ともなると家族で別荘地へレッズゴーらしい。ド畜生まあ、例えいたとしても、妹のこんな姿を見せたら、あのロリコン野郎何しでかすか分かったものじゃない。やはり却下だ。

霧霞の病院は… 連休だから休業中。それに結構距離がある故、ここからだとならば人目につきすぎてしまう。

雨守先輩達に至っては、家の場所すら知らない始末。

贅沢はいえないが、有須を匿ってもらうとしたらやはり女性の知り合いの宅がいいんだけど… そんな知り合い、当然僕にいたはずもなく。

ああ、僕の友好範囲は何て狭いんだ。

僕の世界はなんて小さいんだ。流石駄目人間である。

僕を助けてくれそうな女性…。

いや、待てよ？ もしかしたら。

僕は一縷の望みを託し、とある場所へと向かった。

「いやー、助かったよ雷九。いきなり押しかけちゃってごめんね。とりあえず家を出たのはいいけどさ、どうしたもんかと途方にくれたところだったんだ。それに、元氣そうで何よりだよ」

とる場所とはズバリ雷九の家だった。

家からもほどよい距離で、僕の事情を知っていて助けてくれそうな女性。そんな条件に正にピッタリ当てはまる女性、それが雷九だった。

「いえいえ、私もこうして嵐さんのお役に立ててよかったです。でも、最初ドアを開けて、必死な顔で小さな女の子を抱きかかえている嵐さんを見たときは、流石にちよつとびっくりしちゃいましたけどね。でも、直ぐに天使様絡みなんだなって分かりましたから」

そういつて優しく微笑んでくれる雷九。ああ、今は君が天使に見える。

それにしても必死な顔か。僕もそれだけ無我夢中だったわけで。

「ぶぶぶつ、だよートオルン。嵐ってば、どうみても変質者だったよねー」

リンネのヤツ、どうしても僕をヘンタイにしたらしい。と、ここまでされるがままでやってきた有須が、業を煮やして口を開いた。「ごほん、あのー兄さん？ そろそろ説明してくれませんか？ —

体ここはどこで、この方はどなたで、その、兄さんとどういった関係なのか」

僕の変わりに雷九が答える。

「え？ お兄さん？ あっもしかして、この前お話されてた妹さんですか？ 確か嵐さん、中学生と小学生の妹さんがいらっしやるんでしたよね？ ということは、小学生の妹さんですね？ へえー、可愛い。小学校の1年生くらいですか？」

違ーう。そう勘違いするのも無理無いけど、微妙に違っただよ雷九。

僕は恐る恐る隣の有須の顔を一瞥する。

うが。

思ったとおり物凄く機嫌が悪そうだ。ここは一つ、早々に雷九の誤解を解いてやらねば。

「あー、あんな雷九、実は」

「に、い、さ、ん？ 私は兄さんに聞いているんですよ。このやけに兄さんと親しげな女性徒はこのだれなんですか？ このロリコン！」

時既に遅し。

有須のやつ、何がそんなに気に食わないのか、相当ご機嫌斜めらしい。可哀想に、雷九なんて口開けたまま固まっちゃったよ。

何だろっこの状況は？

「ごめんごめん、紹介が遅れちゃったな。えーそれでは改めて。こちら雷九透ちゃん。桜ヶ丘第二中学の1年生、つまり有須の後輩だよ。この前、天使の仕事絡みで知り合ってたんだ。で、雷九、こちらは僕の妹の花有須。雷九の先輩で…今はとてもそう見えないかもしれないけど、中学3年で君より年上ってことになるね」

雷九は一瞬信じられないというような顔をしたものの、ロリっ子にギロリと睨まれ、恐る恐る答える。

「あ、もしかして。その、何かの伝承の仕業、ということでしょうか？」

有須は答えてくれそうもないので、僕が変わりに答える。

「どうやらそうみたいなんだ。正直僕もまだ良く分かってないんだよね、この現状が。ああ、そうそう。雷九、お願いついでにもう一つ頼んでもいいかな？」

すっかり萎縮してしまっていた雷九が元気を取り戻し答える。

「はい、勿論です。嵐さんと天使様にはすっかりお世話になりましたから。何でも言うてください！」

雷九はそう言うってくれるけど、実際のところ僕らはそんなに恩義を感じてもらおうほど、何かしたってわけじゃない。

だからそんな風に言われると、逆に何だか照れくさいわけで。

「それじゃ雷九、君の私服を僕に貸してくれないか？」

瞬時に凍りつく空気。

何故かぽつと赤くなり、急にもじもじしだす雷九。

え？ 何？ 僕変なこと言ったか？

「嵐、やっぱり変態さんだったんだね」

「兄さん、自分が何を言っているのか分かってますか？ 分かっていますよね？ 絶対分かって言ってるんですよね？」

ロリっ子のくせに有須さんの視線とオーラが怖いよ。とても小学生とは思えない。

いや、実際小学生じゃないけどね。

僕は、有須にポカポカ殴られながらも必死に弁解する。

「だーっ、違う。違うから。ほらっ、有須がパジャマ姿のままだろ？ とりあえず雷九に服を借りようかと思っただけなんだって。正

真正銘、本当にそれだけだから。他意はないんだって」

「え？ あ、私のために？ そうですか、そうですね、私ったら勝手に勘違いしちゃって。すみません兄さん。えへへ」

えへへって有須さん。まさかお前が笑って誤魔化すなんて日がこようとは。これってロリ化のせい？

「ははは、僕の方こそ言い方が悪かったからね。うん。ナイスパンチだったよ有須。それ、いつ鍛えてるの？」

リンネは相変わらず空中で大爆笑している。

僕はそんなリンネを無視し、雷九に言った。

「ちよっと遠回りになっちゃったけど、改めて。雷九、有須に服貸してやってくれないか？ 雷九？ らーいーくー。とーるさーん。

おーい、雷九さーん。どうしたー、話聞いている？」

「嵐さんが私の服で、私の服で、あんなことやこんなことを…」

あれー、雷九さんが可笑しな妄想状態になっちゃってるよ。

僕の知ってる雷九はこんな子じゃなかったのに。それとも、こちらが本来の雷九の性格なのだろうか？

雷九カムバツク。

僕は彼女に脳天チヨップをお見舞いする。勿論、ダンゴにするよ
うな本気のものではなく、ちよいと小突く程度のもの。

「はへ？ あ、う、す、すみません。服、服ですよね？ はい、大丈夫です。私小さい頃の服、捨てられずにと持ってるんです。

サイズがあうか分かりませんが、今持ってきましたね」

そう言っただけで階段を下りていく雷九。

「…面白い子ですね」

さっきまでの勢いはどこへ行ったのか、ちよこんと体育座りをして答える有須。

「イヤ、僕の知ってる雷九とは大分違うというか、キャラが違うというか。何だか妙に明るくなったというか、ちよっと変わったというか」

僕の疑問に対して、すかさず答えるリンネ。

「新たな関係や繋がりが出来たことで、本来の彼女が前面に出てきたのかもしれないよー。良いことだと思っよ、あたしは」

相変わらずあっけらかんと答えるリンネ。

でも、恐らくそういうことなんだろうな。ぶっちゃけ、あのみやちゃんって同級生の子からの影響が大きい気がするが。

「あの子も、私にみたいにな、その、何かに取り憑かれていたんですか？」

有須が側でぶかぶかと浮いていたリンネに質問する。

「トオルンの場合はねー、体が透明になっちゃったんだよ。あとさ、あたしのはリンネって呼んでよ妹ちゃん」

そんなやりとりをするうちに、とたとたと雷九が階段を登っていく音が聞こえてきた。

「お待たせしました。有須先輩に気に入ってもらえると嬉しいんですが」

そういつて雷九が差し出してきた服は。うん。やっぱり雷九も女の子。

それは、ちよつと派手めなふりふりの可愛らしいフリルのついた、白のワンピースだった。

そういえば、有須は小さい頃から地味目というか大人しめな服ばかり着ていたので、こういう女の子の子した可愛い服をきているとこつてあまり見たこと無かった。

「へえー、かわいいー。妹ちゃん着て着て」

「ちよつと、これを私に着るといふんですか？」

案の定、難色を示す有須。

「今の有須なら似合うと思うけどな。ほら、有須つて昔からこの手の服あまり着たことなかっただろ？ だからちよつと見てみたい、つてのもある。僕の個人的願望だけど」

「…に、兄さんがそこまで言うのなら仕方有りませんね。この服、お借りしますね雷九さん」

不安げな表情でこちらのやりとりを見ていた雷九が嬉しそうに答える。

「はい、勿論です。良かったー、この服私のお気に入りだったんですよ。サイズが合わなくなった今でも、手入れしておいて正解でした。それに、他にも何着かありますから、良かったら好きなものを選んでください」

「そうと決まれば、ほらほら嵐。とつとと出てけー。妹ちゃんが着替えるんだから」

そりゃそうだ。僕は一目散に雷九の部屋を出て階段をのしたで待つことにした。

「覗いちや駄目だよー、あらしー」
安心してくれリンネ。そんな勇氣、僕は持ち合わせちゃいない。そんな事を思いつつ待つこと1時間。

女性の身支度つてのは、なんでこんなに時間がかかるんだろう？
それとも、雷九が持ってきた服全てを試着してるんじゃないだろうな？

とは言えここは雷九の家。ふらふらと勝手に出歩くわけには行かないので、ひたすらにじっと待ち続ける僕。

こう言つときはあれだ、円周率でも唱えて心を落ち着かせよう。

「お待たせーあらしー、入ってきていいよー」

僕が眠い目をこすりながら108ケタ目の数字をを口にした瞬間、リンネの声が家中に響き渡った。

階段にもたれてうとうととしていた僕の脳が一気に覚醒する。

僕は階段を駆け上がり、再び雷九の部屋に侵入した。

そこには、不思議の国のアリスならぬ、不思議な顔した有須がいた。

「まるでルイスキャロルの世界だ。なかなか似合ってるよ有須」

主人公、アリスに似た格好の有須。確かに似合っているけど、これはもはや、コスプレの領域なのでは？

だが、そんな僕の返答に満足したのか、ニコニコ顔のリンネが得意げに答える。

「でしょでしょー、あたしもここまで似合つとは思っても見なかったわ。ね、トオルン」

「はい、有須先輩可愛いから、何着ても似合つんですよー」と雷句。
「ま、まあ、たまにはこういう服も悪くないですね」と有須。

どうやらまんざらでもない様子。ま、これなら僕も1時間待ったかいがあったというもの。

「何だか、3人の親睦も深まったようだし。よし、じゃあ本題に入ろうか」

ちよつとだけ前置きが長くなったものの、ここからが本番だ。

そのタイミングで雷九が遠慮がちに言った。

「あの、私、お邪魔でしたら席を外しますので」

「いえ、大丈夫よ。部屋に上がらせてもらい、その上服まで貸してもらってしまいましたし、それに雷九さんも私と同じだったんでしょ？」

有須がOKを出している以上、僕らがどうこう言う筋合いは無い。それに、正直言って雷九にもしてもらった方が何かと心強い。

「朝もちよつと話に出たけど、やっぱり有須のその姿にこそ意味があると思うんだ」

僕はそう言いながら、早くも胸の奥がズシリと重たくなるのを感じた。

「兄さんが言いたいことは分かります。この姿、およそ10年ほど前の私の姿そのものですから」

そう言って、忌々しいといわんばかりに自分の体を見渡す有須。

「10年前か、あの頃は確か母さんも体調が良かった頃だったし、3人で良く一緒に遊んだっけ？ 懐かしいな。母さんって元々体の弱い人だったからね、3人で遊んだ記憶ってそんなに多くは残ってないんだよね」

「そうでしたね。たぶん、花家にとって色々な事がありすぎた頃でしたから。だんちゃんが生まれて、お母さんが亡くなって、ミズキ姉さんが出て行って……」

有須がまるで自分に言い聞かせるように、呟くようにそんな事を言う。

「どっちにしても、今回はあなた達花家の家族の問題かもね」

…… ああ、やっぱりそうなるよね。どうにも気が重い。

「兄さん、私、どうしたらいいんでしょうか？」

正直言ってどうしたらいいか分からない。

このまま10年前の出来事やら、有須の気持を突き詰めていけば、何か分かる気がするけど、あまり気が進まない。

僕が答えを出せないでいると、有須が言う。

「あの、こんなときに言い出すことじゃないと思うんですけど、私、行ってみたいところがあるんです」

有須がこんなことを言い出だすなんて珍しい。もしかすると何か考え合つての事なのかもしれない。

「勿論良いよ。で、どこに行きたいんだ有須？」

「はい。その、遊園地に」

これまた意外すぎる回答。

まあ、連休だし可笑しくは無いけど。今の状況を考えて疑問符しか浮かんでこないわけで。

「遊園地ー、うわー、あたし遊園地って始めてー。いこいこ、ねえ、嵐行こうよー」

既に行く気満々なリンネ。こうなつては宥めるのも困難だろう。と、なると答えは一つ。

「それじゃあ、行こう。たまには連休らしいことをするのも悪くないよな」

目を輝かせ、がしつと僕の手を握ってくる雷九。

「わ、私も御一緒してよろしいですか？」

いつになく積極的な雷九。というか鼻息が荒い。

僕の知っている雷九のイメージがどんどん崩れていく。

「雷九。君、遊園地好きなのか？」

そんな僕の質問に対し、猛烈に首を上下させ頷く雷九。

「あ、あははは。まあ、いいんじゃないかな？」

一瞬だけ、有須がむすつとしたような気がしたが直ぐに元のすまし顔に戻った。

うん、きつと気のせいだろう。

「それはそれとして、どこの遊園地に行きたいんだ？ やっぱリYOUSJとか？ 定番の夢の国か？ この辺で遊園地と言えば、小

さいとこしかないんだけどね。それとも、折角だからちょっと遠くまで行ってみる？」

僕の提案にふるふると首を振って否定する有須。

「いえ、桜ヶ丘ランドに」

今日は想定外の大安売りらしい。

桜ヶ丘ランドと言えば、この近所に有るどう轟頁目に見ても小さな寂れた遊園地。最近では大手のテーマパークに押しに押されて閉園寸前とか。

「本当にそこでもいいのか？」

「はい。そこがいいんです」

有須は力強くそう言い放った。

「了解。天気もいいし、時間的にも丁度いいかもな。早速行こう」

遊園地なんて何年ぶりだろう。下手すれば10年ぶりくらいかもしれない。流石インドアな僕である。

「うわー、何かこう凄い廃れた感が漂ってますね」

雷九が一ミリも気を使うことなくそう言う。

「はは、そうだね。でもこれなら並ぶことなくどれでも好きなやつに乗れそうだけだね」

幾ら今は廃れているとはいえ、結構前までは大人気の遊園地だったのは確か。

その証拠に目玉である大きな観覧車はもとより、ジェットコースター、おばけ屋敷、廻るコーヒーカップなど、定番どころが一通り揃っている。

「うっわーおつきいー。ねえねえ、嵐あの大きくて廻ってるのが噂に聞く観覧車？」

「天界でどんな噂が流れているのか想像も出来ないけど、そうだよ」
うわーいと歓声を上げながら飛んで逝ってしまったリンネ。まあ、

天使だしそもそも他人には見えないから入園料も要らないわけで。

「それじゃ、僕らも入ろうか」

こうして実際に遊園地まで来たというのに、心ここに在らずといった感じの有須。

「有須、どうかしたか？ 具合でも悪いとか？」

「いえ、何でもありません。さあ、私達も行きましようか兄さん、雷九さん」

やっぱりここは1日フリーパス券がいいのだろうか？ ツーか7000円ってリアルに高いなコレ。某テーマパークより確実に高いよねコレ。

僕はちよつと涙目になりながら言う。

「二人とも先に入って。ここは人生の先輩として、僕が出させていただきます故」

「そんな、そんなの悪いですよ、私なんて勝手についてきただけです」

遠慮がちに答える雷九。が、ここで引き下がる僕ではない。漢として、時にはひけないこともあるのだ。

「おいおい、そんなこと言うなよ雷九。君には色々と助けてもらってるんだからさ、気にすんなって。もし有須に何かあった時とか、やっぱり雷九の手を借りると思うから」

ようやく雷九も納得してくれたようで、僕らは揃ってゲートを潜った。

有須がロリ化して、いったいどうなってしまうのか分からないと言っかなり緊迫した状況にも関わらず、何だかんだいってもちよつとわくわくしてる僕。相手はあの有須。何も考えなしにここにやって来たわけではないはず… たぶん。

「よし、折角だから1日遊びつくそう。有須、最初はどれからだ？ どれからいく？」

「そうですね、やっぱり最初はジェットコースター。そうですね？ 兄さん」

そういつて悪魔の微笑み浮かべる有須。

やっぱりかやっぱりそうなるか。有須ならそう言うと思った。

「ふっふっふ。有須、昔の僕とは思っなよ。確かに昔、僕は絶叫系のマシンが大嫌いだったよ。というより苦手だったよ。けどさ、それはあくまで昔の話。こうして高校生にもなつて絶叫マシンが怖いなんて、そんな格好悪い姿を君たちに見せられるわけが無い。いいよ、乗ろう」

勿論、只の強がりだ。そもそも、僕が遊園地に来なくなった理由の一つが絶叫マシンが苦手っていうのがある。

あの頃以来乗っていないわけだから、突然乗れるようになるわけもなく。

「そついえば雷九、君は絶叫系とか大丈夫？」

雷九なら、雷九ならきつと僕のこの気持を理解してくれるはず。そんな淡い期待を込めて。

「私、実はジェットコースターって今まで乗ったこと無いんです。そもそも遊園地って一人で来るところじゃないですからね」

地雷。

し、しまった。変わって来たとはいえ、そついえば雷九ってこついうやつだった。

「あ、そつかそつか。初めてならこれくらいのジェットコースターが丁度いいかもしれないよ」

そう、ここ桜ヶ丘ランドにあるジェットコースターはお世辞にも迫力満点とか言えるレベルではない。そんながっかり度満点の代物だった。

これなら僕だって余裕で乗れるに違いない。きつとそつだ。

園内の人込みはGWにも関わらずまばらだ。そんな様子を見せられたらやっぱりこの経営がちょっと心配になつてしまつ。

「お、やっぱり並ばなくてもよさそつだな。それじゃ早速乗ろう」と、そこでいきなり係りの人に呼び止められる僕達。

「お客様、まことに申し訳ございませんが、こちらの身長を超えて

いないお客様は、危険ですのでご遠慮いただいているのですが」
そう言ってニコニコ顔でピンク色の不思議生物（桜ヶ丘ランドの
イメージキャラクタらしい）の立て札を見せてくる従業員さん。
すっかり忘れていたけど、今の有須はロリ状態。彼女の身長では
到底届かないわけ。

僕は、恐る恐る有須の様子を盗み見る。

何故かぴくぴく小刻みに震える有須さん。

一瞬のうちに、何とも言えないオーラが周囲に立ち込めたのが分
かる。

こ、怖い。とてもロリっ子とは思えない。

「… 兄さん。雷九さんと二人で乗ってくればいいじゃないですか、
二人で楽しんでくればいいじゃないですか、何なら私、ここで待つ
てますから。はいはい、どーせ私なんてのけ者ですよ」

うっわ、有須さんってばすっかりご機嫌斜めだよ。

だが、こんなときこそ雷九の出番。同性として、何とか宥めてく
れるに違いない。

「あははは。しょうがないよな、こればかりは。雷九、他に行こ
うか？」

「何寝ぼけた事を言っているんですか嵐さん！ さあさあ、ここは
お言葉に甘えて行きましょう」

初めての絶叫マシンを前にして、すっかりテンションが上がって
しまっている雷九。テンションと言うよりキャラが変わってる。そ
んなはっちゃけすぎな雷九。

「嘘だろ？」

僕は、雷九にひっぱられながらジェットコースターに乗り込んで
いく。

こつなつてしまつてはもはや逃れようも無い。

何とか耐えるしかない。頑張れ僕。

否応なしにコースターのシートへと据わらされ、絶望への路をひ
た走る。

カタカタと音を立てて動き出すマシン。

徐々に絶望に包まれていく僕。きゃっきゃとはしゃぐ雷丸。そんな僕らの様子をじとっと眺める有須。

尚も段々と登っていくマシン。眼に映る景色がどんどん変わっていく。

…………… あ、駄目だコレ。

（5分後）

おえーっつ。うえええええっつ。

僕は、吐いた。全力で吐いた。それはもう泣きながらリバーシしていた。

そんな僕を余所に、上機嫌な雷丸。

「楽しかったですね、嵐さん。あのふわーって感じが癖になりそう。もう1回乗りましょうか？ もう1回」

一方、有須はと言えば。

「天罰でも下ったんじゃないですか？ いい気味ですね、兄さん。

次行きますよ！」

相変わらずのご機嫌斜め。

僕はふらふらになりながら有須の後を追う。情けない。ああ、情けない。

そんな有須が次に向かった先、メリーゴーランド。

「これなら、私でも問題なく乗れますから」

そう言っただけ胸を張る有須。

まあ、ロリ化する前からそもそも胸無いんですけどね。げぶん、げぶん。

「メリーゴーランドか。うん、遊園地の定番だね。でもさ、男子高校生が乗るのはちょっと厳しいよ、ここは二人に任せようかな」

僕はこの場に残るつもりで近くのベンチに腰掛けようとした。

「駄目です。そんなのズルイ。さっきは私が我慢したんですから、

次は兄さんの番です。さ、私と一緒に乗ってくださいね？」

そう言っただけで、さっさと微笑む有須。そんな顔で言われたら、断れるわけが無いわけで。

そんな僕らは有須の言葉通り、二人で一つの木馬に乗った。

そういえば、さっきから雷九が見当たらない。もしかしたら本当にまたジェットコースターに乗ってるのかもしれない。

「うわ、やっぱりちょっと恥ずかしいなコレ」

「何言ってるんですか兄さん。兄さんなんて誰も見てませんから安心してください。というより、お客さんなんてほとんどいなかったじゃないですか。大丈夫です。ほらほら、動き出しますよ」

まあ、妹とメリーゴーランドに乗るなんてこと事態、それこそこうして有須がロリ化しなければ2度と訪れることも無かった機会だろうし。

気分的には悪くない。

ほどなくして、ぐわんぐわんと廻りはじめる回転木馬。

僕らの他には親子が一组。

今の有須よりさらに小さな女の子と、その母親の組み合わせ。回転木馬の外では父親らしき人物が、ビデオカメラを構えている。

そんな光景を見て、僕は言う。

「子供の頃はさ、メリーゴーランドの何が面白いのかさっぱり分かんかったけど。今ならちよつと分かる気がするよ」

「そうなんですか？ 私は知ってましたよ。ずっと昔から」

段々とその動きを止める木馬。落ちないようにと、ぎゅっと握っていた有須の体から手を離す僕。

小さくなったって、昔の姿になったって、有須のその温もりは、体温は、やはり有須そのものだった。

「兄さん、そろそろお昼です。一旦休憩しましょうか？」

「早っ。時間の経過が早いってことは、僕も存外楽しんだってことか」

時刻は12時手前。正直、廃れたテーマパークと舐めていたころがあつたらしい。

ぶっちゃけ楽しい。超楽しいのだ。

「お昼にするとして、そういえば雷九は何処に行ったんだろぅな？ あ、嘘だろ。あいつまだジェットコースターに乗ってるぞ」

丁度何度目か分からないジェットコースターから降りてくる雷九。「おいおい、大丈夫か？ いくらなんでも遊園地初心者の君がいきなり乗りすぎじゃないか？ 気分悪くなったりしてない？」

「いえいえ、全然大丈夫です。むしろ気分爽快、実に晴れやかな気分です。絶叫マシンってこんなに楽しいものだったんですねー」

どうやら僕は、雷九の新しい扉を一つ開けてしまったらしい。

ランチタイム。

僕は、園内に有る売店でお昼を購入することにした。勿論、僕の自腹であることを付け加えておく。

「こういうところの食べ物ってさ、高い割りにあまり美味しくないイメージが有るよね」

「そうですか？ 確かにちょっと割高かもしれませんが、味は分かりませんか？ あ、折角なので私は桜ヶ丘バーガーで」

「あの、私も有須先輩と同じもので」

いかにもなネーミングである。桜ヶ丘なんて謳ってるけど、そもそもこの特産品って何かあつたっけ？

その名の通り、桜はちよつとだけ有名だけど。基本的に特産物があつたなんて記憶は無いんだけどな。

僕は訝しげに、その桜ヶ丘バーガーを3つ注文した。3つで2枚札が飛ぶ値段。大手のハンバーガーショップなら数倍の数が買えるっていうのに。

僕はぶつぶつと、あくまで心の中で文句を言いつつ2人が座るテーブルへと向かった。

雷九と有須、お互い相手に慣れて来たようで、普通に会話をしてる。そんな様子にちよつと感動を覚えたりする僕。

こうしてみるとまるで姉妹みたいだな。

勿論、事情を知らなければちんぷんかんぷんな会話なんだけどね。「お待たせ、2人とも。さあ、この超胡散臭いバーガーを検証してみようじゃないか」

そう言いながら、早速かぶりつく僕。

「… うまつ!!!」

美味しかった。意外なほどに美味しかった。

どこら辺に桜ヶ丘らしさがあるのか分からないが。

ちよつとこつてりしている和風てりやきソース、シャキシャキレタスと輪切りトマト、2枚重ねの大きな牛肉、ほどよく柔らかく妥協の無いパンズ。それらが奇跡的なハーモニーを奏でながら互いに互いを高めあい、一つとなり、何ともいえない味をかもし出している。

呆れ顔の2人を余所に、僕は追加で2つほど平らげたのだった。

「兄さん、次はあれにしましょう、あれ。テーブルから入り口が見えていてずつとちよつと気になっていたんです」

そう言つて有須が指差す先に有るもの、お化け屋敷だ。

「お化け屋敷か。でもさ、遊園地には何でお化け屋敷なんてあるんだろうな？ 他のアトラクションとは一線を画しているような気がする」というか、何というか」

「そうですね。こればかりはこの遊園地にも必ずあるってわけじゃありませんし。でも方向性としてはジェットコースターと同じだと思えますよ、怖いもの見たさとも言えはいいの」

有須の言葉に頷きながら、僕は入り口へと向かう。

「お嬢ちゃん、お兄ちゃんの手を離れたら絶対駄目だよー。お嬢ちゃんにはちよつと怖いかもしれないけど、頑張つてね。それじゃ

あ、逝つてらっしやい」

そう言つて笑顔で見送つてくれる係員さん。その言い草にちよつとむつとする有須。まあ、今の有須じゃそう言われても仕方が無いのである。僕はそつと有須の手を握り、入り口へと入つていった。「に、兄さん、本当に手なんか繋いでくれなくてもいいですから。私、一人で大丈夫です」

既に暗がりなのでその顔は見取れないけど、有須が僕の手をぎゅつと握りながら言った。

「はは、そう言つなよ。ほら、僕は方向音痴だから。こつして有須と手をつないでいれば迷わずにすむだろ？」

「そ、それなら仕方が無いですね。兄さん、昔から方向音痴でしたもんね」

僕の手をいつそう強く握り返す有須。

「雷九、しんがり任せたけど大丈夫か？　もしかして、お化け屋敷に入るのも初めてだったりする？」

「はわはわわ、真つ暗で、何だか寒いです。何かでできそうな既に僕の話聞いてない。」

と言つた雷九さん、お化け屋敷何だからそりゃ出るでしょう。むしろ何も出なかつたらばつたくりだよ。

そんなことを考えていると、突然、床から煙が噴出した。うん、ありがちな演出である。

「きやー！、何か出た。床から何かでましたよ、今」

お次は、横路が火の玉で明るく照らされる。これもまあ、定番だ。

「うわー！、何か光つて揺れてますよー。えくとぶらずむだー！　いやいや、火の玉でしょ普通。」

と、そこへ、コツンコツンとこちらに何か近づいてくる音がする。これは。

「ぐおー！ー」

突如、前からフランケンシュタインっぽい大男が現れた。

何でだよ！　そこは幽霊だろ普通。世界観無視かよ！

見は日本風なお化け屋敷だったのに、中は何でも有りらしい。そのうちキョンシーとか吸血鬼も出てくるかもしれない。

「ぎゃー！ー！ー！ー！、出た！、出ました！ー！。変質者だ！ー！」
そういつて一人先に行つてしまふ雷九。

僕はむしろ雷九のそのテンションに驚いたよ。

雷九のテンションにも驚いたけど、手をつないでいるおかげで、何だかんだいつてもびくつびくつと驚いている有須の様子が手に取るように分かつた。

「大丈夫か、有須？ 雷九はともかくとして、有須も実はさつきから内心びびりまくつてるだろ？」

「わ、わわわ私なら全然大丈夫です。それより、早く雷九さんをお追いかけしましょう」

そう言いつつも、今まで以上に僕の手を強く握つてくる有須。素直じゃないな、相変わらず。

ちよつと進んだところで雷九らしき後姿を発見。

と、僕が声をかけようとしたその瞬間。雷九の前方から突如ぬう！ーと出現した白い影。

「こんなところにいたんだ？ 探しちゃったよー！」
アレ、どこかで聞いたような声だな。なんて思っていたのも束の間。

ぶくぶくと泡を吐き、白目をむき倒れる雷九。

… 正直、こんな漫画みたいな倒れ方する人間つてやつを始めてみたわけで。

僕は、咄嗟に走つてその体を支える。

「あれ？ どうしたのトオルン？ こんなところで急に寝ちゃって」
「リンネ。タイミング悪すぎ」

そして、雷九。君はエンジョイしすぎ。

何だかんだいつて一番今回の遊園地を楽しんでいるのは彼女なんじゃないだろうか。

僕らは倒れた雷九を背負つてお化け屋敷を後にした。

「すみません、すみません、すみません。私、お化け屋敷あんなに怖いものだとは思いませんでした。皆様にごめいわくを掛けてしまつて」

「いやいや、全部リンネのせいだから気にしなくていいよ。お化け屋敷に1体だけ本物がいたんじゃないしょうがない」

「むっ、嵐。本物って何よ、本物って」

頬を膨らませながらそう言うリンネ。確かに、リンネにも悪気があつたわけじゃないんだろうけど、あれは本当にタイミングが良かったというか、悪かつたというか。

そんなやりとりをしているうちにも時間は進み、気が付けば夕刻近く。

そろそろ帰りのことを視野に入れる時間帯である。

「兄さん、そろそろ時間も遅いですし。最後はあの観覧車に乗りましょうか」

そう言った有須の横顔は、何かを決意した女性の顔だった。

観覧車。これも遊園地の定番中の定番である。この物語の最後の締めとしてはもってこいなかもしれない。

「あの、私はさっきの件もありますし。天使様とここで休憩します。ですから、最後はお二人で楽しんできてください」

「分かった。うん。その方がいいかもな。じゃ、リンネ、雷九を頼んだぞ」

何か言いたげな表情のリンネだったが、僕ら2人の顔を見回した後、静かに頷いた。

その時、リンネが雷九に目で合図を送る。すると、雷九は僕に一つの紙袋を渡してくる。

「必要になるから渡して欲しいって天使様が」

僕らは二人揃ってゴンドラへと向かった。

こちらもちやほやり待ち時間無しで乗ることが出来た。

僕らの乗った3番ゴンドラは、徐々にその高度をあげていく。

「兄さん、今日は本当にありがとうございました。私の無理を聞いていただいたいて」

「こつちこそ、ごめんな。今朝方、親父にも言われたんだけどさ、有須はいつも自分のことより家族を優先しているだろ？ 僕達は母さんや姉さんがいなくなつた後、その役割を無意識のうちに有須に押し付けちゃつたんじゃないかって思つたんだ」

有須は黙ってゴンドラの外を見つめる。

「だからこそ、母さんも、姉さんも居た幸せだった10年前のあの頃に戻りたがってるんじゃないかって」

オレンジ色の夕焼けが僕達のゴンドラに差し込む。もう少しで天辺までたどり着きそうだ。

「私も最初この姿になって、兄さんやリンネさんから天使や伝承の話しを聞いた後、すぐにそのことを考えました。でもね、兄さん。それは違うんです。だって私、無理やり母さんや姉さんの役割をしようなんて思っていない。だって、私は私ですもん。どんなに頑張っても、2人にはなれない。なつてあげられない。それに、私。家族を優先してるなんて言われますけど、それだって私が好きでやっていることなんです。無理なんてしてない。兄さんだって、私やだんちゃんが困つていたら、自分のことなんてお構い無しに助けてくれるでしょう？ それとおんなじです。私、父さんも、だんちゃんも、兄さんのことも大好きなんです」

そう言い切る有須の横顔は、夕日に照らされとても美しく輝くのがあった。

「この言葉に、嘘偽りなんてありません。10年前は母さんも姉さんも居たし、確かに幸せでした。でも、やっぱりそれは私にとつて過去形なんです。大切なのは今。だって、私、今も十分幸せですもん」

僕の頬を一筋の涙が伝う。

有須は僕が思っている以上に、強く逞しい妹だったらしい。

ゴンドラは、ついに天辺に到達していた。

「ねえ、兄さん、見てくださいよ。私たちの家があんなに小さく見える。それに、夕日に照らされてとっても綺麗ですよ」

うん。僕は涙をぬぐいながら頷くことしか出来なかった。相変わらずの、実に情けない兄っぶりである。

「でもね、兄さん。私、実は一つだけ嘘をついてました。もし昔に戻れるとしてら、一つだけしたいことがあったんです。… 兄さんは覚えていないかもしれませんが、10年前に1度、家族みんなでの桜ヶ丘ランドに遊びに行くっていう約束をしたんですよ？ 結局、それは叶わぬ夢となってしまったわけですけど。当時は本当に残念で残念で」

そうだったのか。有須は小さい頃からやけに聞き分けのイヤツだったからな、そんなのおくびにも出さなかった。

「最近までそのことすら忘れていたんですが、この閉園が決まったというニュースを聞いたら、ついつい、その当時の記憶が蘇ってしまっ。そう考えると、やっぱり原因は私自身にあったのかもしれないですね。すみませんでした」

そう言っ僕に対してその頭を下げる有須。

「それでも私、今日こうして兄さんと、そして雷九さんと一緒にここに来てよかったと思っています。胸のつかえがとれたような気がしました。それに、今日1日私の名前のとおり、まるで不思議の国のアリスになったような気分でした」

そう言っ有須の体は、夕日に照らされオレンジ色に輝きながら、点滅していく。

何故かは分からないが、どうやら彼女の体が元に戻っていくらしい。

良かった。本当に良かったよ有須。

…………… え？

ちょっとまってよ。今、ここで、僕の目の前で、元に戻るのか？

それってかなり不味いような。

5歳 15歳へ。有須の体はまるで魔法少女の変身ポーズのような光に包まれ、徐々に大きくなる。

体の膨張に伴い、当然、サイズの合わなくなった服が破れていく。服が… 服がああああああー！

僕は、半狂乱になりながら何とか目を逸らそうと体を後退させる。とその時、ガサツという音と共に、僕の足元に何かが置かれていくことに気が付く。

…！

流石リンネ。何だかんだいっても天使の名は伊達じゃないらしい。こうなることも見越していたってことだろうか？

袋の中には、桜ヶ丘ランドというネーミングの入ったダサイジャージが入っていた。

恐らく、この時、この瞬間のため、雷九に伝えて事前に準備したものだろう。

そして、その瞬間にも、目の前にはあられもない有須さんの姿が。ああああああああああ。

イヤ、落ち着け僕。落ち着くんだ。

こういうときは素数… じゃない円周率を数えるんだ。

うわああああ、3 . 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 2

3 8 4 6 2 6 4 3 3 8 3 2 7 9 5 0 2 8 8 …。

そんな僕を余所に、すっかり元の姿へと戻った有須は、意識を失ってゴンドラのシートでぐったりしている。

… 4 1 9 7 1 6 9 3 9 9 3 7 5 1 0 5 8 2 0 9 7 4 9 4 4

5 9 2 3 0 7 8 1 6 4 0 6 2 8 6 2 0 8 9 9 がべっ。

舌かんじやったよ。血が出てきたよ。

僕は、自分で自分をぶん殴りながら、何とか有須にジャージを着せる。

僕は、何も、見て、いない。ホントウダヨ？

一番下まで戻ってきたゴンドラから降りる僕。有須はまだ気を失ったままなので、僕が背負って出ること。

… あのとときの係員さんの驚きよつと言ったら、暫く忘れられそうに無かった。

そりゃそうだよね。

乗るときは小さい口りっ子だったはずなのに、降りる頃にはすっかり大人になっているんだから。

加えて僕の顔面。自分で殴りすぎて、それはもう偉い事になっていたわけで。

下で待ち構えていた2人も、元に戻った有須の姿よりまず僕の顔の方に驚いていたくらい。

「うわっ、嵐。どーしたのその顔。ゴンドラの中で12R戦ったみたいなのになってるよ」

「うん、ちよっと自分の中に巢食う伝承と戦ってたね。それにしてもリンネ、伝承って怖いよね。本当に恐ろしい。後、ジャージありがとう。コレが無かったら、それはもう色々なところが色々大変だったよ」

「でしょでしょ。もっと褒めてもいいんだから！ それじゃ皆、まだ仕上げも残っていることだし、一旦トオルンの部屋に戻りましょー」

僕は夕焼けに照らされながら、有須を背負ってトオルン宅へ向かっていた。

「なあ、リンネ。結局今回の伝承ってなんだったんだろうな？ 今までと違って何か変というか、変わったタイプだったような気がする」

「こればかりは、私も断言は出来ないけど。伝承にも色々あるってことね。今回みたいに、ちよっと風変わりなタイプもある。大抵のヤツは対象者の願い、願望に巢食って捻じ曲げた形でその願いを叶えてしまうわけだけど。今回はたまたまというか。結果論というか。でもやっぱり、伝承は伝承。私が天使で有る以上、それを抜うのがあたしの仕事であり使命。それだけは忘れないで、嵐」

「そっか。覚えとくよ」

僕は後ろに背負われ、眠ったままの有須に向かって独り言のように呟く。

「有須、お前もいつの間にかこんなに大きくなったんだな。昔はさ、にいにい、にいにいって言いながら、僕の後ろばかりくっついて歩いてきたのに。母さんが亡くなって、姉さんが居なくなつて、ダンゴが生まれて。気が付けば、有須が花家一番のしっかり者になつてたよね。今のお前はさ、花家の中心なんだよ。お前は無理してないなんて言つてたけど、本当は僕らがもつとしっかりしなきゃいけないだよ。だからさ、僕なんかが言えた義理じゃないけど、有須はもつと僕らを頼つてもいいと思うんだ。勿論、僕も兄貴として、有須に負けないように、もつとしっかりするからさ」

「……………馬鹿にいにい」

僕らの顔が赤く見えたのは、きつと夕日が赤かつたためだろう。

そんな僕らのやりとりをそばで聞いていた雷九がぼつりと呟く。

「いいですね、兄妹つて。私も兄さんと昔みたいにな…。いえ、これから築いていけばいいんですよ」

雷九宅。再び雷九の部屋

僕は雷九のベッドにそつと有須を寝かせる。

「それじゃあ仕上げね」

リンネが何か呪文を唱えたあと、有須の心臓に向かって矢を放つリンネ。

と有須の体から、黒い煙が噴出してくる。

やがてその煙は有須の体から切り離され、空中で実体化していく。

「リンネ、頼む」

僕はその煙を睨みつけながら言った。

リンネが頷くと同時に、僕の右手は発光し始め、やがてその光はひとつ卵となる。

「卵？ 何で卵？ と言うか、卵でどうしろってんだよ、コントじゃないんだからさ」

「ちつつち。当然ただの卵じゃないよ、嵐。むしろ食べたら一氣にあの世逝きね」

リンネの言う通り、卵から異様な機械音が響く。よく見るとタイマーらしきデジタル表示も見て取れる。

つまり、爆弾。

天使と爆弾。何ともミスマッチな組合せ。

卵つてのはアリス的に考えて分からなくもないけど、何故爆弾なのか。

だが、あれこれ詮索する暇も、考える時間もそもそもあまりないようだった。

カウントダウンは残り5秒。

迷っている暇は無い。僕は、目標に向かって卵こと謎の爆弾を全力で投射する。

あ……そもそもここは雷九の部屋じゃないか。こんな空間で爆発したら。

が、時既に遅し。

放たれた卵は、空中で破裂。中から大量の光が溢れ、伝承の黒き霧を飲み込み、やがて、空中で離散していった。やはり腐っても天使武器。ただの爆弾ではないわけで。

「ふうーっ。緊張したー」

「はた迷惑な卵だった。一瞬本気で焦ったよ」

僕はすやすやと眠る有須を見守る。

「雷九、また一つお願いしたいんだけど、いいかな？」

雷九はにつこり笑いながら答えてくれる。

「大丈夫です。有須さんは私が責任もって回復まで見届けさせていただきますから」

「そう言ってくれると助かるよ。雷九になら安心して任せられる。」

それに、有須の手前あんな事言っちゃったからね、僕は一旦家に戻るよ。親父やダンゴも心配しているかもしれないし」

そう言つて、雷九と一旦別れ花家へと向かう僕とリンネ。

「そういえばリンネ。遊園地じゃ、すぐに居なくなっちゃったけどさ、お前何してたんだ？」

「あー、あれね。観覧車の天辺まで飛んで見たの。あそこからだ、この桜ヶ丘が一望できるでしょう？ 奇麗だったなー、あの景色。

あのね、嵐。あたし、この町が好きだよ。町だけじゃない、嵐も、妹ちゃんもトルンも、キリキリだって大好き。この試練が始つてみて、やっぱり天界で習つていたのよりずっと大変だつて感じてるけど、あたし、今までよりずっと強くこの試験を成し遂げたいって思うようになったの。これからも嵐には迷惑かけちゃうかも知れないけど…… 最後まで付き合つてくれる？」

「当たり前だ。僕だつて最初は戸惑つたけどさ、今はこうやつてリンネに会えて良かったとさえ思つてるんだ。色々な人たちと出会うことで、僕自身も変わつていけるような、そんな気がする」

そんなことを言い合ううちに、どうやら家の前まで到着したようだ。

「さて、今日の夕飯は僕が腕を振るうことになりそうだな」

「へえー、嵐つて料理出来たんだ。ちよつと意外かも」

「そうか？ リンネに食べさせられないのが残念だよ。ま、僕の場合、大分おおざっぱな正に男の料理つて感じだけだな」

翌日

早朝。有須を迎えに雷九宅へと向かう僕とリンネ。

「嵐さん、お早うございます。有須先輩なら昨日のうちに目が覚めて、すっかり元気になられましたよ」

— 先ずどうぞ、上がってくださいという雷九。

「あら、兄さん。珍しく早起きですね。わざわざ迎えに来てくれたんですか？」

「一応ね。あ、着替え持ってくれば良かったかな？」

「そういえば、最初ここに来たときパジャマ姿だったっけ？」

「それなら大丈夫です。どーせ兄さんのことだからそこまで気が廻るとは思っていませんでしたし。それに、既に透ちゃんに服を借りちゃいましたから。ほら？ どうです？ 似合ってますか？」

そこにお茶を持って上がってきてくれた雷九が答える。

「有須先輩って何来ても似合っちゃうんですもん。羨ましいです」

「へえ、でも良く雷九の服とサイズが合ったね。成る程、こうしてみると2人とも身長はそんなに変わらないのか。それに、胸のサイズが2人ともペタ」

時既に遅し。

「兄さん。あなたって人は、いつもいつも一言多いんですよ！」

「嵐さんの、ばかーーーーー」

「にやはははははは、流石嵐。最後まで抜け目無いなー」

僕は、有須と雷九、兩人両方向から全力の鉄拳制裁を受け、そのまま意識を失ったのだった。

どうやら僕という人間は、変わるところか全然成長すら出来ないのかもしれない。

END

第7話「花と嵐と引き籠もゾンビ」〜隠家渚の場合〜

第7話「花と嵐と引き籠もゾンビ」〜隠家渚の場合〜

季節は夏。梅雨が明けてからというもの、連日晴れ間が広がっている。

これだけ暑い日が続くと、流石に外出するのも億劫になるというもの。

出来る事なら、クーラーがキンキンに効いた部屋で、アイスや冷たい麦茶を片手に部屋に引き籠っていたくなる。

むしろ夏が終わるまでずっと引き籠っていたいだけで。

この夏、僕はその言葉をそのまま体現したような、一人の風変わりな少女と出会った。

「うがーっ、リンネ。お前ちょっとはじっとしてられないのか？ そうやって部屋の中ではたばたばたと飛んだり跳ねたりされちゃ、まったくもって勉強に集中出来ないじゃないか！」

「むうーっ。何よ嵐。別にあたし、邪魔なんかしてないもん。ちょっと退屈だったから部屋で天使体操してただけだもん」

だ、か、ら。それを邪魔してるって言うんだよ。と言うより何なんだよ、その天使体操って。

僕のそんな訴えも虚しく、相変わらず謎のポージングをとり続けるリンネ。

そんな彼女に対し、思わず頭を抱える僕。駄目だ、ただでさえ糞暑いのに、それに加えてこのリンネ。僕に残された僅かな集中力も、理性もどこかに吹き飛んでしまいそうだ。

そんな僕の気持ちを知ってか知らずか、リンネは呑気に言う。

「あー、退屈。折角梅雨ってやつも終わったんだから、早く次の試練が始まればいいのにー」

「ちよつと待てリンネ。確かに君の試練ってやつも重要だけど、こつちの試験だつてすこぶる重要なんだ。むしろテストが終わるまでは……」

「キッター……」

…… 神様、あんまりです。

「ほらほらほら、嵐ー次の試練だよ、にやはははは。残念でした、勉強はまた今度だね」

その今度じゃ遅いから今勉強してるつてのに。

とは言え、こうなつてしまった以上、文句の一つを言つていても仕方がない。

「で、リンネ？ 場所は遠いのか？ 夕飯までには時間があるけど、出来れば近くだと有難い。色々と有難い」

「大丈夫大丈夫。嵐はそのままの格好でいいから。そのままちよつとだけじつとしてて？」

何故？ そう言い返そうとした瞬間、家のチャイムが鳴る。

「ね？」

得意げなリンネ。

まさか対象者自ら家に出向いてきたつてことか？ いやいや、幾らなんでもそれは都合が良すぎる。

そもそも、いつからこの家は伝承達の集会場になつたつてんだよ。僕は、あれこれ考えを巡らせつつも、とりあえず玄関へと向かつた。

「はいはい、今開けますよ……と」

ドアを開けた先、僕の目に飛び込んできた人物。それは。

「え、雷九？ どうしたんだ、こんな時間に？」

「嵐さん、こんな時間にごめんなさい。でも、どうしてもお話したいことがあつて」

僕らのそんな会話が聞こえたためか、何故か親父が顔を見せる。

「ほーう、嵐。この前のさだ… 小雨ちゃんから引き続き、こりやまた可愛らしいお客さんじゃの。で、この子と小雨ちゃん、どつちが本命なんじゃ？ 全く、お前も案外隅におけんなー、流石はわしの息子じゃ。がはははははは」

そう言つて僕の背中をばん叩いてくる親父。親父の登場は場の混乱以外の何ものでも無いわけで。

どん引きしつつ、微かな苦笑いを浮かべる雷九。

「親父、雷九は有須の後輩だよ。唐突にそれは失礼を通り越してただのセクハラだからな？」

親父のこんな反応も2回目ともなれば慣れたもの。僕はあくまで冷静に否定していく。

「は、はじめまして。私、桜ヶ丘中学1年の雷九透と申します。嵐さんには、それはもう色々とお世話になりました」

「ほう、有須の後輩か。それに嵐に大変世話になったとな？ くおら嵐、お前さんこの可愛らしいお嬢さんの一体何の世話をしたんじや？ このえる助がーえる助がー」

頭が痛い。駄目だ、この親父相手にやはり冷静でなんていられるわけが無かった。

「いいから一先ず、雷九から、は、な、れ、ろ！」

僕は、とりあえず雷九を連れて僕の部屋へと避難した。

既に披露困憊の僕。

「あ、やっぱリトルオルンだ。元気してたー？」

「こんにちは、天使様」

そう言つて祈りのポーズのように手を合わせ、眼を輝かせてリネを見上げる雷九。

相変わらず、彼女の中でリネ崇拜は続いているらしかった。

こんないい加減だけの天使には、すこぶるもつたいない行為である。

「あ、適当に座つてよ。汚い部屋でゴメンな、雷九。君が来ると分かってればもう少し片付けといたんだけどね」

「い、いえいえいえ。あの、私、家族意外の男の人の部屋に入るの
って初めてなので、ちよつと緊張、して、ます」

恐縮した面持ちで僕の用意したクッションに腰掛ける雷九。

「にははははは、そういえば嵐もさー、トオルンの部屋に始めて入
ったときは、笑っちゃうくらいにおどおどしてたよね」

「そんなのもう忘れたよ。それより、何かあったのか雷九。もしか
して伝承関連？」

先ほどまで落ち着かない様子だった雷九は一変、沈痛な表情で答
える。

「… はい、でも今回は私じゃなくて、私のクラスメイトのことな
んです」

「へえ、クラスメイト？ そういえば、クラスの連中とはうまくい
ってる？ 部活の方はどう？」

「ぶぶぶつ、何ソレ。まるで父親みたいな言い草だね、嵐。何かや
らしー」

い、言うに事欠いてやらしーはないだろ、やらしーは。先ほどの
親父の顔が僕の脳裏をよぎる。勘弁してくれ。

「せめてお兄さんにしてくれよ。僕はまだ10代だぞ？ それに、
断じて変な意味はない。ただちよつと心配だっただけで」

そんな僕らの不毛なやり取りをじつと見ている雷九。

「ぶぶつ、お2人は相変わらずですね。大丈夫ですよ、嵐さん。ク
ラスメイトとも部活も、何とか頑張ってますから」

「そつか、それなら良いんだ。ごめんな、話の腰を折っちゃって。
それで、その雷九のクラスメイトがどうしたの？」

「その子、5月くらいから殆ど学校に来ていないんです。それで、
その子と家が近い私がプリントや配布物を届けたり、様子を伺った
りしているんですが…」

「不登校ってやつか。両親は何やってんだ？ その子と話し合った
りしないのかな」

「それが、自分の部屋に鍵をかけて引きこもってしまっているらし

くて。全く話が出来ないみたいなんです。私も、何度も彼女の家までいつているんですが、なかなか話を聞いてもらえなくて…」

「ふーん。まるでお休みの日の嵐みたいだね」

「そりゃ言いすぎだろ。それに、僕はインドアが趣味なの。しかも最近はたまに散歩に出たりしてるだろ？ でも不登校で引き籠もりか。これは色々分け有りっぽいな。でも、雷九はどうしてそれが伝承絡みだと思ったんだ？」

ただの引き籠もりの問題だったら、そもそも僕の出る幕ではないわけ。

「実は、彼女の家を訪ねた時、私、1度だけ部屋から出ていた彼女の姿を見たんです。そのときの様子がどうしても気になってしまってます」

「具体的にはどんな様子だった？ 何か変だったとか？」

「はい、何て表現したらいいかわからないんですが。虚ろな眼をしていたというか、表情が全くないと言うか。まるで、魂がぽっかり抜けちゃってるような感じ？ うつつ、ごめんなさい、うまく表現出来なくて」

「そんなことないわ、トオルン。あたし、一つ思い当たることがあるもの。どうやら、今回の対象者はその子で間違いないよね。ありがとトオルン、よく話してくれたわ」

「いえいえそんな。ただ、その子。少し前までの私にちょっとだけ似ているような気がしたから。それに、もし彼女が私と同じように苦しんでいるなら、助けてあげたいって、そう思ったんです」

雷九のやつ、本当に見違えた。以前までのような、おどおどして自分に自信の無かった彼女はもはや存在していないらしい。

これは、僕も負けてられない。

「一先ず了解。それで、そのクラスメイトは何て名前なんだ？」

「彼女の名前は、隠家渚。嵐さん、天使様、どうか彼女を助けてあげてください」

明日、一緒に隠家の家へと向かうことを約束し雷九と一旦別れた。せつかくなので、一緒に夕飯をどうかと誘ったものの、どうやらお兄さんと外食する先約があったらしい。

ちよつと残念だったものの、よくよく考えれば小雨先輩のときの二の舞になる可能性もあつたわけだ。

あの時は、アレな性格の小雨先輩だったからこそ何とかなかったものの、純真無垢な雷九を親父の毒牙に晒すわけにはいかない。

雷九の居なくなった部屋で、僕はリンネに言う。

「さつき心当たりが有るって言ってたよな？ ソレって何？ どんなやつ？」

「実際に会ってみないと断言は出来ないけど、恐らくゾンビの伝承だと思ふの」

「ゾンビ？ ゾンビってあのゾンビ？」

「嵐がどんなゾンビを思い浮かべてるのか分からないけど、相手はあくまで伝承だよ。言うなれば、精神的ゾンビね。少なくとも今回は、映画みたいに死者が蘇って人を襲ったりするアレじゃないと思う。知ってる？ 精神的ゾンビって？」

「ゴメン、さっぱり分からない。ゾンビと言えば映画やゲームのあのイメージしかないよ」

「まあまあ、百聞は一見にしかず。明日実際に会ってみれば分かると思うよ」

会えればの話だろ？

先程の雷九の話聞いた限り、とてもじゃないけど素直に会ってくれるとは思えない。それどころか、その姿を見れるかすらも難しいんじゃないだろうか。

恨めしいほどの快晴、流石は夏といったところである。

正直言つて、こんな日は部屋でだらだら過ごすに限るんだけど、そんな事、これから引き籠もりちゃんを改心させようとする人間が言うようなセリフではないわけで。

「ぶぶぶぶつ、嵐。こんな日は部屋でだらだら過ごしたいと思つてるでしょ？」

リンネのセリフがぐさりと突き刺さる。鋭すぎるぞリンネ。

「何で分かつたんだ？ 天使つてやっぱり人の心も読めるものなの？」

「にははははは。だつて、ほら」

そう言つて僕を指差すリンネ。僕は改めて自分の姿を確認する。

右手にdvdプレイヤーのリモコン、左手に携帯ゲーム機。足元にはマンガ本と小説の山。引き籠る気満々な、そんな格好。

「うおわつ、なんじゃこりゃ。体が条件反射で動いちゃったのか？」

確かにコレは、どう鼻屑目に見ても部屋でだらだらモードの格好だ

「まだ本人と会つてないからただの予想だけど、引き籠もりちゃんと嵐つて凄く気が合うような気がする」

「… 僕もそんな気がする」

程なくして、雷九が僕らを迎えにやつて来た。

「ごめんな雷九。確か、隠家の家つて雷九の家から近いんだっよね。だったら僕らが君の家に出向いた方が早かつたよな」

「いえいえいえ、そんな。そもそも今回の件は私がお願したことですし。それに、何だかいてもたつてももられなくて」

「そうか。それにしても、その隠家つてどんなヤツなんだ？」

「うーん、どんな人かと言われると、私も良く分からないってのが正直な意見ですねえ。殆ど会話した事すらないうちに、彼女が不登校になつてしまったので」

やはり、そう簡単にこちらとコミュニケーションをとってくれるような相手では無いらしい。

と、そんなことを話すうちに雷九の家を通り過ぎ、僕らはとある屋敷の巨大な門に辿りついた。

「到着です。ここが隠家渚ちゃんのお家ですよ、嵐さん」

お家？ 違うよ雷九、これは家と呼べるレベルじゃない。どう見てもお屋敷だ。

「でかい、門だけでも十分でかい。この町にこんな大きい屋敷があったなんて、今まで全然知らなかった」

あまりの大きさに思わず足がすくんでしまう。

「ぶつぶぶつ、嵐、なーにびびっちゃってんの。まだ門だけでしょ？ とつとはいるーよ」

「べ、べべ別にびびってなんかいない。ただ、ちょっとだけ予想外だっただけ。けど、この屋敷から発せられるこの威圧感やオーラは何だろう。凄く嫌な予感がするんだけど。… ここで間違いないんだよね、雷九？」

妙に年季の入った傷だらけの表札には確かに「隠家」と書かれている。

僕の抱いていたイメージとは似て似つかぬこの現状。規模というか桁が違う。

「ふふつ、嵐さん大丈夫ですよ。初めは私も驚きましたけど、皆さんいい方たちばかりですから。見ために惑わされちゃいけません」
そう言っって慣れた手つきで、門に付属しているインターホンを押す雷九。

良い方たちってどういう意味だ？ 隠家の家族のこと？

それに、見た目に惑わされるなんて、この門のことだよな？

僕は言い知れぬ不安を抱えながらも、じつと門が開くのを待っていた。

その時、インターホンからこれまた僕の予想の斜め上に行く声が聞こえてくる。

「はい……どちらさんですかい」

インターホン越しでもはっきりと分かるドスの利いた低い声。

威圧感たっぷりの門、馬鹿でかい屋敷、禍々しいオーラ。そして、ドスの利いたこの声。

僕の嫌な予感は、最高潮に達しようとしていた。

「あ、すみません。雷九です。渚ちゃんにプリントを持ってきました」

「おお、雷九さんでしたか。いつもすみません」
その数秒後、ゴゴゴと音を立て巨大な門が開く。

「さあ、行きましよう嵐さん。今回こそ渚ちゃんに会えると嬉しいんですが」

門をくぐったところで何人かの人影が見えた。

… はいアウトー。

やっぱりか、やっぱりなのか？

どう見ても、どう鼻真目に見ても、ヤザです。ヤーさんです。

やのつく自由業の方です。本当にありがとうございます。

「雷九さん、お嬢のためにいつも苦労かけちまってすまねえな」

「私、苦労だなんて全然思ってますよ大熊さん。それに、私が渚ちゃんと一緒に学校行きたいと思ってるだけですから」

「ふっ、クハハハ。相変わらず見上げた娘さんだ。で、そちらは？」

「私の先輩で友達の花嵐さんです。今回無理を行って一緒についてきて貰ったんです」

「ど、ど、どうも、花嵐でしゅ…です」

ははは、噛んだよ、いきなり噛んじまったよ。静まれ、静まるんだ僕のチキン。

「まあまあ、そんな緊張しなさんな」

何ゆえ雷九がこれほど冷静にかつ普通に接していられるのか。正直言ってみればびりまくりの僕。

「ふむ、花？ 花か。お宅は花屋か？ もしや、見琴さんのご子息じゃねえかい？」

「え、ええ、はい。確かにそうですけど、何故それを？」

「いやいや。商売柄、いつもお宅を利用して貰ってるからな。そうか、見琴さんの息子なら心配はいらねえな。さあ、ついてきてくれ」

花屋の仕事は店先で花を売るだけじゃない。

確かに、大口に卸したりもしているんだけど、まさかこんなところにお客さんがいるとは思わなかった。ヤのつく方達にお得意さんがいるとは思わなかった。

とはいえ、おかげでこうして無事中可以入ることが出来たわけだし、一先ずは良しとすべきか。

それにしても広い庭だ。庭園ってやつなのだろう。

池がある庭なんて初めてみた。その上、その池には色鮮やかなニシキゴイが何匹も泳いでいた。

そうこうする間にも、黒服のいかつい男達をちらほらみかける。

これは、どう見ても本物だ。本物のやーさんだ。幾ら雷九の頼みとはいえ、偉いところにきてしまったと今更後悔する僕。

まあとは言え、今更引き返すわけにもいかないし、そもそも一人で帰れる気がしない。

何度か来た事が有るとはいえ、何故雷九はこれほどまでに平然としていられるのだろうか。

平然とするどころか、むしろあの大熊って人と談笑すらしてる始末。

やーさんと女子中学生が一体どんな話題で盛り上がるのか、気になっちゃった僕は、思わず聞き耳を立てる。

「… おお、そうだ。雷九さんにこの間教えてもらったレシピ。昨日試して見たんだがね、なかなかうまく作れたよ」

「わあ、本当ですか？ 良かったー。大熊さん、筋がいいですからね。今度はクッキーなんてどうですか？」

お、菓、子、作、り、だ、と？

これはもう意外とかってレベルじゃねーぞこれ。

天使を初めてみたときよりよほどの衝撃を覚えたよ、僕は。

笑っていいのか、驚いていいのかすら分からない。

そうこうするうちにやがて屋敷の玄関にたどり着く。このまま隠家渚の部屋まで案内してくれるらしい。

「こうして何度も雷九さんに来てもらってるのに、お嬢は一向に部屋から出てきてくれない。全く、悩みのタネだよ。かと言って俺らがどうこう言っても聞いてくれるお嬢じゃない。やっぱり同級の雷九さんが頼みの綱だ。勝手に期待して、勝手に押し付けるような形になっちまって悪いけどよ、どうかお嬢のことをよろしく頼む」

そう言っつて足を止める大熊さん。どうやらここが隠家渚の部屋らしい。

… 鍵が3重にかかっているように見えるのは、どうやら僕の気のせいじゃ無さそうだ。間違いなく、相手手ごわい手合いのようだった。

「それじゃあ俺は一旦戻ってるから、何かあつたら声かけてくれ」
そう言っつてのしのしと元来た路を戻っていく大熊さん。

何となく緊張の糸が解けた僕は雷九に尋ねる。

「まさか3重にロックされるとはね。それで、いつもどうしてるんだ雷九？」

「はい。ドアは見ての通りです。ここから話しかけます」
そう言っつて二度部屋のドアをノックした雷九は、一人語りを始める。

「こんにちは、渚ちゃん。雷九です。今日もプリントもって来たよ。昨日はね、家庭科の授業でカレーを作ったんだよ」

ドアの向こうの顔の見えぬ相手に、学校であった出来事を事細かに話していく健気な雷九。

「成る程。ドアが開かない以上、こちらから一方的に話しかけていくしかないわけか。と言うか、ドアの向こうには本当にいるんだよな、隠家渚は。もしいなかったらドアに向かって喋ってる雷九があまりに不憫だぞこりゃ」

「あたし、見てこようか？」

僕の背後から突如姿を現すリンネ。

「うおっ、リンネ、お前今まで何処行ってたんだ？　また勝手にいなくなってるさ」

「にはははは、気にしない気にしない。それにしても広いおうちだねここ。やたらと家族が多いみたいだし。それもいかつい男の人はっかり。兄弟かな？」

「ははは、それは家族じゃなくて構成員とか組員って言うんだぞ？　でも兄弟ってのはあながち間違ってる無い。ただし、兄弟の杯を交わした義兄弟の類だけだ」

「確かに。リンネならドアくらいすり抜けられるもんな。その上相手からお前の姿は見えないわけだし」

「うんうん。じゃ、ちゃちゃっと思ってくるねー」

そう言っただけでドアをすり抜け部屋の中へと進入するリンネ。

リンネには悪いけど、やっぱり天使って言うより幽霊と言った方がぴんと来るよね、こういうシーンを見せられると。

などと考えているうちに、あっという間に戻ってくる天使さん。

「早いな。どうだった？　隠家はどんな様子だった？」

「ちゃんといたよ。ほら、あたしのセンサーも反応してるでしょ？　次の試験の対象者は彼女で間違いないんだけど」

「けど？」

「やっぱりゾンビだった。彼女に取り憑いた伝承は、ゾンビの伝承。この目で確認したから間違いないよ」

「ゾンビって言っても、僕らが思ってるようなあのゾンビじゃないんだろ？　確か、精神的ゾンビだったけ？」

「そう。トオルンや妹ちゃんの時みたいに、外見に何か変化が現れるわけじゃないわ。だから見た目がグロテスクになってるわけじゃない。でも、この伝承に取り憑かれちゃうとね、無気力、無表情、無感動、無思想になっていくの。つまり、個が無くなっちゃうのね。今回の伝承はゾンビのそんな一面を反映したタイプみたいね」

成る程、それは確かにゾンビだ。しかも思っていたより相当性質が悪い。

「それって、もし隠家のゾンビ化が進んで、完全に自分の意思ってやつが無くなっちゃったら」

「そうなったらあたしたちの手には負えなくなるわ。最も、今見てきた感じだと大分進行しているかもしれない」

「そんなの、そんなの酷すぎます!」

僕らの会話を真横で聞いていた雷九が叫ぶ。

「渚ちゃんが渚ちゃんじゃなくなっちゃうなんて。私、彼女と喋ったことも、直接会ったこともほとんどありません。でも、彼女のことはここにいらっしゃる皆さんから色々お話を聞きました。私、彼女とお友達になりたいんです! 彼女と一緒に学校へ行きたいんです!」

雷九が熱くそう叫ぶ。僕らも、そんな彼女の思いに答えられないわけにはいかない。

「まずはこのドアを開けてもらうことから始めよう、雷九。ゾンビにしる、引き籠もりにしる、やっぱり直接会って話さないかね」

口では偉そうなことを言ってみたものの、どうやったらこの頑丈な扉を開けてもらえるのか? どうやったら彼女の心を開いてもらえるのか?

というか、そもそも僕が名乗り出てリンネが天使のキスを施さない限り、隠家のゾンビを抜うことは出来ないわけで。

とりあえず、僕も雷九にならって部屋の中の隠家に向かって語りかけることにした。

「あのー、はじめまして。僕、雷九の友達で花嵐と言います。まるで見ず知らずの僕が言うのも何だけどさ。隠家、直接会って君と話

がしたいんだ。だから、このドアを開けて僕たちと会ってもらえないかな？」

「嵐、ド直球だね。ひねりがないんだからー。」

そう言っただけオーバリアクション気味に、やれやれとばかりにポーズをとるリンネ。

もっとうまいやり方があるとは思いつけど、ヘタレな僕にはこれが精いっぱいなんだよ。

偉そうな事を言った割にはノープランなんだよ。僕は、いつだって。

と、その瞬間、突然、隠家の部屋の嚴重な扉が開かれた。

「うおわっ、見る見る。本当に開いた。開いたぞ、二人とも」

あんな謳い文句じゃ絶対に開けてくれるはずがないと思っていたので、あまりに意外な展開に思わずテンションが上がる僕。

と、僕らの目の前に可愛らしい黒い水玉模様のパジャマを着た金髪ツインテールの一人の少女が現れる。

雷九よりも小柄なその少女は、僕らを一瞥した後、何故かその視線を僕にロックオン。

何故かは分からないものの、隠家からの熱視線を浴びる僕。

え？ 何？ やっぱりさっきの僕の言い方がお気に召さなかったか？

などと考えるうちに、隠家の細い腕が急に僕の腕を掴んだ。

「え？」

あつげにとられていた僕は、わけのわからないまま、隠家の部屋への奥へとぐいぐいひっぱられていく。

ドアを開けてもらえたまでは良かったけど、一体何だこの状況。何が何だかさっぱり分からない。

僕は隠家に導かれるまま、彼女の部屋へと足を踏み入れたのだった。

「ま、待って渚ちゃん」

「うっわー、嵐ってば意外とやるね。前言撤回、ちょっと見直しち

やったよ」

そう言っ僕の後続く二人。

隠家渚の部屋

実に女の子らしく可愛らしい部屋だった雷九の部屋とは大きく異なり、強烈な負のオーラを感じずにはいられない隠家の部屋。

失礼だとは分かっいても、部屋を見渡さずにはいられない。

で、その強烈なオーラの正体は何かといえ、ズバリ、恐怖だ。

この部屋、怖い。

正直とても落ち着ける雰囲気とは言いがたい彼女の部屋。

つまるところ、彼女はホラーマニアだった。

ジェイソン、エイリアン、ドラキュラ、狼男…そしてゾンビ。

ありとあらゆるホラー映画のいわば主役たちのマスクやフィギュア、ポスターがところせましと飾られている。

僕は、隠家が用意してくれたハロウインのかぼちゃ型クッションに座っている。

隣には隠家。何故か僕に腕を絡めてぴったりとくっついている。

彼女から何かしらの説明なり抗議があるものかと思っっていたが、

隠家は一向に喋る気配は無い。

無いどころか、さっきから何故か僕の顔をじつと凝視している。

そんな様子に溜まりかねた雷九が、口火を切る。

「凄い、やっぱり嵐さんは凄いです。私がどれだけ話しかけても駄目だった渚ちゃんの心を、あっという間に開いて、しかもこんな風に気に入られちゃうんですから」

果たしてこれは、気に入られるなんて生易しい状況なのだろうか？

僕はしびれを切らし訴える。

「えーっと、隠家さん？ 取り敢えず、放してもらってもいいかな？ こんな風に捕まれちゃうと僕、その、どうしたらいいか…」

彼女は、答える代わりに首を大きく左右に振る。

つまり、答えはノーってことらしい。

「にはははは、良かったじゃない嵐。それに、嵐を気に入ったって事は、ナギナギ自身の感情が残ってるって証拠かもしれないよ？
つまり、まだナギナギを救うチャンスはあるってこと。ね？ ト
オルン」

リンネのその言葉に、大きく頷く雷九。

確かに、隠家に感情や意思が残ってたってのにはホツとしたし、
こうして何とか部屋にも入れたけど、本番はここからである。

こうして彼女が取り憑かれていると確認できた以上、これはもはやただの引き籠もり事件ではないのだ。

逆に言えば、この伝承を取り被うには、隠家の引き籠もり問題を解決することが必要不可欠という事。

「リンネ、この伝承を被うのに必要なのは、隠家を部屋の外に連れ出すことだろ？」

「ピンポン。良く出来ました、嵐。そうそう、今回の伝承の原因は明確だよ。こんな部屋で引き籠もってちゃ、そりゃゾンビの1匹や2匹とり憑いても可笑しくないよー」

リンネの言う通り、確かに悪魔がよってきても可笑しくないような雰囲気。

例えば、単純にホラー映画のマニアだったら、まだ話は分かるし、僕にも理解できる。でも彼女の場合、その対象が聊か多岐に行き渡りすぎているらしい。

小動物のホルマリン漬けから初め、一体何語で書かれているのかすら分からないような分厚い本、散乱するフラスコ、果ては怪しげな黒魔術道具一式まで。というか一体どこの魔女だよ。

彼女の部屋は、思わずそんな突っ込みを入れたいような装いを呈していた。

これって全部隠家の趣味なのだろうか？

人の趣味をとにかく言うつもりは無いけれど、残念ながら僕には

1ミリも理解出来そうに無かった。

「えっと、そのままでもいいから聞いてくれるか？ 隠家。さっきも名乗ったと思うけど、僕の名前は花嵐。桜ヶ丘高校の二年だ。ここにいる君のクラスメイトの雷九とは友達でね、今回君の抱えるある問題を解決しに来たんだ。で、その問題っていうのと関係してくるんだけど、実は僕、何の因果か天使の使いつ走りをやってるんだなこれが」

僕の口から飛び出した天使という謎の面白赤面ワードにも、やはり無反応な隠家。

彼女が今何を考えているのか？ 僕のことをどう思っているのか？ それすらもさっぱり読み取る事が出来ない。

それでも、僕を掴む隠家の腕が緩むことは無かった。

「渚ちゃん。嵐さんには、私が頼んで一緒に来てもらったの。お節介かも知れないけど、私、どうしてもあなたと一緒に学校へ行きたい。あなたと、お友達になりたいの」

真っ直ぐにそう訴える雷九。

かつて透明人間の伝承にとり憑かれた雷九だからこそ、隠家の事を他人事とは思えないのかもしれない。

が、そんな雷九の訴えも虚しく、あくまで無反応を貫く隠家。

無反応どころか、先程からぴくりとも動いていない。これってゾンビの影響なのだろうか？ やはり僕らの訴えは、彼女の心に響いてはくれないのか？

それでも、僕を掴む隠家の腕からは彼女の体温が確かに伝わってくる。

リンネが隠家に天使のキスを施したのを見届けた僕は、ここで一つの疑問を抱く。さて、オカルトマニアである隠家は、リンネの姿を見て一体どんな反応を示すのだろうか？

「……………」
答えは無反応。

リンネはわざとらしく、彼女の眼の前で変顔を決め込む。が、や

はり無反応。どうしたって無反応。

「嵐、どうしよう。つんさみみたいに過剰反応されるのも嫌だけど、無反応ってのはもっと堪えるよ」

そう言って肩を落とすリンネ。

あのリンネをここまで意気消沈させるとは。隠家渚、やはり只者では無さそうである。

そんなリンネに代わって、僕は説明を始める。

「隠家、信じられないかもしれない……いや、君なら信じてくれそうなお話なんだけども。君の目の前にいるコイツ。この不思議生物、実は天使なんだ。名前はリンネ。どう？ 天使はオカルトに入るかな？ 君の興味の対象には入らないかい？」

そんな僕の言葉にもやはり無反応の隠家。

こうなってくると、本当に彼女のにまだ意思が残っているのかさえ怪しくなってくる。

「さっき僕が言ったある問題。勿論一つは君の引き籠もりのことなんだけど、正直、これだけだったら僕が偉そうにとやかく言えるような事じゃないと思ってるし、僕もインドア人間だからさ。君の気持は何となく分かるんだ。……僕にも似たような経験が有るし」

「ああー、やっぱりそうなんだ。嵐、それって例の中学のときでしょ？ ねえ？ ねえ？」

いつの間にか元気を取り戻していたリンネが嬉しそうに尋ねる。

そうさ、ああそうさ。雷九の事件のときにもちよっと触れたけど、僕の中学時代は黒歴史が満載なんだよ。それを語る気はさらさらないが。

僕はリンネの言動を無視して続ける。

「もう一つの問題。今の君にとってはむしろこっちがマズイ。隠家、君は今、ゾンビにとり憑かれてるんだ。君がこうして無表情、無感情、無感動、無口になってるのはやっぱりそのゾンビが原因だと思う」

僕を掴んでいた彼女の腕が、よりいっそう強く僕を掴む。もしも

これが、彼女なりのサインなのだとしたら、事態は一刻を争うこととなる。

つまり、既にそうすることでしか僕に意思を伝える手段が無い、ということに他ならない。

「隠家……。大丈夫、君をみすみすゾンビなんかにはさせたりしない。そのためにも、君がゾンビの伝承にとり憑かれるに至った原因つてやつを探さなきゃならないんだ。どんな些細な事でもいい、何か思い当たる事はないか？」

暫く逡巡した後、隠家は部屋の片隅を指さした。

隠家が指さしたのは一体の人形。ドールというやつだろうか。

「人形？ その人形がどうかしたのか？」

それにしてもやけにリアルな人形である。実は結構お高いものに違いない。

が、それを見たリンネが一言。

「うげっ、最悪。ナギナギってば、これのせいですっと引き籠つてたのね？」

「天使がうげっとか言うものじゃありません。と言うか、ただの人形じゃないんだな？ それ」

リンネは僕の呼び掛けに対し、心底げんなりした顔で答えた。

「勿論だよ。嵐、これはね、天使の天敵、悪魔が作った人形なの」
悪魔。

やはりと言うべきか、来るべくして来たというべきか。ここにきてとつとつ悪魔という単語が彼女の口から発せられた。天使といえは悪魔。やはり、残念ながら悪魔つてやつも実在するらしい。

「悪魔が？ つまり、呪われてるとか、持ち主が不幸になるとか、そんな感じか？」

「そうだね。ニュアンスとしてはそんな感じだけど、でも見た目よりずつと達が悪いんだ。なんせコレ、悪意の塊なんだから」

悪意の塊。リンネのその言葉が、この人形の持つ負の力を物語っているような気がした。

「それで実際のところ何なんだコレ。悪魔が作った人形で、あんまり縁起の良い代物じゃないってのは分かったけどさ」

「効果は人形によって様々だから一概には言えないんだけど。これが側にあると、負の伝承の力を助長させるのは確かね。今回、ナギナギのゾンビ化がここまで進んだ理由の、直接的な原因は間違いないコレだよ」

つまり、今回の場合、隠家がゾンビに取り憑かれたのは、そもそも彼女自身に問題があったというよりこの人形自身が問題だったということか？

「だったらさ、こいつを何とかすれば一件落着いてこと？」

そんな僕の問いかけに、意外なところから返答が返ってきた。

「だまってきいてれりゃーよう、おめーら、なんかかんちがいしてねーか？」

声のした方向に振り向いてみるものの、誰もいない。何だ。どういうこと？

「おい、そのおぼづら。こっちだよこっち。おめーのめんたまはふしあなかつての」

再び声のする方向へ目を向けるものの、やはり誰もいない。あるのは例の人形だけ。……人形だけ？

「嘘だろ。まさか、人形が喋ってる、とか？」

「まさかもなにも、さっきからずっとしゃべってるだろがよ」

正確には、喋ってるというより、僕らの精神に直接語りかけてくる感じだった。

そう言っただけでとてこちらに歩いてくる人形。この人形、喋るだけじゃ飽き足らず、動く事すら出来るらしい。

可愛らしい小さな女の子の形を模した人形なのに、汚い男言葉。あまりのギャップに眩暈がしてくる。

「はあー。まあ、こついうことだよ、嵐」

「渚ちゃんのお人形さんが、喋って、動いてる……」

雷九はあまりの驚きの為か、ぽかんと口を開けて呆然と悪魔人形をみつめていた。

「だ、れ、が、こいつのにんぎょうだつーの。いいか？ おめーらよくきけよ、こいつはな」

その声をさえぎるように、隠家はその人形をはがいじめ… もと、抱きしめた。

「よ、よせ、はなせこのやろう。まいにちまいにち、いーかげんにしろい」

何だこれ？ どういうことだ？

いまいち状況を飲み込む事が出来ない僕は、その場の光景に途方に暮れてしまっていた。

「おい、あほづら、んなところにつつたつてねーでたすけるよ。それでもてんしだいこうか？ おめえー」

本物の悪魔ではないものの、いわゆる悪魔のしもべに助けを求められる天使の使いつてなんなんだろう。

いずれにしろ、このままではちが明かないと思った僕は、納得がいかないものの、その人形に言われた通り隠家と人形を離しにかかった。

「状況が良く飲み込めないけど、隠家、一旦離そう、ね？ 一旦落ち着こう。そうだ、じゃあ、その人形僕に見せてくれないかな？」

僕のその言葉を受け、ちょっとだけ逡巡したのち、隠家はそつと僕にその悪魔人形を差し出してくれた。

「あ、ありがとう」

「なんだよあほづら、おめーいがいとみどころがあるじゃねーか。たすかったぜ、これでまともにはなしができるってもんだ」

悪魔人形は、僕らをくるりと一瞥した後、何故か僕の肩の上に座り、喋り始めた。

「まあきけ。さっきそのてんしがいつてたよーに、おりゃあくまにつくられたにんぎょうだ。ま、つってもよ、げのげれべるのかき

ゆうしもべだけだな。そんなおれのほんらいのもくてきはな、このすがたでろりっこともをおどろかせること。ただそりだけだ」

喋り方やリンネの説明に比べて、随分可愛らしい目的だな。勿論、それを聞いてみすみす野放しには出来ないが。

「けどよ、どこでどうまちがっちゃったのか、きがつきゃこいつのへやにいたんだよ。しかたがないからよ、ろりっこってーにはちととしがいきすぎてるけど、ひとまずこいつをびびらせてやろうとおもったんだわ」

確かに、雷九も小さいけどそれ以上に小さい隠家は、見た目的には十分ある意味ロリっ子だもんな…… って納得してる場合じゃないか。

「そしたらどうよ、こいつ、まゆひとつうごかさないとどこかそのままおれをらちかんきんしゃがった。ひでーはなしだろ？」

あくまで悪魔の話だ。

そのまま鵜呑みにするわけにはいかないけど、隠家が人形を離そうとしなかったのは確かにこの目で見たし、なにより、隠家の嗜好から考えると、悪魔人形を気にいつてしまったなんてのも、あながち嘘とは思えないわけで。

「あたし、悪魔のしもべの話なんて信じるつもりさらさらないんだけど、けど、この部屋やナギナギを見てるとあながち全否定も出来ないんだよね、これが」

「だからよー、おりゃこいつをどうこうしようなんてきもちさらさらねーのよ。そりゃびびらせよーとはしたし、おれがいるせーでこいつのあくまがはつげんして、しんこうがすすんでるってのもわかってるさ」

「そう思ってるんだったら、なんで隠家の元から出て行こうとしないんだよ。それじゃあ矛盾してるじゃないか」

「それがもんだいなんだよ、あほづら。いいか、さつきもいったけど、おれのほんらいのやくわりはせんこくのろりっこをびびらせることだ。こいつになんてなんのきょーみもねえ。だからこそ、おれ

はさつさとんずらしよーとしたさ。でも、こいつがそれをゆるそうとしねーんだよ。そもそもなんでこいつがひきもってるかしてるか？おれをにがさねーよーにするためだよ。こいつ、しろくじちゆうおれをはなさねーんだ」

混乱気味の僕を見かねたリンネが言う。

「嵐、つまりはこういうこと。元々ゾンビに目をつけられる理由があったにせよ、ナギナギはそれに取り憑かれるまでにはいたらなかった。けど、そこにこのへんてこ悪魔人形がやってきたことと、ナギナギがこの人形を手元に置いてしまった事、さらに人形を逃がさないようにするため部屋に引き籠もってしまった事が、彼女のゾンビ化がここまで進行してしまった原因ね」

「それだ。僕がさつきからずつと気になっていたのはそこなんだよ。そもそも、隠家はこうしてこんな厄介な人形を部屋においておこうと思っただけ？ 何でだ隠家？ こいつが普通じゃないってのは誰にでもわかる。本当にただ気にいっただけなのか？」

隠家は、黙ったまま口を開こうとはしてくれない。

さつきと違い、この質問には答える気はないようだ。

「こうなったら、やることは一つだけね。こいつをあやし達で抜うの。ゾンビ化も、促進も、この人形が原因ならそれで終わりでしょ？ それに、悪魔の作った人形くらいならあたし一人でも抜う事が出来るわ。簡単簡単」

リンネの言うことは正しい。確かにそれで万事解決だ。けど、何か引っかかる。

そもそも何故、隠家はこいつを手元に置いたのか。こんな厄介な悪魔人形を手元に置いてしまったのか？ ただ単に気に入ったから。ホラーマニアだから。そんな単純な理由で、こんな得体のしれない物体を？

それに、そもそもあんな悪魔のしもべの話を、一ミリでも信じて

いいのか？ 相手はあくまで悪魔なんだぞ？ いいのか？ 本当にこれでいいのか？ こんな単純な話でいいのか？

「さあー覚悟なさい、悪魔の人形。あんたなんてすぐに被ってみせるんだから」

リンネは、対悪魔道具用の、いつもと違う銀色の弓を取り出し、引き絞る。

いいのか？ 本当にこれでいいのか？

……… 待てよ。今更だけど、そもそも何であの人形は、僕らにあんな話をしたんだ？

隠家につかまっていたとはいえ、そんな話をすれば自分が原因だつてことを暴露するようなものだし、天使に被われてしまうのは明白だったはず。それにも関わらず、聞いていもないのにも関わらず、あいつは自分からその話をしてきた。それに、隠家につかまっていたなんていうのもおかしい話だ。やつが本気で逃げるつもりなら、そのチャンスはいくらでもあったはずである。現にさっき僕らが部屋に入った時は、普通に棚に置かれていたじゃないか。

こう考えると、あいつの話矛盾だらけじゃないか。やっぱりどこか可笑しい。でも何の為に？

……… まさか、まさかリンネに矢を放たせるためだとしたら？

今、この状態こそ、あいつが望んだ自体だとすれば？

一瞬、月美ちゃんの時の墮天使の話が脳裏をよぎる。墮天使。試練の失敗。

おいおいおい嘘だろ？

が、僕がそんな事を考えていた瞬間、リンネの矢は悪魔人形に向かって放たれた。

くそつ、間に合えー！ー！。

僕は形振り構わず、悪魔人形へと飛びついた。

間一髪。

僕は咄嗟のところで人形を掴み、勢い余って大きな棚に激突していた。

上からは隠家の集めたホラーグッズが雪崩のように落ち、僕の頭を直撃する。

「嵐さん、だ、大丈夫ですか？ どうしたんです？」

続けてリンネが叫ぶ。

「なにやってんのよー、嵐。あなたに当たったらどうするつもりだったの？ ただじゃすまいことくらい分かってるでしょ？」

「いてて、良かった。無事だ。違う、違うんだよ、リンネ。僕らはとんでもない勘違いをした。こいつは悪魔の作った人形なんかじゃない、こいつが、こいつこそが隠家なんだよ！」

「嵐、あなた何を言ってる……」

その直後、ゾンビ状態の隠家が動いた。部屋から出ようと出口に走ったのだ。

「行かせるかよ」

僕は、手に持っていた人形を雷九に投げ渡し、隠家の行く手をホラーフィギュアを投げつけ阻み、そして、その手を掴んだ。

「すまん、隠家、ちよつとの間だけ我慢してくれ。今だ、リンネ。

はやく、はやくさっきの対悪魔用の銀色の矢を」

「ちよ、ちよつとどいいうことなの？ 嵐、分かんないよー、何でなの？」

「リンネ、後で必ず説明するから、今は、僕を、僕を信じて矢を放つてくれ、たのむー」

「んもつ、無茶ばかりして、どうなってもしらないんだからね……いくよー」

そんなリンネの放った銀色の矢は、僕をかすめて隠家に無事命中。

その瞬間、隠家と人形は同時に光を放つ。
驚くべき事に、僕の手の中の隠家は… 跡形も無く消え去っていた。

一方雷九に預けた人形は、みるみるうちに形を変え、そこには、人間の姿をした本物の隠家が姿を現した。

「えっ？ なぎさちゃん。でもどうして、さっきまでのなぎさちゃんは？」

良かった。どうやら僕の予想は正しかったらしい。

ほっとしたのも束の間、部屋の奥、隠家のコレクションと思しき棺桶型のオブジェのふたが突如として開く。

「あゝら、残念ですわ〜ん。あともう少しでしたのに。ま、こんなものに引つかかるようじゃ興奮せましたけどん」

天使？ いや、黒い羽根に黒いしっぽ、おまけに角まで生えてる。

… おいおい、嘘だろ。これってまさか。

「り、リンネ。僕の見間違いでなければ、どう見てもこれ、悪魔だよな？ お前が天使なら、あいつは間違いなく悪魔だよな？」

「違うよ、嵐。あいつは悪魔なんかじゃない。魔女よ」

「うふん。こんにちは〜、お間抜け天使ちゃんにその代行者さん。わらわの名前はベルモット。魔女よ〜ん」

魔女と名乗る実際どい衣装を着た、我がままボディの女性。いや、あくまで僕の主観だけど。

「魔女？ 魔女ってあの魔法使いの？」

「それも違う。魔女はいわば悪魔の上位種。天使の敵ってのは正解だし、人に害をなす存在つても確かなんだけど、それだけじゃない。こいつらの目的は、天使を失墜させること」

「あゝらあら、これはこれはご丁寧に説明御苦労さまですわん。でも意外でしたわね、肝心の天使は軽々騙せたのに、まさか人間である代行者に阻まれるなんて。あなた、悪魔の才能があるのかもしれない

天使の涙は、止まりそうも無かった。

「落ち着いたか？」

「えへへ、ごめんね嵐。あたしっいたらっつい取り乱しちゃって。何だか恥ずかしいな」

「そんなことない。それとさ、一先ず隠家のゾンビを何とかしないか？ 何だかんだ言っても、彼女がゾンビの伝承に取り憑かれてるつてのは確かなんだろ？」

「分かった。トオルン、ちょっとだけナギナギから離れていてね。さあ、仕上げだよ」

そう言うところリンネは、いつもの光の弓を取り出し、隠家目掛けて矢を放った。

リンネの矢は見事命中。彼女の体からは黒い霧が湧き上がる。出たな、ゾンビ。さて、こっからは僕の仕事だ。

そう思った瞬間、僕の右手に鋭い痛みが走り、光が対悪魔武器を形成していく。

ふむ、今回はどんな得物になるかなつと…。

ん？ いつもより随分小さいぞ。瓶？ 中に何か液体が入ってるけど。

聖水。

ゾンビだけに聖水か。何だか確かに、目覚まし時計やねこじやらしにくらべればよっぽどそれらしい。

「よし、リンネ。この聖水をいつものようにあの霧にかければいいんだよな？」

「え？ それ聖水じゃないよ、嵐。ガソリンだよそれ。正確には対ゾンビ用天使ガソリン。良く燃えるんだなこれが。でも安心して、ゾンビ以外には火が移らない仕組みになってるの」

「ゾンビにガソリンって、お前こそ漫画の読み過ぎだろリンネ。…

ほんとに効くのか？」

僕は戸惑いながらもその小瓶を隠家の靄に向かって、力の限り投げつけた。

小瓶は中の液体をまき散らしながら黒靄にヒット。

液体は火をつけたわけでもなく、白い炎で燃え上がり、跡形も無くもやを焼き尽くした。

やっぱり普通のガソリンじゃないんだ、アレ。まあ、ここは隠家の部屋だし逆に普通のガソリンが普通に燃えたらえらい騒ぎになっちゃうからな、そうならなかっただけマシというもの。

僕らは急いで隠家に近づいた。

「渚ちゃん、良かったね、本当に良かったね」

「大丈夫か隠家。もう大丈夫だぞ、君にとり憑いたゾンビは僕等が被ったから、って寝てるみたいだな。まあ、無理も無い。少し寝かせておいてあげようか、雷九」

僕は隠家を再び雷九へと預けると、リンネを見上げた。

「結局、今回の話をまとめてみると。つまり、隠家の部屋にあの人形がやってきて、結果、隠家がゾンビにとり憑かれたのは事実。けど、隠家があの人形を追いださなかった理由が違う。隠家が手元に置いていたんじゃない、追いだしたくても追いだせなかったんだ」「ううう、あたしの勘違いもいいところね。あたしたち、あの人形に気を取られ過ぎていたのね。まんまと踊らされたってわけ。あの魔女、本当に悪魔らしい悪魔」

人形の力で、隠家に取り憑いたゾンビの力を助長させ隠家を沈黙&無感情にし、かつ人魔女の力で人形と隠家の体を入れ替え、隠家を完全な操り人形に仕立て上げた。目的はもちろん、リンネに間違った矢を放たせ、試練を失敗させるためである。…なんて手の込んだ事を。

「悪魔は、あたし達天使の天敵であり、負の伝承を作り出している

張本人でもあるの。あたし達天使と悪魔は何千年も前から対立しあってきた。もし、もしもあたしがあのまま魔女たちの罠に嵌って矢を放っていたら、試練失敗どころか、ナギナギの命さえ危なかったかもしれない。もし嵐が止めてくれなかったら、あたし……」

まさに、それこそが今回出てきたあの魔女たちの狙いだっただろう。人に害をなし、天使の仇をなす存在。

「またもや泣き顔になるリンネ。僕は慌ててフォローする。」

「でもそうならなかっただろ？ 僕だって一応君のパートナーで天使の使いなんだ。たまには役に立たなきゃね」

僕がそう言い放ったその時、隠家が目を覚ました。

「気がついたのね、なぎさちゃん。辛かったね、怖かったね、でももう大丈夫だよ、天使様と嵐さんが助けてくれたから。もう、何にも心配いらんんだよ」

「1か月間、良く頑張ったな。でももう安心していい。笑う事も、泣く事も、勿論部屋の外にだって出る事が出来る。隠家、君は自由だ」

そんな僕の呼び掛けにさし、涙を流し頷く隠家。

良かった、ちゃんと感情も意思も元に戻ったらいい。

そして、がしつと僕の手を掴み、側に近づける隠家。

「え？ デジャブ？」

さっきまでの偽隠家がそうしたのは、僕等を陥れるため、僕等を逃がさないためだった。でも今回は真正銘本物の隠家にそうされている。

そう思うと、どうしたらいいのかわからなくなり焦る。

「ふふふっ、やっぱりなぎさちゃんに気にいられてるんですよ、嵐さんは」

「あーっ、ナギナギだけずるいーあたしもー」

おお、何だこの両手に花状態。どーですか、世間様。僕もやれば出来る子なんです。

「……お花の……匂いがするの」

花？ 成程、隠家が気にいつていたのは僕というより僕からした花の匂いか。

「ああ、うちはさ、花屋さんなんだ。さっき聞いた話だと隠家の家もお得意さんらしいね」

「……………血が……………出てるよ？」

「え？ どこどこ？ そういえばあの時、思い切り激突しちゃったからな。大丈夫、今まで気がつかなかったくらいだし、大したことないよ」

ぺろっ

まるで子猫のように、僕の傷口を舌でなめる隠家。

あまりの衝撃に、何が起きたのか理解できないでいる僕。

「あ、え、いや、そんな、お、おきやさん？ いったい何を？」

「……………助けてくれたの……………見てたから」

尚もぺろぺろと僕の傷を舐め続ける隠家。

「にはははは、良かったじゃない嵐。役得だよ、役得」

と、その時。隠家の部屋のドアをたたく音がした。

「お譲、何だか大きな音がしましたけど、大丈夫ですかい？ 雷九さん達も一緒なんですかい？ お譲」

「きつと、大熊さんです。なぎさちゃんもゾンビから解放されましたし、詳しい話をするのは難しいかも知れませんが、せめて少しでも早く彼女の元気な姿を見せてあげましょうよ」

雷九の言う通りだ。何だかんだで結構時間が経ってしまったている。まずは隠家の顔を見せて安心させてあげべきなのだろう。

「隠家、立てるか？ ほら、僕を掴んだままで大丈夫だし、ゆっくりでいいから、まずはこの部屋から出よう」

彼女には一カ月ぶりの外の世界。この光も、空も、景色も、彼女にとっては、どんなふうに見えるのだろうか？

日の光が隠家を優しく包み込む。

「お譲！ お譲。… 夢、じゃないんですね？ 良かった、お譲。」

本当に良かった。何があつたかなんて聞きやせん、こうしてお譲がまた姿をみせてくれた、もうそれだけで十分です」

そう言つて目に大粒の涙を浮かべる大熊さん。ヤザの目にも涙。「大熊さん、嵐さんが渚ちゃんを救いだしてくれましたよ。やっぱり嵐さんに頼んで良かった」

「おおお。流石は見琴さんの御子息、俺の見込んだ通りだった。あんたと雷九さんには大きな借りが出来ちまったな。もし何か困ったことがあつたらいつでも声をかけてくん。組をあげて面倒見させてもらつぜ」

「あは、あはははは、いや、もう、ほんと、そういうの全然大丈夫なんで、お気遣いなく」

僕は、全力で苦笑いするしかなかった。

「にやははははは、嵐良かったねー。いつそ今日から面倒見てもらえば？ 根性が据わるかもよー」

そんな僕らのやりとりを余所に、一心に空を見上げる隠家。

「……………空つて……………こんなに青かったんだ」

例えゾンビは被えても、一か月という空白の時間は二度と戻つてこない。

それでも、今の隠家ならきつと大丈夫。

願わくば、彼女の心にもこの空と同じ青空が広がりますように。

そう祈りつつ、僕もどこまでも広がる青空を見上げた。

END

第8話「花と嵐と折れない鼻の会長選挙」
〜鞍馬紅子の場合〜

第8話「花と嵐と折れない鼻の会長選挙」
〜鞍馬紅子の場合〜

季節は夏本番！ そんな七月。

僕の一番嫌いな季節の本領発揮。連日30 を超える日々が続いている。

この有無を言わせない暑さ。この季節、僕のインドア気質は一層その傾向を強める。

唐突だが、夏の楽しみって果たして何だろうか？

祭り？ 海？ 花火？ ノンノンノン。ガンガンに冷房の効いた部屋でただらする。

これこそ至福。これこそ至高。この糞暑い中、わざわざ汗をかきに外へ出るなんて、全くもってナンセンスだと思わないか？

少なくとも僕は、そういった事に幸せを感じてしまうタイプの人間故、毎日毎日カレンダーを睨みつつ、とっとと夏終わってくれないかなと、日々祈り続ける今日この頃。

しかし、痛切なる僕のそんな思いとは裏腹に、イタルの発したあの一言は、僕を未だかつて無い暑い暑い夏へと巻き込んでいくのだった。

「嵐、頼む、付き合ってくれ」

突然、そう言って頭を下げる親友に対し、僕のとるべき正しい行動とは一体何だろうか？

灼熱の夏は、彼に存在する僅かな思考能力さえ根こそぎ奪ってしまっただらう。

「一先ず、イタルを正気に戻すため、全力で殴ってみることにする。漢同士の会話と叫びたら、昔から拳で交わすものと相場は決まっている。」

では、遠慮なく。

「げほおつ、ごほつ、あ、嵐、きつさま、いきなり何をする!」

僕に殴られ吹っ飛ぶイタル。僕は、そんなイタルをぐいつと掴んで引きずっていく。

「ちょ、ちょい待てやこら。いきなり殴りつけたかと思いきや、今度は俺をどこに連れていく気だ」

「いや、病院だけだ」

「なんなんだよ、その飴と鞭!」

「勿論、治療が必要なのはその傷じゃなくて、お前の頭だぞ、イタル。見るよ、お前の爆弾発言のおかげで皆引いちゃってるぞ。こっちはとんだとばっちりだよ」

「… あー。悪かった、俺の言い方が悪かったからまずその手を離してくれ。つーか、普段はもやしっ子のくせにどこにこんな力隠し持ってたんだよ」

僕らのこの珍妙なやり取りのせいで、教室が俄かにざわめき立っている。

イタルは、ふらふらとよろめきながら立ち上がる。

「つまりだ。俺、生徒会長になりたいんだよ」

「イタル… やっぱり病院行こうな?」

「何だよその可哀想なモノでも見るような目は。俺は至って正常だし、本気なんだよ! だからよ、嵐には俺に付き合っただけで欲しいんだよ。つまり、推薦人になって欲しいわけだ。な? 頼むよ」

生徒会長。つまり、生徒の中の生徒、ザ・生徒代表だ。

こいつ、自分にそんな器があると思ってるのか?

人望があると思ってるのか?

クラス委員長に立候補するのは分けが違うんだぞ。

「一応、聞くだけ聞くけどさ、何で会長になんてなりたいたいんだ?」

「ふっ、嵐よ、それこそ愚問。何故会長になりたいかって？ それはな…生徒会室が俺を呼んでるからだ！」

駄目だコイツ。早く何とかしないと。

「お前を呼んでるのは、脳のお医者さんだけだと思うぞイタル。気をしっかり持て。それじゃあ突っ込む気にもなれない」

「嵐、お前も俺の友なら覚悟を決める。俺の覚悟はとっくに決まってるんだ。その証拠にな、もう手続きは済んでるんだぜ」

こいつが親友だということを、今日ほど後悔した日は無かった。

「は、ははは、は。イタル、お前まさか」

「ああ。もう立候補の手続きしてきた。勿論、推薦人はお前で登録したからな」

そう言っつて、今世紀最高のドヤ顔でサムズアップして見せるイタル。

手遅れだ。もう何もかも色々と深刻なレベルで手遅れだ。修正不可能レベルで手遅れだ。

僕は、ぐったりとうなだれてその場で肩を落とす。

「ひゃっひゃっひゃ。そんなに嬉しいか？俺と一緒に戦えてそんなに嬉しいのか？流石は我が心の友だぜ」

「あっはははははははははは。こいつめー。あっはははははははははは」

壊れる僕。きつと、あれもこれもぜーんぶこの暑さのせいだ。そうに違いない。

こうして、僕らの選挙戦は唐突に幕を開けたのだった。

放課後 屋上

「実際のところ、何で生徒会長なんだ？ どう見てもお前にゃ務まらないと思うけど」

「あ？ 失礼だなおい。そりゃよ、俺だつてモテたいとかモテたいとか、モテたいとかつて気持ちには確かにある」

今、確信した。こいつだけは、こいつだけは絶対に生徒会長にしてはいけないと。

立候補の手続きが既に終わってしまったというのなら、もうこの自由人を止められるのは推薦人である僕しかいない。

とは言うものの、まあ、普通に考えればこいつが当選するはずが無いわけで。

成り行きとはいえ、こうなった以上、取り敢えずはしばらく様子を見てみることにした。

そんな僕の決意をしまってかいらずか、急に真面目な顔をしてイタルが語り出す。

「嵐、お前なら分かるだろ？ 俺の家族がどんなやつらかって」

イタルの家。堅氷家。

実のところ、イタルの一家は俗に名門と呼ばれる家系であった。

普段のおちゃらけた言動とは裏腹に、小さい頃からかなりのスバルタ教育を受けてきたらしい。

その反動で性格は残念なものとなってしまったとは言え、それを除けば、実は意外とスペックが高かったりするイタル。

つまり、彼の家族から言わせれば、堅氷家の一員なら生徒会長くらないなんて当たり前、なれなければ一族の恥さらし、くらしい話なのだろう。

「まあね。言わんとすることは分かるよ。分かるけど… 本気なのか？ お前もそれでいいのか？ 納得してるのか？」

返事の変わりにニヤリと笑ってみせるイタル。こいつがこんな笑い方をする時、それはいわゆる本気の時、なのだ。

「はあ、分かったよ。これは僕も、本気になるしかない無いみたいだな」

「ああ！ それでこそ我が心の友だぜ。私利私欲で生徒会長になつて何が悪い！ ってな」

「あつはっは、そつだそつだ、委員長の意地を見せてやれ」
僕らが馬鹿騒ぎをする中、誰かが屋上へと駆け上がってくるよう
な足音が聞こえてきた。

そして程なく、屋上の扉が勢いよく開かれる。

「…で、どつちが堅氷つて人？」

開口一番そう告げる一人の女生徒。

長身で、日本人にしては鼻が高く整った顔立ち。

いわゆる美人と言ってしまうても差し支えの無いタイプのその女
生徒。

「あん？ 俺が堅氷だけど、あんた誰だ？」

「あんたこそ、このワタシを知らないの？ ふん、底が知れるわね」

「おい嵐。この女、お前の知り合いか？」

おいイタル、僕にふるな。僕をこれ以上面倒ごとに巻き込むな。

「いや、知らない。あの、失礼ですけど、どちら様ですか？」

「あゝあ、揃いも揃って馬鹿ばっか。あんた達、それでもワタシの
対戦相手なの？」

対戦相手？

成程、つまり彼女も生徒会長に立候補したということらしい。

「へいへい、ねーちゃん。いきなりかましてくれるじゃないの。よ
ーするに、お前も生徒会長選の立候補者つてわけかい」

イタルの対立候補は、不敵な笑みを浮かべる。

「そつよ、その通り。ワタシの名前は鞍馬紅子。覚えておきなさい、
あんた達の生徒会長になる女よ」

立候補者つてことは、この人、僕らの同級生だろ？ 何でこんな
に偉そうなんだ？

「つまり、早速俺達をスパイしにきたつてわけか？」

「ふつ、スパイだなんて図々しいわよ。ワタシね、あんた達に降伏
するようお願いに來ただけよ。生徒会長になるのはワタシ。堅氷君、

さっさと諦めれば？」

Oh、なんて自信と傲慢さ。やっぱり、生徒会長になるにはこれくらいの器ってやつが必要なんだろうか？

だが、このイタルに関しても、その二点においては十分負けていなかったわけ。

「紅子だがベニヤだが知らんが、会長になるのはお前じゃ無い、この俺だ。ひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっ」

これじゃあまるで子供の喧嘩。先行き不安でいっぱいになった僕が、二人の仲裁に入ろうとしたその瞬間、この屋上にまた新たな人物が姿を現した。

鞍馬さんと違い、身長は低く、良く言えば清楚な、悪く言えばちよつと地味めな感じの小柄な女性。

「べ、紅ちゃん。止めてよ、こんなところで騒いじゃ駄目だよ」

「アズネ、止めないで。こいつワタシに喧嘩売ってきたのよ？ だってベニヤよ？ ベニヤ」

「でもでも、たぶん紅ちゃんも酷いこと言ったんでしょ？」

アズネと呼ばれたその女生徒は僕らの方に向き直り、深々とその頭を下げる。

「あのあのつ、紅ちゃんが、ご迷惑おかけしました。… 堅氷至君と、花嵐君ですよね？」

「ええ、まあ。えーっと、もしかして君、この鞍馬さんの推薦人？」

「はいっ。私、私、東あずねって言います。紅ちゃんったら、ワタシの対戦相手がどんな奴か見てくるって言ったきり、一人で突っ走って行っちゃって。どうもすみませんでした。ほら、紅ちゃんも」

「何よアズネ、こんなやつらに謝ることなんて何も無いわ。もういい、行こっ」

去り際、何度も頭を下げていった東さん。それに引き換えこちらに振り替えることも無く嵐のように去って行った鞍馬さん。

「行っちゃったよ。結局何だったんだ、あの二人？ でもまあ、あんな奴と争うはめになるとは、前途多難だなイタル」

……？ 可笑しい。反応がない。

イタルの奴、二人が出て行った扉を何故かじっと見つめている。

「おい、イタル？ どうした？」

「……………可憐だ」

「カレンダー？」

「あずま、あずねちゃんか……………。うひゃひゃひゃひゃっ」

そう言い残したイタルは、心ここにあらずといって状態で、僕を置いて一人校内へと戻って行ってしまふのだった。

前途多難。

とは言つものの、一度引き受けてしまった以上、中途半端で終わるわけにはいかない。

鞍馬紅子。まずはこいつがどんなやつなのか調べてみる必要がある。

だが、ここで僕は、ふとある疑問が浮かんだ。

… そもそもどうして鞍馬さんは、僕らが屋上にいるって分かったんだ？

誰かに行き先を告げておいた覚えは無いし、たまたま姿を見られていたなんて可能性も低いと思う。

僕の考え過ぎだろうか？ 何だか堪らなく嫌な予感がすることだけは確かだった。

僕がそんな事を考えていた刹那、おなじみのボンという効果音とともに、リンネが突然姿を現す。

「お待たせしましたー、リンネちゃん登場です。ってあれ？ 一足遅かったかな？ 嵐、今ここに誰かいたでしょ」

「あ、ああ。いたよ。いたけど… まさか」

「にははははは、そうだよ、そのま、さ、か。次の試練だよ、嵐。さっきまでこの場所であたしのセンサーが反応してたんだよ？」

ノオオオウ。やっぱりか、やっぱりそうなのか。

「となると、対象者はイタルか、鞍馬さんか、東さんってことにな

るわけだ」

僕の見た限り、イタルはいつも通りのダメ人間だった。やつを除外すると考えれば、残り二人のうちどちらかということになる。

これは聊か厄介なことになってきた。唯でさえ苦勞の多いこの會長選に、もしも何らかの伝承まで絡んでくるとしたら。

僕は、そう考えただけで眩暈がしてくるのだった。

「リンネ、反応は？ センサーは今どっちを指してる？」

そう言っただけで上がったリンネのアホ毛は、いつも違い、光り方が微弱で方向も定まっていなかった。

「あちゃー、圏外だねこれは」

「はあ？ 圏外？ そんな事ってあり得るのか？」

「対象者があたしからよっぽど遠くに離れた場合、一時的にこうなることもあるけど」

おいおいおい、二人はさっきまでこの屋上にいたんだぞ。どんなに早くてもそう遠くへは行けないはず。これって、つまり。

「何らかの伝承による影響。それ意外考えられないよな。何がどうなったのか僕には想像もつかないけど」

「しよーがない、今日のところは一先ず様子を見よつか、嵐。この学校に通ってるとしたら、明日も必ず現れるよ」

翌日

結局、幸か不幸か今年の立候補者はイタルと鞍馬さんだけ。つまり、二人の直接対決となる。

桜ヶ丘第二学園の場合、立候補者が決まってから実際の投票日までの時間はわずか3日間しかない。

つまり、今日が火曜ということ、金曜日が投票日ということになる。何と言っても時間との勝負なのだ。

「なあ嵐。選挙運動って言ってもさ、具体的には何すりゃいいんだろな？」

こいつ、そんなことも知らずに立候補したのか。僕は、ますます気が遠くなるのを感じた。

「まあ、お前のことだからそんなことだろうとは思ってたけどね。ほら、コレ」

僕はイタルの前に何十枚ものポスターを差し出す。

「！ おおお。ポスター、俺のポスターじゃないか。やるな嵐。昨日のうちに作ってくれたのか？ それにしてもよ、やっぱり俺ってこう見るとカッコいいよな？ な？」

そりゃそうだ… スマンなイタル。ばりばり修正済みだ。フォトシヨの力って凄い。

「ほら、取り敢えずイタルはこいつを校内に張ってきてくれ。あ、くれぐれも節度を守ってだぞ？」

「うおっしやー、任せるー」

自らのポスターを抱え、勢いよく教室から飛び出るイタル。本当に分かってるのか？ あいつは。

「はあ、委員長のくせに世話が焼ける。よし、次は…」

「あは。花君、何だか委員長のお母さんみたいだね」

僕らのやりとりを見ていたクラスメイトが話しかけてきた。

「え？ お母さんは勘弁してよ、せめてそこはお父さんかお兄さんでしょ」

「えーっ、絶対お母さんだよ。それで、どう？ 2・Dの鞍馬さんには勝てそう？」

「うーんどうだろう。僕が幾らこっやってサポートしても、結局はイタル次第だからね。あ、そうだ。その鞍馬さんってどんな人なのか、何か知ってる？」

「鞍馬さん？ 見たまんまだよ。気が強くて、我的強い高飛車な感じ。実は私、中学の時彼女と一緒にのクラスになったことがあったんだけどさ、やっぱり昔からあんな感じだったなー。自然と周りに敵

を作っちゃうタイプっていうの？ だから、一人でいる事が多かったかも」

確かに、いきなり僕等に宣戦布告をするくらいだ、負けん気が強そうタイプではある。

「でもね？ この高校に入って、東さんっていう友達が出来てからは、そういうことも大分減ったみたいだよ」

あずま。昨日のあの東さんの事だろう。彼女が暴走しがちな鞍馬さんのストッパー的な役割をしているのかもしれない。そう言えば昨日もまさにそんな感じだったな。

「そっか、ありがとう。確かに強気なタイプだとは思ってたけど、昔からそうなんだね」

お調子者委員長 VS タカビークイーン

生徒会長としてはどちらも微妙なんじゃないかなんて、口が裂けても言えない。

それに愚痴っけていても仕方がない、一先ずは行動あるのみ。

僕は、残りの分のポスターを抱え教室を後にした。

「遅い、遅すぎるわ、あんた達」

高圧的なこの言い草、僕が後ろを振り向くと案の定、そこには鞍馬さんがいた。

「今更ポスターを張り出すようじゃ、遅すぎるって言ったのよ、花君」

そう言って辺りを指差す鞍馬。ここらの掲示板は、既に鞍馬のポスターや応援文で埋め尽くされていた。

どうやら僕達、大分後れを取ってしまったらしい。

「確かに、君達の方が一枚上手だったみたいだね。… 流石は東さんだ」

「くおおら、そこはワタシでしょ。ワタシを褒めるところでしょ。」

まあ、あずねの指示つてのは事実だけだ」

こうして顔を会わせたのも折角の機会だ。何でもいい、情報を引き出せるだけ引き出してみよう。

「ところで鞍馬さん、君は何で生徒会長になりたいんだ？」

「はあ？ 花君、そんなくだらない質問しないでよね。そんなの決まってるじゃない。この学校をワタシの思い通りにしたいからよ。学校の為でも、ましてや生徒のためでもない。ワタシは、ワタシの為だけに、生徒会長になるの。文句ある？」

イタルといい、鞍馬さんといい、私利私欲をここまで全面的に押し出せるつてのはある意味恐れ入る。

「そう言えば堅氷はどうしたのよ？」

「ああ、イタルなら」

僕がそう言いかけた瞬間、僕の言葉をさえぎるように鞍馬さんが叫ぶ。

「あんにやろう、アズネに何してんのよ！」

「え？ どこ？ どこにいる？」

鞍馬さんの言葉に辺りを見渡してみるも、イタルも東さんの姿も見えない。

不審に思った僕は、再び鞍馬さんに向き直る。

「二人とも姿が見えないけど… って何やってんだよ、鞍馬さん！

嘘だろ、ここ何階だと思ってるんだ！」

三階だ。にもかかわらず、何を考えているのか廊下にある窓から直接下へ飛び降りようとする鞍馬さん。

僕が止めたのも束の間、彼女の姿は既に窓から消えていた。

「おいおいおい、冗談だろ。とてもじゃないけど正気とは思えない…」

すぐに窓へと近づき、恐る恐る窓下を見るものの、既に彼女の姿はどこにも見当たらなかった。

「嵐、見た？ 今の。あたし今ので確信しちゃった」

僕の隣に、いつものごとく突然リンネが現れた。

「やっぱり伝承か。ということは、鞍馬さんがとり憑かてるってことで間違いないんだな？」

「うんうん、しかもそれだけじゃないわ」

「それだけじゃない？」

「あの子に取り憑いた伝承は恐らく天狗。厄介な事に、彼女はその力を使いこなしてしまっている」

伝承の力を使いこなす？ そんな事ありえるのか？ 相手は人間に対して害をなすだけの存在のはずである。

「そもそも人間が伝承の力を使うなんて事、あり得るのか？ しかも天狗ってあの鼻の長い天狗？」

「とり憑かれた人間との相性が、恐ろしく良かったりすると極々稀にね。ねえ、嵐、天狗ってどんな力を持つてるかしってる？」

「空飛んだり、団扇で風を起こしたり、神通力を使ったり、怪力だったり。何か仙人みたいな感じ？」

「うんうん。どう？ 何か思い当たる節は無いかな？」

… あ。

昨日、僕らの居場所にいきなりやってきたり、さっきもイタルと東さんがどこにいるのかも分かってたみたいだった。

それに、窓から飛び降りたのもきつと。

「リンネ、彼女がその伝承の力をコントロールして、その力を使いこなせてるんだったらさ、僕らがそれをとり被う必要ってあるのか？」

「大アリだよ、嵐。だって相手は天狗だよ？ 今はまだ彼女が制御出来てるみたいだけど。天狗の力なんて、一人の人間がコントロールするには大きすぎる。力が暴走しちゃうのも時間の問題だよ」

「まあ、そういうものか。でも天狗ねえ」

確かに、なんとなく天狗が似合いそうな感じだよな、鞍馬さんって。

「でもね、その天狗の場合、被う方法の相場は決まってるんだ」

「待て、リンネ。言うなよ、絶対言うなよ……ズバリ、鼻をへし

折ることだろ？ 勿論、比喩的な意味で」

「にははははは、嵐大正解。ね？ 分かりやすいでしょ？」

そのまんまだな。しかも今回の場合、ご丁寧にもその舞台までちゃんと用意されている始末。

「それじゃつまり、イタルのやつに本当に生徒会長になってもらうしかないじゃないか」

「そーいうこと。で、肝心のそのお友達は？ 嵐、あなたは天狗ちゃんを追わなくていいの？」

「そうだった。あーくそ、嫌な予感しかない」

僕は急いで鞍馬を追いかける。とは言うものの、僕には彼女のような力があるわけじゃない。

「リンネ、お前のセンサー反応してる？」

「うん、今は大丈夫みたい。あっちだよ、嵐」

リンネの力を借り、僕は鞍馬さんを追いかける。

中庭

「って言うってんでしょ？ えーい、とにかくアズネから離れなさい

よー」

「べ、紅ちゃん、落ち着いて」

「そうだぞ、俺はただあずあずと喋っていただけじゃないかよ。同じ生徒会長選の関係者としてな」

「お前があずあず言うな！」

案の定、言い争いになってしまっている様子。僕は慌てて仲裁に入る。

「はいストップ。イタルも鞍馬さんもそこまでにしとこう。唯でさえ選挙運動中なんだ。こんなところを見られでもしたら、どちらにとっても利益にはならないはずだろ？」

「そうだよ、そうだよ紅ちゃん。こんなことしてちゃ駄目」

「止めないでアズネ。だって、こいつが」

「だからさー、俺が何したって言うんだよ？　ただ単にあずねちゃんに喋ってただけじゃんよ」

「それよ！　さっきからあずあずだとかあずねちゃんだなんて馴れ馴れしいって言ってるの」

全然僕の話聞いてくれない二人。頭が痛い。何というかこの二人、実は似たもの同士なんじゃないだろうか。

「イタルも鞍馬さんも静まれこんにゃろ、人の話を聞けー」

僕や東さんの仲裁も虚しく、静まることを知らない二人。

こうなると僕等に出来る事はただ一つ。気の済むまでやらせてあげることだけ。

僕と東さんは近くのベンチへと腰を下ろした。

「ごめん、東さん。うちの馬鹿イタルが迷惑かけちゃったみたいだね。そのせいで鞍馬さんまで」

「そんなそんな。迷惑なんて何もありませんよ？　それに、こうしてみるとあの二人、何だか似たもの同士って感じしません？」

「それは僕も思ったけどさ、あれは似たもの同士っていうより、同族嫌悪って感じじゃないかな？」

「そうかも。どちらかといえば、似た者同士は私達の方？」

「あー、そうかも。お互い、苦勞が絶えないみたいだし」

「あは、苦勞は言い過ぎですよ、花君。でもでも、そんな紅ちゃんだからこそ、本気で彼女を生徒会長にしたいって思ってるんです。だから、二人には負けませんからね？」

「やっぱり、あちら側も本気だ。本気で生徒会長を狙ってくる。これは…　是が非でも負けられない。」

それぞれの私利私欲思想惑を内包しながら、選挙運動一日目は幕を閉じた。

残すは二日。投票前日の三日目には全校生徒前での演説がある。

つまり、それまでに何とかある程度の差をつけたいわけで。
何かとっておきの秘策でもあれば…。

選挙運動二日目。

僕とイタルはいつもより大分早く登校していた。ズバリ、朝から校門で挨拶運動するためだ。

生徒会長選の定番だけど、まさか自分がこれをやる日が来るなんて夢にも思わなかったわけで。

余談だが、あまりに早く起きすぎてしまったので、今朝は僕がダングをたたき起こしてやった。勿論、ヒップドロップでだ。

我ながら大人げないとは思いつつも、積年の思いもあった故、躊躇することなく思い切りかましてやった。あいつの驚きっぷりといったら、BDディスクに保存して後世に残したいくらいだった。おかげで朝からダングの鉄拳制裁をあびたものの、僕はいつにもまして上機嫌だった。

「何だよ、嵐、やけに嬉しそうじゃねーか。何かいいことでもあったか？」

「ああ。たまには早起きもいいなと思って。でもお前から挨拶運動したいとか言い出すとは思っても見なかった。やっと本気になってきた？」

「だからよ、俺は最初っからずっと本気だったの。勿論、あの紅子とかいう女にも負ける気はないぜ」

「そっか。そりゃ悪かったよ」

そんな話を話すうちに、我が校の校門が見えてきた。同時に、見覚えのある人物が二人。

「イタル、門の前見てみる」

「あ？ …… うおおお、あずあず！」

イヤ、確かにそうなんだけど、僕が言いたいのはそこじゃない。

つまり、またしても二人に先を越されたってこと。

「あら、あんな達。やっぱ遅い遅いそのよね。遅すぎる。ワタシ達と本気でやりあう気あるの?」

「笑止千万。紅子よ、これくらいで俺に勝ったつもりか?」

相変わらず、顔を会わせれば言い争いを始める二人。そんな二人をよそに僕は暢気に挨拶を交わす。

「お早う、東さん。流石に早いね。僕達もかなり早く来たつもりだったんだけどな」

「お早う嵐君。これ、紅ちゃんの提案なんですよ? 私もちよっと早すぎだよって思ったんですけど、結果的には嵐君達より先にはじめられたわけですから。やっぱ紅ちゃんは凄い」

……今のところ、鞍馬さんは天狗の力を制御出来ているようだった。

「先をこされちゃったなら仕方がない。イタル、反対の門の方に行こう。ここより人通りは少なくなるけど、やらないよりマシだ」

「お早うございませす。生徒会長候補、堅氷至をよろしくお願いします」

疲れた。

正直朝から声出しっ放しするのは結構疲れるもんだ。

とは言え、相手は天狗。こちらの行動を先回りするくらい訳ないのかもしれない。事実、イタルの行動なんて始まって以来ずっと読まれっぱなしだ。

ここらで一発逆転しないと、どう考えても勝機はないわけで。

「あれえー、嵐くん。こんなところでどうしたのお?」

頭を抱えてうんうん唸る僕に、どこか聞き覚えのある声が掛けられる。

「え? 小雨先輩! 先輩こそどうしたんですか? こっちの門か

ら入ってくるなんて珍しいですね。まさか、また放浪してたんですか？」

「あはははは、良く分かったねー。おねーさん嬉しいなあ」
相変わらずの小雨先輩である。
「よし。」

……ちよつと反則技な気もするけど、手段を選んでいる場合じゃない。

これはもう、ただの生徒会長選挙ではないのだから。

「小雨先輩。先輩にはいつも助けてもらってばかりですけど、僕の我儘をもう一つ聞いてもらえますか？」

「んもう。遠慮なんてしないでよお嵐くん。ウチと君の仲だもん。ウチも、嵐君に頼られて嬉しいんだよお？」

「ううう、先輩有難う。先輩こそ本物の天使ですよ。それで、実はですね」

お昼休み 校内

「あーあー、ごほん。えーつとお、生徒会長に立候補しました花嵐をよろしくうー」

「先輩、立候補したのは僕じゃなくてコイツですって。堅氷イタル。僕はただの推薦人」

「あははは、そうだったけ？ ごめんごめん。いやあー、でも何だか緊張しちゃうなー」

「俺あもう、先輩が俺の応援をしてくれてるっただけで感無量っス。もう一生ものの思い出っスよ」

「君、大げさだなあ。あはははは」

僕とイタル、そして小雨先輩はお昼休みを利用して校内での挨拶回りを行っていた。

こちらとて必死。利用できるコネクションは何でも利用させてもらう。

案の定、小雨先輩の知名度を利用した挨拶回りは大成功だった。

「でもよ、嵐。前から思ってたんだが、お前と雨守先輩達って一体どういう知り合いなんだよ？俺が先輩達の話をした時なんて、この学校にそんな先輩達がいることすら知らなかったじゃねーか。それからの短期間でどうやってお近づきになったんだ？」

イタルよ、何も今それを言い出す必要は無いんじゃないのか。普段は細かいことなんて全然気にしな癖に、こういうことだけは鋭いから困る。

「あー、それはねえ、嵐君がウチらの…もががが」

僕は慌てて先輩の口をふさぐ。この先輩のことだ、聞かれたら素直にリンネや伝承の事を喋ってしまいそうで気が気でない。

別に誰かに喋ったらいけないという制約はないものの、あくまで今は眼の前の生徒会長選挙に集中して欲しかった。

「ごほん。いーだろ、イタル。たまたまだよ。それに、人と人との出会いに理由なんてい必要か？」

— 先ず口から出まかせでごまかしてみる。まあ、こんないい加減な回答で誤魔化し通せるとは思えないが。

「うおい、嵐！お前………今、実にいい事言った。その通りだ。理由なんていらねえよな。流石は我が心の友だぜ。ひゃっひゃっひゃ」

そして何故か小雨先輩まで。

「うえええん。おねーさん感動しちゃった。やっぱり嵐君はかっこいいんだからあ、もう」

ははは、良かった、二人ともちょっとアレな人で本当に良かった。「よおーし、おねーさん頑張っちゃうぞお。みなさあーん、花嵐いをよろしくうー」

先輩、だから立候補者は僕じゃないんですって。

こうして、何だかんだで昼休みの間中、挨拶回りを続けた僕達三人。

流石に雨守の名は伊達ではなく、効果は抜群。鞍馬勢に大きな差をつけられた気がする。

やっぱりちよつと反則技な気がするけど、こういう人脈やコネも実力のうちってことで。

放課後

「そう言えばイタル。お前、明日の全校生徒の前での演説、内容はちゃんと考えてあるよな？」

「嵐、そりゃー愚問つてもんだぜ。俺はな、この高校に入った時から生徒会長を夢見てたんだ。当然、そんなこたあ考えてあるし、何十回とイメージトレーニングをしてきてる。抜かりはないぜ」

「へえ、そっか。イタルがそこまで考えていたとは全然知らなかったよ。まあ、そこまで言うなら大丈夫そうだな」

「当然だ。ひやつひやつひゃ」

「よし、選挙活動も後半戦。放課後も、門の前で挨拶運動やらビラ配りでもしときますかね」

ボンという効果音と共に、そんな僕等目の前に、慌てた様子のリンネが現れた。

「嵐、大変だよー。天狗ちゃんの反応が可笑しいの」

「こんな時に限って……イヤ、こんな時だからこそ、か。」

「スマン、イタル。先に始めててくれ。僕、ちよつと用事を済ませてから合流する」

僕はそう言い残し、大急ぎで教室を後にした。

リンネのセンサーを頼りに、鞍馬さんの元へと向かう。ちなみに、リンネのセンサーは、何故か先ほどからちかちかと点滅を繰り返し

ている。

最悪の事態。

恐らく、最も恐れていた力の暴走が起こってしまったのだろう。場合によっては、生徒会長選挙どころではなくなってしまうかもしれない。

リンネのセンサーの反応が強くなる。

「嵐、近いかも。この辺りだと思っただけだなー」

この辺り。僕らは体育館の裏に来ていた。

ドラマなんかだと良く使われるロケーションだけど、実際にこうして来るのは初めてだ。

鞍馬さん、どうしてこんな人気のない場所にいるのだろうか？

「あ、見て嵐。あそこ」

リンネとセンサーが指し示すその場所。そこに、鞍馬さんは倒れていた。

「鞍馬さん！ 大丈夫か？ しっかりして」

案の定、天狗の力を制御しきれなくなったようだ。大粒の汗を額に溜める鞍馬さんを何とか抱き起こす。

「… えっ、花君？ あんたどうしてここに？」

未だ虚ろな表情の鞍馬さん。一先ずは意識を取り戻したのはいいが、これはもう猶予が無い。僕は単刀直入に切り出した。

「鞍馬さん、君、不思議な力を持っているみたいだね」

「…… 何で知ってるの？ ワタシの秘密、何であんたが知ってるのよー！」

「落ち着いて。とにかく僕の話聞いてくれ。君のその力。例えば三階の高さから飛び降りたり、思い浮かべた人物が今どこにいるかを感知出来たり、もしかしたら、空を飛ぶこともできるのかもしれない。でもね、これらの力は元々、君にとり憑いた天狗の伝承による力なんだ」

鞍馬さんは黙って僕の話聞いてくれてる。もしかしたら、ただ単に意識が薄れて言っているだけかもしれないけど。

とにかく、僕はあのワードを言うため話を続けた。

「僕はそんな伝承を被うための天使の使いなんだ。荒唐無稽な話に聞こえるかもしれないけど、実際にその力を使っていた君なら、こんな僕の話も信じられるよね？」

リンネは慌てて天使のキツスを施す。

鞍馬の顔から少しだけ苦痛の色が消えたように見える。

良かった。リンネが干渉する事で、天狗の力を多少なり押さえつける事が出来たようだ。とは言うものの、こんな当然、ただの時凌ぎに過ぎないわけで。

「やほー、くららちゃん。あたし、天使のリンネ。あなたにとりついた天狗を被いに来たよー」

「天使？　じゃあやつぱり、ワタシ死んだの？」

「にはははは、だいじょーぶだいじょーぶ、死んで無いよ、くららちゃん。今はまだ、ね」

笑い顔から一変、急に真剣な顔になったリンネが続ける。

「くららちゃんも自覚してたでしょ？　あなたがその力を使うたび、あなたは自分が自分で無くなるような感覚に襲われていたはずだもん。このまま天狗の力を使い続けたりしたら、間違いなく体に乗っ取られちゃうよ？　くららちゃん」

「鞍馬さん。だから僕達が君の……」

そんな僕の言葉をさえぎり、鞍馬さんは叫んだ。

「絶対に嫌。この力を手放すなんて、考えられないわ。ワタシがどうなるうと、そんなのワタシの勝手。天使だか何だか知らないけど、余計なお世話だったの。それに、あなた達との勝負はまだ終わって無い。そうでしょ？　ま、一応は助けに来てありがとう。それだけはお礼を言っておく。それじゃ、ワタシ帰るから」

そう言っつてふらつく足取りで立ち去ろうとする鞍馬さん。

「お、おい、鞍馬さん」

「待って嵐。無駄だよ」

「無駄って、リンネお前。このままじゃ鞍馬さん、伝承に乗っ取ら

れちゃうんだろ？ いいのか、このままで」

「嵐、思い出してみて。この悪魔を被うのに必要な事が、何だったかを」

天狗を被うために必要な事…。

「彼女の鼻、まだ折れてないでしょ？ いづれにして、このままじや彼女の中の天狗を被うことはできないわ。それに、くららちゃん自身もきつと自覚してると思う。自分の力が普通じゃない事も、このままじゃいけないことも。だからこそ、こんな人気のない場所で一人、伝承による精神汚染に耐えていたんだと思う」

「結局、鞍馬さんを救うには生徒会長選で彼女に勝しか無いってわけか」

「うんうん。それに、あたしが干渉した事でその決着がつくくらいまでなら、彼女の体も何とか持つと思う。いい、嵐？ くららちゃんを天狗にしちゃ、絶対にダメだよ？」

僕は、静かに頷き返した。

選挙運動三日目

今日の午後には全校生徒の前での演説がある。それが選挙運動の締めになっていて、後は翌日の投票&開票を待つだけという形になっている。

残された短い時間を有効活用するため、僕は朝から再び校門の前に立っていた。

「うーす。おはよーさん。元気かー？ えー、花嵐をよろしくー」

「いやいやいや、先輩、五月雨先輩、立候補したのはこっちですよ。こっち。僕はただの推薦人」

「ああ、そうだったけ？ どちらでもいいだろそんなの」

どっちでも良くないです先輩。というかめちゃくちゃ眠そうだな

五月雨先輩。僕と同じで朝は苦手なタイプなのかもしれない。

「やるからには、勝ってもらわなければ、わたくし達が協力する意味がありませんわ」

と、春雨先輩。

昨日の鞍馬さんの様子を受けて、もはや完膚なきまでに叩き潰し、その鼻をへし折る事でしか彼女を救えないと理解した僕は、昨日の小雨先輩に引き続き、朝から春雨、五月雨両先輩方にも協力を仰いだ。

「嵐よお。俺あ、夢でも見てるのかな？ あの雨守先輩達が、わざわざ俺のために、俺のために……あの五月雨先輩が……」

そう言つて涙ぐむイタル。

そう言えばコイツ、五月雨先輩のファンだったっけ？ そのくせ、東さんにも気があるようだし。なんとも無節操なやつである。

本人曰く、それはそれ、これはこれ。お前には絶対に分かんらんとのこと。

「五月雨先輩、コイツ、先輩のファンらしいですよ？ 物好きなや」

「ごふつ。先輩から拳を受け、うづくまる僕。そんな僕を尻目に五月雨先輩に近寄るイタル。

「お前、アタシのファンなんだって？ なかなか見どころあるじゃねーか」

そう言つてイタルの肩をばしばし叩く五月雨先輩。

「！！！！！！ うおおおおおお、生徒会長に、俺はなる」

そう叫んだあと、どこかへと走り去ってしまったイタル。

気合いが入ったのはいいことだけど、あれではただの不審人物である。

仮にも生徒会長になろうという人物があれなのだから、僕は頭を抱えずにはいられなかった。

「なんつーか、流石にお前の友達だけあって……変態だな。伝承絡みの話とはいえ、本当にあいつが生徒会長なんかになっていいのかよ？ アタシは不安だぜ」

「そうですね… まあ、そこは花さんに責任を取って子守りをしてもらうしかないでしょうね。ねえ、花さん。あなた、ただの推薦人で終わろうなんて思っていないませんか？ もしも堅氷さんが生徒会長になったあかつきには、あなたにも勿論生徒会に入っていたできますわよ」

「くつくつく、いいなそれ。しかしお前が生徒会か。心底似合わねーな」

「天使代行としての仕事もあるでしょうけど、あなた、帰宅部ですし基本的に暇人ですものね？ 問題なしですわ」

やはり、この禁断の手は悪魔の取引だったらしい。よもやこんな展開になるとは。というかこの二人、僕に対して容赦ないなー本当に。

「ま、まあ、本当にイタルが生徒会長になれば考えますよ」

「あら？ 何言ってますの？ こうしてわたくし達が応援している以上、あなた達が負けることなんて、断じてありませんわ！」

こうして朝の挨拶運動に次いで、お昼休みは小雨先輩も加わり、実に豪華なドリームメンバーでの選挙運動が行われた。

残すは午後の立候補者による演説。

だが、ここに来て一つ気になる事が浮上した。今日の朝から、鞍馬さんと東さんの姿を見ていないのだ。昨日も僕らより早く門にいたものだから、てつきり今日もいるものとはかり思っていたが、何故かその姿を見つけない事が出来なかった。

これには彼女たちなりの何らかの意図があるのだろうか？ それとも単に、鞍馬さんに何かあったということか？

昨日の今日だけに、恐らく後者の確率の方が高い。

僕は、午後の演説が始まる前、二人を探してみる事にした。

「リンネ、居るか？」

「ぼおん！ という聞きなれた擬音とともに、何も無い空間から突如として天使が現れる。」

「居るよー。くららちゃんを捜すんでしょ？ あつちだよ」

リンネのセンサーには反応がある。どうやら、校内にいるのは確かなようだ。

「あつちも移動してるみたい。上だよ、上ー」

何故かは分からないが、彼女達は屋上に向かっているらしい。

僕が屋上への扉を開けた瞬間、一人の人物が横たわっているのが眼に入った。

「あ、誰か倒れてる。くららちゃんだよきつと」

「ちよつと待ったりリンネ。あれは… 東さんだ」

僕は急いで彼女に駆け寄り声をかける。

「東さん、東さん大丈夫か？ あー糞、何でこんなことに」

「嵐、この子命に別条は無いみたいだけど、天狗の神通力で気を失わされたみたいだよ」

何があつたかは分からないけど、鞍馬さんと一緒にいた東さんは、鞍馬さんの天狗の力により、倒れた。

鞍馬さん自身は恐らく、この屋上から直接飛び降りて姿を消したのだろう。

「とりあえず、東さんを保健室に運ぼう」

僕が彼女を運ぼうとした瞬間、屋上の扉が開かれた。

「さあーと、最後の演説練習でもしときますかね… … って嵐？ 何でお前こんなところに？」

次の瞬間、眼にも止まらぬスピードで、イタルの拳が僕を見舞った。

「嵐、貴様！ あずねちゃんに何をした？ 何しやがった！」

「ちよつと待てイタル。落ち着け、僕じゃない。これは鞍馬さんが…」

しまった。イタルのあまりの剣幕に、思わず口を滑らせてしまう駄目人間な僕。

「あの高飛車女が？ おい、本当か嵐？」

「あー、そつだよ。僕も何があつたかまでは知らんけどな。僕が屋

上に来た時には既に鞍馬さんは消えた後で、東さんが倒れてたんだ。状況から考えても鞍馬さんが何か知ってるのは確かだろーよ」

「嵐のバカバカ、煽るってどーすんのよー」

「あの野郎……」

そう言い残し屋上から立ち去るイタル。

イタル、分かっているのか？ もうすぐ立候補者の演説が始まるんだぞ？

鞍馬さんの力が暴走し、生徒会長選挙もめちゃくちゃなんて事になつたらなす術なし。

だが一先ず、今は東さんを保健室に運ばねば。

「……はな、くん。べ、に、ちゃんを……おねが、い」

うわ言のように、その消え入りそうな声で僕に訴える東さん。そんな彼女に対して僕は、ただただ頷く事しかできなかった。

彼女を日射病で倒れていた、という名目の元保健室へと送り届けた僕は、急いで校庭へ向かう。

まずい、もう演説開始の時間だ。イタルは？ 鞍馬さんは？

僕が校庭に到着したとき、演説は既に始まっていた。

意外な事に、鞍馬さんは壇上でとても伝承に取り憑けているとは思えないくらいに、冷静に淡々と演説を行っていた。

どうなってる？ 彼女の力は暴走したんじゃないのか？ それに、イタルの姿がどこにも見当たらない。

状況をイマイチのみこめない僕は、しばし様子を伺うため、鞍馬さんの演説に耳を傾ける。

「ワタシは、ワタシ自身の力で……この力で、この学校を、いえ、あなた達を変えて見せる……例えば、こんな風に……ねっ！」

その言葉の直後、校庭に大きなつむじ風が発生する。

「おいおいおい、冗談じゃない。彼女、ついにやっちゃったぞ」

「うはぁー、さっすが天狗だね。風を操るくらいわけないってん

だもん。そもそも風を操る事が天狗の本来の能力なんだよ」

「いやいや、感心してる場合じゃないだろリンネ。どーにか出来ないのかこれ…ってうおおお、こっちきたぞ！」

「にはははは、あたしの力じゃ無理無理。こうなっちゃったら、くららちゃんを止めない限りこの風は止まらないよ」

完全に力が暴走している。というか、まさか全校生徒のいる前でこんな風に能力を発現させるとは。

結局、リンネの干渉でも天狗の力を押さえつけておくことが出来なかつたらしい。

ド畜生。とにかく今は、彼女をなんとかするしかない。

校庭の生徒達が避難していく中、ただ一人壇上の鞍馬さんに近づく僕。

が、簡単に行くはずもなく。そもそもこの風は自然現象ではなく、彼女が引き起こしたつむじ風なのだ。当然、彼女の想いのまま動いている。つまり、その場に僕しかいなくなれば、必然的にターゲッティングは僕の方に向くわけで。

「ちくしょー。まさか、こんなバカでかい風に追いかけられる事になるなんて思いもよらなかつたああああああああ」

あ、駄目だこれ、死んだかも。

そもそもリンネと出会ってから、もう普通の人生には戻れないんじゃないかなんて思ったりしていたけど、まさか、死ぬときまでこんな風に普通じゃないなんて、考えもしなかつた。

正に、僕の真後ろまでつむじ風が迫ってきたその時、予想しなかつた一人の人物が、颯爽と鞍馬さんに近づきその胸倉を掴んだ。

「うおい！ 貴様！ 自分の親友を傷つけておいて、何が生徒会長だ！ 底が知れるぞ、鞍馬！ お前、自分が偉くなったとも思ってるのか？ 全部自分の思い通りになるとでも思ってたのか？ ふざけるな！ 友達一人とも分かりあえない奴に、上に立つ資格なんかあるわけねーだろが！」

イタルだ。

どうやら、東さんを傷つけられて臨界を突破してしまったらしい。と言うか、あいつ、あんなに熱いやつだったのか。普段お茶らけちやいるが、流石は御曹司。やる時はやるやつなのだ。

「… だって、だって」

その目から一筋の涙を流し、気を失う鞍馬さん。

と、同時に僕の後ろに張り付くように追って来ていたつむじ風は、跡形も無く消え去った。

や、やった。何とか、助かった。

「お疲れー、嵐。今回、カツコいいとこ全部持ってかれちゃったね？ でも、つむじ風に追いかけてまわされるなんて本当嵐らしいよね。ぷぷっ」

ほっとけ。どうせ僕はいつもいつもそんな役ばかりだよ。

僕は壇上の二人に走り寄る。

「イタル、お前どこ行ってたんだよ。啖呵切って僕より先に屋上から出たくせに」

「ん？ ああ、あれな。あずねちゃんのおんな姿見せられてよ、一気に頭に血が上っちゃったせいとか、どこかに演説のメモ落としちゃまって」

「ずっと探してたのか？ あれだけ格好つけて啖呵切って出てったのに？」

「みなまで言うなよ、恥ずかしい。まあ、結局見つからなかったんだけどな」

「お前らしいよ、イタル。まあ、どっちにしろこれじゃあ、演説も一時中断だろうな。一先ず彼女を保健室に連れて行こう」

結局、会場が吹っ飛んだ事もあって、この日の演説は中止。

一見するとただの自然現象だけに、それが鞍馬が引き起こしたものだと思いつく者もおらず、鞍馬の責任問題には発展しなかったというところが不幸中の幸いだったと言える。

当然、雨守三姉妹は気が付いていただろうけど、だからといって

それをどうこう言うような先輩方ではない。
つまり、僕の事を信頼して、処置は僕に任せてくれているという
こと。

翌日

早朝。鞍馬さんが生徒会長候補を辞退したことで、投票が行われる事も無く、実にあっけなくイタルが新生徒会長に決まってしまった。

実のところ、鞍馬さんの鼻は、昨日の出来事で完全にへし折れてしまったのかもしれない。

前任である元生徒会長、影山薄子元会長の話を聞きながら、僕は鞍馬さんと東さんの姿を探す。

… 居た。

昨日あれから二人に何があったのかは、僕の及び知るところではないが、二人一緒に居るところをみる限り、どうやら彼女達の仲に亀裂が入ったりはしていない様子だった。

そんな二人に、僕はほっと胸をなでおろす。

物事の幕切れなんて、案外こんなものなのかもしれない。

僕等の選挙選は、こうして幕を閉じた。

放課後 屋上

「鞍馬さん、体の方は大丈夫？ まさか、こんな幕切れになるなんて思ってもみなかったよ」

鞍馬さんはどこか吹っ切れたような顔つきで空を見上げ答える。

「ええ、ワタシもよ。でもこれで良かったのよ。堅氷君の言う通り、ワタシには上に立つ資格なんて無かった。あんな力を手に入れて、つつい思いあがってしまった。この力があれば、何でもワタシの想い通りになる、なんて思ったりしてさ。最初は、ワタシを馬鹿にしたやつらを見返してやりたいだけだった。この学校を、生徒達をワタシの思い通りにしたいだなんて、そんな邪な感情、思いつきもいとこよね。その力が天狗によるものだなんて、皮肉もいいところよ」

そんな僕らのやりとりを横で聞いていたリンネがそつと鞍馬さんに語りかける。

「いい、くららちゃん。今からあなたの中に潜むその天狗の伝を完全に取り払うからね？」

「ええ、お願いするわ。ワタシにはもう必要のない力だし。こんなもの、もういらない」

彼女のその言葉を聞き届けた後、リンネは何か唱えた後、光の弓を取り出した。

「くららちゃん。最後の仕上げよ。何があってもあたしと嵐を信じてね」

一度だけこくりと頷く鞍馬さん。

それと同時に矢を放つリンネ。… 矢は見事鞍馬さんに命中。彼女の体から黒い煙が浮かび上がる。

天狗である。

「さあ、嵐、いっちょ決めちゃって」

リンネのその言葉とともに、僕の右手に鋭い痛みが走る。

さて、今回はどんな天使子武器出てくるのか？

僕の右手に出現した武器、それは。

団扇だった。

天狗だけに？ それとも夏だからか？

武器って感じは全然しないけど、ねこじゃらしなんて事もあった

からな、文句は言えない。

僕は両腕に力を入れ、思い切り団扇を振るった。

団扇から発せられた光り輝く強風は、鞍馬を覆っていた黒い影を跡形も無く吹き飛ばした。

うーん、気持ちのいい風だ。

「お疲れ様、嵐。これで生徒会長選挙も、天狗退治も終わったね。どう？ 肩の荷が下りた気分は」

「ああ、いや、まだまだよりンネ。実はまだもう一つだけ、仕事が残ってるんだ」

そう言っただけは鞍馬さんに近寄る。

「鞍馬さん。君の中の天狗は、僕らが責任もって追い払ったから。もう安心していいよ。それと、はい、コレ。うちの馬鹿大将から」

そう言っただけは鞍馬さんにイタルからの手紙を渡す。

その手紙には、汚い字ででかかど「召集令状」と書かれていた。「君も知ってる通り、生徒会の人選は生徒会長に一任されてるんだ。君がどんな人物なのか？ どんな想いを持っているのか？ 今回の騒動を通じて僕らは君の事が良く分かった」

手紙を読みながら、鞍馬さんは反論する。

「だったら、だったら、何故ワタシ何かを副会長に指名するのよ！？ そんなの有りえない」

「だから、だよ。やり方はどうあれ、君が本気で生徒会長になりたかったことは事実。そんな君にだからこそ、副生徒会長を任せたいんだ。鞍馬さんには、あんな天狗の力なんてなくても、十分副会長としてやっていけるだけの能力があると思ってるんだ。… まあ、ぶっちゃけると、僕一人じゃあの馬鹿大将を制御する自信がなくてね。君と一緒に見張ってもらいたいんだ。勿論、君だけじゃなく東さんにも声をかけてある。彼女には、会計をやってもらおうと思ってるんだ」

ちなみに僕は書記というポジションに落ち着いていた。

当初、イタルのやつ僕に副会長をやれなんて無茶ぶりを振ってきた

たものだから、慌てた僕は鞍馬さんを推薦した。そうなると当然東さんも生徒会に入ってくれるに違いないという理由で何とかイタルを説き伏せ、こうやって彼女を勧誘している訳。

そもそも僕は、会長や副会長なんて器じゃない。せいぜい書記か会計が妥当なところなのだ。

二度目となる彼女の涙を見届けた後、彼女は笑顔で答える。

「いいわ、そこまで言うなら引く受けてあげる。ただし、あいつが生徒会長に向かないと判断したら、あいつの寝首をかいてワタシが代わりに生徒会長になってやるんだからね」

そう言い放った彼女の手には、イタルの手紙とは別の紙がしつかりと握りしめられていた。

……あれって確か、昨日イタルが無くしたっていう演説のメモ紙？ 何故かは分からないけど、彼女が持っていたらしい。

そこにどんな内容が書かれていたのか？ 今となっては、それを知るのはいタルと鞍馬さんだけ。

なにはともあれ、副会長を無事引き受けてくれた鞍馬さん。

御愁傷様、イタル。良かったな。

こうして僕は、成り行き上、柄にもなく生徒会入りしてしまったわけ。

これも全部、この夏の暑さのせいには違いない。そうに違いない。

僕は、溜息を一つつき、鞍馬さんと共に生徒会室へと向かった。

END

第9話「花と嵐と花より団子　〜花団子の場合〜」

第9話「花と嵐と花より団子　〜花団子の場合〜」

季節は夏真っ盛り！　な夏休み直前。

校内は早くも夏休みの話題一色。どこに行こう、何をしよう。あれもしたい、これもしたい。

去年までの僕なら、間違いなくその一員だったに違いない。が、今年の僕は一味違う。幸か不幸か生徒会役員になってしまったのだ。

そんな楽しい生徒達を尻目に生徒会室へと赴く日々。

もつと派手な活動ばかりかと思っていたのに、まわってくるのは地味な仕事ばかり。

生徒会ってやつがこんなにも大変だったなんて思いも寄らなかった。その上、何分生徒会長が問題ありなので、その分の負担は勿論こちらにまわってくる始末。

なんて理不尽な展開。

そんなただでさえグロッキー状態の中、花家では「ある大事件」が起こる。

ああ…　果たして僕は、無事夏休みを迎える事が出来るのだろうか…。

とある土曜。休日を謳歌すべく、僕は自分の部屋に引き籠もっていた。

謳歌するのに引き籠もるとはこれいかに、などと言う無粋な突っ込み止めていただきたい。

僕には僕の、君には君のやり方があるはずなのだから。

「うっわ、嵐。折角のいい天気なのに、引き籠もる気まんまんだね。そんなんじゃないつまでたつても、もやしっ子の称号から卒業出来ないよ?」

「ちつつち。それは違うぞリンネ。僕は最初からもやしっ子を卒業する気なんて、毛頭無い」

僕は、とてもいい笑顔でそう言い切った。

「ぶーっ、嵐つてば相変わらずダメダメ何だからー。ちょっとはみたらしちゃんを見習いなよー」

「みたらしちゃん? ああ、ダンゴの事か。いやいやリンネさん、あれはダンゴが元氣すぎるだけだからね? 今日だつてこの糞暑い中、草野球の助っ人と子供サッカークラブの試合だろ? 我が妹ながらなんつーバイタリテイ」

僕の下の子ダンゴは、残念なことに親父に似て運動神経抜群な、かなりの元氣娘。

休みの日には小学生女子ながらも、こうして大人に交じり商店街の草野球などのスポーツ試合の助っ人に出たりしている。そんな有須とは正反対の性格で、子供は風の子を地で行く元氣娘なのだ。

昔から変わらずこんな感じなダンゴだけど、毎年何故かこの時期になるとそのパワフルさに拍車がかかる。

やはりアウトドア派にとっては夏つてやつはそういう季節なのかもしれない。

「ダンゴの事は置いておいて、僕が言いたいことは一つだけだよ…インドアで何が悪い?」

リンネのジト目をものともせず、僕はエアコンの設定温度を一度下げ、天高く積まれた積みゲを崩しに取り掛かったのだつた。

おいおいおい、ここで親友キャラの裏切りだと!? 攻撃の要だ

ったのに、しかもメイン装備を預けたままの離脱なんてありえないだろ、常識的に考えて。

超展開に僕が頭を抱えていたその時、誰かが僕の部屋をノックする音が聞こえてきた。

「兄さん、いますか？ いますよね？」
有須だ。

何だろう、僕の直感が全力で告げている。何だかメンドクサイ事を頼まれそうだと。

かと言って無視するわけにもいかない。

さて、どう回避しようか、などと思案するうちにリンネがいち早くドアをすりぬけてしまう。

「やほー妹ちゃん、どうしたの？」

「あっリンネさん。兄さん中で何やってます？ まさか寝てたりなんてしてないですよね？」

「にはははは、嵐ならいつものインドア万歳状態だよ。今頃どうやって妹ちゃんを回避…。」

リンネの声は大きいので良く響く。あいつ余計なことまでペラペラとー。

このままではまずいと感じた僕は、リンネと有須の会話を遮るように思い切り自室のドアを開けた。

「いやあ、有須。どうした？ 何か用かな？」

「あ、兄さん。お休みのところすみませんが、ちょっと手伝ってもらえませんか？」

「ああ、勿論いいけど。具体的には何したらいいんだ？」

「はい、花屋の店番とスーパーのタイムセール買い出しどちらかなんですが」

そう言っって右手の我が花屋のエプロンと左手のエコバックを掲げて見せる有須。

「え、店番？ 親父はどうしたんだ？」

うちの花屋の場合、規模も小さく、店先に来るお客さんもそれほ

ど多くないという事で基本的には親父一人で回している。

「それが朝から行方不明で。恐らくですけど、だんちゃんの試合を見に行つたんだと思います」

基本的には花屋は親父一人で回している。が、自由奔放すぎる親父の性格上、こつやつて何も告げずに姿をくらましてしまう事が多々あつた。

そうなるたびに、僕や有須が店番をするはめになる。

こんな状態がかれこれ10年近く続いているわけだから、親父の子供じみた行動には慣れつこになつた僕等は、多少の事では動揺しなくなつていた。

つまり、今回の事も想定の範囲内ということ。

「有須、多分見に行つたというより自分もちやっかり参加してると思つよ、それ。そうなると少なくとも午前中いっぱいには帰つてきそうもないね」

僕は、有須の左手に下げられたエコバックを掴んだ。

有須に重いものを持たせるわけにもいかないし、そもそも僕はお花屋さんの店員なんて柄じゃない。

そうなると選択肢は一つしか残されていないわけで。

「スーパーに行くよ」

そんな僕の考えを読んでいたように、有須はエプロンの前ポケットから1枚のメモを取り出した。

「すみません兄さん。はいコレ、買い物メモです」

メモに書かれた内容の多さに思わず絶句しそうになる。

そもそもうちは現状4人家族だというのに、なぜにここまで大量の食材が必要になるのか？

答えは簡単だ。

親父とダンゴ。あの体育会系コンビが食べる量が異常だからだ。尋常ではないからだ。親父はともかくとして、ダンゴなんて明らかに小学生のソレとは思えないくらいよく食べる。僕なんかよりよっぽど食べる。そのくせこつやつて毎日のように動き回っているの

太ることは皆無らしい。

「うん、分かったよ。ついでに親父を見かけたら引きずってでも連れ帰るから」

「期待してます。ではお願いしますね、兄さん」

こうして、僕はリンネを連れだつて近所のスーパーへと買い出しに向かった。

「暑い、暑い、あついー。さっきから何だこの暑さ。だから夏なんて嫌いなんだよ、ド畜生」

土曜の11時。一番暑い時間帯では無いものの、照りつけるこの太陽が無くなるわけでもなし、暑い事には何ら変わらないわけで。

「にはははは、嵐ーさっきから何回同じセリフを繰り返してるの？ 全くおおげさだなー」

「いやいや、全然おおげさじゃないですよ？ というかリンネは暑くないのか？ 飛んでる分僕より太陽に近い気がするけど」

その問いかけに対し、にいつと笑いながら頭上の天使の輪っかを指さすリンネ。

「これだよ、これ。前にも説明した通り、あたし達天使はこの輪っかで空を飛んでるんだけど、実はこの輪っか、天界の技術の結晶なの。ほら、キリキリの夢の中に入るときにも使ったでしょ？ 実を言つとあたしがドアや壁をすりぬけるときもこの輪っかの力を使っているんだ。勿論、こんな暑い日の体温調節もばっちりだよ」

今までさんざん天界なんていい加減なところだと馬鹿にしていた僕。

ああ、僕はなんて愚か者だったんだ。謝りたい。全力で謝りたい。むしろ懺悔したい。ビバ天界。

「リンネ… ほら、霧霞のときはあの輪っか貸してくれただろ？

雨守三姉妹の時も。だからさ」

「あまーい。甘すぎるぞー嵐。幾ら代行者でも、平時に輪っかは貸せないもんねー。にやはははは」

ド畜生！！！

僕は、額に大粒の汗を携えながらスーパーへと向かう。

そう言えば、ダンゴや親父が参加してる草野球やら草フットサルってそのスーパーの近くだったっけ。

帰り際ちよっとだけ覗いてみた方がいいかもしれない。

少なくとも、本当に親父がいたら是が非でも連れ帰らねば。

「いらつしゃいませー」

スーパーの入口を抜けると、涼しい風が全身を包み込んだ。涼しい。超涼しい。ナイアガラのように流れ出ている汗が急速に引いて行くのを実感する。

「ここが、噂の天界ですか？」

「嵐。幾ら何でもスーパーの冷房に感動して涙目になるのは、ちよっとどうかと思うよ？」

「だって、涼しいんだもん。暑くないんだもん」

思わず語尾に「だもん」とかつけちゃうくらい感動してる僕。ああ、何と言う安上がりな感動体質。

一通り感動しきった後、有須の買い物メモを見ながら店内を回る。特売の牛肉を買い漁り、続けてにんじん、たまねぎ、ジャガイモ、福神漬けを購入。

どう見てもカレーです、本当にありがとうございました。

いや、まあ、カレーは大好物なだけだね。けど、恐らく親父とダンゴのリクエストなのだろう。試合をした後は、無性にカレーが食べたくなるものらしい。カレーのCMって何故かスポーツ選手が出演している事が多いし。そういうものなのだろう。

まあ、僕には永遠に理解できそうも無い感覚だ。

「さて、と。リストにあったものは全部揃えたし、そろそろ帰ろう

かりンネ」

スーパーで買い物する事自体は、毎度毎度有須に付き合っているし、僕自身嫌いではない。何より涼しいし。

問題はここを出た後だ。じりじりと容赦なく照りつける太陽、唯でさえ鬼のような暑さだと言うのに、行きには無かったこの巨大な二つのビニール袋を抱えての強行軍。

恐ろしい。考えただけでも貧血で倒れてしまいそうだ。

そんな事を考えながらスーパーの外への一步を踏み出す。

… うっわ、出口の自動ドアから見える景色が、心なしか歪んで見える。厩気楼か、厩気楼なのか？

「嵐。両手にビニール袋を抱えて、そんな絶望的な表情で出口に突っ立ってるのもどうかと思うよ？」

通行の邪魔でしょ、とリンネ。

いつもはボケ役のはずのリンネに、ここまで冷静に突っ込まれると何だか悔しいやら情けないら。

これも全てこの暑さのせいだ。

僕は覚悟を決めて外の世界へと向かった。

「ねえねえ、ずっと気になってたんだけどさー、この商店街何かお祭りでもやるのかな？」

そう言ってるリンネは、アーケードをぐるっと見渡す。

明日は7月7日。そう、七夕だ。

「ああ、七夕祭りだよリンネ。って言うか、七夕って分かる？」

僕のその質問に対し、ぷくつと頬膨らませ答えるリンネ。

「ぶーっ、それくらい知ってるもん。嵐さあ、幾らあたしが天使でも、ちよつとした日本の一般常識くらいは一応持つてるんだよ？」

「ははは、ごめんごめん。でもそうか、七夕祭りか。来るときは全然気がつかなかったな」

「暑い暑い言ってるからだよー。もう、男の子なんだから我慢しな

さい」

なんて事だ、突っ込みだけでは飽き足らず、リンネ先生から説教までくらってしまった。

涙が出そう。

「そうだ。祭りも良いけどさ、一応ダンゴと親父の様子を見てから帰ろうか？ あの二人が一緒にいるとなると何しでかすか分からないし」

「にはははは、何だかんだいっても心配性だよ、嵐は」

「違う。断じて違う。僕が心配してるのは二人じゃなくて、二人が周りに迷惑かけてないかってことだよ」

リンネは何故かにやにやしている。

そうだね、男のツンデレなんて誰得だよ。嬉しくなるとも無いし、そもそも誰も喜ばないし、見苦しいし、暑苦しいだけだよ。

「まあ、ここから直ぐ近くだからさ。ちらっと見るだけ見に行こう」

「がははははっ、うおー、だんごー。ここは通さんぞー」

「おとーさん、そんなんじゃ団子は止められないよーだ」

数十メートル先からでも聞こえるこの馬鹿でかい声は、間違えようも無くあの二人のものだった。

頭が痛くなってきた。

親父、あんた何を考えてるんだ。

さらに近づいた僕は、フェンス越しに中のグラウンドの様子を伺う。

「嵐、あそこあそこ。あそこにいるみたいだよ」

リンネが指差す方向に目を向けてた瞬間。信じたくない光景が目に入る。

ジーザス。何がどうしてこうなったのか理解に苦しむ光景。

子供サッカークラブの面々に混じって、親父と一緒にプレイしている。

あの親父がただ様子を見に行くだけで済むとは思っていなかったけど、まさか小学生に混じってプレイしているだなんて。

しかも周りの子達、ダンゴ以外はみんな呆れるというよりありや完全に引いちちゃってるよ、かわいそうに。

これはさっさとって親父を連れ戻した方がよさそうだ。

「親父！小学生に混じってなにやってんだよあんだ。邪魔したら駄目だろーが」

僕の声に反応して、二人が同時にこちらに振り返った。

「ガハハハ、嵐じゃねーか。丁度いい、そこで父親のスーパープレイを目に焼き付けておくがいい」

「おとーさん、甘いよ。団子の前で余所見なんかして、い・い・の・か・なつと」

ゴールポストの前にいたダンゴが、力いっぱいボールを蹴る。その刹那、親父も負けじと思いつきボールを蹴る。

一つのボールに二人の全力がぶつかり合う。

瞬間、空気が振動するくらいの破裂音とともに、サッカーボールが弾けて飛び散った。

目の前で起きたあまりに衝撃的な光景に一瞬固まってしまったものの、すぐに二人の下へと駆け寄る。

「ダンゴ、大丈夫か？ 怪我とかしてないか？ 立てるか？」

「に、にいにい。あはあはは、大丈夫だよ。団子は大丈夫だから良かった、どうやらなんとも無かったようだ。冗談抜きで、一瞬心臓が止まるかと思った。」

僕は気を取り直して親父に目を向ける。

「親父、一応聞くけど大丈夫か？ つーかあんたやりすぎだろ。小学生に混じって何やってんだよ。ほら、帰って仕事しなさい仕事」

「ガハハハ、そうだったそうだった。十分堪能したしのう、んじやそろそろ帰るとすつか」

大体、どれだけの威力で蹴ればボールが破裂するなんて事が起こるんだらう。流石は体育会系親子。何もかも出鱈目である。僕には想像も出来ない世界だな。

…ただ、あの一瞬。親父がボールに触れる前、つまり、ダンゴ一人が蹴った瞬間にボールが破裂したように見えたのは、ただの僕の気のせいだろうか？

いや、きつと気のせいだろう。そもそも小学生がいくら力いっぱい蹴ったとしてもそこまでの事が起こるはずが無い。僕は、親父を引きずって自宅へと向かったのだった。

「親父。別にダンゴの試合を見に行くなどは言わないけどさ、流石にさっきのはやりすぎだろう。色々」と

「ガツハハハ。まあそう言ってくれるな嵐よ。わしだって最初は団子を応援するだけのつもりだったんだがな」

「溢れ出る情熱を抑えきれず、小学生に混じってプレイしたと？」

「うむ」

僕は、深い深い溜息ついてから話題を切り替えた。

ここからはちよつとまじめモードの話。

「そう言えば、明日は母さんの命日だね。7月7日って言えば世間的には七夕だけどさ、やっぱり僕にとっては前者の意味合いが強い日かな」

「ん？ んー、そうじゃな。わしらにとってはな。まあ、あいつはイベント事が好きなやつだったから。例え七夕を祝ったって、罰当たらんとと思うぞ、わしは」

先ほどのふざけきった態度や表情と違い、どこか遠い目をする親父。

「母さん、七夕好きだったもんね。この商店街の七夕祭りもさ、小さい頃母さんに連れられて何度か来た覚えが有るよ」

ここでふと先ほどの親父の言葉を思い返す。

むしろにとつては。つまり、親父と僕、それと有須にとつてはという意味。きつと、そこにダンゴは含まれない。

なぜなら、ダンゴに母さんの記憶は無いから。いや、恐らく無いはず。

元々体が丈夫な方では無かった母さんは、ダンゴを産んだ直後に亡くなってしまったからだ。

だからダンゴには母さんとの思い出や記憶は無い。写真の中だけの存在。とは言うものの、ダンゴがその事について親父や僕らに疑問や不満を漏らしたことは、これまでただの一度も無かった。

まるでそうすることが、そうやって空気を読む事が、自分の正しい態度だと言いつ聞かせるように。

僕や有須はどちらかと言えば、母さん似なのだ。僕のこの貧血ももやしっ子体質も、元々母さんから受け継いだものなんだと考えれば、何故か愛着が湧いてくるから不思議。一方のダンゴは、完全に親父似。兄妹随一の運動神経の持ち主で、元気すぎるお転婆娘。どこをどう見ても親父の血である。そんな体質はダンゴにとつて、ある意味良かったのかもしれない。

「ああ。お前や有須の手を引いて出かけるのが好きだったからな、あいつは。生きていれば、きつと団子のやつにも同じ事をしてやっただろうにな。そのせいかもしれないな。この時期になると、ついつい団子に余計なお節介を焼いちまう」

そう言つて照れくさそうな笑みを浮かべる親父。

知らなかった、親父がそんな事を考えていたなんて。

これは、ちよつとだけ見直さざるを得ないかもしれない。

「なんて偉そうに言つてみたが、単にわしが遊びたかっただけだ」
そう言つてガハハハと豪快に笑う親父。

つられるようにして、僕も、声を上げて笑った。

「ただいまー、有須。って有須は店番か」

僕は一先ず、両手に下げたビニール袋を冷蔵庫へと引越しさせる作業に移った。

この大量の食材をいかにコンパクトに効率的に冷蔵庫へと収納するか。僕は、この一見じみーな作業が結構好きだったりする。

どうやら親父も素直に店番へと戻っていったらしい。やれやれ、これでミツシヨンコンプリート。

「お疲れ様ー嵐。それにしても、きなこちゃんも嵐のおとーさんもやっぱり超元気だったね」

「きなこちゃん？ ああ、ダンゴのことね。良いんじゃないか？元気が有るってのは良い事だよ、たぶん」

「ふーん。さーて、お使いも終わったしーそろそろ次の試練が来ないかなー」

うげっ、このパターンは隠家の時と同じだ。

リンネのこの呟きはシャレにならないってことを痛感していた僕は、早々に釘を刺す。

「いやいやいや、リンネ。鞍馬さんの件を解決したばかりだろ？そう続けて来る訳無い…… よね？」

僕は祈るようにリンネのアホ毛を見つめる。

反応が、無い。ということとは？

おおおおお、セーフ。どうやら今回はセーフらしい。

「なーんだ、つまらないのー」

安堵の溜息をつき、僕は冷蔵庫に食材を詰め込みまくる。リンネには悪いけど、そりゃ事件なんて起こらない方が良く決まってる。

僕は休日の午後を謳歌するため、ほくほく顔で自室へと戻ったのだった。

さて、とにもかくにも午前中の続きである。

積みゲ崩しの再開といきますか。

僕は再びエアコンのスイッチを入れ、コントローラーを手にした。「あらしー、あたしちよつとぱとろーるしてくるねー。何かあったらすぐ呼びに来るから。いつまでも遊んでちゃだめなんだからね？」
「あははは、分かってますよーリンネさん。ま、君のセンサーにも反応が無いみたいだし、何も無いとは思うけどね。いつてらっしい」

僕はそんな気の抜けきつた空返事をしつつ、窓からリンネを見送った。

これは暫く集中出来かもしれないぞ。

そんな僕の甘い甘い考えは、いとも簡単に崩れ去ってしまう。

「兄さん、いますか？ いますよね？」

午前中の時と一字一句違わない有須の言葉が、僕の部屋に響き渡る。

午前中同様、やはり良い予感はない。

「どうした有須？ もしかして何か買い忘れがあったとか？」

「いえ、それは大丈夫です。それに、きちんと整理されて冷蔵庫に並べられていましたし。完璧でした。というか兄さんって、何故か収納するのがうまいですね。普段は大雑把なのに」

「うん。何と言うかこう、きちつと収納されてると気持ちいいからねで、買い物件じゃないとすると… もしかしてダンゴ？」

「はい。実は先ほどだんちゃんから電話が有りまして。だんちゃん、足を怪我してしまつたらしいんです。たいした怪我ではないらしいのですが、念のため迎えに来て欲しいと連絡が有りまして」

まさか、あの時か？

大丈夫なんていつてたけどダンゴのやつ、やっぱりやせ我慢してたつてことじゃないか。ああ、糞。何で見抜けなかつたんだ、僕の馬鹿。

それに、足となると最悪おぶつて帰ることになるかもしれない。

さほど遠くない距離とはいえ、そうなると有須では厳しいだろう。かと言って親父をいかせたら店が回らないし、そもそもまた何をしでかすか分かったものじゃない。つまり、僕が行くのがベストという事らしい。

「分かった、すぐ迎えに行くよ有須。念のために帰り際、医者に見てもらってくるから」

やれやれ。こういう日は一度邪魔が入るとことんまでなのだろう。僕は目の前のゲーム機の電源を落とし、玄関へと向かった。

午後一時。一日のうちでもっとも暑い時間帯がやってくる。

太陽は僕の真上で容赦なく照りつけ、体力と水分とやる気を奪っていく。

暑い…。そう口にするのも憚られるほど暑い。何と云うか、暑さは人をダメにする。

もはや僕の中の思考回路と言語中枢は完全にマヒしてしまっていた。

ただただひたすらに、ふらふらと、ダンゴの元へと向かう僕。これじゃ、人の事ゾンビだなんて言えたものではないわけで。あの時の隠家よりよっぽどゾンビしてます。

と、そんなこんなで目的地に到着。

「あつ、にいにい。わざわざ迎えに来てくれたんだ？ ごくろーさん」

「くおらダンゴ。何であの時言ってくれなかったんだよ？」

ダンゴはチロリと舌を出し、照れ笑いを浮かべる。

「えー、だって格好悪いじゃん。一応試合終わるまでは続けたかったし」

「そういうのをやせ我慢って言うんだよ」

僕はダンゴの足をじろりと注視する。

ダンゴの右足首は熱を持ち赤くはれ上がっていた。あー、こりや捻ったな。ねんざとまでは言わないけど、すぐに冷やした方がよさそうだ。

「早く処置しないからこうなるんだぞ。勿論、帰りに病院寄るからな？ 兄として、嫌とは言わせないぞ」

患部にコールドスプレーを拭きつけ、ハンカチを当て包帯で固定する。いわゆる応急処置だ。

「あー、やっぱり？ 何かにいいてさ」
「ん？」

「普段ばりばりインドアのくせに、何故かこういうときの手際がいいというか、妙に頼もしい感じがするよね」

「そうか？ まあ、伊達に親父のスパルタアウトドア教育を受けてきただけはある、ってところじゃないか？ お前は小さかったから覚えてないだろうけど、僕が丁度ダンゴの歳くらいのときには色々やらされたからね」

とはいえ、その反動で今の僕がいるわけだけど。

「えー？ アウトドアなにいいて何か想像出来ないよ」

「みなまで言うな。自分でも似合わないって思ってるんだからさ。それより、ほら」

そう言っ僕は、自分の背中を指さしてしゃがみこんだ。

「乗れよダンゴ。このにいにいめが特別におんぶしてしんぜよう」

そんな優しさに満ち溢れた僕に対し、無言で蹴りを入れてくるダンゴ。

「痛っ。そりやないだろダンゴ。そもそも僕はこのために来たんだからさ。遠慮するなっ」

「い、嫌だよ、恥ずかしいもん。にいには分かってないよ、何にも」

「なんだそりや？ あーもう、いいから乗れっ。あの有須だっ僕におんぶされたんだぞ？」

「ふん。そんなの小さいころの話でしょ？」

「いや、つい最近だけど」

「……え？」

勿論、ロリ化したときの話だけど、それは流石に言えないので黙っておく。

でも事実は事実。僕は嘘は言ってますよ。神様、天使様。

やはり、素直にうんと言えなかったのは、ダンゴもまたそういう年になったのだという証拠なのだろう。兄としては嬉しいような寂しいような。

「わ、分かったよ。にいにいがそこまで言うなら特別におんぶされてあげる」

「はいはい。って、重っ。お前また重たくな」

僕の背中の上で、無言で僕を殴りつけるダンゴ。

しまった、つい本音が口を出してしまった。というか、小学生の分際で体重を気にするなんて生意気なやつである。そもそも成長期の小学生何だから、体重が増えるのは当たり前なのに。

「とりあえず病院行くからな」

土曜の午後。商店街には親子や夫婦、カップルなどでこつた返していた。

「… ねえ、にいにい。おかーさんってさ、どんな人だった？」

僕が昔の話をしたせいだろうか？

それとも行き交う親子連れを見たためか、ダンゴはふいにそんな事を訪ねてきた。

「母さん？」

確かに、兄妹の中で一番母さんと長く過ごしたのは僕だけど、改めてそう聞かれるとどう答えたらいいのかわからなくなる。

「そうだなー。まあ、あの親父を人生の伴侶に選ぶくらいの人だからね、ちよつと変わってて、何というか物凄く包容力があって大らかな人だったよ」

僕に背負われた状態なので、ダンゴが今どんな表情で僕の話聞いているのかわからないものの、僕の話を実剣に聞いているという

雰囲気だけは伝わってきた。

「いつもニコニコしているような人でさ、怒ることなんてめったに無かった。ああでも、ダンゴと同じで、体重の話だけはNGだった。親父はよくそれで母さんに殴られてたよ。後、イベントごととかが好きでね、両手に僕と有須の手を繋ぎながら良く出かけた記憶があるよ。繋いだ手を嬉しそうに振ってさ、変な歌を歌ったりするんだ」

そうこうするうちに病院に到着。ちなみに、霧霞の病院ではない。ダンゴは昔から元氣娘でしょっちゅう怪我をしていた。ここはそんなときに訪れるいわゆるかかりつけの顔なじみのお医者さん。

老夫婦が経営している小さな個人病院だけど、向こうもダンゴを昔から見てきて性格も熟知している故、大病院よりこの方がはるかに話が早いのだ。

「はい、到着つと。それじゃあ僕はここで待つてるから、早く診てもらってこい」

「うん。ありがとうにいい、行ってくる」

病院の入口に向かうダンゴを見送りながら、ふと考える。

今まで、ダンゴの口から母さんの話が出ることなんて殆どなかった。ましてや、どんな人だったかと聞かれたことなんて唯の一度も無いことだった。

勿論、自分の母親の事を知りたいと思うなんて極々当たり前のことだし、それが自分が物心つく前に亡くなってしまっている人に対してだったなら、尚のことだ。

だが、これまでダンゴはそれをしなかった。そんな当たり前の事すら、彼女はしてこなかったのだ。だからこそ、先ほど唐突にそんなことを聞かれて、僕は内心ひどく驚いていたし、同時に心のどこかで安堵にも似た感情を抱いていたのだ。なぜなら、ダンゴはそういうことにはトコトン無関心なのか、それとも自分の立ち位置を理解し、自らの心にブレーキをかけていたのかと思っていたから。何となくだけど、花家においてダンゴの前では母さんの話は禁句

になっていた。誰も口にしなかったけど、やはりダンゴに気を使っているというか、何となく話じづらい話題であったためだ。実のところ、母さんが亡くなった状況を未だ、ダンゴには詳しく話していない。ダンゴを生んだことが原因で、母さんは死んでしまったなんて、親父も、僕も、少なくとも今はまだ言えるわけも無かったし、言うつもりも無かった。

どれだけの間、僕はそんな考えを巡らせていたのだろうか？

気がつけば、丁度ダンゴが治療を終え病院から出てくるところだった。

僕の巻いたものより何倍も丁寧に巻かれた真新しい白い包帯と、僕の視線に応えるように苦笑いを浮かべるダンゴの顔が目に入った。「てへへ、なんでもっと早く来ないんだって怒られちゃった。後、今日明日は絶対安静だつてさー」

「当たり前だろ、そんなの。むしろあれは、捻ったくらいで済んだのが不思議なくらいだったよ」

そう言う僕は、再びダンゴに背中を差し出す。流石に二度目だからか、それとも医者によほど絞られたからか、今度は素直に従うダンゴ。

「そうそう、素直が一番だよ。それじゃ帰るか」

午後三時過ぎ。まだまだ暑い。ピークは過ぎてもまだ暑い。暑い、重い、疲れた、しんどい。

とはいえ、ダンゴを背負っている手前、そんな情けない事は口にさせない。それが妹を持つ兄貴としての矜持なのだ。漢としての一欠けらのプライドなのだ。

それにしても背負ったダンゴがやけに静かだ。さっき重いなんて口走ったのが悪かったか？ 親父似の癖にこういふところ意外と根に持つタイプなんだよな、ダンゴは。

「ダンゴー、悪かったって。お前は立派なれでいーだよ。だから機嫌直せて、な？」

ダンゴから反応は無い。が、代わりに別の反応が返ってきた。

「……すうすう」

どうやら疲れて寝てしまったらしい。この暑さで、しかも僕の背中なんかで良く眠れるな。やれやれ、何だかんだ言ってもまだまだ子供じゃないか。

僕は気合いを入れなおし、花家へと向かった。

「ただいまー、っと」

僕の声を聞いて、奥からぱたぱたと有須がやってくる。

「あつ、お帰りなさい兄さん。ご苦労様です」

僕は、しーっと有須に向けジェスチャーを送る。

「だんちゃんったら眠ってしまったんですね」

「うん。帰り道でいつの間にか、ね」

「ふふつ、きつと兄さんに背負われて安心しちゃったんじゃないですか？」

私もそうでしたから、と少し照れたように言う有須。

「そうかな？ 単なる遊び疲れじゃないか？ 一応医者には診てもらったから。大したことないみたいだけど、少なくとも今日明日は絶対安静だつてさ」

「そうですね、思ったより軽傷で良かったです。だんちゃんも無茶がすぎるところがあるから、今回はいい薬です」

「ははは、まあね」

その後、有須と二人でダンゴを部屋に運び、僕は再び自室へと戻っていた。

リンネの奴はまだぱとろーるとやらから帰っていないようだった。こつ何度も部屋と外を往復しては、流石に再びコントローラーを握る気分にはなれなかった。

ゲーム機を片付け、ベッドに横になり天井を見上げる。窓の外からは相変わらず行き交う人々の笑い声や楽しげな会話が聞こえてく

る。

僕は、そんな声を聞きながらまどろみの世界へと足を踏み入れる。

ダンゴと母さんの話をしたせいだろう。久しぶりに母さんの夢を見た。

親父と母さん、僕と有須とダンゴ、それにミズキ姉さんも一緒に並んで笑っている。手が届きそうで、決して届くはずのない現実。ここではない、どこか近くて遠い世界。もしかしたらあり得たかも知れない世界。でも、それは少なくともこの世界ではない。決して。

そんな目の前に広がる幸せな光景に、息をのみ思わず見入ってしまった。

すると、突然、後ろから誰かに肩を叩かれた。

「うふふ、嵐ちゃん。やつほー」

「って母さん？」

「あらあら、何もそんなに驚く事ないじゃないの、ひどいなー。まるで人を幽霊みたいに」

「え？ あ、うん、ごめん。… はい？」

「ノリが悪いぞー嵐ちゃん。そこは、いやもうあんた死んでるだろ、って突っ込んでくれなきゃ、ね？」

この悪乗り、間違いなく母さんだ。僕の中で、訳も分からないうちに感情がこみ上げてくるのが分かった。

「うん、ごめん。母さん」

「ちよ、ちよっとちよっと何涙目になってんのよ嵐ちゃん… ほんと、泣き虫なのは変わってないのね」

そう言って、ちよっとだけ背伸びをして僕の頭をなでる母さん。

「ほら、明日って私の命日でしょ？ だからちよつと出てきちゃった、てへ」

出てきたって…。流石は母さん、フリーダムすぎ。

「そう思ったときに丁度良くあなたが眠っていたものだから、善は急げと思ったのよ、うん」

丁度良く僕が眠っていた？ ああ、そっか、僕、あのまま眠っちゃったんだ。

待て、だったらダンゴなんて僕より先に寝ていたはずだ。僕の背中で。僕がその疑問を口出そうとした瞬間、僕の言葉を遮るかのように、先に口を開く母さん。

「それにほら、嵐ちゃんって今、ちよつと変わった事に首突っ込んでるでしょ？ むふふ、かーさんは何でも知ってるんだから」

間違いなくリンネの事だ。何で母さんがそれを知っているのかとも思っただけ、あの世と天使、何となくつながりがあるのは理解できたし、そもそも天国なんて本当にあるの？ なんて今この場で母さんに聞く事は、酷く場違いで、的外れな質問に思え、僕は口をつぐんだ。別に、そんな事知りたくも無いし、知る必要も無いのだから。

「うん。今のところは何とか頑張ってるよ、母さん」

そんな僕の返答に対し、優しく微笑み返してくれる母さん。

「嵐ちゃんなら大丈夫。今までもこれからも、そしてあの子の事も」
ふいに、母さんの体が徐々に消えてゆく。

「あらあら、そろそろ限界みたいね。… 嵐ちゃん、お父さんや瑞希に有須ちゃん。そして団子ちゃんのことをお願いね。これからあの子に何が起きてても、嵐ちゃんなら助けてあげられるって、母さんそう信じてるから」

何か？ ダンゴが何だった？ あいつに何が起こるってんだよ。

「待って母さん！」

そう叫ぶと同時に、現実へと覚醒する僕。

「… 夢？」

「ぶぶぶつ、なーに叫んでるのー嵐？ まったくマザコンなんだからー」

リンネだ。

どうやら僕が寝ている間にぱとろーるから帰還していたらしい。

つまり一部始終を見られていたという事になる。最悪である。

「いつからそこに？」

「ずっとかな」

「僕、他に何か寝言言ってた？」

「にはははは、言ってた言ってた。ごめんとか謝ったり、急ににやにやしたり、泣きそうな顔になったりしてたよ。ねえ、どんな夢見てたの？」

もう一度言う、最悪だ。

「リンネ、このことは誰にも」

「あらしー、あたしだってそこまでずぼらな天使じゃないよ？ 勿論、誰にも言わないから安心して？ だから、ほら、早く涙を拭いてえ？」

自分の頬を触ると、ぴちやりと冷たい感触。

リンネの言う通り、やっぱり僕はマザコンなのかもしれない。

「にいさーん、夕ご飯ですよー、降りてきてくださーい」

有須の声が階下から聞こえてきた。

僕は一体どれだけの寝ていたのだろう。窓の外見ると、辺りはすっかり闇色に染まりきっていた。

「ほらほら嵐、いつまでそんな顔してんの？ 妹ちゃんが呼んでるし、早く行ってきなよ」

「ああ、うん。そうだね。そうする」

僕は服の裾で乱暴に顔をこすると、リンネに急かされるようにして、キッチンへと向かった。

その頃には既に、夢の内容はおろか、母さんに何を頼まれたから、すっかり忘れてしまっていた僕なのだった。

夕食はカレー。まあ、僕が午前中に材料を買ってきたわけだから分かり切っていたことだけだ。

「遅かったですね兄さん。ってその目、どうしたんですか？ 何だか赤くなってますけど」

「え？ あ、あははは。ちょっと寝過ぎちゃってね。帰って来てからずっと寝てたからかな」

「ガハハハ、寝る子は育つって言うしな」

「にいにいの場合、もうそれ以上伸びるのは無理だよ。あつという間に団子が追いつめちゃうもんね」

何とか泣き顔を誤魔化せたのはいいけど、相変わらず容赦ないなこの親子は。… 僕だってもう伸びないとは思ってるさ。

「僕の身長の話はもういいだろ。有須、僕にもカレーください」

「んー、やっぱり有須ねえのカレーは最高だよー。おかわりー」

「わしもわしもー」

あんたらがつつきすぎだろ。

「うふふ、そんなに慌てなくてもまだまだありますから、大丈夫ですよ」

はいどうぞ、と二人におかわりを手渡す有須。

「いただきます」

えーい、ハモるな、このおかわり親子め。

が、その時、またしても事件の片鱗が眼の前で起こる。

「へ？」

バキッという強烈な音と共に、突然、ダンゴが握っていたスプーンがへし折れたのだ。

「だ、ダンゴ。お前、どんだけ気合い入ってるんだよ」

「ガハハハハ、良くある良くある」

ねえよ。

この二人とは住む世界が違うので良くわからんけど。普通、あり得る事じゃないと思う。

「だんちゃん大丈夫？ 怪我してない？ もしかして、金属疲労かしら」

「べ、別に団子のせいじゃないもん。勝手に折れただけだもん。馬鹿にいいい」

「僕？ 何故僕のせい？」

とんだとばっちりである。もう好きなだけおかわりすればいいじゃないか。

「ところで父さん、明日は何時頃に行きます？」

明日、つまり母さんの墓参りのことだろう。基本的にダンゴの前で母さんの話はNGではあるものの、こと墓参りに関しては別。

「ん、暑くならん朝のうちがいいだろうな。団子よ、お前はその足だし明日は留守番しててもいいんじゃないぞ？」

それは、親父にしては珍しく、至極真つ当な意見だった。

「そうそう、一応今日明日は安静にすることだったしな。たまには家で大人しくしてもいいんじゃないか？ ダンゴ」

が、それに対するダンゴの答えは、僕等も予想だにしていなかったものとなった。

「………… ふーん。皆して団子をのけものにするんだ？
え？」

気を使ったつもりが、逆に地雷を踏んでしまったらしい。というか、今日のダンゴは珍しく母さんに拘るな。何故だ？

「のけものってだんちゃん。二人はあなたの足を心配してそう言ってるのよ？ そういう言い方は良くないわ」

「そんなの知らないもん。団子だって、団子だって」

何かを言いかけたものの、ダンゴは、逃げるように部屋へと戻って行ってしまった。やれやれ、である。

「ガハハ………… はあ。こりゃ笑えん。ちっとも笑えんぞ。わしとした事が、ちとあいつに気を使い過ぎたかのう？」

「そうですね。今までだんちゃんって母さんのことについてあまり聞きたがりませんでしたけど、それってだんちゃんなりに気を使っていたってことなんでしょうし。本来なら、まだまだ母さんに甘えたい年頃ですし」

花家に訪れた小さな不協和音。これは間違いなく、何か起きる前触れであり合図なのだろう。

二人の会話を聞きながら、この時僕は先ほど見た母さんの夢を思い出していた。

ダンゴを助けてあげてほしい。確かにあの時母さんはそう言っていた。

母さんが誰でもなく僕にそれを頼んだ理由。

勿論、兄として、家族として妹のピンチを救うのは当然のことだけど、きつと他に意味があるはず。

もしかすると… いや、もしかしなくても結論は一つしかない。伝承だ。

母さんは何故か僕が天使代行をしていることを知っていた。そう考えれば結論はこれしかないはずである。

出来れば考えたくないし、僕の思い違いであってほしいとは思っけど、覚悟だけはしておく必要がありそうだった。

翌日

結局、昨日の夜は母さんが再び夢に出る事も無かった。

ついでに、リンネのセンサーが反応する事も無かったし、やっぱり単なる僕の思い過ごしだったのかもしれない。

それならそれに越したことは無いわけで。

僕はほっと胸をなでおろし、目覚まし時計を止めた。

今日は七夕。

母さんの墓参りの帰り道、商店街の祭りに顔を出してみるのも良いかもしれない。

僕が呑気にそんな事を考えているのも束の間、突然、かなり慌てた様子の有須がノックも無しに部屋へと飛び込んで来た。

「に、兄さん。兄さん。大変です。だんちゃんが兄さんで、朝がいなくなつて」

有須にしては珍しく、やけに取り乱した様子である。言っていることも支離滅裂で滅茶苦茶だ。

「取り敢えず落ち着いて有須。それに、大変なのは僕の格好と有須の言動だからね？」

僕は、なるべく平常心を保ちつつ、側に置いてあつたズボンをはいた。

「つて、きゃー！つ、兄さん、妹の前でなんて格好してるんですか。変態、馬鹿、馬鹿兄さん」

そう言つて顔を赤らめる有須。こんな格好つて言われても、ここはそもそも僕の部屋だし、単に着替えようと服を脱いだところに有須が飛び込んできたわけで。流石に変態扱いされるのは酷いと思いつつも、一応謝つてしまふのが僕。

「ご、ごめん有須。でもここ一応僕の部屋だからさ。ノックしてくれればきちんとした格好で対応したんだけどね」

「へ？ あ、す、すみません兄さん。私ったらあまりに焦つてしまひ、ついつい取り乱してしまいました」

「うん、別に良いんだけどね。それよりさ、それだけ慌ててたつてことは何かあつたんだよね？ もしかしてダンゴ？」

「そうです。そうなんです。だんちゃんがないんです。靴も無いみたいで、玄関の鍵も開けられた状態でした。だんちゃんつたら、あの足で

しかもこんな朝早くからどこへ行ってしまったのか……」

やはり、と言つべきなのか、結局こういうことになつてしまふ。

やはり、胸をなでおろすには、些か早すぎたらしい。

「おいおい、ダンゴのやつ。まさか家出とかじゃないよな… ケータイは？ 通じない？」

「はい。先ほどから何度もかけてるんですが、電源入れてないみたいで」

「親父は？ 親父は何やってるんだ、この一大事に」

「父さんなら朝から配達に行ってます。電話してみたのですが、ケータイ家に忘れて行ってしまったみたいで」

「おやじいー。真つ当に仕事するのは良いんだけど、何故こういう肝心な時に居ないんだあの人は。」

「分かった。取り敢えず僕は近所を探してみるよ。有須は家に残ってて。もしかしたらダンゴから連絡があるかもしれないし、あいつの事だから」

「何食わぬ顔でひよっこり戻ってくる可能性もある」

あくまで希望的観測だったし、その可能性は凄く低いように思われた。だが、それでも言わないと有須は今にも泣き出しそうな顔をしていたのだった。

「そうと決まればゆっくりしている余裕は無い。僕は手早く準備を整える。」

「リンネ、悪いけど協力してくれるか？ 何だか悪い予感がするんだ。いや予感と言うより、確信に近いかもしれない」

「嵐、それって」

僕は黙って一度だけ頷き、玄関へと走った。

「有須、それじゃ後頼むな。大丈夫、必ず連れて帰るからさ。そうしたら、皆で母さんのところに顔見せに行こう」

「半ベソ状態の有須にそれだけ言うと、僕はリンネとともに玄関のドア開けた。」

「昨日に引き続き、相変わらずの快晴。正直暑い。が、そんな戯言を言う余裕も考える余裕も、今の僕は持ち合わせていなかった。」

と、花家の玄関のドアを閉めた瞬間。リンネのアホ毛に反応が現れる。

「んんっ。きた、きたみたいだよ、嵐。次の試練の反応」

リンネはどこか申し訳なさそうな、暗い悪い顔で僕を見つめる。別にリンネのせいってわけじゃない。だから、リンネにはそんな顔してほしくはなかった。

これで、予感はず信に変わった。次の試練の相手は、間違いなくダンゴだ。

有須に次いでまさかダンゴまでその対象になってしまっなんて、夢にも思わなかったわけで。

これってやつぱり僕が天使代行をやっていることと何か関係があるのだろうか？

僕が伝承を呼び寄せているとでもいうのか？

とはいえ、今はそんなことを考えている暇は無い。前向きに考えれるなら、少なくともこれでダンゴの位置を知ることが出来るのだ。鬼が出るか蛇が出るか。

「行こうリンネ。それで、あいつまでの距離は？ 場所はどこなんだ？」

「うん。それがね」

「探したぞ、ダンゴ。びっくりしたじゃないか、突然いなくなったりしてさ」

実際、探し回ったわけじゃない。リンネのセンサーに導かれるまま、ここにたどり着いただけ。

とは言え、この場所ならリンネのセンサーがなくても、恐らく一番最初に探しに来ていた場所だと思う。

桜ヶ丘町の郊外、ひっそりとした小高い山の中腹、花家にとっての特別な場所。母さんにピクニックと称して良く連れてこられた場

所。

そんな場所に、母さんの墓はあった。

母さんは最後まで変り者だった。花家の墓に入ることも、母さんの実家の墓に入ることも良しとせず、この桜ヶ丘町を一望できる、花家を見下ろせるこの裏山に、自らの眠る場所を与えて欲しいと望んだ。母さんは、ここからの景色が大好きだったのだ。

家から決して近い場所じゃないし、事実、ここまで来るのに時間も体力も必要だ。体力馬鹿の親父は良いとしても、僕や有須がここまでくるのは結構骨が折れる作業だったりする。

それでも、最後の我儘だからなんて言われた日には、僕らは誰一人としてノーと言う事は出来なかったわけで。

「…… ねえ、にいにい」

ダンゴは母さんの墓をじっと見つめたまま、こちらを向かず僕に語りかけてくる。

「ここにさ、おかーさんが死んだ日が刻んであるよね？ 団子、ずっとずっと気になってた。でも、それを聞いちゃったら、もう後戻り出来ない気がして、ずっと我慢してたんだ。でも、もう良いよね？」

僕は全身から嫌な汗が流れ出るのを実感した。

堪らなく嫌な予感がしたし、話の続きを聞きたくなかった。聞き続ける自信が僕にはなかった。

「なあ、ダンゴ。こんな裏山まで来て、足は大丈夫なのか？ 昨日の今日なんだ、まだ安静にしてなきゃダメだろ」

僕は、ダンゴの後姿に向かって話しかける。今のダンゴを、正面から諭せるほどの勇気を、僕は持ち合わせていなかった。

「いいよね、にいにいは」

「え？」

「だってそうでしょ？ 兄妹の中で一番おかーさんと長く過ごしたのってにいにいだもんね」

「そ、それはそうだけど、そんなの当たり前」

しまった！

そう思った時には、全ては遅すぎた。手遅れだった。

ダンゴは声を荒らげて反論する。

「当たり前？ にいにいとっては当たり前のことかもしれない。

でもさ、団子は、団子は母さんの顔すら覚えてないんだよ？ 写真

でしか見たことないんだよ？ 一緒にお話したことも、一緒にお出

かけしたことも無い。なーんにも無いんだもん！」

触れない事で解決した気になっていた、そんなあ僕らのなんて浅はかなことか。

今になって自己嫌悪と自責の念でいっぱいになる。今更遅すぎるっていうのに。

「見てよ、母さんの命日。団子が生まれてから三日後だよ？ ねえ、これってどういうことなの？ にいにい… 答えてよ！」

そう叫びながら振り向いたダンゴの額には、今の彼女の感情を代弁するかのように「大きな角」が現れていた。正に鬼の形相である。

それ対して僕は声を失い、ただ茫然とダンゴの変わり果てた姿を見つめる事しかできなかった。

「嵐、あらしー、すっかりして？ 伝承だよ？ そんなのあたしのセンサーに反応した時点で分かりきってた事でしょ？ それに、嵐が助けないで誰がクネーデルちゃんを助けるっていうの？」

リンネの叱咤のおかげで何とか意識を取り戻す。

そうだ約束したじゃないか。すっかりしろ、僕。

僕は両の頬をバチンと叩き気合いを入れる。

というか、クネーデルって確かドイツ語で団子って意味だよな。

いちいち分かりにくいなあーもう。

「あれって角、だよな？」

「そう、角。鬼だよ、嵐。今まで体を張った戦闘なんてナンセンスだなんて言っちゃったけど、ごめん嵐」

「なんで謝るんだよりンネ……」

直後。メリメリという音を立て、目の前にあった大きな木が、折れた。

「聞いているのにいいい？　ちゃんと答えてよ！」

ダンゴは、自らの苛立ちを表現するかのように、近くにあった木を力任せに蹴ったのだ。しかも怪我をしているはずの右足で。

木は、哀れにも根元から折れ、音を立てて崩れ落ちた。

「ね？　あの子にとり憑いた伝承は赤鬼。赤鬼の赤は感情の赤、怒りの赤。今回の解決方法は、あの子の想いを、感情を、全て受け止めてあげる事だよ」

「は、ははは、あんまり聞きたくないんだけどさ、その受け止めるって言うのはどういうことかな？」

「勿論、あ、な、た、の、体、で。だよ、嵐」

ああ母さん、もしかしたら僕がそちらに行くのも時間の問題かもしれない。

「ダンゴ、聞いてくれ。お前の質問に答える前に言いたい事がある」

「何？　なんなのさ、さっさと行ってよ馬鹿にいいい」

そう言いつつ、母さんの墓石を揺さぶるダンゴ。

お、お、落ち着け、頼むから落ち着いてくださいダンゴさん。

「げふん。ごふん。あーあー……　っよし。聞いて驚くなよ？　にい

いにはな、実は天使の使いなんだよ。つまり天使さんの仕事のお手伝いだな、うん。でだ、お前、頭に角生えているの気が付いてる？

お前さ、とり憑かれてるんだよ、鬼の伝承にさ」

僕の天使発言に対して、馬鹿でかい石をこちらに投げつけようとしていたダンゴは、一旦それを下ろし自らの額を確認する。

「げっ、なんじゃこりゃー。団子、角が生えてるー」

ダンゴがびっくり仰天するうちに、そそくさと天使のキッスを施すリンネ。

つまり、これでもう後戻りはできないという事。

「やっぴょーみたらしちゃん。あたし、天使のリンネ。あなたの鬼

を被いに来たよー」

リンネのおかげでさっきまでの殺伐とした雰囲気は崩壊したが、勝負はまだまだこれから。体で受け止めるってつまり。

「疑心暗鬼。今のみたらしちゃんはきつとこつちの話なんてまともに聞いてくれないよ？ だから、まずは嵐が言い分を聞くの。頑張ってね？」

そう言うつとリンネは僕の額にちゅつと天使のキッスを施した。

「え？ な、何だよ急に、今何したんだよ？」

「にはははは、慌てない慌てない。嵐にちゅつとだけ天使の力を貸しただけだよー。アイギスの楯を嵐の体に入れたの」

「楯？ というかアイギスってギリシヤ神話のアレ？」

「うーん、まあ、平たく言えば防御呪文みたいなものかもね。つまりね、嵐の体はいつもより頑丈になったの。やったね！」

やったね！ これで思う存分殴られ放題だ！ …… ははは。

覚悟を決めた僕は、ぺたぺたと自分の角を触るダンゴに、先ほどの質問の答えを返す。

「ダンゴ、さっきの質問の答えだけど。そうだよ、母さんはお前を生んで三日後に死んだんだ。それは、疑いようのない事実だ」

僕の回答を聞いたダンゴは、のっしのっしと僕の方へと歩み寄ってくる。は？ のっしのっし？

角だけじゃない、ダンゴの奴、目が真っ赤だ。腫れてるとか充血してるなんて類じゃない、血の赤だ。感情の赤だ。しかも、心なしかアイツ、ちよつとでかくなってる？

「馬鹿にいいー、団子の何が分かるっていうんだー」

ダンゴから放たれたその拳は、僕の顔面にクリーンヒット。「ごべぶぼおおおおおおおっ」

声にならない声を上げながら、綺麗に放物線を描き吹っ飛ば僕。骨が折れたとか、内臓が破裂したとか、そういうレベルではない。

これ、天使の力を借りてなきや死んでるよね？ ね？

「なんでだよ、何でもっと早く言ってくれなかったんだよ。バカバ

カバカバカバカー」

ダンゴに馬乗りになれながら、ぼこぼこ顔面を殴られる僕。もともと大した面じゃなかったけど、今となって見る影もないほど顔面崩壊中。

これ、この件を無事解決したとしても、果たしてこの面で僕だつて分かるだろうか？

僕はふらふらになりながらも立ち上がる。

「団子だつて、花家の家族だもん。教えてくれたつて良かったのにいいいいいい」

お次は蹴りである。サッカーで鍛え上げられ、鬼の力に寄り数段力の増した彼女の蹴りは、それはもう昇天しかねない威力なわけで「へびやぼおろおおお」

「あ、あらし大丈夫？ うわー、これはもう御免としか言えないわでも、おかげでそろそろ頃あいかもね」

リンネがそう言い終えるのと同時に、僕の左右の手にズキリと痛みが走り、光が両手を覆う。

え？ 今回天使武器出るの早くないか？ そもそもまだ解決してないだろ。

僕のそんな疑問をよそに、両手には何故かボクシンググローブ。

「さ、第二ラウンドだよ、嵐。みたらしちゃんにへばりついた負の感情をぶん殴つて追いだすんだよ」

ええええええええ。何、その斬新な鬼退治。

「リンネ、きび団子は？ 犬は？ 猿は？ 雉は？」

「なにそれ？ ごめん、昔話は神話しか知らないの。にやはははいやちよつと意味が分からないんだけど。

どうしろつてのこれ。これでダンゴを殴つてののか？ 小学生なのに、妹なのに、殴れつてののか？ これじゃ鬼退治っていうより、ただの壮絶な兄弟喧嘩じゃないか。

僕が躊躇している間にも、ダンゴはこちらに牙を向けてくる。

「だーれがきびダンゴだあああー」

「べばおおおおおつ」

言ったけど。確かに言ったけど、言っていない。

とは言え、このままじゃ埒が明かない。殴って解決するなら思う存分殴ってやる。心を鬼にしてやる。泣いても許してやらないからな。

「くうつうらえええだんごおおおお」

そんな、僕の全力の右ストレートは虚しく宙を空振る。

あっさりとダンゴに避けられた僕は、代わりにカウンターパンチをお見舞いされる。

ああ、駄目だこれ。何と言う無理ゲー。何というチート。

「団子の、団子のせいなんでしょ？」

「な、何の話だ」

満身創痍の僕は、意地と根性と兄パワーで何とか立ち上がる。

そんな僕に対し、ダンゴは決定的な一言を投下する。

「団子が… おかーさんを殺したんでしょ？ 団子を産んだせいで、おかーさんは死んじゃったんでしょ？ にいにいだって、団子なんて、生まれない方が良かったって、そう思ってるんでしょ？」

その瞬間、僕の感情は、爆発した。

「違う違う違う違う違う違う違う違う違う…」

お前、それ本気で言ってるか？ 本気でそう思ってるのか？」

「に、いにいに？」

「ふざけんじゃねー！ お前こそ、母さんの何が分かるっていうんだよ？ 母さんがどんな思いでお前を産んだと思ってるんだよ？」

ダンゴは僕の勢いにたじろぎ、一歩下がる。すかさず僕はダンゴに詰め寄っていく。

「母さんはな、最後まで笑顔だったよ。お前を産んで自分の体力を使い果たしても、お前の心配ばかりしてたよ。お前の成長した姿が見れなくて残念だって、最後までお前のことばっかり考えてたよ。

とはいえ、リンネが何も感知していないってことはたぶん僕の空耳だろう。僕の体は大分ガタがきてしまっているらしい。

僕は全身全霊を込めて右腕に力を込める。

「うおおおおおおああああ。鬼は鬼ヶ島に引っこんでるやああああああ」

僕の拳を受け、黒い靄は内部から光を放ちやがて、空中へと離散していった。

同時に、ダンゴの額から角が抜け落ち、音も無く消えていった。や、やったぞ、終わった。けど、流石に今回は、グロッキー。

「え？…さん…さんなの？」

ダンゴが誰かと話してる？ 誰だ？

僕は、その相手を確かめる体力も無く、その場で気を失った。

「にいにい、にいにいってば。大丈夫？ ていうかさ、こんなところで何やってんの？」

目の前にはダンゴの顔。その額には角はない。

あー、僕、どれくらい気を失っていたんだろう。それに全身が痛い。なんじゃこりゃ。というか、ダンゴのやつ自分がやったことを覚えてないのか？ 伝承をされた人間は、その記憶を一生抱えて生きていくのが代償なんじゃないのか？ そんな僕の疑問を察してか、僕の真横にいたリンネが小声で言う。

「たぶんだけど、あなた達の母君の力が働いたのかもしれないよ。だんごちゃんにあたしの姿は普通に見えてるみたいだし。でも、不思議な事に、鬼の力で暴れていた記憶だけが改竄されてるみたい。あたしが言うのもなんだけど、こんなことってあり得るのかな？」

まさか、母さんの力なのか？

一先ず僕は、話をあわせる事にした。

「ダンゴこそ、こんなところで何やってんだよ？」

「うーん分かんないや。誰かに呼ばれたような気がして、気がつい

たらここにいたんだよね。そうそうにいい、団子おカーさんとお話したんだよ？」

「やっぱりさっきのは母さんだったのか。」

「そっか、良かったじゃないか。今日は七夕だし、きつと母さんもお前に会いたかったんだよ。」

「終わりよければ全てよし。あえて母さんがダンゴの記憶の一部を改竄したというのなら、それはそれでいいはずなのである。」

「お二人さん、一旦家に帰った方がいいんじゃない？ 妹ちゃんも心配してるかもよ？」

「リンネちゃんがそういうなら、帰ろっかにいにい？ そーだにいにい。にいにいってばリンネちゃんのお手伝いしてるんでしょ？」

「いーなーいーなー」

成程、僕が気を失っている間、リンネの奴もダンゴの記憶改竄に合わせて適当に話を合わせてくれていたらしい。やれやれである。

僕は、ほつと胸をなでおろし、本日三度目となるおんぶをすべく、ダンゴに背中を差し出した。

「ほら、帰るぞダンゴ」

「うん！」

ダンゴは妙に嬉しそうにしながら、僕の背中に飛び乗った。

瞬間、電流が流れるように全身に痛みが走った。

兄の矜持よ、今しばらく僕に力を与えたまえ。

「何かごめんな。ダンゴ」

「えゝ何さ」

「いや、ほら、僕達何となく母さんの話題についてさ、お前の前では避けてたつていうか、妙な気を使つた気がする。可笑しいよな、家族なのにな」

「いいよ、そんなの。家族でしょ？」

「そうだな。お前の名前もさ、実は母さんが名付けたんだ。兄弟の中で、唯一母さんが名付け親になつてるのが団子なんだよ。僕も有須も親父が命名したからね。最初親父の奴、お前の事、本当にダン

ゴって名前をつけようとしたんだ。でもそれじゃ女の子らしくないってことで母さんが珍しく怒ってさ。で、結局妥協案として、字は団子だけど、読みとしてだんこってすることで何とか決定したんだけど。何だかあの両親らしいよな」

「えへへへっ。団子、その話もう知ってるもーん。おかーさんから聞いたんだから」

「へえー、そっか。そう言えばダンゴ、足の具合はどうだ？」

「足？ 全然大丈夫だよ？ つい勢いでにいにいの背中にのっちゃんたけどさ、足はもう大丈夫。団子は丈夫だからね」

「そりゃ良かった。だったら午後は皆で商店街の七夕祭りでも行くか？」

「うん！」

満面の笑顔を浮かべるダンゴ。ああ、こんな笑顔を見せられたら、今までの苦労や痛みも吹っ飛んじゃうね！ 痩せ我慢だけだ。

何とか無事に花家前へとたどり着く僕等。

「あつ、にいにいおんぶはここまででいいよ。有須ねえに見られたら恥ずかしいし。んじゃ、先行ってるから、サンキューにいにい」
そう言っつて玄関へと入っつていくダンゴ。

僕はその瞬間全身の力が抜けへる状態になる。

が、そんな僕に追い打ちをかけるようにリンネ。

「嵐ー、お疲れ様ー。本当に今回は嵐にしては珍しく体張ったもんね。それで、さ、嵐。言いにくいんだけど、そろそろアイギス解除するね？ これっつてさ、結構あたしも疲れるんだよね。それでさ、解除するっつてことは、どういう意味だか分かるよね？ にやはははは」

今まで、僕の体の中で楯としてダンゴの猛攻を受け止めてくれてたアイギス。それを解除するという事はつまり。

「ちよ、ちよっと待て、いや、待っつてくださーいリンネさん。それっつつまりその、あ、待てっつてまだ心の準備が」

「待ちませうん。大丈夫大丈夫、アイギスの楯事体、ある程度の痛みは吸収してくれてるはずだから。勿論全部つてわけじゃないけどね。それでも死ぬ事は無いからと思から。たぶん。んじゃ、せーの、ほい解除」

鬼がいる。ここにも鬼がいるぞ。

「……ぎいいいやあああああああああああああああああ

僕の奇声は、夏の青空の下、町中に響き渡ったのだった。

今日は七夕、この天気ならきつと天の川も良く見えるだろう。

織姫と彦星は無事再会する事が出来ただろうか？

ああ、母さん、やっぱり僕がそちらに行く日は、そう遠くない気がします。

そんな事を考えながら、僕の意識は、飛んだ。

END

第10話「花と嵐と解けない真夏の雪女」白井天世の場合」

第10話「花と嵐と解けない真夏の雪女」白井天世の場合」

期末テストを終え、生徒会の地味で面倒な仕事をこなし、妹とのいざこざさえをも乗り越え、ついに、ついにやってきた夏休み。

ああ夏休み。ビバ夏休み。

早起きする必要も無ければ、灼熱の日差しの元ぐったりしながら登校する必要も無いし、一台の扇風機に群がる必要も無い。

宿題？ それがどうした。そんなものとするに足らない実に些細な問題だ。

僕は、9月の始業式前に慌てて問題集を広げるようなテンプレ学生とは一味違う。

そう、一味違うのだ。

そんな夏休み真っ盛りな8月上旬。天使と過ごす夏休み。

それは、当たり前のように平穏な日々が続くはずも無く。

僕らの前に、あまりに季節外れな伝承を抱えた人物が現れる。

今年の最高気温を叩きだしたこの日、僕らの前に現れたおよそ夏には似つかわしくない人物。それは。

「嵐、あらしつてばー」

僕の隣にちょこんと座っている天使が、僕に話掛けてくる。

「んー？ どうしたリンネ。やっぱり退屈？」

僕はコントローラーを握り、画面から目を離さずにそう言った。

「それはいつもの事だからいいんだけどさー、何とつか嵐、さっきから眼がすごいマジだよな」

マジ？ 確かにそうかもしれない。僕は、今、真剣で本気なのだ。

「嵐ってさー、こつ言う時に見せる集中力っていつか、異常なまでの執念みたいなのがあるよね。だつてさ、あれだけあった夏の課題を夏休み始まった直後から一心不乱にやり始めて、3日間で全部終わらせちゃうんだもん。良く分かんないけど、そういうのって毎日少しずつ進めるものなんじゃないの？」

「はっはっはリンネくんや、それは甘い。実に甘い。まあ、ごく一般的にはそういうものだよね、夏休みの課題は。だがしかし、僕はそのごく一般的ではないのだよリンネくん。僕はね、昔からこの手の奴は最初の3日間で終わらせるって決めてるんだ。勿論、残り1カ月間の休みで悠々自適なインドアライフを過ごすためにね」

僕はサムズアップを決め、最高の笑顔でそう言い放った。

「にははは、何だかそれ、凄く嵐っぽい考え方だよ。… っていうか折角の夏なのに外に出る気は皆無なんだね、嵐ってば」

「ふつ、良く分かつてるじゃないかリンネ。勿論、どこかに出かける気なんてさらさらないよ。必要最低限以外はね」

「そう言い切れるのが凄いや嵐。まったくもう、もやしっ子なんだから。あたしももう諦めたけど」

「最高の褒め言葉をありがとうリンネ。はっはっは。この1カ月で全ての積みゲ積み小説を崩すのが僕の使命。誰にも邪魔はさせないのよ」

高らかに宣言した僕は、再び視線を画面へと戻した。

有須は家事。ダンゴは学校のプール。親父は当然店番。

それぞれがそれぞれの活動に精を出している。

有須に家事を任せっぱなしってところに少々の後ろめたさを感じないでもないが、家族もこんな僕の生態には慣れたものなので、用事や手伝いがあれば遠慮なく声をかけてくる筈。

つまり、僕がこのインドアライフを円満に過ごすため、残る問題唯一つ。そう、リンネだ。

最後に試練があったのが先月の七夕。つまりあれから3週間近く

の間が空いている事になる。

早い時は三日と待たずに試練が続いたりするのに、長い時には今回のように何週間も間があく事もある。

このインターバルは何なのか？ この間に果たして意味はあるのか？ それこそ神のみぞ知るといっちゃつ。

こればかりは僕やリンネにはどうすることも出来ない問題なのだ。そんな一抹の不安を感じながらも、僕は天高く積み上げられたブツクタワーの一番上から、一冊の小説を慎重に抜き取り、タイトルを確認する。

タイトルは「バリーボッターと100人の妹」

やたらと地雷臭がぶんぶんするけど、何と云うか、100人の妹というフレーズが僕の心を掴んで離さなかったのだ。

何だよ、100人って、両親頑張りすぎだろ。いや、そもそも人間かどうかすら怪しい。クローンとか魔法とか、そんな感じなのだろうか？

表紙は集合写真のようにずらりと並んだ妹と思われる女性達と、真中に主人公らしき男性が一人。まるで軍隊のようにびしっと整列している妹達。凄い。タイトルと表紙だけでもこの驚嘆っぷりだ。さぞかしぶつとんだ内容なんだろうな…。

僕はゆっくりとページをめくっていった。

およそ3時間弱。250Pあまりのその文庫を読み終えるのにかかった時間である。

見た目の地雷臭とは裏腹に、奇想天外でありながらも最後まで読者を突き放す事なく、むしろぐいぐいと最後の一文まで引つ張られるような、そんなファンタジー作品だった。

素直に言えば、面白かった。それに、以外にもかなり熱い展開だったことを付け加えておく。

確かに面白かったんだけど、いつもの僕の趣味とはあまりにかけ離れているジャンルだったのも確か。果たして僕は、いつどこでこんな本を買ったのだろう？

そう思って裏表紙を見てみると、そこには貸出履歴と書かれたカードが貼り付けられていた。

ああ、そうか。思い出した。

何週間か前、街の図書館で気まぐれに借りたものだった。成程、成程。

ってイヤ、待てよ。何週間か前？

僕は慌ててそのカードに書かれた返却期限を見た。… 今日？

良かった。ギリギリセーフ。

今日か、今日ですか。それなら話は早い。丁度読み終えた事だし、さっさと返しに行こう。

ついでに二巻があれば借りてしまおう。むしろ無かったら買う。

積み本を消化するどころか増やすことになっている僕。読んでは増え、読んでは増え。いつものパターン。不毛な循環である。

そんな事を考えながら、僕は図書館へと向かった。

夏休み中ということで、受験勉強や夏休みの宿題と向き合う学生を始め、外回り中と思しきスーツ姿のサラリーマン、子連れの母親、新聞を熱心に読む老人等々、館内は老若男女問わず、人でごった返っていた。

冷房の利いた館内、静かな環境、ネット設備、そしてさまざまなジャンルを網羅した蔵書の数々、それらを兼ね備えた図書館は、暇を持て余した人々にとって正にうってつけの場所なのだ。それに学校の図書室とは規模が違う。

そんな僕も、夏休みに入った今でも、この図書館だけは通い続けていた。

僕の第二の桃源郷。ここは、僕にとって昔からのお気に入りの場所だった。

僕は真つすぐに返却窓口に向かうと、その足で例の2巻を探し始めた。

幾ら学校よりも蔵書の数が多いといっても、この手のジャンルの小説、ラノベは一般のものと比べると格段に少ない。

僕は、ぽっかり空いた棚の隙間を見て溜息をつく。どうやら先客がいたらしい。

少ないと言ってもどんな本にもファンはいるものなのである。ましてや今は夏休み中なのだ。借りられていて当然。

僕は落胆しつつ、代わりに新たに数冊の本を選んだ後、再び窓口へと向かった。

が、その時、先ほどまで僕がいた小説棚から少女の叫び声が聞こえてきた。

「ウツソ、なんでなんでなんでー。なんで1巻がないんですかー」
桜ヶ丘第二学園の制服を来たツインテールの少女。

どうやら彼女も僕同様、お目当ての本を先客に借りられていたらしい。

その気持ちは十分分かるけど、高校生にもなって図書館で大声で叫ぶってのはどうなのよ？

他の場所ならいざ知らず、こと図書館とあつては僕も見えて見ぬ振りが出来なかった。

僕は溜息を一つつき、彼女の元へ向かう。

「君さ、お目当ての本が無かったその気持ちは分かるけど、一応ここ図書館だから」

そう言つて左の人差し指を口元に近づけ、静かにのジェスチャーをとる僕。

この距離まで近づいて分かったけど、どうやらこの子が探していた1巻っていうのは僕が先程まで借りていたアレらしい。

「うー、だつてー」

だつてー、つて……。そもそも高校生にもなつて図書館で騒ぐといふ、いまだき小学生でもやらないような暴挙に打つて出ている時点で、普通に聞いてくれるような相手じゃないとは思っていたが。

「まあ、落ち着いてよ。それに君が探してた本つてバリーポッターの1巻だろ？」

「そう、それですよ。つーか、あんたか。まさかあんたが借りてたんですか！　こんにやろー、貸出期間ぎりぎりまで借りてやがつてー」

「あははは、ごめん。借りた事すら忘れてて。でもほら、さつき返したばかりだからさ、今ならあそこの返却窓口となりの棚にあると思うよ」

「分かつてますよ、んなこと。つたく、しっかりしてくださいよ？」

「はい、スミマセンデシタ」

もつと言つてやりたい事があつたものの、何故か思わず謝つてしまふ僕。

何かもつ、突然どうでも良くなつてきていた。

「んじゃ、ボクは行くからね。以後、注意するよーに」

そう言つてスタスタとカウンターへと向かうボクっ子少女。

ボクっ子？　ああ、そう言えばボクっ子なんて初めて見たな。

空想上の生き物じゃなかったらしい。

カウンター横の棚から、お目当ての小説を見つけたその少女は、手続きを済ませ、こちらを振り返る事も無く出口へと向かつて行った。

先ほどのやりとりのせいで、何となく居づらくなつてしまった僕も、慌てて図書館を出る。

何だか今一つ腑に落ちない気分だけど、気分を切り替え本屋へと向かう。

何を隠そう、先ほどのタイトルの2巻を買つたためだ。

出来れば借りて済ませたかったけど、無いものは無い。ましてや

返却はいつになるかも分からない。内容を忘れないうちに続巻を読むためにも、ここは一つ、購入するのが手っ取り早い。結果的にまた積み本が増えてしまう事になるわけだけど、この夏休み中には何とか崩せるはずである。

図書館から歩く事10分。僕のお気に入りの本屋に到着。

品ぞろえも、立地も申し分なし、そして何より、本屋にしては革新的な試し読みスペースなる空間が設置されている。きちんと内容を理解し、納得した1冊を手にとってほしいという店主の思想によるもので、椅子や机が設置されたそのスペースは、実際本選びの1助となるなっていた。

それでも、不思議とそのスペースを悪用して何時間も居座ろうという輩やそこで全て読んでしまおうなどという輩が一切出てこないのは、この本屋が昔から地元民に愛され続けている証拠だし、ひとえに店主の人柄だと思う。

そんな事を考えながら、いつものように自動ドアをくぐる僕。

「おつ、いらつしやい嵐君。君が午前中に来るなんて珍しいね？」

今日は雪でも降るのかな？」

そう言っ出て迎えてくれるのはこの本屋の2代目。つまり現店主の息子さん。

僕より一回り上の年齢だが、昔から僕を弟のように慕ってくれ、僕もまた兄のように慕う人物。

「こんちは、陽兄ちゃん。ってか、こんな真夏に雪なんて幾ら何でもあり得ないよ。普通そこは雨でしょ？」 雨

「ああ、そうだね。でも何故かそんな気がしたんだ」

そう言って微笑みを浮かべる陽兄ちゃん。

相変わらずの兄ちゃんである。

そして、何を隠そう、僕のこのインドア気質はこの人の影響によ

るものが大きかったりする。

元々親父とこの店主が仲が良いということもあり、僕は小さいころからこの本屋へ入り浸っていた。元来本好きという僕の性格もあって、年は離れていたものの、すぐに仲良くなった僕達二人。

僕には姉がいるが、その人は神出鬼没で大抵家にはいない人なので、僕にとつて身近で、まともで、手本にしたいような大人像は正にこの人だった。

簡単な話、昔から陽兄ちゃんの真似ごとばかりしていたら、いつの間にか自分もこんなことになってましたという話。それでも僕は、この人に比べればまだまだまともな方だと言える。

深町洛陽。それが陽兄ちゃんの本名。ぱつと見は、優しげな表情で常に笑みを浮かべた優男。ぶつちゃけイケメンだ。

たぶん、外見だけなら相当なレベル。が、残念なことに、その中身はと言えば、アニメ好き、ゲーム好き、漫画好き、真正正銘のオタク。例えば漫画を買う際には、観賞用と保存用、そして布教用と三冊買うような筋金入り。一般人からすれば理解不能というより引くレベルといっても過言ではない。

深町洛陽とは、そういう人物なのだ。

「ふーん？ そうだ、陽兄ちゃん、バリーポッターって知ってる？ 今日はその2巻を探しに来たんだ」

「嵐君、君は僕を何だと思ってるんだい？ 勿論知ってるさ。それにいつも言ってるだろ？ 作品には愛と敬意を持って接しろって。正式タイトルを覚えていないなんて論外だよ、嵐君。N出版のバリーポッターと不死鳥の妹なら、ほら、丁度今、女の子が立っているあそこの棚にあるよ」

そう言っただけで遠くの棚を指し示してくれる陽兄ちゃん。

流石は兄ちゃん、一見何だかカッコいいような事を言っているよ。うだけど、ただ自分の知識を披露しただけだ。

というか2巻は不死鳥の妹というタイトルらしい。今回もツッコ

ミどころ満載なタイトル。

僕は、教えられた棚に近づいていく。と、どこかで見たような少女が一人。

「うげっ、またあなたですか？」

そう言つて心底嫌そうな顔をする少女。間違いない、さつき図書館にいたあの少女だ。

「図書館の君か。つて、その本。まさか君もそれ買いに来たの？」

僕は彼女が小脇に抱えた小説を見ながら言つた。

「そうです。何か問題ありますか？」

「いや、無いけど、無いんだけどさ。それ、最後の1冊だよな？」

やはりマイナーな作品なのだろうか？ どうやらここにも在庫は1冊のみだったらしい。

「だ、か、ら。何か問題ありますか？」

「モンダイナイデス、ハイ」

やっぱり図書館の時同様、反論したい事があつたにもかかわらず、途中で急にどうでもよくなり、単純に頭を下げってしまう僕。

「でしょうね。それじゃ、ボクは行きますから」

そのままレジへと向かうボクツ子。何だろう、このしてやられた感。

僕は、がっくりと頂垂れたまま兄ちゃんのいるレジへと向かう。

そんな僕らのやりとりを見ていた兄ちゃんは、にやにや顔で僕を迎える。

「残念だったね、可愛そうな嵐君。ドンマイ」

そう言つてサムズアップする陽兄ちゃん。

「絶対慰めるときの顔じゃないよね、それ。でもさ、こんなことつてあるのかな？ 僕、さつきも図書館でもあの子に先越されたんだよね」

「へえ、これで2度目かい。つてことはもう1度くらい何かありそうな感じがするね」

「いやいや、そんなこと言わないでよ。出来ればもう関わりたくない

いって痛感したところなんだから」

「なーに、ただのカンだよ嵐君。それじゃ可愛い一番弟子のために、僕が一肌を脱ぐとしよう。実はさっきの本、僕も持ってるんだ。勿論自分用でね。それで良かったら貸してあげるよ。今度来る時まで用意しておくからさ」

「流石兄ちゃん。何と頼もしい」

「そうでしょ？」

という事で、一旦陽兄ちゃんと別れ家へと向かうことに。

2度ある事は3度あるっていうけど、このまま真つすぐ家に帰れば二度とあの子と会うことも無いはず。

それにしてもこの暑さ。図書館、本屋と冷房がばっちり効いた空間にいたせいも、今が真夏だという事をすっかり忘れてしまっていた。

アスファルトからの照り返しが容赦なく体力を奪い、僕の額からはとめどなく汗が流れ出る。ああ、まずい。ふらふらしてきた。

そういえば今朝見たニュースで、今日は今年一番の最高気温を叩きだすらしい。というより、今年はどうにも猛暑らしく、例年より暑い日が続くとか。

駄目だ、考えただけでうんざりしてきた。夏嫌い。

到着するころには、持病の貧血も相まって僕は夏の屋敷のよう
に左右に揺られていた。

「た、ただいまー。舐めてた。夏を舐めてた。これは苦行レベルだよ。いつから僕は修行僧になったんだ」

僕は、扉を閉め終わると同時に、玄関にべったりと倒れ込む。

「おかえりなさい兄さん。大丈夫ですか？ わざわざこんな暑い日に外出するなんて、兄さんにしては珍しかったですね」

「あー、うん。ちょっと図書館にね。どんな本にせよ、延滞するわけにはいかないだろ？」

「ちなみに、どんな本借りてたんですか？」

「……普通の小説？」

別にやましい本を借りていたわけじゃないけど、妹に向かって妹100人がどうたらなどというタイトルを言うのも何だか気が引けた僕は、適当に言葉を濁すのであった。

「何ですか今の間は。それにどうして疑問系なんですか」

「有須さんもう勘弁して下さい。そして水を一杯下さい。… ぶらぶらします」

「え？ それを早く行ってくださいよ兄さん。んもう、こんな暑いのに出歩くから」

ちよつと待つて下さいね、と有須。

「ふう… 何とか誤魔化せたみたいだな」

「ぶ。ぶ。ぶ。いやいや、嵐。全然ごまかせてないよ
リンネだ。」

後ろからやってきたところを見ると、どうやら日課のぼとろーるを済ませた帰りらしい。

「見たの？」

「嵐って妹ちゃんにも貧弱だと思われてるんだね。事実だけど」

そう言つて憐みの表情を浮かべるリンネ。

「ふ、ふん。リンネにこの辛さは分からないさ。それはそうと、確かその輪っかが温度調節してくれてるんだっけ？」

「そうそう。だ・か・ら、ぜーんぜん暑くないよ」

憎たらしいほどの満面の笑みを浮かべ、おまけにVサイン。ド畜生。

僕は、有須に持つてきてもらったコップ一杯の水を一気に飲み干すと、すぐさま部屋へと向かい、光の速度でエアコンのスイッチを入れた。

「ふはははは。人間だつて負けてないさ。このエアコンという文明の利器がある限りね」

…ん？ おかしい。エアコンが反応しない。

僕は握りしめているリモコンのONボタンを連打する。

「はっ、電池か。電池切れかつ！」

僕は慌てて本体の方に近づき、直接スイッチを入れる。

が、反応なし。僕は自分の顔から血の気が引いて行くのを感じた。

「あらし、それって」

「言つな。それ以上言つんじやない」

僕は祈るような気持ちで、げしげしと本体を叩く。治るところか、白い煙を吹くエアコン。

「あらしー、壊れてるよね？ 故障してるよね、これ」

あまりに残酷な現実を受け入れられず、部屋の隅でうずくまる僕。

「嘘だ。嘘だ。嘘だ。嘘だ。嘘だ。嘘だ。嘘だ」

「にやははははは、あらし最高！」

僕は、絶望した。

エアコン無しで、これからの日々をどう過ごしていけばいいんだ。まだまだ夏は長いというのに。

そんな僕のあまりの落胆っぷりを見たリンネが慌ててフォローする。

「なせばにやる。なさねばにやらない。にやにごともって諺があるでしょう嵐。大丈夫、何とかなるよー」

そう言つて僕の背中をぽんぽんと叩く。

というかどこの猫將軍の諺だよ、それ。

「それにほらー、これだつて同じ文明の利器じゃない、ね？」

団扇と扇風機。それは僕に残された最後の皆。

蘇る記憶。走馬灯のように鮮やかに思い出される昔の記憶。

そうさ、エアコンが入る前はこの二つの文明の利器で何とかやってきたじゃないか？ エアコンが無いからって何だ。やれる。僕ならやれるはず。

僕は、それらを手に取り高らかに掲げた。

「そうだ、僕にはまだこいつらがいる。やってやるぞー。うおー」

「うわー。嵐に変なスイッチが入っちゃったよ。ま、いつか」

その時、リンネのアホ毛が唐突に力強く光り始める。

「キッターー」。何週間ぶりかな？ ついに、ついにきました

ー。嵐、準備おっけー？」

「はっはっは、いつでもいいぞリンネ。今の僕はやる気に満ち溢れてる」

「それはいいんだけどさ、その手に持った扇風機は、流石に置いていこうね？」

「はい」

僕らは、日差しが容赦なく降り注ぐ、午後時間帯、再び町へと繰り出した。

「それで、対象までの距離は？ さっきはああ言っただけさ、やっぱりこの暑さには敵いません。なるべく近ければいいんだけど」

「うーん。どうだろう。でも、嵐のよく知ってる場所だよ？」

「僕の？」

僕の知っている場所。そこは、センサーから知らされる大まかな情報だけでも分かるほど僕にとって身近な場所らしい。

リンネのアホ毛に導かれるまま僕らは対象と接触すべく、その場所へと向かう。

「じゃじゃーん、ここです」

「う、学校か」

そこは僕の通う、桜ヶ丘第二学園だった。僕は後門の前でげんざりと校舎を見上げる。

センサーがここを指し示しているという事は当然。

「この生徒ってわけか」

「断言は出来ないけど、その可能性が一番高いよねー」

学校か。僕は何となく雨守三姉妹の事件と鞍馬さんの件を思い出していた。

あの時は、まだ1学期の真っ最中だったから毎日顔を合わせるこ
とが出来たけど、今は絶賛夏休み中。それでも学校に来ているとい

うことは、僕のように生徒会や委員会の用事で学校に来ているか、部活動のためか、或いは…。

そんな事を考えているうちに、リンネが叫ぶ。

「あつ、来たよ嵐。あたしのセンサーが反応してる。対象がこっち来るよ」

「えっ」

直後、僕は何ともいえない寒気、悪寒を感じた。

相変わらずの暑さだというのに、僕の体からは一気に汗が引き、変わりに震えが起きていた。

寒い？ 嘘だろ。こんな真夏の真昼間に、僕は寒さを感じているってのか？

「またあなたですか。ははーん、分かりました。あなた、ストーカーさんですね？」

慌ててその声のする方へと振り返る僕。

僕は、二度、三度と自分の目をこすり彼女を見つめなおす。

… どうやら、目の錯覚や、見間違いの類ではないらしい。

僕がそうまでして自分の目を疑ったのは、その声の主が、午前中に二度出くわしたあのツインテ少女だったからではない。まあ、勿論それにも驚いたけど。

僕が自分の目を疑った理由。

それは、その少女の周りだけ、雪が降っていたからだだった。

言うまでも無く、何らかの伝承の仕業だろう。

雪。なるほど、これなら先ほどの寒気も納得がいく。

何と言つか、今の季節とはかなりミスマッチな伝承であることは間違いないようだった。

「リンネさーん。これって雪女とかスノーマンとか、そういう類の伝承だろ？ そうなんだろ？」

「ピンポンピンポン、嵐選手だいせいかい。あたしの見立てだと雪女で間違いないと思うわ」

「やっぱりか。というか、こんなの当たっても何も嬉しくない。」

「天世の質問を無視するどころか、独り言ですか？ やーっぱり可笑しいですねあなた」

「そう言っつてジト目で睨みつけてくる少女。」

「いや、可笑しいのはどちらかと言えば君の方だよ。つと、いきなりゴメン。えーつと、じつは君に用があつて待つてたんだ」

「ストーリーするため？」

「…一度その発想を捨てようか」

空中で大爆笑するリンネ。いいさ、こういう展開はもう慣れた。笑いたければ好きなだけ笑うがいい。

「君さ、えーつと」

「白井ですよ。白井天世。ここの1年。ストーリーなのにそんな事も知らなかつたんですか？ 名前なんて基礎の基礎でしょ？」

もう反論するのも面倒なので、僕はそのまま続ける。

「あー、そうそう白井。ちょっと変な事聞くけど、君さ、寒くない？」

「馬鹿ですか？ あなたは。この真夏に寒いとか、アホですか？」

暑さで頭やられちゃってるんですか？ 脳みそ沸いてるんですか？」

「だよ。普通そうだよ。僕だつてこんな質問したくないさ。でもあんな姿を見せられたら、そういわざるを得ないわけで。」

「ゴメン、変な事聞いて」

「まあ、寒いんですけど」

「うおおおい、やっぱり寒いんじゃないか！」

「またもや大爆笑のリンネ。」

「流石はボクのストーリーさんですね。ボクのことならなんでもお見通しつてわけですか、こんにやろつ」

「いや、殆ど知らないけど。逆に君に僕の事で知つておいて欲しい事なら有る」

「出た。はい出ました。ここからがストーカーさんの本領発揮つてわけですか？」

もう僕がストーカーなのは決定事項ですか、そうですか。

僕は大きく深呼吸した後、例のセリフを語り始めた。

「ごめん。自己紹介がまだだったね、僕の名前は花嵐。ここの2年、つまり君の先輩つてわけだ」

「あ、思い出した。あなた現生徒会長の推薦人やってた人でしたよね？ あの人もかなーり変態チックな感じだったけど、推薦人もやっぱり変態だったか」

イタル、お前、相変わらず酷い言われようだぞ。やっぱり会長モテモテライフなんて夢のまた夢だったな。

「うん。よく知ってたね。おかげさまで今は書記やってます。で、続きだけど。僕がやってるのは書記だけじゃないんだ。僕は、天使の使い。つまり天使のお手伝いをやってるんだ」

あ、固まってる固まってる。

白井のやつ、すっかりフリーズ状態だよ。氷付けみたいに固まっちゃって動かないよ。

毎度お馴染みの反応とはいえ、素直に心が折れそうな僕。

何かもう、全てどうでも良くなってくる。

「寒い、何だか今日は凄く寒いです」

うん、雪女のせいだから、それ君に取り憑いた雪女のせいだから。

リンネは笑いを堪え、お腹を押さえつつ、何とか天使のキッスを施した。

「あなた面白わー、何だか嵐と漫才コンビ組めそうな感じね。今度学園祭があったらやってみたら？ と、ごほん。あたしの名前はリンネ。天使だよ。ユッキー、あなたを助けに来ました」

「何のコスプレですか、それ？ 流石ストーカー先輩のツレの方だけありますね」

突如目の前に出現したリンネにも全く動じず、淡々と受け答えを行う白井。

それにしても、とうとうリンネも僕と同じ変質者まで成り下がったか。はははは。

「だーかーらー。本物の天使なのー。あなたの雪女を被いにきたんだからー」

「そーですか雪女ですか。それなんてアニメ？」

「ムツキーちっがーう。ユツキー、さっきまで雪降らせてたでしょ？ 今はあたしが干渉したおかげで止まってるけどさ」

「っーか、ユツキーってボクのことですか？ 雪降らせてたからユツキー？」

何て安直な、と言わんばかりにリンネを見下す白井。

うわ、リンネも大分手を焼いているようだ。仕方ない、このままじゃ埒が明かないし。

「まあ、渾名のことは許してやってくれ白井。リンネは残念な事にネーミングセンスが皆無なんだ。それより君の雪女の方が先決。さっきまで君は自分の周りに雪を降らせていただろ？ 君自身も寒かったって言ってたじゃないか、それは君が雪女の伝承に取り憑かれていたってこと。さっきリンネも言ったけど、僕は君のそれを被うためにやってきたんだ」

「そうそう。あの雪はね、ただの雪じゃないの。あなたの体温や周りの温度を奪って雪に変質させている。だからユツキー自身も寒かったでしょ？ それにあなたが近寄ってきたただけであたし達も寒かった。このまま雪女の伝承が侵攻すると、雪の降る範囲も広がるの。そうなるかどうか？ あなたにも分かるわよね？」

成る程、図書館と本屋は元々エアコンが効いてたから気がつかなかった。

「ふーん、そっか。ボク、そんなのに取り憑かれてたんだ…」

以外にもあっさりとその事実を受け入れる白井。僕は疑問に思いそれを口にした。

「僕らの話、信じてくれたってことでいいのかな？」

「ええ、まあ。ボク、こう見えてもそういう話大好物なので。その

手の話に抵抗が無いんですよ」

大丈夫、あの小説を借りていた時点でそんな気がしてたから。

でも、オタクであることと、こんな話信じられるかどうかってのは思いつき別の話だと思うんだけどね。

「ありがとう。で、ここからが大切なんだけどさ。伝承に取り憑かれるってのはただ事じゃないんだよ。だから、取り憑かれるには、何かしらの理由ってやつが有るはずなんだ。何か心当たりとかあるかな？」

僕は慎重かつ冷静に白井を問いただしていく。これが分かれば解決への路はぐつと近くなる。

そんな僕の思いを余所に、白井は至極あっさりと答える。

「ある。ありますよ。思い当たる節が」

リンネは目を輝かせて問いただす。

「えー、なにになーに」

そんなリンネを尻目に、白井は一呼吸置いた後、僕の目を見ながら答えた。

「ボク、夏が大嫌いなんです」

気がつくとは僕は、思わず彼女の手を握り、硬く握手を交わしていたのだった。

「フーか、何ですかこの握手は？ 訴えますよ？」

「ゴメン、僕も夏が大嫌いなものでつい」

「そうですか。なら許します」

良かった。僕はその手を離し、近くを浮遊していたリンネに話しかける。

「つまり、今回の雪女は、白井の夏嫌いを克復させないと駄目ってことかな？」

「うーん、本人がそう言ってるんだから、その可能性が一番高そうなのは確かだけど」

何となく含みの有る言い方だけど、方向性としてはとりあえず間違っていないらしい。

「そつか、分かった。さて、とは言えどうしたもんかね？」

夏嫌いを克復するにはどうすればいいのか？

そんな事を言われても僕自身夏が嫌いなわけで、これはなかなか難易度の高い問題かもしれない。

しかも夏が嫌いといつても、わざわざこの真夏に雪を降らせちゃうくらい嫌いなレベルなのだ。一筋縄ではいくまい。

僕がそんな風にして頭を抱えていると、校舎の方からひよっこりと東さんが現れた。

「あれあれ？もしかして嵐君ですか？」

その瞬間、僕の中でガチャリと音を立ててピースが嵌った。

ブラボー。これだ。この案でいこう。

「おお、東さん。実にいいところに」

「え？」

「東さん、生徒会メンバーで親睦会を含めて海に行くのつて、確か明後日だったよね？」

「そうそう。明後日の朝7時にここに集合だよ？それがどうかした？」

僕はにやりと笑い、白井の肩にぽんと手を置く。

「うん。ほら、会計監査つてまだ決まっていなかったでしょ？実はさ、こいつを推薦しようと思つてね」

僕のいきなりの提案に、思わずこちらを睨んでくる白井。言いたいことは分かるものの、ひとまずは放置。

「あらあら、そうだったんですか？1年生かな、お名前は？」

につこりと白井に笑いかけると東さん。そんな彼女の笑顔に負けたのか、僕の急な提案に疑問や反論を挟む前にその口を開く。

「い、一年の白井天世です」

「天世ちゃん。うんうん、とっても可愛い名前ね」

「っ、あ、ありがとうございます、先輩。この名前のよさが分かるとは、どこぞの先輩とは大違いですね」

こいつ、あからさまに僕の時と態度が違うぞ。

「と言うわけでき、皆の意見も聞いてみたいからコイツも海に連れて行きたいと思ってるんだけど、どうかな？」

「なっ、ボク、そんなの一言も聞いて」

「とってもいいと思うわ。私は賛成。こんな可愛い女の子が生徒会に入ってくれれば、私も嬉しいもの」

僕は再びニヤリと笑い、天世の背中をばしばしと叩く。

「だってさ、白井。良かったじゃないか。それじゃ、これでけっ
ーい」

僕らのそんなやり取りを黙って見つめていたリンネが一言。

「こういつときの嵐ってホント凄いやね。あんな短時間でユツキーの性格を良く見抜いてるもん。ぷぷっ、本当にストーカーの才能があるかもねー」

リンネ、せめてもう少し真つ当な褒め言葉は浮かばなかったのか？

このところ、僕の称号がもやしっ子からヘンタイにクラスチエンジしつつある気がする。実に由々しき事態である。

とにかく、これで下準備は完了だ。といっても実はこの後の展開は何も考えてなかったりする。つまり、海に言った後は成り行きに任せるしかないわけで。それ以前に、まずは明後日に白井が集合場所に来てくれるのを祈るしかない。

こんな綱渡りで無責任な僕の計画。さて、どこまでうまくいくかな？

二日後

一応、白井を引つ張り込んだ責任もあるので、集合場所に一番最初に向かうべく、まだ日も昇りきらないうちに起床する僕。

こんな早い時間に果たして起きられるかどうか、そんな子供みた

いな悩みも、目覚まし3個で何とか解決、事なきを得た。

ああ、窓の外では鳥達がちゅんちゅんと囀り、オレンジ色の朝陽が僕の部屋を照らしている。この時間に起きることなんて滅多にない僕にとつて、例えこんな些細な出来事でも何故か感動を禁じえないのだった。

僕は、今日の予定を反芻しながら窓を開けじつと外を眺める。

が、そんな様子をにやにやしながから見つめる天使が一匹。

「にはははは、あらしつてばー柄にもなくなーに黄昏ちゃってるの？ はつずかしいー」

… しまったー。あまりの清々しさに、リンネの存在をすっかり忘れてた。

僕は、なるべく平静を装いつつリンネの方を見ずに答える。

「べ、別に黄昏てたわけじゃないぞ。ただこう、ほら、ね、ちよつとだけテンションがさ… ZZZ」

寝たふりでごまかす僕。カッコワルイ。というか恥ずかしい。普段こんな時間になんて絶対起きないからな、妙なテンションになつてしまった。

「こらー、あーらーしー。寝たふりでも、本当に寝ても駄目だよ。今日はユツキーを助けるんだからね！ いつまでも寝ぼけてないでさっさと起きてー」

「はい」

僕は、リンネの言葉に素直に従い、いそいそと準備を始める。

流石にこの時間では親父も有須もまだ寝ているらしく、花家は静寂に包まれている。

「さて、と。白井のやつ、素直に来てくれりゃいいけどな。それじゃ、行こうかリンネ」

集合場所は桜ヶ丘第二高校の校門前。

約束の時間まではまだ大分あるものの、やはり、白井が来なかった時のことも考え、僕は集合場所に誰よりも早く着くつもりで向かっていた。

「ねーねー嵐、海ってここから遠いんでしょ？ どーやっていくの？」

「んー、それなら心配いらないよ。やっぱりここからだが一番近い海でも結構時間掛かっちゃうからね。勿論車でいくんだけど」

僕がそこまで言いかけた時、リンネが学園の校門を指さし、叫んだ。

「嵐、あれあれっ、アレ見てよー」

リンネが指さす先、校門に小さな人影。間違いない、アレは。

「白井？ まさかお前が一番のりだったとは驚きだよ」

白井はどこか不機嫌そうな顔で僕の顔を睨みつける。ふむ、睨みレベルはダンゴ以上有須未満。つまり、びびるレベルじゃないってこと。

「たまたまです。偶然早く起きてしまっただけですから。つーか、みなさんが遅すぎるだけじゃないですが？ 海舐めてますよ絶対」

そう言う白井の眼には明らかにくつきりと隈が浮いていた。

口ではこう言ってるけど、本当はめちゃくちゃ楽しみにしてたのか？ だとしたら、今回の試練。もしかしたら意外と何とかなるかもしれない。

が、そんなことはおくびにも出さず、僕は何食わぬ顔で会話を続ける。ここで彼女の機嫌を損ねることだけは避けなければならぬ。「ごめんごめん。そうだよな。誘った側が遅れてくるなんて問題外だよな」

「そうです。その通りです。分かればいいんですよ、全く」

「もしかしてユツキーってば。海に行くの一番たのし」

リンネー。おーいリンネ。空気を読め。読んでくれ。僕は必死に話題をそらす。

「あー！ つと、ごほん。えーつと、アレだ、そうそう、白井、水着はちゃんと持ってきたらうな？ それ忘れたら話にならないぞ？」

白井はハアアと溜息をつく。

「当然、準備して有るに決まってるじゃないですか。それとも先輩には、ボクが海に行くのに水着を忘れるようような、そんなドジッ子キヤラに見えますか？」

「いや、残念ながらドジッ子には見えないな」

そもそもボクっ子だし。それに、ドジッ子なら月美ちゃんや雷九で十分間に合ってますから。

それにしても、水着か。

今更だけど、海なんだから皆当然水着なんだよな。となると、目の前の白井を始め、鞍馬さんや東さんの水着姿を拝めるといふ事実。

…………… 夏ってイイネ！

何かもうそれだけで、今までの糞暑かった日々も許せてしまうから不思議。

むしろ今まで嫌っててごめんね、夏さん。

あーあ、白井も僕くらい簡単に心変わりしてくれば今回の試練は簡単なものになー。

でもそうか、水着か。皆どんな水着を着るんだろう。

そう考えると凄くわくわくしてきてしまう現金な僕。

鞍馬さんは、あの性格ならきつとビキニタイプだろう。東さんはきつとパレオタイプとか。で、白井は…。

「先輩、何か今いやらしー事とか考えてませんでした？ 例えばボクの水着は何だろーとか」

白井がジト目でこちらを伺う。こいつ、エスパーか？ いや、今のは完全に僕が悪いな。幾らなんでも本人を目の前に考えることじや無かった。多分、物凄い顔に出たに違いない。

「あは、あははは。ご名答。考えたよ確かに、白井はどんな水着かになって。ごめんごめん、本人を前にして失礼だったかな？ でも気になったんだからしょうがない」

「はあ。普通に認めるんですね。そこは誤魔化すところじゃないんですか普通。…………… それじゃ、見ますか？」

何故か上目遣い、しかも妙顔を赤らめもじもじした態度でそんな

事を言い放つ白井。

ナンデスカソレハ。

ちよつと何言ってるのか僕には理解できない。理解の範疇を超えている。

天使も悪魔も許容してきた僕の脳が、彼女のそんなたった一言によつてオーバーヒートしてる。

僕はどうしたらいいか分からず、あわあわと行ったりきたりしている。

そんな僕の様子を気にも留めず、こんな校門前で上着のボタンを一つずつ外し始める白井。

えー、あー、うー。どうやら僕の言語中枢は完全に崩壊してしまつたようだ。

と、何だかんだ言いつつもそんな白井の様子をガン見する事で落ち着いた僕。

白井の上着の下から光臨したモノ、それは。

スク水だと？

「し、白井… 何でこんな道端で水着を見せるんだとか、そもそもどうして既に水着来てるんだよとか、そんな野暮な事は聞かない。でも、一つだけ僕の質問に答えてくれ。どうして、なんで、何故、スク水なんだ？ しかもウチの高校って水泳の授業ないから、それつて中学の時のだろ？」

「っーか、何うるたえてるんですか先輩は。確かに中学のときのものですけど、別にスクール水着なんて珍しくも何ともないでしょ？」
「あ、ああ。スクール水着なんて珍しくないよ。僕の妹も現役で着てるし。でもさ、高校生であるお前が着てるつてのが問題だろ」

「何ですか差別ですか。先輩の妹さんは良くてボクが駄目なんて不公平です。それに、理由なんてないですもん。別にいいでしょ？ スク水好きなんですから」

うん。そつか。好きならしょうがないな、好きなら。

僕もシチュエーションに惑わされてついつい取り乱しちゃったけど、人の趣味をとやかく言うのは良くないな。それに、悪くない。むしろいいじゃないかスク水。いーいスク水。

僕は白井の肩に手を置き、わざとらしく改まった顔で言う。

「スマン、僕が悪かった。白井の言う通り、人の趣味は千差万別」

「だから何ですか、その妙に腹立つに訳知り顔は！」

僕らがそんな不毛なやり取りをする中、こちらに近づいてくる人影が一つ。

「お早うございます。嵐さんに、天世ちゃ……」

生徒会の天使こと東さんである。

やはり彼女は時間より早めに来るタイプだと思ったよ、などと暢気に言ってる場合じゃない。

どうしよう。最悪のタイミングで最悪な場面を見られてしまった。凍り付く東さん。空中で大爆笑するリンネ。上半身半脱ぎで何故かスク水の白井と、そんな彼女の肩に手をかけている僕。

駄目だ、終わった。

この状況を覆すだけの能力を、僕は持ち合わせていない。

それでも何とか悪あがきだけはしてみようと乾ききった口を開く。

「あ、あの、あのね東さん。これは」

「あ、あはは。大丈夫、安心して嵐君。嵐君がどんな人でも、私、生徒会の仕事を途中で投げ出して辞めたりしないから」

そう言いつつ、半歩下がる東さん。

半ベそ状態の僕をよそに、冷静に上着を着直す白井。

「お早うございます東先輩。今日はどうぞよろしくお願いします」

そう言ってぺこりと頭を下げる白井。何故だ、何故お前はそんなにも落ち着いていられる？

その後、丸々30分かけて何とか誤解は解けたものの、既に披露

困憊状態の僕。

これだけで今日1日分のエネルギーを消費したのは言うまでも無い。

そうこうするうちに、鞍馬さん、イタル、そして最後に車で到着したのが陽兄ちゃん。

そう、今回僕らは陽兄ちゃんの同伴の元海へと行くことになった。本来なら生徒会顧問の先生に連れて行ってもらうべきなんだろうけど、今回のこれはあくまで生徒会の活動外、親睦会という名のお遊び会なのだ。流石に先生には頼れない。

そこで僕が適任として推したのが陽兄ちゃん。

この人、今では筋金入りのインドアだけど、信じられない事に昔はかなりのアウトドア派だった。親父と一緒に僕を海へ山へと連れ回してくれたものなのだ。だからこそ、この辺の海にもかなり詳しくあったりする。

「や、お早う皆。とりあえず時間も無いから、挨拶は中でね？ さ、乗って乗って」

「急かしてしまつてごめんね。今回皆を引率する深町です。嵐君やイタル君がお世話になってます」

こちらこそー、と女性陣。流石は陽兄ちゃん。その顔と人当たりの良さで生徒会女性陣からの反応も上々。

「やっぱりつえーな陽さんは。あいつら、俺らの時と全然反応が違うぜ、嵐」

「そりゃそうだろ。陽兄ちゃんイケメンだし。流石に慣れてるけど、毎回何とも言えない気分にはなるな」

不意に僕の隣に座っている白井からの視線を感じた。おっと、そうでしたそうでした。僕は慌てて口を開く。

「改めて紹介するけど、この子白井天世って言うんだけどさ、会計監査に推薦しようと思つて連れて来たんだ」

僕はそう言いながらぼんと彼女の背中を軽く叩く。

「白井、天世です。一年です。この鬼畜先輩に騙されてやってきました」

だっ、おまつ。

確かに騙し討ちには近かったかもしれないけど、自分だって本当はかなり楽しみにしてた癖に。何てひねくれ者。素直じゃないヤツ。白井の自己紹介に微妙にしんと静まりかえる車内に、陽兄ちゃんとイタルの笑い声が響く。

「ひゃっひゃっひゃっ。あらしー何だおい、お前ついに一線を踏み越えちまったのか？」

「嵐君、成長したね。師としては嬉しい限りだよ」

三者三様の答えが返ってくる。

ただ、鞍馬さんだけは僕の近くで浮いているリンネの姿を見て、彼女が取り憑かれてしていると気づいてくれたようだった。

「皆どんな想像してるんだよ！ それに陽兄ちゃんは白井の事見た事あるだろ？ 一昨日日本で僕と言いつ争ってたあの子だよ！」

「ははは。知ってる、ちよつとからかったただだよ。カルシウムが足りてないのかな嵐君。牛乳飲んで？」

そんな和気あいあいとした雰囲気の中、車は進み、時刻はお昼に近づきそうな頃。ついに、僕らは目的地へと到着した。

潮風の匂い、照りつける太陽、打ち寄せる波、人気のない砂浜。

海である。しかもかなりの隠れスポットのようで、この時期にこれだけの良い場所に人がいない。

陽兄ちゃんに感謝しつつ、僕らは早速海へ向かう。

僕らが荷物を脇に運んでいる間、女性陣は近くの更衣室で着替えを済ませる。

が、既に私服の下にスク水を装備していた白井に隙は無く、またたく間に準備を整え、一番手でそのまま海へ直行。

「うおいコラー、待て待て待て白井！。準備体操くらいしろー」

慌てて止めに入る僕。というかコイツ本当に夏キライなのか？

今朝からの様子を見る限り、これじゃあまるで。

「むっ、今からしようと思っただんですよーだ。全く、先輩は姑ですか？ おかんですか？」

「ひゃっひゃっ、そりゃ言えてるぜ白井。コイツは変なところ細かいからなー」

準備体操しろと説教しただけでえらい言われようである。というか普段、僕ってそんな風に見られてたのか。若干シヨツクだ。

「あんた達、何騒いでんのよ？ 海くらいではしゃいじゃって、ガキね」

そうこうするうちに鞍馬さんと東さんがやってきた。

ビンゴ！ 僕の今朝の予想通り。鞍馬さんは目のやり場に困る赤のビキニ。東さんは白のパレオ。どちらも甲乙つけ難い。おお目の保養。

それにしても相変わらず棘ある言い回しの鞍馬さん。とはいえ、生徒会でも特にイタルに対しては常にこんな感じなのでいい加減僕も慣れていた。

が、一方のイタルは違うようで。

「おおおおお、あずねちゃん！ 可憐だ。天使だ。まるで一枚の絵画のようだ。まさに生ける芸術。今日、あなたと海にこれば俺はなんて幸せモノなんだー！ ……で、鞍馬。お前今、何て言った。

あん？ 海くらいいだあ？ よーし、そこまで言うなら俺とどっちが遠く前で泳げるか勝負だ」

「いーわ。受けてあげる。その代わりアタシが勝ったら生徒会長の座譲ってもらうから、覚悟しなさいー！」

うっしやおらーという掛け声とともに、海へと飛び込んでいく二人。準備体操は……もういいです。二人ともまるで子供だ。

「あの二人、相変わらず仲良いな。まあ、単純に会長と副会長の仲が良いってのは良いことだけだね」

「その通り。紅ちゃんもあんなにはしゃいじゃって」

僕の隣には東さん。普段制服姿しか見慣れていない僕にとって、今の彼女の姿は緊張の対象そのものなわけで。

「あはは。それはそうと東さん、その水着良く似合ってるね。イタルも言ってたけど、本当に天使みたいだ」

どこかの天使とは大違いなのである。

「あらあら、お上手。ふふっ、安心して下さい、別に今朝の事は本気にしてませんよ？ 嵐君はあんなことする人じゃない。そうですよ？」

そう言つてにっこりと微笑んでくれる東さん。天使だ、本物の天使がここにおる！

と、冗談はほどほどにして、無事誤解が解けたのは実にめでたいんだけど、大変なのはこれからだ。

こつやつて無事に海まで来れることはできたけど、後はどうやって白井の雪女を抜つかだ。行き当たりばつたりで何とかなるかと思つていたけど、どうやら僕の考え方は大分甘かつたようだ。

ここから先どうすればいいかなんて、全く思い浮かばなかったのだ。

まあ、折角海まで来たんだからやることなんて一つだけだね。

「よし、白井。準備運動はすんだか？ 僕達も泳ぐぞ」

「ふっ、ボク達も勝負でもしますか先輩？」

勝負か。いくらインドアな僕でも年下のしかも女の子に負けるわけにはいかない。

これでも親父や陽兄ちゃんに鍛えられてるんだ。それに、もしかしたら何か突破口が見つかるかもしれない。

「自信あるのか？ いいよ、僕が完膚なきまでに叩きつぶしてあげよう」

僕は大人げも無く勝利宣言をし白井の隣に並ぶ。

「二人とも、あんまり無茶しちゃだめよ」

浜辺では東さんが手を振っている。別にかつこつけるつもりはないけど、午前中の僕のマイナスイメージを払拭するにはいい機会だ。

「準備はいいか白井？ んじゃ行くぞー」

僕は勢いよく海へと侵入。

海の水が心地よい。体も心なしか軽い。これならどこまででも泳げそうな気がする。

あっはっは。悪いなー白井。言葉通り、手加減無しでぶっちぎらせてもらうぞー、… って白井は？

可笑しい、後ろから全く音がしない。

幾ら何でもスタートして数秒でそこまで距離が空くはずがない。

まさか？

僕は慌てて泳ぎをストップし、水面に顔を出した。

浜辺の方を凝視すると、浜から数メートルの時点にぶかぶかと浮く白井と、慌てて近寄る東さん。

おいおいおいおいおい。嘘だろ。

ああ糞、僕の馬鹿野郎。白井は夏が嫌いなはずだろ？ まさかとは思うけど、その可能性もあつたのだ。

「白井、大丈夫かーしらいー」

「天世ちゃんしっかり！」

— 先ず彼女を掴んで浜辺に寝かせる。

いつの間にかというか、今までどこに行っていたのか、騒ぎを聞きつけた陽兄ちゃんが僕らの側に来ていて、白井を冷静に介抱する。ぺちぺちと頬を叩いてみると、まるで漫画のようにぷびゅーと口から水を吐き目を覚ます白井。

よ、良かった。何と言うか、間違いなく僕の寿命は縮んだに違いない。

「白井、まさかとは思っけど、お前泳げないのか？」

「…… はい。カナヅチですけどなにか？」

真顔でそう言い放ったボクっ子。何のつもりだ？ へたすりゃもつと大ごとになっても可笑しくは無かったっていうのに。

「良かったー天世ちゃん、もうもう心配させちゃだめだよ」

「まあ、無事で何よりだけどさ。そっいことは早く言ってくれよ白

井。皆心配するだろ？」

僕の言葉に対して、難しい顔をして白井が答える。

「正論ですけど、先輩に言われると何故かむかつかますね」

む、むかつくって。それはあんまりだろう白井。というか随分ストレートだな。

「白井ちゃん、泳げないことは恥ずかしい事じゃないさ。それに、もし克服したいなら、嵐君に教えてもらうといいよ」

えっ、そこは年長者として自分で教えるんじゃないの？ というか陽兄ちゃん、水着すら着てないし。泳ぐ気ゼロだよ。

折角海まで来てパラソルの下で漫画読んできるとか、僕もインドアを自称してるけど、この人には一生勝てない気がする。

「まあ、教えるのはやぶさかじゃないけどさ、どうする白井？」

そんな僕の呼びかけに、ちよつとだけ逡巡した後、僕の目を見ながら答えた。

「しよーがないですね。先輩、教わってあげてもいいですよ」

「そりやどーも。そうだ、東さんも一緒をお願いしていい？ 僕一人じゃ何となく不安だから」

唯でさえイタルという爆弾を保有している生徒会に、また一人こんな問題児を迎え入れて、果たしていいものなのかどうか。

今更ながら物凄く不安になってきた。自分で出したアイディアなのにね。

白井に泳ぎを教えて1時間が経過。

駄目だ、コイツ。流石にカナヅチを自認するだけあって浮かぶ事すら難しい。これは骨が折れるなんてレベルじゃないかもしれない。と、僕が深刻な顔をしていると白井がぼつりと呟く。

「っーか、分かってましたよ最初から。ボクなんてどーせ泳げないんですよ。無理なんですよ。だから夏なんて嫌いなのに」

その瞬間、辺りの温度が一気に落ちる。一瞬、海の水が凍りつくんじゃないかと思ったほどだ。

だがまずい、雪女の侵攻スイッチが入ってしまったらしい。

「えっ、え？ 私、何だか急に寒気が…」

その時、ぼんつと音を立て何故か水着姿のリンネが現れる。

天使らしく、白のレオタード。へえ、リンネのヤツ意外と胸があ

… 何て暢気に言ってる場合じゃない。僕のアホ。

「あらしー大変。雪女の力が強まってきちゃってるー。ユッキーから冷気が溢れちゃうよー」

僕は横にいる東さんに慌てて言った。

「東さん、長時間水の中にいたから冷えたんじゃないかな？ ごめんね、つき合わせちゃって。ここからしばらくは僕が教えるからさ、浜辺で陽兄ちゃんと休んでいてよ？」

僕はともかくとして、一般人である東さんを巻き込むわけには行かない。

それに、今のところ白井の力の効力有効範囲はそれほど広くない。浜辺までは影響が及ばないはず。

さて、ここからは寒さとの勝負。

ここで僕が投げ出したら、彼女の伝承を取り払う事は一生出来ない。是が非でも諦めるわけには行かないのだ。

とはいえ、こんな真夏に寒さで震える事体になろうとは夢にも思っていないかったわけで。

暑いのも嫌いだけど、寒いのも好きじゃない。そんな事を愚痴りつつ、僕は唇を紫にしながら白井の練習を続ける。

さらに1時間が経過。寒さに震えつつ、つきつきりで指導した結果、白井の泳ぎは何とか様にはなっていた。奇跡である。

一方、僕の体力が限界寸前。後は彼女が納得してくれれば一時でもこの冷気を止める事が出来るはず。

「ど、ど、ど、どうだ白井？ ち、ちゃんと練習すれば、ば、泳げるように、なった、だろ、ろ？」

僕の唇は紫を通り越しどす黒くなってきた。もはや呂律がう

まく回らない。

「ふふん。ま、ボク有能力を持つてすれば、泳ぐ事なんて簡単ですよ」

言い返したい衝動を必死に抑え、僕は彼女の言葉に耳を傾ける。

「そうだ先輩。もう一度勝負しましょう。今度はボクの本気で勝負してあげますから」

「あ、ああ。の、望む、と、と、ところ、だ」

僕は歯をガチガチと鳴らしながら何とか答える。

あれだけ太陽がキラついているのに、どうして僕は一人で真冬気分なのだろう。

意気揚々と少し先に見えるブイを指さしながら白井が言う。

「あのブイまで先に着いた方が勝ちですからね？ よーい、ドーン」
ばしゃばしゃと覚えたてのクロールで少しずつ前へと進む白井。

一方、泳ぐ体力さえ残っておらず、逆に浜辺へと流される僕。

結果は明白。

「あーっはっはっはー。やったぞこんにやろー。どーですか先輩、ボクの実力はー」

「うん……いいんでない？」

彼女の満面の笑顔を見届けたあと、僕はぶくぶくと音を立てて海底へと沈んでいったのだった。

「よし、スイカ割りすんぞー！」

浜辺でぐったりする僕をよそに、ようやく戻ってきたイタルが叫ぶ。

「ちよつと待てイタル。そもそもスイカなんて誰も持ってきてないだろ？」

イタルはニヤリと笑い、スイカを天高く掲げた。

「え？ 何で？ まさかわざわざ買ってきたのか？」

「おいおい嵐。こうして実際にスイカがあるんだからよ、細かい事は無しにしよーぜ」

鞍馬さんと勝負していたはずなのに、何故かスイカを片手に帰ってきたイタル。謎過ぎる。

一方の鞍馬さんも僕同様、浜辺でぐったりして先ほどから独り言を呟いていた。

「…… あんなやつに負けたあんなやつに負けたあんなやつに」
やはり、ここは追求しないのが吉だろう。

「そうなるよ、あとスイカ割りに必要なものと言えば、てきとーな長さの棒と、目隠しかな」

「おう、棒ならあるぞ嵐。ほれ」

そう言っただけで木刀をこちらに投げてよこすイタル。は？ 木刀？

「イタル、何で木刀何だよ。しかもこれどこぞのお土産屋で良く売ってるアレじゃないか。お前ら一体どこまで行って来たんだよ！」

体育会系の考える事はさっぱり分からない。というか理解出来ないし、したくもない気がする。

「ひゃっひゃっひゃ。まー、俺が勝ったってのは確かだから気にすんな。えーっと、後は目隠しか」

と、先ほどからずーっと体育座りでうわ言のように独り言を呟いている鞍馬さんに向かって一言。

「おい、鞍馬、その水着ぬ」

イタルが言い終える間もなく、鞍馬さんの拳がイタルを海の藻屑へと変えていた。

ぶかぶかと海を漂う生徒会長。イタル… 無茶しやがって。

「アホですね」

白井が呟いた。

「ああ、アホだ」

僕は同意した。心の底から。

その後、元気を取り戻した鞍馬さんと東さんと白井と僕でスイカ

割りを続行。

木刀の一撃を頭上に受けるといってお約束をこなすうちに、気がつけば日が沈みかけていた。そろそろお開きだろうか。

「完全無欠の生徒会長、ただいま帰還！」

「さーて皆、そろそろ帰り支度しようか？　ゴミはちゃんと持ち帰ろうね、後忘れ物に注意して」

「無視か？　無視なのか？」

イタルを無視し、いそいそと片付けと着替えを済ませた僕らは、陽兄ちゃんの待つ車へと戻った。

「やあみんな、海は楽しかったかい？」

結局、アレ以降一度も車から降りてくる事が無かった陽兄ちゃん。僕が言えた義理じゃないけど、折角海に来たって言うのに外に出ない陽兄ちゃんのインドア気質には並々ならぬものがあるわけ。

「楽しかったぜー。誰かさんのおかげで危うく遭難するかと思っただけど」

「ベーっだ。そんなの200%自業自得でしょ」

顔に血管を浮かび上がらせながら、鞍馬さんがイタルを睨みつける。

「ま、まあまあべにちゃん。至君も、悪気があったわけじゃないんだから、ね？」

「イグザクトリー。その通りです、あずねさん。流星に俺の事を良く分かってらっしゃる」

いやいや東さん、むしろこいつには悪気しかないですから。悪気の塊ですから。

「ははは。楽しんでもらえたようだなによりだよ。それはそうと、帰り道なんだけど、どーやらこの近くでお祭りをやってるみたいなんだ。寄ってくかい？」

「流石にこの時期だけあって混んでるなあ。皆、はぐれないようにしないと、つていないし。既に皆いないし」

陽兄ちゃんの提案に満場一致で賛成した僕らは早速祭り会場へやってきました。

単純に人が多いつても去ることながら、海の時もそうだったけど、僕らは何てまとまりの無いチームなのだろうか。こんなのでこれから生徒会としてやっていけるのかどうか多少不安になる。

そんな事を考える中、誰かが僕のTシャツをくいくいと引っ張っている事に気がついた。

「ん？ ああ良かった、白井、迷子になったのかと思ったよ」

「それをボクに言いますか先輩。この状況、どう考えても先輩が迷子になったと言った方が適切でしょ？ 全く、ガキですか先輩は」

「ですねよね？ ごめんなさい、お手数おかけしました」

だって認めたくなかったんだもん。この年で迷子とか。ケータイも車内に置いてきちゃったしさ。

二人でとぼとぼと合流地点まで歩く。

「白井、今日はどうだった？」

「もがもがもが」

白井は、先ほど僕がお詫び代わりに買ったたこ焼きを口いっぱい頬張りながら答えた。

正直、何言ってるのかさっぱりわからない。

というか一度に頬張りすぎなんだよ。お前はリスか？ リスなのか？ 誰も取りやしないつてのに。

「ごめん、食べ終わってからでいいから」

「もが」

待つこと数秒。白井の口から出た答えは。

「イマイチですね」

「うぐっ」

「何がうぐですか。このたこ焼きがイマイチだって言ったんですよ。」

これじゃーお詫びの品にはなりませんね」

その割には美味しそうに食べてた気がするんだけど。

「ああそう、なら別の」

「だから、だから、また今度、こうやって遊びに来てやってもいいって言ってるんです」

「… そっか。勿論喜んでお連れしますよ、天世様」

「どうやら、思った以上に楽しんで貰えたようだ。これは成功ってことでいいんだろうか？」

「ほ、本当ですか？ って、ふ、ふん。仕方ないですね、気が向いたらついていってあげます」

そんな捨て台詞を吐いて一人走り去ってしまった白井。

入れ替わるようにして目の前に現れるリンネ。

「よっ、リンネ。これで良かったのかな？ お前の眼にはどう見えた？」

「流星は嵐ってとこかなー。今のユツキーならだいじょーぶそうだよ」

「良かった。でも、今回も雷九の時同様、僕は何もしてないけどな」

「またまたー嵐ったら謙遜しちゃってー。一応、あたしなりに解説するとね？ ユツキー最初夏が嫌いだって言ってたでしょ？」

「ああ、僕も嫌いだ」

「それって、つきつめれば、夏が嫌い＝暑いのが嫌い、海が嫌い、プールが嫌い、祭りが嫌い、花火が嫌い、夏のイベントが嫌いってこと。ユツキー、嵐と違ってアツパータイプのオタクちゃんみたいだし。嫌いだからこそ、相手の気力を奪ったり、この雰囲気をぶち壊してやろうと思ったんじゃないかなー。だから正反対の季節の現象を持ってきたの。だから雪」

確かに、白井の降らせていた雪は一般的な自然現象の雪ではなく、自分の周りに居る人の温度を下げ、その奪ったエネルギーの象徴のようなもので、一般人の眼には見えないものだった。

つまり、雨守三姉妹のときの雨のように本物の自然現象を呼び寄

せたわけではない。雪はあくまで飾り。肝心なのは彼女が周囲の温度を奪う事で、彼女の周りにいる人たちの雰囲気や、やる気をぶち壊そうとしていたところだ。

「でもね？ 嵐がかなーり強引にユツキーを引っ張ってきたでしょう？ そもそも本当に嫌いなら嵐のことなんて無視しちゃえば良かっただけだもん。本当は心のどこかで期待していたのかもしれないし、誰かにこうしてほしかったのかもねー。だから、その雪は彼女なりのメッセージでもあったのね」

「何だそりゃ？ 今一つ納得できないんだけど、構ってちゃんってこと？ 何て素直じゃない。何て寂しがり屋。そして、何て天の邪鬼なやつだ。まあ、僕がやったことが無駄じゃ無かったってんならそれでいいよ」

「にやははは、嵐に繊細な乙女心を理解出来る日なんて来るわけないよねー。嫌よ嫌よも好きのうちってね。嵐がユツキーに、夏嫌いを払拭させたそれでいいじゃない。それに、前にも言ったでしょ？ あたし達の仕事は、一步を踏み出せないでいる人たちの背中を、そつと押してあげる事だつて。天使だつて、毎回毎回荒療治ばかりするわけじゃないもん。ね？」

「そうだね。暫くはダンゴの時みたいなのは勘弁してほしいよ。今でも時々夢に出るレベルなんだぞ？」

「ぶぶつ。時々うなされてるなーって思ってたけど、みたらしちゃんにボコボコにされてる夢見てたんだ？ 情けないな、嵐ってば」

「ああ自覚してるさ。さて、そろそろ集合場所に行こうか。これ以上皆を待たせたら、今度は何奢らされるかわかったもんじゃないぞ」

数日後。

「おまたせ白井、待たせちゃったか？」

「別に待ってません。今来たところですから。つーか何ですかこの定

番のやりとりは。これじゃまるで、でで、デートみたいじゃないですか」

「それを言うならお前の答え方だってデートの定番のやつだろ。お、偉いぞ白井。ちゃんと持ってきてるな」

そう言つて妹達にそうするよ用に、彼女の頭を撫でる僕。

「し、仕方ありませんから。一応約束は約束ですし。ボクは約束は守る女なんです」

彼女が手にしているもの、それは生徒会への入会届だった。

本来なら夏休み中の今、わざわざ学校まで持ってきてもらつ必要はなかったのだが、彼女の気が変わらないうちに受理しようと考えてのことだった。

何せ、こうして一緒に居る今でも彼女の考えていることは今一つ分らない。

リンネの言う通り、女性の心は複雑なのだろう。それとも僕が朴念仁なだけか。

「うん。確かに受け取ったよ、これで今日から君も生徒会役員だ！」
「別に嬉しくは無いですね」

「ですよ。まあ、僕も成り行きというか流れで生徒会に入つたつてもあるし、気持ちは分かる。でも何事も経験さ、白井。やる前から嫌つてちゃ、前には進めないのだよ」

「それは、まあ、はい」

「さーて、んじやどこか人気のない教室にでも行くかー」

直後、僕の後頭部を凄まじい衝撃が襲った。

「ついに本性をあらわしたな、この変体が！。エロいことか？ エロいことしようつてののか？」

「いってええええ。ちょ、白井、お前全力で殴るやつがいるか。と
うかが騒ぐな暴れるな興奮するなー」

「だあああれが興奮するかー」

「わるかった、僕が悪かったから落ち着いてくれ。僕の説明不足だ。これからお前の雪女を抜うから、どこか人気のない場所に行こうつ

て言ったただけだ！ 他意はないんだって」

案の定、リンネは空中で大爆笑している。まあ、リンネがフオロ
ーしてくれるなんてこれっぽっちも思っちゃんいなかったが。

「さて、何だか既に疲れ切ってる僕だけど、そろそろ始めるか」

僕ってどうして毎回こんな役回りなのだろう。どう考えてもイタルが適任でしょう、こういうのは。

僕がげんなりしながら答えると、リンネが元氣よく答える。

「おっけー。ごほん、いいユツキー？ 今からあなたの中の雪女の
伝承を取り払うから、何があってもあたしと嵐を信じてね？」

「今さらですけど、本当にコスプレじゃないんですかそれ？」

「むきー、失礼だぞユツキー。いいから目をつむるのだー」

「ふむ、ボクは別にこのままでもいいんですけどね？ 涼しいし」

「涼しいというより寒いだろ？ それに周りの僕らがそれじゃ良く
ない。そもそも冬だったら凍死するぞそれ」

「何してるんです、とっとと始めてください」

ころころ態度を変えやがって。相変わらず訳分からんやつだ。

僕らがこんなやりとりをするうちに、懐から矢を取り出し、慣れた
手つきで白井を射るリンネ。

次の瞬間、白井から黒い靄が立ち込める。

出たな雪女。

次いで、僕の右手に痛みが走る。さて、雪女に対抗出来る武器は
なんだろう？

僕は期待しつつも右腕の光が収まり、形作っていく様を見守る。
そんな僕の右手に現れたもの、それは。

…… カイロ？ ほっカイロだろこれ？ どーみてもホツカイロ
だ。

これまでも、目覚まし時計に猫じゃらし、団扇などおよそ武器と
は言えないものが出てきたことはあったけど、幾ら何でもこれは酷
過ぎる。間違いなくワーストワンである。どう考えたって可笑的い

だろ、これ。しかもこれ地味に熱いし。

雪だけに、何か熱そうなものが出てきそうだったのはちょっと予想してたけど。何故にカイロ？

これ、どーすりゃいいんだろう。

僕がホツカイロにうろたえてっていると、離れた位置に居たリンネが何やらジェスチャーしている。

なになに、よくもんで、温かくしたら、思いっきり、投げる。

成程。いや、成程も何も無い、残念ながらいつものパターンだった。

僕は腑に落ちない気分になりつつも、思い切りふりかぶって勢いよくカイロを投げつけた。

そんなカイロは見事命中。黒い靄は空中で光を放ちながら、やがて離散していった。

いつものこととは言え、本当にこんなのでいいのかと心配になってしまう僕。

「あらしーおつつかれー」

「やれやれだよ」

そう言っ僕は白井に駆け寄った。

「おーい白井大丈夫か？ 生きてるか？ お前の中の雪女は取り除いたぞ」

「みたい、ですね。体の違和感が抜けたような気がします。何となくですけど」

そう言つと白井は、脇の鞆をこそそそと漁り、何かを取り出しこちらに差し出してきた。

「先輩、これ」

「こっ、これは… バリーポッターと不死鳥の妹じゃないか」

「何と言いますか、借りの作りっぱなしは性に合わないので、特別に貸し上げます」

「ねえねえ、ユッキー。それ最後どうなんの？」

「それはですね、妹の」

「だー、言つな、絶対言つな。口が裂け言つんじやないぞ」

僕のアマリの慌てようがツボに入ったらしく、爆笑するリンネ。

「全く、ネタバレなんてそれこそ人でなしのする行為だ。それはそうと白井、折角だからお前にも何か貸してあげよう。どうだ？ これからウチくる？」

「行く行くー」

いやリンネ、お前には聞いてないし、そもそもお前はいつつもウチいるだろが、と心の中で突っ込む僕。

「いいでしょう。先輩のレベルがどれくらいのものか見極めてあげますよ」

てつきり断られるかと思いきや、意外とすんなり提案を受け入れる白井。

その顔がどこか嬉しそうに見えるのは、僕の気のせいではないはずだ。

そんな僕も、周りに陽兄ちゃん以外にこういうディーブなネタの話を出来る人がいなかったたので、正直ちょっと嬉しかったりする。

「ああ望むところだ。陽兄ちゃんレベルとはいかないまでも、白井に負ける気はまったくしないからね」

「それは聞き捨てなりませんね、先輩。どう考えてもボクの方が上に決まっています」

「じゃあ聞くが、一巻の後半に出てきた、101人目の妹の目的って結局何だったと思う？」

「簡単ですよそんなの。あれはですね、単に主人公を」

そんな僕らの濃ゆいやりとりを傍目で見ていたリンネが一言。

「まったくー、二人とも熱くなっちゃって。お子ちゃま何だから」

「お前に言われたくない」

「コスプレ天使に言われたくないです」

夏休みも残すところあと半分。

その半分は退屈せずに済みそうな、そんな予感がした。

END

「うふん。それで、ラクヨー。実際にその眼で見た感想はどうですかのん？」

「いやー、驚いたねやっぱり。君の話だけじゃ今一つ信じられなかったけど、この眼で見えてしまうと流石に否定は出来ないよ。彼が天使のパートナーになったって事を」

「それは何よりですわん。ラクヨー、あなたにはもう少し彼らの行動を監視していただくことになりますけれど、文句は有りませんでしよ？」

「そうなのかい？ やれやれ、仕方ないねそれは。ごめんよ、嵐君だけどこれは仕方のない事なんだよ。何と言っても僕は、ベルモットさんの… 魔女のパートナーなんだからね」

第11話「花と嵐と黄昏色の肝試し」ゆーの場合」

第11話「花と嵐と黄昏色の肝試し」ゆーの場合」

暑さもピークを迎える8月中旬。

今年の夏は、僕にとっては随分久しぶりなアウトドア夏だったと言える。

海にプール、祭りに花火にすいか割り。およそ世の中の夏休みの代名詞といっても過言ではないこれらの行事をあますことなく興じてきた僕。

何てこった、これじゃあまるでリア充みたいじゃないか！

それもこれも、きつとリンネのせいであり、リンネのおかげでもある。

が、どうやら僕は夏の風物詩とも言える重要イベントを一つ、やり残しているらしかった。

そう、今までと一味違う僕の夏は、まだまだ終わらない。

「よし、皆集まりおったな？ お前たちに一つ、発表したい事がある」

とある日の夕食。リビングへと集まった僕らに向かって、珍しく真面目な顔をした親父がゆっくりと話し始めた。

親父がこんな風に真面目な顔して話すときは、いつもろくでもないことを考えている時なわけで。

だからこそ僕は、たまらなく嫌な予感がしてならなかった。

「何だよ親父、そんなに改まっちゃってさ。頼むから、大人として節度を持った発言をしてくれよ？」

僕は早々に親父に釘をさした。

「兄さん。それは幾らなんでも失礼ですよ？ 父さんはきつと重要なお話が有るんです。ここは茶化さず静かに聞きましょう」
有須がいつも通り親父を立てる。

流石は我が家唯一の良心で常識人。彼女が居るからこそ、こんな親父でも花家は回っている。

「えー、おとーさんが真面目な話って似合わねー」
「どうやらダンゴも僕と同意見らしい。」

「全く。わしの話を見真面目に聞こうってやつは有須だけか？ とーさんシヨンボリ」

「シヨンボリとかいいからさ、早く要件を言ってくれ。早くしないと折角有須が作ってくれた夕食が冷めちゃうだろ？」

親父のシヨンボリ発言を受けて思わず本音が口についてしまった。
「ぐわははは、おいおい嵐、お前ちよつとカルシウムが足りてないみたいだな？ 牛乳飲もうぜ」

そう言って、凄く良い笑顔でサムズアップする親父。

ははは、親父は冗談が得意なんだから、あははは。

僕が額に血管を浮かび上がらせ、ふるふる震える様を見かねた有須が慌てて間に入る。

「父さん、確かにその、夕食が冷めちゃいますから。ね？」

「そうだな、ちよつと溜めすぎたか。では発表するぞい？」

それでもまだ引つ張る親父。

僕も、有須もダンゴも、息を呑み親父の次の言葉を待った。

「肝試をするぞい」

花家のリビングに訪れた一瞬の静寂。窓際に下げられた風鈴だけが、その存在を強く主張しているように思えた。

「有須、ソースとってくれないか？」

「どうぞ兄さん」

「にいいい、醤油とつてー」

「ああ、ほらよ」

僕らに露骨に無視された親父は、仏壇に向かってぶつぶつと語り始める。

「母さん、子供達はあんなに元気に育ちました。それはもう、父親を無視するくらい元気に育ちました。だから心配せず」

親父の十八番。母さんをだしに使われると、僕も無視し続けるわけにはいかないわけで。

「だああああ、分かったよ。分かったから、いちいちそうやって母さんに報告するのは止めてくれ」

「ぐわははは。うむ、流石は嵐だな」

「何が流石なのか分からないけどさ、もっと分からないのは何で肝試しなんだって事。そりゃ確かに8月だし、夏だし季節的には可笑しくは無いけど。そんな話、今まで一度も出なかつたじゃないか」

僕が不満を爆発させていると、隣の有須が頭を抱えながら言った。「いえ、恐らくですけど… 昨日見た心霊番組が原因ではないでしょうか？ ほら、昨日の夕食時に流れていたあの番組です」

「あの怪しさ満載のやらせ番組？ あまりにくだらなから、途中から見てなかつたよ僕」

それにしても、いい大人がそんなテレビ番組に感化されてしまうとは、我が親ながら超情けないのである。思考回路が完全に小学生並みなのである。

「んー、でも団子は賛成かな。何かおもしろそーだし」

やはりというか予想通りというか、親父の突飛な提案に賛同するダンゴ。流石は似たもの親子である。

「ちょ、ちょっとだんちゃん？ あの… 私は、そういうの苦手ですし」

そういえば有須のやつ、以前一緒に行った遊園地のお化け屋敷でも、かなり怖がってたからな。

まあ、僕も決して得意ではない。というか、むしろ怖い。

天使やら悪魔やらと何やかんやで関わってきたものの、それとこれとは別問題。怖いものは怖いのです。

ということ、すかさず援護射撃。

「僕も出来ればゴメンこうむりたいな。そもそもさ、肝試しって言うっても具体的には何する気だ？ 遊園地のお化け屋敷でもいくの？」

「それなら心配いらん。わしのリサーチによると、最近出ると噂のスポットが近くに有るらしいからな。そこへ行ってみたいと思うんじゃない」

何だよその無駄な行動力は。

親父のヤツ、一体いつの間にそんな事調べたんだろう。というより、その行動力をもっと仕事に生かして欲しいと切に思う。

「どーしたの嵐？ そんなにくらーい顔しちゃって」

「なあリンネ。普通、子供が面白半分で心霊スポットに行くなんて言い出したら、説教の一つでもして止めてやるのが親つてもんじゃないか？ それ、止めるどころか自ら率先して、そんな得体の知れない場所に子供を連れ出す親つてどうなのかな？」

「あたしが言うのもなんだけど、変わってると思う。凄く。流石は嵐のお父さんだよな」

そんなリンネに対して僕は、引きつった苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。

あれから数日。

時刻はもうすぐ日付が変わろうかと言う時間帯。

ついに肝試しの決行日となってしまうたわけ。

結局、僕と有須の反対も虚しく、親父の一存で開催が決定した肝試し。

詳しい場所はついてからの楽しみと言う事で、事前情報無しのお楽しみ本番。

親父曰くその方が怖いからだそうだが、こちらからしたら迷惑の上ない。ああ駄目だ、この期に及んでも愚痴しか出てこない。ド畜生。

「うおーい、嵐。そろそろ出発するぞー、車に集合な」

階下から親父のテンションの高い声が聞こえてくる。楽しみなのは分かるが、時間帯をもう少し考えて欲しい。

「じゃ、そういうわけでちょっと逝って来るよリンネ」

「にはははは、楽しんできてねー」

この手のイベントには、当然参加するだろうと思っていたリンネだったが、今回は珍しくパスしてお留守番を決め込むつもりらしい。理由は眠いから、だそうだ。

真意は定かではないが、これで幽霊と天使を見間違えるなんてベタなオチは回避されたわけだ。

どうせならこのイベント自体回避したいけど。僕は少々準備を整え、皆が待つ車へと向かった。

「はあ、何が悲しくてこんな時間に家族で心霊スポットに行かにならんのだ」

車中、僕がぼつりと本音を漏らす。僕の隣では僕に寄りかかり、有須がうとうととしていた。

「がははは、諦めが悪いぞ嵐」

「ぶぶぶ、さてはにいにい、怖いんでしょー？」

体育会系コンビが前から僕を煽る。

で、小学生に怖いなどと言われたくらいですぐさま反論してしまふ単純な僕。

「ははつ。幽霊が怖い？ 笑わせるなよダンゴ。僕が怖いのはこの有」

僕が言い終える前に、有須がジト目で僕を睨みつける。

「あ、有須さん、起きてましたんですか？」

「むしろ兄さんのそのワードで目が覚めました」

御立腹の御様子の有須様。いやいや、僕とした事が油断した。

「ぐわっはっはっは、おいおいお前ら、車中であんまりはしゃぐなよ？ その元気は到着するまでとっておけ」

「はしゃいでない。全然はしゃいでないから。むしろ今ので僕のテンションは完全にマイナス状態だよ」

再び眼を閉じ眠り始める有須。

何だかんだ言ってもやはり眠いものは眠いらしい。そりゃそうだ、有須のやつ、いつもは日付変わる前に寝ちやうからな。こんな時間まで起きていることなんて、大みそかくらいなものか。

それに比べて、小学生の癖にこの時間になっても全くもってそのテンションを落とすどころか逆に上がっていくダンゴ。流石は似たもの親子である。

そうこうするうちに現場に到着。

成る程、場所はいかにもな心靈スポットの定番、トンネルだった。「で、親父？ ここにはその、噂とか云われみたいなのが当然あるんだろ？」

「おう。そりゃ、当然あるだろうな」

「あるだあろうなって、まさか知らないのか？ そんな基本的なことも知らずにここを選んだのか？」

「がははは、気にするな。云われがあるのが無かるうが、出るっていう噂は本当だしな」

全くいい加減な。そもそもこういことって、云われとか噂とかそういう舞台背景があつてこそじゃなかるうか。

これじゃあただのトンネル。まあ、夜のトンネルだし不気味なことは確かだから、肝試しには違いがないが。

「それでどうするんです？ やっぱ一人ずつトンネルの向こうまで行くとか？」

がくがくと小刻みに震え、眼が泳いで、いつ泣き出しても可笑しくない状態のダンゴ。

トンネル内に入る前の、あの元気印のダンゴは見る影もない。

「だんちゃん、だんちゃんしっかり！ どうしたの？ で、出たの？ アレが出たの？」

そんな有須の呼びかけに対し、白目をむきながら、ダンゴが答える。

「ナ、ナニモ、ナカッタ、ヨ？」

「嘘をつけー！ しかも何故かカタコトになってるー！」
深夜という時間帯を忘れ、思わず叫ぶ僕。

「ま、ダンゴがそう言っとるんだ。大丈夫じゃろうて。で、次はどつちだ？」

「これのどこが大丈夫なんだよ！ しかもこのおっさん続ける気満々だよ！」

「今日の嵐のツッコミは切れがあるのう、腕を上げたなおい」

「あげてないよ！ というか、何？ 何なのこのトンネルは」

恐怖心を紛らわせるため、尚もツッコミを続ける僕。非常に虚しい行為である。

「あ、あの、あの、あ、のの」

「うお、どうした有須。一旦落ち着こう、日本語になってないから大きく深呼吸したのち、有須が今にも消え入りそうな声で言う。

「……………無理です。私一人であんな悪魔の巣窟に侵入するなんて、ぜえったいに無理です」

あのトンネルはどうやら悪魔の巣窟だったらしい。少なくとも今の有須にはそう見えるようだ。

「そうか？ ふむ、なら嵐と一緒にいってーぞ」

「中止にするとかいう考えは一切無いんだな、親父。仕方ない、有須、とつと行ってとつと終わりにしよう」

そんな僕の呼び掛けに対し、静かに頷いた有須は、僕の腕をこれでもかと言っくらいがっちりと掴んだ。

「これはちょっとくつつきすぎじゃないか？ その、歩みにくいだろう？」

ふるふると首を振る有須。というかついに喋らなくなってしまった。

仕方がないので僕らは、ふらふらとおぼつかない足取りでトンネル内部へと侵入した。

「このトンネル、やけに暗いと思ったたら灯りが殆ど見えかかってるじゃないか。これじゃ本当に事故が起きてても可笑しくもないかもな」

というわけで、手にした懐中電灯だけが頼みの綱というこの状況。ついたり消えたりしている内部灯が不気味さをより際立てている。

「何だか落書きだらけだね。… って有須、幾ら何でも眼は開けていた方がいいってば」

何もそこまで怖がることないのに、そう言おうとした瞬間、目の前にカサカサと動く物体が。

「ぎゃあああああ、って何だ、ただのビニール袋か。ごめんごめん、有須、僕の見間違え」

ふと、隣に眼をやると、白目を剥いた有須さん。

「有須ー、しっかりしてくれー。有須カムバック！」

だ、駄目だ、口から泡ふいちゃってるし、完全に気絶してる。

仕方ない、このまま背負って運ぶしかあるまい。

有須と一緒にだ何故かこのパターンが多いのは、果たしてただの気のせいだろうか？

「んー、やっと半分か。不気味ではあるけど、やっぱりただのトンネルだよな。何にも出やしないじゃないか。さっきのダンゴだって、どうせごみか何かと見間違えただけだろう。ははは」

ゴールが見えてきたという事で、若干油断していた僕は思わずそ

んなことを口走っていた。

が、その余裕も束の間。

僕の目の前には、何故か白衣を着た男性が倒れていた。思わず声を上げそうになるも、背負った有須を起こすわけにもいかない。根性で耐える紳士的な僕。

……幽霊？ いやいや、倒れてる幽霊なんて聞いたことないぞ、しかも足もちゃんとあるし、幽霊にしてはやけにリアルだ。

まあ、幽霊見たことないから分らんけど。ってことはまさか死体？ 勘弁してくれ。肝試しで死体を見つけるとか洒落にならない。

いや、ここは一つ、円周率でも数えて落ち着こう。1.16…

僕が100桁まで数え終えたとき、その死体もとい倒れていた男性がぴくりと動いた。

どうやら死んではいなかったらしい。

「あのー、こんなところで寝たら風邪ひきますよ？」

何とも間の抜けたセリフを吐く僕。

僕は有須を背負ったまま、男性に近寄る。

と、男性に触った瞬間、手に何かべとりしたものがあったのに気がついた。

「ん？ 何だこれ、水？」

懐中電灯で自らの手を照らし詳しく見てみると、僕の手は何故か真っ赤に染まっていた。

「赤… 血！？ お、おいあんた大丈夫…」

男性を起した瞬間、僕の眼に入った男性の顔、そして姿。

顔中真っ赤で、そのお腹には見事なまでに直角に包丁が突き刺さっていた。

「ほぎゃあああああああああああああああ」

今回ばかりは僕の中の紳士も耐えきれなかったらしく、大声を上げ叫んでしまった僕。

「んみゅう、何ですかもう？ 五月蠅いですよ、兄さん」

どうやら、気を失っていた有須が眼を覚ましたようだ。

が、ビニール袋くらいで気を失ってしまうような有須がこの光景を見たら当然。

「きゃああああああああああああああああああああ」

眼の前の光景を見て、再び気を失う有須。

僕は有須を担ぎあげ、そのまま後ろを振り返ることなく、元来た道を死に物狂いで全力疾走。

「おう、お帰り嵐。どうだった？ お化けはおったか？」

「お、お、おおおお、おおお、おおお、おおお、おおお」

「何言ってるのかさっぱりわからんが、予想以上に楽しんだようじやな。良かった良かった。ほらこれでも呑んで落ち着け」

そう言って1本の缶ジュースを放り投げる親父。

叫び過ぎて喉がからからだったこともあり、疑うことなく一気飲み。

「アツアツのお汁粉缶だけどな」

「ぶーーーーっ」

壮大に吹き出した後、むせる僕。

「何だよ！ 何故このタイミングでわざわざあつあつのお汁粉を渡すんだよ！ 悪意しか感じられないよ！ というか、わざわざ温めながら待ってたのかよ！」

あまりの恐怖のせいで、こういう親父だっけことすっかり忘れてた僕。

「ガハハハハ、すまんすまん。ほら、麦茶だ」

今度は中身を確認しつつ、水筒の中身を一気に飲み。

「ひどいなあ、嵐君。僕を置いて行っちゃうなんて」

「ぶーーーーっ」

突如として目の前に現れた、顔面真っ赤白衣男。トンネル内に居たあの男である。

僕は再び壮大に吹き出したのだった。

「うわっ、汚いよ嵐君。ほらあ、よく見て、僕だよ、僕」

真つ赤男は懐からタオルを取り出し、その顔をごしごしと拭きだした。

すると、そこには見慣れたあの顔が。

「え… もしかして陽兄ちゃん？」

「ご名答。そう、僕だよ」

トンネル内の謎の白衣の顔面赤男の正体は、何と深町洛陽その人だった！ いやいやいや、そんなバカな。

「ど、どうして陽兄ちゃんがここに？ いや、それよりなんつー格好してんだよ！」

「ガハハハハ、ごくろーさん洛陽君。計画とちつと違う展開になっちゃったが、まあ、概ね成功だな」

「ですねえ。僕もなかなか楽しませてもらいましたから」

そう言つて笑いあい、ハイタッチを決める二人。

成程、今回の肝試し、つまりは親父と陽兄ちゃん二人の仕組んだことだったわけか。

陽兄ちゃん、昔世話になったからって、何故か親父の頼み事は素直に聞いちゃうんだよな！

加えて、陽兄ちゃんの趣味の一つにコスプレがある。インドアの癖にだれに見せるんだよって話だけど、それはそれこれはこれ。

見せると言うより、自分で自分の姿を見て楽しむらしい。ま、イケメンだからこそ出来る趣味。

僕には到底理解出来ない領域だと思つたわけ。

「ところでその格好は何なの？ 何で白衣なの？」

「これかい？ ただのお化けじゃセンスがないと思つてね。とある研究所でバイオハザードが発生して、ウイルスによって顔面から血を噴き出した研究員つていうテーマなんだ」

未だ顔面の半分を赤くしたまま、爽やかに微笑む陽兄ちゃん。

やつてることは最悪なのに、こんな格好でも物凄く様になつて見えるからイケメンの力は恐ろしい。

「ふーん、それじゃあそのお腹の包丁は？」

「研究に没頭するあまり、奥さんをほったらかしにしちゃって、ヤンデレ化した奥さんに刺され出血多量で死んだ、っていう裏設定かな」

「バイオハザードどこいつちゃったんだよ！ しかもそっちが死因かよー！」

「おっ、嵐君、今日のツツコミはいつもより気合いが入ってるね」
大の大人が二人も揃いもそろってこんなくだらないことを考えている、そりゃツツコミにも気合いが入るといふもの。

「ところで、トンネル内で倒れてたのも演出？」

「いやいや、本当はもう少し演出やらトラップを用意してたんだけどね、最初に来た団子ちゃんから問答無用で一撃食らっちゃってねー。いやいやあれは実にいいパンチだった」

ああ、あれ本気で倒れてたんだ。

恐るべし、ダンゴ。いや、むしろ二人の計画を半壊させたわけだし、ナイスだ、ダンゴ。

「ところで洛陽君、例のものはばっちりかね？」

「ええ、つつがなく見琴さん」

そう言って白衣からビデオカメラを取り出した陽兄ちゃん。ま、まさか。

「よし、よしよしよし。帰ったら早速見てみよう」

「僕にもコピーして下さいね？」

ふ、ぎ、け、ん、な。

側で一部始終を聞いていたダンゴが、顔を真っ赤にしながら二人にボディーブローをお見舞いした。

いいぞダンゴ、もっとやれ。

「全く、おとーさんも、洛陽おぢさんも、いい加減にしてよねー！」

「本当、下らないよな」

僕の言いたいことは、全てダンゴが代弁してくれた。

へなへなとその場にへたり込む僕。もはや悪態をつく気力も無く、とつと帰りたい気分ではあった。

「ただいま」

「おつかえり〜嵐。どう？ 楽しかった？」

「リンネ… 君には今の僕の顔がどう見える？ この顔が楽しかった顔に見えるか？」

「うん、見えるよ？ どっちかといつとかなり楽しんだように見えるよ」

僕の質問に対して反射的にそう答えたリンネ。そうか、今、僕はそんな顔してたのか。

結局何だかんだ言いつつも、親父主催の意味不明なこのイベントを楽しんでしまったと言う事か。

それって腑に落ちないような、悔しいような。

「それに、ちゃっかりお土産までもって帰っちゃって。にやははは、嵐ってばそんなに楽しかったのー？」

「は？ お土産？」

リンネのその発言に、思わずキョトンとしてしまう僕。

だが、そう言われたとたん急な寒気とともに、何だか背後から異様なオーラを感じるような気が。

「り、リンネさん？ そ、それってどういふことなのかな？ ぼ、

ぼ、僕の後ろに、何か、居るのかな？」

「にやはははは、何言ってるんだよう嵐」

そう言い終えると同時に、リンネのアホ毛センサーが唐突に光り始めた。

「は？」

「嵐ってばすつごーい。次の試練の対象者を連れてきちゃうなんて」
「だから僕は何も… 連れてきた？ 今、連れてきたって言ったの

「？」

「嵐ー、後ろ向いてみなよ」

怖い。いろんな意味で後ろを向くのが怖いよ僕。

大きく深呼吸した後、ゆっくりと振り向く。

「あ、どーもです！」

「……」

僕は再び視線をリンネへと戻した。何故だろう、全身から嫌な汗が止まらない。

依然としてリンネのアホ毛は、僕の間後ろを指して力強く光り続けている。

「何も言わずに視線をずらすなんて、酷いですよーう。しくしく」
そう言っつて、僕の後ろからひよっこり姿を現した遊体X。

その姿は、見事なまでに半透明。後ろの家具がくつきりと見えるくらいに半透明。この姿、雷九の事件を思い出す。

が、今回は単にそれだけではない様子。何故なら。

「足が… 無い」

次の対象者であることはどうやら間違いなさそうだけど、これってどういことだ？

「見たまんまを答えるなら… 幽霊？」

死に装束、青白い顔、半透明な体、そして足がなく空中に漂っているその様から導き出される答えは、幽霊の一択のみだった。

「もう、それが初対面の女の子に言うセリフですか？ ぶんぶん」

「え、ご、ごめん。というか、君、誰？」

「……………」 はて、わたしって誰なんでしょうか？ あせあせ」

僕の質問に対して、たっぷり間をおいた後、質問で返してきた幽霊。

そもそも幽霊にまともな質問をぶつけた僕が悪かった。

「とりあえず、僕の名前は花嵐って言うんだけどさ、一応その、天使の使い、見たいなことをやってます」

僕のセリフに合わせ、リンネが天使のキッスを幽霊に施す。

「天使さん？ ほへえー、それじゃあ私、死んじゃったんですか？
ってよく見りゃ私、足がなーーーい、しかも体が透けてるーーー
」

今頃気づいたのか？

そう言えば心霊番組が何かで、幽霊は自分が死んでること気がついてないやつもいる、なんて話聞いたことあるけど。

「そもそも記憶喪失？ ってか幽霊に記憶なんてあるのか？ あのトンネルにいたのが憑いてきちゃったってのか？」

僕はぶかぶかと浮いてこちらの様子を見守っていたリンネに疑問をぶつけた。

「リンネ。天使の仕事ってさ、迷子になった幽霊をあの世に導く事なんかも含まれてんの？」

「んー、あながちまるつきり関係がないとも言いきれないんだけど、基本的には天使の仕事じゃないよ、それは。ほら、テレビでよく天使が死んだ人を天へ導く！ みたいな描写があるでしょ？ あれは無いわ。あんなのは人間の想像にすぎないもの。夢を壊しちゃって悪いけど、この手の仕事は死神の領分ね」

確かにそれは聞きたくなかった。

「つまり、基本的には天使の仕事じゃないんだな？」

うんうんと頷くリンネ。そうなると次の疑問が浮かぶ。

「それじゃあ何で、次の試練はこの幽霊が対象何だ？ 僕らは、どうすればいいんだ？」

「さあ？」

さあってリンネさん。あんたそれでも天使ですか？ あ、今はまだ天使の卵か… ってそんなことは、この際どうでもいいわけで。

「実を言うと、あたしもさっからずっと考えてただけどねー」

そうなのだ。いつもなら自ら率先して名乗り出て、あたしが助けてあげるーなんて、どこから沸いてくるのか分からない自信と根拠を基にした彼女の自己紹介が入るのだが、今回は珍しくそれが無い。どうやら今回の対象者は、天使にとってもレアケースなのかもし

れない。

「うーん、死神の領分に関しては専門外だから、あたしも詳しくは無いんだけど。それでも記憶が全くないってのは可笑しいと思う。それに、幽霊が対象者だなんて聞いた事が無いわ」

「そうなのか？ 分かった、こういしても埒が明かないし、一先ずこの幽霊ちゃんの記憶を探すって方向で動いてみるか」

僕は改めて幽霊の方に向き直り告げる。

「あー、幽霊さん、いや幽霊ちゃん？ …… あー、もう。名前も覚えてないってのは不便だな」

「にはははは、それならあたしに任せてよ嵐。よーし… うん、決めた。幽霊だけにゆーこなんてどう？」

「そんなまた安直なー。しくしく」

ゆーこ、ね。確かに安直だけど、リンネのネーミングセンスにしては悪くない気がした。

「よし、それじゃあゆーこちゃん。僕らは君を助けたいと思う。それにはまず君の記憶が肝心なんだ。ここにくる以前、どんな小さなことでもいいんだ、何か記憶はあるかい？」

「はいー。それが全然なんにもおぼえてないんですよー、これがきがついたらトンネルに居て、気がついたら花嵐さんの後つけていて、気がついたらこの家に居たんですよー。てれてれ」

「そうなのか。やっぱり普通に考えれば、あのトンネルで何かあったと考えるのが普通だろうな。それと、僕の名前を砂嵐みたいに言うのは辞めてくれ」

「えー、私がどう呼ぼうと私の勝手じゃないですかー、砂嵐さん」

「今、完全に砂嵐って言ったよね？」

はい、ここでリンネが大爆笑。

その時、僕の部屋の扉がいきなり開かれた。

「五月蠅いですよ兄さん！ いま何時だと思ってるんですか！ リンネさんもその笑い声を何とかして下さいー！」

「ご、ごめん有須。ほらこいつのせいなんだってば、次の試験の対

象者で幽霊なんだけど」

「こいつ？ とはどいつのことですか？ 私には兄さんとリンネさん、お二人の姿しか見えませんが」

「え？」

てつきり有須になら、その姿が見えるんじゃないかと思っていたが、どうやらそうではないらしい。

僕がゆーこの姿を視認出来るのは、やはり天使の力あってこそなのか？ それとも何かほかに原因でもあるのだろうか？

別段僕は、靈感がある体質と言うわけではない。

「ははん、そうやってごまかそうとしても無駄ですよ？ それともまさか本当に、トンネル内で何かに取り憑かれちゃたんですか？

それともそれとも驚きすぎて、兄さんが可笑しくなっちゃっただけですか？ いずれにしても静かにしてください。私は今、猛烈に眠いんですから！」

「ごめんなさい。猛省します」

僕の謝罪を聞いたのち、パジャマ姿に枕片手の有須は、そそくさと部屋へと戻って行った。

再び大爆笑する二人。

「というかお前まで笑うなゆーこ！ ほぼ君のせいなんだからな？ リンネも笑うな。また有須が来ちゃうでしょうが！ 全く、この浮遊コンビときたら」

今日何度目か分からないツッコミを入れる僕。ああ、今日は良く突っ込む日だ。

部屋に浮遊物が二つもあると言っつのはどうにも落ち着かないもので。

天使が眠るのだから幽霊だって眠るものらしく、すやすやと寝息を立てながら空中で直立して眠るゆーこ。

今日はあれだけ突っ込んだんだ、これくらいじゃ僕は突っ込まないぞ。

そんな事を考えながら、僕の意識は夜の闇へと吸い込まれていっ

た。

眼が覚めたら、昨日の出来事は全て夢でした！。
そんな展開を期待して、恐る恐る眼を開ける僕。

「ちえっ」

目の前にはゆーこ。何故か逆さになって空中に浮いている。同じく何故かリンネも逆さになって空中に浮いている。

僕の部屋はいつから宇宙空間になったのだろう？

「おはよーござーます花嵐さん。っていうか今、私の顔見て舌打ちしましたよね？ しくしく」

「おはよう。というか何？ その格好は。はやってんの？ いまその格好がブームなの？」

「いえ、全然。そんなことより、今日は土曜日です。元気よく私の記憶を探しに行きましょう！」

「幽霊の癖にやけに元気だなおい」

「にははははは、ほんとほんと、この際その元気を少しでも別けてもらったらどう？」

何だよその漫画みたいな展開は。

親父にダンゴ、リンネにゆーこ。今の我が家は、元気キャラで満ちている。

その上僕までそんな元気はつらつ熱血野郎になってなったらどうするんだよ？ 暑苦しくてしょうがないだろ。

「いや、いらん。むしろいらん。タダでもいらん」

「ひどい。花嵐さん、ひどい。えーんえーん」

「……って嘘泣きだろ？」

「てへ」

危ない。危うく騙されてトラウマが発動するところだった。

てへなんて、その死に装束と青白い顔で言われても、全然可愛い

と思えないのが逆に気の毒だった。

と、いつまでもミニコントを展開してもなにも解決しないということ、ゆーこの記憶が戻ることを期待して、まずは昨日のトンネルへと行ってみる事にした僕ら。

土曜とはいえ、仕事中の親父や陽兄ちゃんに頼むわけにもいかず、バスで現場へと向かう事に。地味に痛い出費である。

肝試しトンネル

「で、何か思い出せそうか、ゆーこ？　ここに居たっつのが君に残っている最古の記憶なんだろう？」

僕は隣で浮かぶ青白いゆーこに問いかけた。どうやら昼の日差しつてやつは幽霊にとつて耐えがたいものらしい。

「うーん。わかりましえーん。それよりトンネルは涼しくていいですねえ。はあー、落ち着く。ずっとここにいたいくらいですねえ」

「わかった。ここが気に入ったのなら、君はここに永住したまえ。これにて一件落着。はははは」

「じょーだんですよーう。リンネちゃんも何とか言っつてやって下さいよー」

「いやー、ゆーこ。幾ら何でもそれはひくわー。あたしはトンネルより嵐の部屋の方がいいかなー」

「そつちじゃなくてー。えーんえーん」

ゆーこが自力で記憶を取り戻すのは困難だと悟った僕は、何か手掛かりがないかとトンネル内部をより詳しく探ってみる事にした。

土曜の昼間だと言うのに殆ど車が通らない。

昨日の夜見た通り、トンネル内はいたるところに落書きがありゴミも散乱していた。

昨日の陽兄ちゃんは、こんな中で僕らが来るまであんな格好で、

しかも一人で待つていたのか。どんな罰ゲームだよそれ。

ゴミに交じって、ところどころにガラス片や車の部品のようなものがおちているところを見ると、どうやらここで事故があったというのは確実ではないかと思えた。とはいえ、それがこのゆうこに関するものかどうかまでは、判断する事は難しい。

頼みの綱のゆうこ自身も、この様子を見て何も思い出せない以上、別の方向から事を進めていくしかないわけで。

そんなことを考えていた時、突然リンネの叫び声が聞こえてきた。「嵐ー大変だー、大変だよー」

慌ててその声のする方向を見ると、昨日の陽兄ちゃんのようにぐったりと倒れこんでいるゆうこが眼に入った。

急いで駆け寄って声をかける。

「おい、どうしたゆうこ、何か思い出したのか？ それとも幽霊にとつてこの日差しはきつかったのか？」

実体のない幽霊だけに、触って抱え起こすことが出来ず、こうやって近寄って声をかけることしか出来ない。

「だいじょーぶねす。ちょっと悪寒がしたただけでふから。やっぱりここ、あんまり居たくない気がしまふ」

「いや落ち着けゆうこ。そもそも幽霊は悪寒とか感じないだろ。とにかくここには居たくないんだな？ 良し、リンネ、取り敢えず移動しよう」

僕は触れなかったが、ゆうこに触ることが出来るリンネは、彼女の手を取ってトンネル外へと移動する。

ゆうこが倒れたのは丁度トンネルの反対側出口付近だった。そこに何かがあるのかもしれないが、とにかく、あのトンネルが何かしらゆうこ関係していることは明らか。そうなってくるとやることは一つ。

「二人とも、一旦町まで帰るぞ？ 図書館へ行こう。ちょっと調べたいことがあるんだ」

ということでも町へと戻り、その足で図書館までやって来た僕ら。そんな僕が、pc前の席に座ろうとした瞬間、とある人物に声を掛けられた。

「あれ？ 先輩？ へえー、珍しいですね、この暑い日に先輩が外に出歩くなんて」

白井天世である。

そうか、このボクっ娘も図書館大好き人間の一人だったっけ。

というか白井の場合、冗談抜きで1日中図書館籠ってる姿がイメージ出来てしまうから怖い。

「よお白井。数日ぶりだな、宿題はちゃんとやってるか？ 夜更かしとかしてないか？」

「何ですか、そのお父さんみたいなセリフは。それより先輩、何か調べ事ですか？ コスプレ天使が一緒のところをみると、只事ではないみたいですが」

ここで会ったのも何かの縁。こうなったら白井にも一つ協力してもらおうとするか。

「白井、リンネは見えるよな？ それじゃあその隣にいる幽霊は見えるか？」

リンネの隣で思い切り変顔を浮かべるゆーこ。

馬鹿にしてる。見えないのをいいことに完全に白井を馬鹿にしてるよこの幽霊。

「幽霊？ いえ、残念ながらボクにはコスプレ天使しか見えませんね。… いえ、待って下さい、確かに見えませんが、ああ、何だこれ、何故だか無性にいらいらしてきます。先輩、一発殴らせて下さい」

「何でだよ！ 普通に嫌だよ！ とにかく、僕は今この幽霊の件でちよっとした調べ物をしようとしていてね。もし暇だったら白井も

手伝ってくれないか？」

「つーか先輩、図書館に居る後輩を捕まえて暇か？　はないでしょ。普通何か用があるからここにくるんですから。…　まあ、ボクは暇なんですけど」

「結局暇なのかよ！　まあいいや、それじゃあ頼むよ白井。後で何かおごるからさ、な？」

「し、仕方がないですね。駄目先輩だけじゃ何時間かかるか分かったもんじゃないですから、特別にボクも手伝ってあげます。有難く思ってくださいよ？」

「ああ、頼りにしてるよ」

僕のセリフに、ちよつとだけ耳を赤く染める白井。

そんな僕らの様子をにまにましながら見守る二つの浮遊物体。

「いやあ、暑いですなあゆーこさん。ここだけエアコンが故障しているみたいですねえ」

「まったくそのとおりですねありンネさん。暑くて暑くて死んじやいそうですねえ。まあ、私もう死んでるんですけど」

そう言つて空中で大爆笑する二人。

いかんいかん。この程度で精神を乱されては調べ事なんて出来やしない。今はとにかく集中するんだ。

「それで先輩、ボクは何を調べればいいんですか？」

「うん。白井、この町の外れにある幽霊が出るって噂のトンネル知ってるか？」

「勿論知ってます。一時期噂になりましたからね、あそこ。それにあそこって事故が結構多いんですよ。確か死者なんかも出てたはずですよ。おかげで今じゃ、殆ど使う人もいなくなっちゃいましたけどね」

やはり、というか当然というか、僕らが知らなかっただけでどうやら有名なトンネルだったようだ。

それに、死者まで出ていとなると、その中にゆーこに関する事故もあるかもしれない。

「分かった。全てを調べていたらきりがないからな。あのトンネル内での死亡事故に的を絞って調べようと思うんだ。白井はpcを使って関係ありそうな記事を調べてもらっていいか？ 僕は新聞やトンネルについての関連資料を当たってみる」

それから数時間。僕らは一つの結論に到達した。

それは、「ゆーこはトンネル内での死亡事故とは無関係」と言う、およそ僕の推論とは大幅に食い違う結論だった。

まず、ここ数十年、確かにトンネル内での死亡事故は何件か起きていた。

が、そのどれもが男性ドライバーばかりでゆーこくらいの年齢の女性が亡くなった事故は起きていなかった。事故当時入院していて暫くした後には亡くなった可能性もあるとして、重体事故の記述も調べたものの、ゆーこくらいの年齢ではいずれも該当者はいなかった。流石に軽傷者まで探すと数が多すぎるし、可能性は低いだろうし、何より時間的にも情報人手の観点から言っても難しかった。

「ありがとう白井。決定的手掛かりは見つからなかったけど、少なくともこの事故とは無関係だと分かっただけでも収穫だった。助かったよ」

「流石に1日調べ事をすると疲れますね。いい暇つぶしにはなりませんでしたけど。それと先輩、奢りの件忘れないでくださいよ？」

「はは、分かっているって。その時は前もって連絡入れるからさ、ま、期待しないで待っていてくれ」

手伝ってくれた白井と別れ、一旦家へと戻ることにした僕ら。辺りはすっかり夕闇につつまれていた。

ゆーこはトンネルの事故とは無関係だった。

その事実を、僕をちょっとだけ安堵させたものの、手掛かりを無

くした僕を余計に悩ませるのも事実だった。

「なあ、ゆーこ。やっぱりまだ何も思い出せないか？ 無理に思い出させようとは思わないけどさ、何かヒントになるようなことだけでも思い出してくれると非情に有難いんだけどな」

「そんな都合良い部分だけ思いだせなんて無理ですよー。あせあせ」

「ですよー」

「でも、やっぱりあのトンネルが無関係とは思えないんです私。例えばそれが直接的では無いにしても、です」

「…それは分かったけどさ、君達、ちょっとは落ち着こうよ。さつきから何で僕の部屋の中で暴れまわってるの？」

ゆーこは僕の部屋で何故かぐるぐる回ったり、飛び跳ねてみたり、歌ったりと実に元気に動き回っていた。

「んー？ なんですですかねー？ 何故かこう、無性に体を動かしたいって言う衝動にかられまして。今の私、明日に向かって叫びたい気分なんです！」

そんなこと言われても正直困るわけで。

まあ、幽霊だからどれだけ暴れまわっても周りの人間には見えな
いし音は聞こえない。実害を被るのは確かに僕だけだけだね。

とは言え、死んでもからも尚元気とは、本当にこいつ死んでるのか？ 幽霊なのか？ って思わず疑いたくなるわけで。

……………え？

我ながら今、何か重大なことを言ったような気がする。

そうか！ そうなのだ。そもそも僕達は、勝手にゆーこを幽霊と決めつけていた。何もゆーこが自分からそう名乗ったわけじゃない。そして、何よりゆーこは今回の試練の対象者なのだ。

関係のなかったトンネル内死亡事故。対象者として選ばれた事実。伝承。つまりはそういうことなのだ。

「あつはつはつは」

僕はとある事実に辿りつき、思わず声に出して笑ってしました。

「うわっ、嵐が急に笑い出した。なになに思い出し笑い？」

「いやいや、ただだけ豪快な思い出し笑いだよ」

「も、もしかして、私のこの儀式が成功して、花嵐さんの笑いが止まらなくなつたとか？　どきどき」

「うおーい、それって儀式だったの？　っていつか何してくれちゃってるの？　なんで僕を呪おうしてるの？」

またしても大爆笑のリンネ。

しまった。まずい、非常にまずいぞ。このパターンは非常にまずい。

そう思ったものの、時すでに遅し。僕の部屋の扉は力一杯に開けられた後だった。

「兄さん！　いい加減にしてください。今何時だと思ってるんですか？　昨日からいつたいぜんたい何なんですか？　浮かれてるんですか？　夏の陽気に誘われて、ついっつかり羽目を外しすぎちゃってるんですか？　それとも何でもすか、やっぱり昨日何か悪いものにも取り憑かれちゃったんですか　死ぬんですか？　可笑しくなっちゃったんですか？　良い機会ですからこの際とことん言わせてもらいます。いいですか？　兄さんは花家の長男としてですね……」

一度始まった有須の説教は、例え雷が落ちようと隕石が落ちようと、月が落ちようと止まることは無い。

僕とリンネ、そして何故かゆーこも揃って正座し、延々と夜明けまで有須の説教を受け続けたのだった。

「お早う、二人とも」

「嵐ー、まだまだねむいよー。ねむねむ状態だよー」

「ごめんなさいごめんなさい」

爽やかな眼ざめとは言い難い日曜の朝。

リンネはまだまだ眠そうだったし、ゆーこに至ってはまだねぼけているのか、何故かひたすら謝っていた。

だらけきった雰囲気を打破すべく、僕は朝から作戦会議を開いていた。議題はもちろんゆーこに関してだ。

「いいか諸君、今日こそはゆーこ隊員の記憶を戻し、真実へと辿りつきたいと思う。そこで二人にはある推理してもらいたい。いいか？ よく聞くんぞぞ？ 昨日の調査で分かったこと、それはゆーこ隊員はあのトンネル内で起きた事故で死んだわけではない。かといって事故と関係がないわけではない。そして、ゆーこ隊員はあくまで今回の試練の対象者だと言う事。死者を導くのは天使の仕事ではないと言う事。加えて、僕らは今まで色々なタイプの伝承を被ってきたという事。一筋縄じゃないかない伝承も大勢いたはずだ。これらから導き出される結論、さあ思う存分推理してくれたまえ」

僕が話終えると同時に、リンネの手がすつとまっすぐに上がった。「おお、早いなリンネ隊員、流石は天使だ」

リンネはニヤリと自信ありげに微笑んだ後、単刀直入に答えた。

「隊長、ヒントください」

「早いよ！ 絶対考えてないだろリンネ。… 全く、仕方がないな。いいかよく聞け、リンネ隊員。ゆーこ隊員は元気すぎる幽霊だ。それに幽霊は普通眠ったりしないだろ？ だがゆーこ隊員は違う。つまり？」

「分かった！」

眼を輝かせ、興奮気味のゆーこ隊員が嬉々としてその両手をあげてアピールした。

「おっ、いよいよ本命ゆーこ隊員の出番だな？ さて、それじゃあ聞かせてもらおうか、ゆーこ隊員の推理とやらを」

ゆーこは敬礼した後、その推理を語り始めた。

「はい隊長。私は」

僕らはある建物の前にやって来ていた。

僕らの推理が正しければ、ここに解決の糸口がある可能性が高かったからだ。

その場所とはどこか？

僕が代行者としてリンネと関わってからと言うもの、何度となくお世話になっているこの施設。

ある時は、土砂降りの中怪我をした先輩をここに運んできたリ、ある時は喋る黒猫と一緒にその恩人を探したり、ある時は、睡魔を抱えたある女性を助けるため、その夢の中へと侵入したり。

そして今度は。

「遅かったのね、嵐。あなた、相変わらず私を待たせるのね？ あなたには学習能力というものが無いのかしら」

そう言って挨拶の一撃を僕に見舞う霧霞。

やはり、僕の周りには些か元氣すぎる人物が多すぎるようだ。

「ご、ごめん霧霞。それと、今日は宜しく頼むよ。また君の力を借りたいんだ」

ここは霧霞総合病院。この町一番の総合病院で、僕はある目的のためこの病院を訪れていた。

昨日のうちに霧霞に電話をし、ある程度の話と確約と、段取りをつけておいたのだった。

すなわち、僕の推理は間違っていないかったという事となる。あとは、そう、本人次第という事か。

「隊長、尻に敷かれてるー。にやにや」

… 本当に大丈夫か、これ？

霧霞の案内でとある病室へと向かう僕ら一行。

「キリキリひつさしぶりー、元氣してた？」

「ええ、一応ね。あなたは相変わらず元氣そうね」

僕は何度か会ったり、電話したりメールしたりしてるのでそれほど久しぶりってわけじゃないけど、リンネにとってはクロマルの件以来ということになる。

まあ、霧霞の性格上、そもそもあんまり相性のいい二人とは言えないわけだけど。

「昨日も言った通り、こいつがゆーこ。と言っても僕とリンネ以外には見えないだろうけど」

病室に到着する前に、一応ゆーこを紹介する。白井の時同様、自分の姿は見えないだろうとたかをくくり思い切り変顔を披露するゆーこ。

「凄い、見えていないとはいえ、あの霧霞を馬鹿にしている。何と言うチャレンジャー、何と言う勇者。」

「へえ、さつきから思いつき私を馬鹿にしているこの子が？」

「そうそう……って、え？ 見えてる？ 霧霞、ゆーこが見えるのか？ 有須も白井も見えなかったのに？ うーん、何でだろう」

「さあ？ 何故かしら。私、こういう環境で育ってきたから霊感は強い方よ？ でも、そんなことより嵐、幽霊にはやっぱり塩かしら？ それとも聖水？」

「ぎゃー霧霞さんってば、ゆーこを成仏させる気満々だよ！」

「アワワワワ、コノオネーサン、コワイ。ユーコ、トツテモコワイ。ガクガクブルブル」

「そうこうするうちに、とある病室の前へと辿りついた僕ら。」

「と言うかこのパターンは一体何回目だろう？ 何度経験しても、知らない人の病室に入るってのは緊張するものである。」

「ま、今回の場合知らないってのは語弊があるけど。」

「ネームプレートには「霊岩寺夕子」の文字。」

「リンネが適当につけたゆーこって名前は、あながち間違っただけじゃなかったという事か。これってただの偶然？」

「準備はいいかゆーこ？ 僕らに出来るのはここまでだ。無責任なようだけど、後は君次第だからな」

僕の呼び掛けに際し、力強くうなずいた後、病室へとすると侵入したゆーこ。続けて僕らも扉を開けて中へと入る。

僕らの目の前には、ベッドによこたわり、人工呼吸器や医療機器が嚴重にとりつけられた少女が一人。

「この子の場合、本来は家族以外に面会は謝絶の状態なのだけど、今回は私の友達と言う事で特別に許可を得たわ」

呆然と少女を見つめる僕に対し、霧霞がそう言った。

僕の眼の前の少女。

少女の顔は、ゆーここと瓜二つ、いや、つまりは、ゆーこそのものだった。

「え？ え？ これってどういうこと？ ねえねえ、嵐どういふこと？」

ただ一人、この場で事情を把握していない様子のリンネが僕に訪ねてきた。

「どういうことってリンネ、家を出る前に説明しただろ？ 聞いてなかったのか？」

「あー、聞いてなかった。だって推理しろーなんて嵐が言うから、あたしずっと考えてたんだもん」

「それって僕が悪いのか？ まあ、簡単に説明するとね、ゆーこは死んでいなかった。それだけだよ」

「ああなるほどー、ってどういうこと？」

「だからさ、そもそもゆーこは幽霊じゃなかったんだよ。僕らが勝手にそう思い込んでいただけなんだ。現にゆーこは自分から幽霊ですなんて言わなかったろ？ まあ、そんなこと自分で言う幽霊が居るかは疑わしいけど。それに、あのトンネル内の死亡事故とは関係がなかった、でもトンネルと無関係と言うわけじゃ無かった。

そもそも僕らはあのトンネルと、死亡事故について拘りすぎているんだよね。トンネルってのはその内部も勿論だけど、その出入り口での事故も多いんだよ。つまり、事故はトンネル外で起きていたん

だ」

僕は一枚の新聞記事のコピーをポケットから取り出し、リンネに見せた。

「なにになに？ 桜丘町正面衝突事故…… 負傷者は意識不明の重体が一名、霊岩寺夕子」

「うん。ゆーこは死んでなんかいなかった。けど、まるきり無事つてわけでもなかった。正面衝突事故でシートベルトをしていなかった後部席のゆーこだけが、衝撃で何メートルも飛ばされて、あのトンネルの出口付近に叩きつけられた。確か、当時は後部座席のシートベルトつて法律で定められてなかっただろ？」

「ぼかんとするリンネに向かい、続けて説明を続ける。」

「図書館で僕らは、トンネル内の死亡事故だけに的を絞って調べてたんだ。そりゃみつかるわけじゃないよね。そもそも死んでないんだからさ。それと、元気すぎる幽霊つても気になってたんだ。ほら、リンネいつも言ってただろ？ 伝承に取り付かれるには何かしらの理由があるって。それに加えてゆーこが今回の試練の対象者に選ばれたという事実。つまりさ、例えるなら今のゆーこって、実は生きてて、何らかの理由によって、例えば、伝承の力によって無理やり生霊に近い状態にさせられたんじゃないかなって思ったんだ。だからこそ記憶がなかった。伝承ってやつは決して親切なんかじゃないからね」

「そこからこの病院に辿りつくまではあつという間だった。」

「伝承は人の潜在意識、心の隙間に入り込んでくるもの。例えば意識は無くても、体は動かなくても、その心の奥底にある隙間や願いを嗅ぎつけ、捻じ曲げ間違った方向で叶えてしまう。」

「僕がリンネに説明している間も、ようやく終えた今も、ゆーこは終始ベッドに横たわる自分自身の姿を見つめていた。」

「担当医によると、意識がずっと戻らないとはいえ小康状態を保っていた彼女の容体が、ここ数日は何故か悪化する一方だそうよ」

「霧霞が淡々とゆーこの症状を語った。」

肉体とその靈魂、つまりはその魂が離れている今のこの状況は、当然と言えば当然だけどユーこの体に深刻な状況を招いているのだらう。

このままの状況が続けば、冗談ではなく、今度こそ間違いなく本物の幽霊そのものになりはてしてしまうの。

僕は確かに伝承を被う事が出来る。

だが、今回の場合はユーこが元のこの体に戻ると決意したときが、そのタイミングであり、必要不可欠なキーなのだ。

僕は黙ってユーこを見守った。

「すみません皆さん、ちょっとだけ外の空気を吸ってきてもいいですか？」

お前、そもそも呼吸してないだろ？ そんな野暮なことを言う輩は、少なくともこの場にはいないようだった。

僕も気分転換がしたくなって、病院の屋上へと向かった。

すると、夏の強い日差しの中、きらきらと輝く半透明な背中が僕の目に入った。

このままの状態であれば、少なくとも霊体として仮初の自由を手にする事は出来る。最もその場合、二度と生身の体には戻れなくなるが。

一方、彼女に取り憑いた伝承を被い、元の体に戻れば幽霊になることは回避できるものの、またいつ意識が戻るとも分からない肉体という名の牢獄に閉じ込められ、ひたすらに自由を夢見て眠りにつく日々を再会する事になる。

霧霞に聞いた話によると、ユーこが事故にあい、今の意識不明状態になって3年がすぎているらしい。当時13歳だった彼女にしてみれば本来なら頃は16歳、白井と同年年の高校1年である。

最初は声をかけるつもりは無かった僕だけど、その背中があまりに儂げで今にも消えてしまいそうだったため、気がつく僕は思わず彼女に声をかけていた。そうすることが正しいような、そんな気がした。

「ごめんな、ゆーこ。途中まではさ、僕がお前を助けてやるーなんて偉そうなこと言ってたのに、最後はゆーこに丸投げ。こんなのつてずるいよな？」

そんな僕の弱音に対して、ゆーこは持ち前の明るさと、幽霊らしからぬ元気で答えた。

「なーに言ってるんですかぁー隊長。隊長は私のために十分頑張ってくれたじゃないですか。後は、後は私が決断するだけですから。うるうる」

「ゆーこ…」

「そりゃー記憶もぶつとんじゃうわけですよー、だって3年ですよ？ 3年。そりゃ私だってお年頃の乙女ですもん。3年も経てばあれやこれや成長しますもんね。私自身、自分で自分からなかったのにも納得です。寝たきりでも体は成長するもんですねえ… 見ましたか隊長？ ベッドに寝ていた私、結構巨乳でしたよ？ にやにや」

「そうなのか？ そりゃまあ、けしからんな、うん」

何となく照れ臭くて、下手に言葉を濁して視線を遠くへと向ける僕。というか何て答えれば正解なんだ、これ？

「あれあれー、何で赤くなっちゃってるんですかー隊長？ ……」

…ふふ、私、決めました」

「うん。そっか」

僕はゆーこのその真剣な眼差しを見つめ、ひたすらに次の言葉を待った。

「私、元の体に戻ります。もう一度、この青空を、風を、温もりを、肌で感じたいから。私、生きてるんだって、実感したいから。実を言うと私、暗闇の中で、毎日毎日願ってたんです。どんな形でも構わない、もう一度だけでもいい、青空の元へと出てみたいって。お恥ずかしい話、そんな中途半端な私の願いがこんな状況を呼んじやったんですよね？ だから、今度はもつと欲張ります。一度だけなんて言わない、生身の体できちんと眼を覚まして見せますから！

きりっ」

僕は真っすぐにユーーこを見据えた後、ゆっくりと頷き、小声でリンネを呼びだした。

「呼ばれて飛び出でリンネちゃん登場です。むー、ユーーこもういの？」

「リンネちゃんにもお世話になりました。ええ、私の気が変わらないうちに、さ、とつととやっちまいましたよ！　どきどき」

こくと小さく頷いたリンネはいつものセリフを語り始めた。

「いいゆーこ？　今からあなたにとりついた伝承を抜うから。何があつてもあたしと嵐を信じてね？　さ、眼をつむって」

「そんなのとーぜんです。最初から最後まで、私は隊長とリンネちゃんを信じてますから！」

「にゅふふふ、照れるぜー」

そう言いつつ、どこからか天使の矢を取り出し、ユーーこ目掛けて射った。

矢は見事命中、ユーーこの半透明なその体から黒いもやの塊が吹き出した。

彼女に取り憑いていた伝承の正体はゴースト。いわゆる悪霊である。

その靄を認めた瞬間、僕の右手に鋭い痛みが走り、光り輝き始める。

「悪霊退治か、これってかなり天使の仕事っぽいよね。さて、何が出るかな？」

期待を込めて右手を見守る僕。

そこに現れたもの、それは…　一枚のお札。

ちよつと頼りないような気がするものの、悪霊って言ったたらこれか。

内心、ちよつとだけゴーストバスターネタを期待していたのは内緒だけ。

僕はそのお札を握りしめ、疑くことなく、一目散に黒靄に向かっ

てダツシュ&ジャンプしお札を張り付けた。

その瞬間、ゆーこを包んでいた黒い霧は空中で離散し、やがて消えていった。

がしかし、それと同時に、ゆーこの姿も徐々に消えていく。

つまり、その魂が病室のゆーこの体の元へと戻っていくという事なのだろう。

「隊長、リンネちゃん、お世話になりました。私の我儘に付き合ってもらっちゃってホントありがとうーござーました。短い間でしかけど、とーって楽しかったです。今度は、きちんとした生身の人間として、お二人に会える日を楽しみにしてますからっ。だから私、頑張ります！ それじゃ、それまでバイビー。うるうる」

「頑張れよ、ゆーこ。僕もリンネも、ずっと待ってるからな？ 君がこの世界に帰ってくるのを、ずっと待ってるから。だから…頑張れ！」

最後になっこりと微笑んで、その姿を完全に消したゆーこ。

「お疲れ様、嵐。嵐は凄く頑張ったよ。それはこのあたしがよく分かってる。だからほら元気出して、ね？」

またもやリンネに慰められる僕。今の僕、そんなに酷い顔してたのだろうか？

僕らがゴーストの伝承を被ったところで、ゆーこが眼を覚ますわけじゃない。

僕らがやったのは、彼女についた悪い虫を被う程度の、そんな極々小さな些細な事にすぎないのだから。

果たしてゆーこが眼を覚ますのは、これから何日先か、何週間先か、何か月先か、何年先か、何十年先か？

僕とリンネがゆーこの病室へと戻ると、霧霞が黙ってゆーこを見守っていた。

「彼女、決断したのね？」

僕は黙って頷く。

「皮肉なものね。件の伝承を被ったっていうのに、彼女についての根本的な問題は、何一つ解決していかないなんて」

「うん、そうだね。僕らが出来ることなんて、ほんの一握りだけ。こうして折角知り合う事の出来た少女の、笑顔一つさえ守る事が出来ない」

「でも、こうして彼女をお見舞いする事くらいなら出来るでしょ？私があなたにそうされたように。それって結構重要な事なのよ？」
お見舞いか。

「ありがとう、流石は霧霞だよ。君の言う通りだ。僕達にだって、まだ出来る事はあるかもしれない」

僕は病室の窓を開け、外の風を病室へと取り入れた。

「分かるか、ゆうこ？ 夏ももうすぐ終わるぞ、秋がすぐそこまで来てるんだ」

辺りはすっかり夕暮れ時、ゆうこの名前と同じ、オレンジの光が病室を包み込んでいた。

「また来るよ」

そう言い残し、僕らは病室を後にした。

その時、ほんの一瞬だけど、ゆうこの顔が笑顔になったような、そんな気がした。

END

「さあ、て、ラクヨー？ 今日の報告を聞かせてちょうだいな？」

「まあまあ、そう慌てないでよベルモットさん。結論から言つとね、恐らく、もうすぐかな」

「うふん、それは吉報ね。その時、その瞬間、天使とその代行者がどんな結論を下すのか、見物ですわあゝん」

「そうかな？ 嵐君とあの天使なら、何となく乗り切れちゃう気もするけどね」

「あらん？ ラクヨー、あの二人の肩を持つつもりかしらん？ このわらわという者がありながらん」

「拗ねない拗ねない。どっちにしろ、答えはもう直ぐ出るんだから。

… さあ、嵐君、君ならどうする？」

第12話「花と嵐と天使の笑顔とその理由」天使リンネの場合」

第12話「花と嵐と天使の笑顔とその理由」天使リンネの場合」

日本中が沸いた、あの地獄の釜のような暑さもようやく一段落し、長かった夏休みも暑さとともに過ぎ去ってしまった今日この頃。

桜ヶ丘学園も2学期を迎えた、そんな9月。

9月と言えば秋。

秋と言えば、芸術の秋、スポーツの秋、読書の秋、そして食欲の秋。

運動会に文化祭、秋に行われるイベントは数知れず。秋は何をするにもいい季節なのだ。

そしてそんな数々のイベントの中で、僕がもっと好きな行事、それはお月見である。

中秋の名月なんて言って、十五夜に月を見るアレである。

勿論、団子食べながら月を見るなんて風流だし、日本人らしくていいと思う。

だけでもう一つ、僕にとって十五夜が特別な理由があった。

夏の終わりと秋の始まり。

そんな季節の変わり目のように、僕等の元にも、とある出会いと別れが待っていたのだった。

「嵐、そんな窓辺で一人たそがれちゃって、どうしたの？ お腹でも痛いのか？」

「うわっ、本当ですね。… 兄さん、何かありました？」

自分の部屋の窓辺に立ち、一人月を見上げる。

そんな僕に対し、部屋に入って来たリンネと有須が開口一番そん

な事を言った。

月を見上げていた僕の表情が、よほど可笑しかったらしい。

そこまで言われては、流石の僕も黙っているわけにはいかない。

「いきなりそれが、二人とも。そんなに変だった？ 僕の顔。リンネはいつものことだけだよ。有須、幾ら何でもわっは無いだろ。

兄さんちよつと傷ついたぞ」

「へっ？ い、いえいえいえ、違うんです。その、兄さんを馬鹿にしたとかじゃなくてですね、ほら、兄さんにしてはですね、珍しくそんなまじめな顔をしていたので、つい」

有須は腕を顔の前ではたぱたさせながら、何故か必死に弁解していた。

僕の方も、別段本気で言ったわけでは無かったので、この話はこれでおしまい。

「ところで二人して何か用か？ ああ、もしかして夕飯の時間？」

「はい。夕ご飯の準備が出来たので兄さん呼びに来たんですが、ノックしても反応がなかったの」

「そっか、ごめんごめん。ちよつと考え事してたんだ。うん、すぐ行くよ」

僕の返事を聞いた有須は、微妙に納得していない表情で、そのままキッチンへと戻って行った。

有須の姿が見えなくなったのを見計らって、リンネがすかさず言う。

「もしかして、ルナのこと考えてた？」

「… 僕の考えてることってさ、そんなに顔に出てる？」

「にはははは、かもねー。でもルナについての記憶があるのは、嵐とあたしだけだから心配ないと思うけどね」

十五夜月美。

かつて花家の隣に住んでいた、僕の幼馴染の名前。

その正体は墮天使ルナ、つまり天使試験に堕ちた天使。その成れ

の果て。

本人さえ忘れていたそんな月美ちゃんの正体に気がついたリンネと僕は、再び月美ちゃんに天使になるチャンスを与え、その魂を天界へと送り返したのだった。

その際、月美ちゃんことルナに関する一切の記憶は、僕とリンネ以外の人間の頭から完全に消去されていた。

あれから数カ月たった今でも、こうして月の綺麗な夜には、ふと彼女の事を思いだしたりしてしまうわけで。

何せ僕らは、十年來の幼馴染だったのだ。やはりそう簡単には忘れられない。

僕は小さく溜息をついた後、有須の後を追いキッチンへと向かった。

翌日

「お嬢様： またそんな泥だらけになってしまわれて」

「にひひひひ。でもねーあたし、一人であんなに飛べるようになったんだよ。偉い？ 偉いでしょ？」

「お言葉を返すようですが。全く、偉くはございませんぞ」

「えええー何だよー。ちつとは褒めてくれたっていいじゃん」

「ワタクシ、あれほどお嬢様お一人だけで飛んではいけないと、申し上げおいたはず。拳句の果てにそんな姿になって。元気いっぱいなのはよろしいのですが、お嬢様の場合些か度が過ぎます。いいで

すか？ お嬢様はもう少し女の子らしくですね
「うー、まーたはじまった…」

それは、どこかの誰かの記憶なのか、はたまたただの夢なのか。

「おい、嵐、起きろ」

誰かに体を揺さぶられている。

… 何だよ。僕は今、猛烈に眠いんだ。放っておいてくれよ。

「くっそ、幸せそうに眠りやがって。こうなったら絶対起こす。意地でも起こしてやるからな！」

そんな声が聞こえてきた直後、僕の頬に強烈な衝撃が走った。

「痛ってええええ。起きるよ、起きればいいんだろう！」

僕はじんわりと熱を帯び、じんじんと痛み出した頬を摩りながら、勢いよくその場に立ち上がった。

「よっ、お目覚めかい大将？」

「何だイタルか。… ってえ？ ここどこ？ 今何時？」

「おいおいしつかりしろよ嵐。もうとっくに放課後だぜ、放課後」
イタルの言葉に愕然とする僕。

慌てて時計を確認すると、針は午後4時を指し示していた。

そう言えば、お昼休み以降の記憶が無い。どうやら僕は、午後の授業中ずっと眠りほうけてしまっていたらしい。

何たる醜態。

そりゃ、授業中居眠りするくらいなら何度も有るけど、こんなにものがつつり寝てしまったのは4月のリンネとの出会い以来かもしれない。

奇妙なデジャブを感じながらも、慌てて周囲を見渡す僕。

「んじゃ、俺は生徒会室へ行くけどよ。今のところ急ぎの仕事はな

いし、今日は俺らに任せて帰って休んだ方がいいんじゃないか？」「ああ、悪いけどそうさせてもらおうよ。皆によろしく言っておいて」「ひゃっひゃっひゃっ。そうしろそうしろ。…で、リンネって誰？ 月見ちゃんって誰だよ。お前、ウンウンうなされながら叫んでたけどよ」「

僕はイタルの疑問を華麗にスルーし、脱兎の如く教室を走り去った。

ぼーっと歩いているうちに、いつの間にやら自宅へと到着してしまっただらしい。

まだ寝ぼけているのだろうか？ 学校からここまで道中の記憶が全くない。

… おいおい、この年にしてついに壊れちゃったか僕？ この半年間。リンネと共に突破した試練の数は丁度10。

それが果たして多いのか少ないのか。まあ、108という試練総数を考えると、まだまだこの先長いってのは確か。

このペースだと後何年かかるんだろう。… 駄目だ、さっぱり分からん。

いつまでも玄関前で突っ立っているわけにもいかず、僕はゆっくりと我が家の玄関を開けた。

「ただいまー」

僕の声に反応し、一足先に帰ってきていたらしい有須がパタパタと出迎えてくれる。

「お帰りなさい、兄さん。今日は早かったですね？」

「んー、何だか微妙に調子が悪いみたいなんだよね。生徒会、イタルに任せて帰ってきちゃった」

「え… た、大変！ 熱は？ 熱はあるんですか兄さん。喉は痛み

ますか？ 咳はどうです？ 寒気は？ お腹は痛みますか？」

有須は相変わらず心配性だな… などと返答する間もなく、気がつくと僕は自室で寝かされてた。

熱も無いのに頭に氷を載せて。

「どうしてこうなった」

僕が自室の天井を見上げながらそう呟くと、僕の看病をする気まんまんの有須が少々興奮気味に答えた。

「いいですか兄さん。兄さんは病人なんです、病人は病人らしく、私に看病されればいいんです。兄さんには、拒否する権利も人権もありませんから」

せめて人権はなんとかして欲しいところだけど、有須に変なスイッチが入ってしまったのは確かかなようだった。

本当に、どうしてこうなった…？

「いや、うん。こうやって看病してもらるのは兄としてかなり嬉しんだけどさ、ちょっとやりすぎじゃないか？ 僕、別に病人てわけじゃ」

何か言いましたか？ とギロリと睨んでくる有須。

正直言つて、怖い。蛇に睨まれたカエル。もとい、妹に睨まれる兄。情けなすぎて涙が出てきそう。

「ボク、モウ、ネマス」

僕らのやり取りを天井近くにふわふわ浮きながら眺め、いつものように大爆笑する某天使。

「よっわー。嵐よっわー」

ああそうさ。その通りさ。好きなだけ笑うが良いさ。

有須に抵抗するのも、リンネに反論するのも面倒くさくなった僕は、そのまま不貞寝と称し、眠りの世界へと身を任せた。

「はい、これ」

「通知表でございますな？　では、失礼して拝見させていただきました」

「どう？　どう？　あたし、頑張ったでしょ？」

「…　確かに、一部の科目はトップの成績。流石はお嬢様でございます」

「ふふん。苦しゅうないぞ？」

「ですが、一部は一部。他の大多数がこの成績ではとても胸を張れるものではございませんよ？　ワタクシ、頭が痛いです」

「ひっどーい。あたしにだって苦手くらいあるもん。ベーっだ」

目が覚めると、今度は断片だけではあるもののしっかりとはつきりと、その夢を覚えていた。

「今のって…　リンネ？」

「はにゃ？　あたしがどうかしたの？　嵐」

天井を見つめながら先ほどの夢を反芻する僕の上に、音もたてずぬうつとリンネが現れた。

これじゃあ天使と言うより幽霊だよ。わざとか？　わざとなのか？

「い、いきなり出てくるなよリンネ」

「ひどいよー嵐。幾ら何でも驚きすぎ。それがずっと看病した人に言うセリフ？」

時計を見ると、7時を回っていた。

「どうやら僕、リンネに見守られつつぐっすり眠ってしまっていたらしい。」

「と言うか看病？　あのリンネが？　むしろ、看護が必要なあのリンネが？」

「もしかして、今までリンネが看病してくれてたのか？」

「んー、看病って言っても殆ど妹ちゃんがやってたからなあー。あたしはじいーっと嵐の寝顔を見てたくらいだけだね」

「そっか。それで十分だよ、ありがとう。それと大声出してごめん。実はさっき、リンネの夢を見たような気がしたんだ。それでつい」
「え？ あたしの夢？」

「そう。だれかと会話してた。僕の知らない人だったよ。いや、人って言うより天使？ しかもさ、外に見える景色がどう見ても地球上じゃ無かつたんだよね」

僕が見たそれは、確かにリンネだった。会話の内容までは覚えていないものの、間違いなく天界でのリンネの姿だった。

問題は何故、僕がそれを見たのかと言う事。

勿論、天界でのリンネの姿なんて見た事がないし、そもそも天界ってどんなところなのという話をしたことも殆どなかった。

「……………やっぱり、なのね」

「リンネ、どうかしたのか？」

「にやははは、ごめんごめん。いやー、あたしの夢だなんてちよつと恥ずかしいなーって思っただけ」

妙に明るく振舞っているリンネが少しだけ気になっていたものの、この時点の僕はこの事に関してさほど気にもしていなかった。

勿論、この後僕の身に「ある出来事」が降りかかるなんて事も、予想できるはずも無かつたのだった。

「秋だなあ」

「秋だね」

「良い天気だなあ」

「秋晴れってやつだろうね」

「…なあ、嵐。俺達何やってんだっけ？」

「生徒会のお仕事。良く言えば、何かあった時のために待機。悪く言えば、だらだらばーっとしてるだけ」

秋という季節は実に様々なイベントが開かれる。つまりは生徒会

泣かせな季節なのである。

この桜ヶ丘第二高等学校も、その御多分にもれず秋晴れ下「体育競技会」なる、ぶつちやけ運動会の高校生バージョンが開催されていた。

つまり、全国のインドア至上主義な真摯にとって、実に迷惑この上ないイベントである。

いつもの僕なら、よりも深刻な顔をして、一秒でも早く終わる事を願いながら終始つまらなそうにしていたに違いない。

だが、今年は一味違った。

曲がりなりにも生徒会役員である僕は、競技には参加せず裏方として行事を円滑に回すべく動いていた。

具体的に言えば、実行委員のお手伝い。つまりは雑用である。

この学園の生徒会は、何でも屋的な性質やスタンスがあるらしく、あれやこれやとイベントのたび、こうして雑用としてこき使われる。いい加減そんな扱いにも慣れ始めていたし、それよりなにより、こんな健全で若者的で、ひたすらに疲れそうな行事に参加するくらいなら喜んで雑用に徹するというもの。つまりは、僕にとって渡りに船。願ったり叶ったりなこの状況。

そんなわけで、僕はこの救護テントにて保険委員と共に絶賛待機中なのであった。

が、僕の隣のこの男は、相変わらずこの状況に不満タラタラらしく。

「嵐、俺はこんなことをするために生徒会長になったんじゃないんだよ。もっとこう、女子にモテたいとか、ちやほやされたいとか、尊敬されたいとか……は、置いておいてだな」

「はいはい。9割9分9厘、私利私欲のためだろ？ 事実、邪な事しか考えてなかったじゃないか」

推薦人として選挙に付き合わされただけでなく、結局こうして生徒会役員までさせられているこちらからすれば、もう少し自分の立場というものを弁えてほしいところ。

まあ、イタルに言ったところで到底無駄だろうけど。

「おいおい嵐ー、いつまでそんな昔の事をいつてるんだよ。今の俺はあずあず一筋だぜ？」

「あずあずゆるーな。未だに、まともに相手すらして貰えてない癖に」

「おまつ、俺が気にしてる事をグサグサと」

そりゃ、会うたびにあれだけストーカー紛いの行動を続けていれば、当然の報いだと思う。むしろ、それでもイタルに法の裁きを与えない東さんの心の広さに敬意を表したいくらいだよ。

僕はわざとらしく大きなため息を一つついた後、目の前で繰り広げられている騎馬戦に視線を移した。

「だが、そう言っただけでいられるのも今のうちだがな」

そう言っただけで不敵な笑みを浮かべるイタル。これまでも何度となく目にしてきた不吉な笑み。

こういふときのイタルは、大抵ろくなことを考えていない。むしろ厄介事しか考えていないのだ。

目の前では、騎馬戦に続きナン食い競争が行われていた。むしろパンではなく何故ナンなのか？

今時パン食い競争なんて小学校でもなかなかお目にかかれないくらいに絶滅危惧種だというのに、この学園の場合、それが古くからの伝統行事なのだから始末に負えない。では何でナンなのか？

古気を知り、新しきを得る。温故知新。そんなこの学園の校風がこのパン食い競争という古き良き伝統行事を、ナン食い競争という形で、このグローバル社会への迎合の一つとして差し向けられたという…のは勿論大嘘。

ズバリ、真実は何代か前のダジャレ好きの校長の親父ギャグが事の発端だったという。いずれにしても、そんな行事が何年も続く伝統行事になってしまうのだから、不可思議窮まりない。

というか誰も止めなかったのか！

テントの数メートル先にセットされ、ぶら下げられたナンに、今まさに選手が食いつかんと飛び跳ねている。

「むしろカレーが食べたいね、僕は」

「何でそこでカレーの話が出てくるんだよ！　というお前、俺の話聞いてた？」

僕の現実逃避中、どうやらイタルは勝手に何か喋っていたらしい。嫌な予感しかないので、正直聞きたくない。

「だから。終盤の名物競技、部・委員会対抗リレーに俺達生徒会も参加するって話だ」

「は？」

「だからな？　対抗リレーに」

「いやいやいや。聞こえてるから。わざわざ言い直さなくても十分聞こえてるから。むしろ、は？　なのはその内容だよ。対抗リレーに参加？　って、聞いてないぞそんなの」

「そりゃそうだよ」

自信満々で、ドヤ顔なイタル。

「たった今、決めたんだからな」

凍りつく僕、尚もドヤ顔なイタル。

「待て、待てイタル。まさか、もうエントリー済ませたとか言うんじゃないだろうな？　事後承諾決じゃあるまいな？」

「ふっ。流石は嵐だな、良く分かってんじゃないか。もしかしてやる気まんまんか？」

ソナナワケナイダロ、コノヤロウ。

折角このまま何事も無く競技会を終えられると思っていたのに、完全にそう思っていたのに。最後の最後にイタルサプライズ発動。

僕は怒りに震えながらも、努めて冷静に言った。

「そんな無茶が良く通ったな？」

「ああ。職権乱用した。ひゃっひゃっひゃ。流石は生徒会長。この程度の事ならゴリ押しで何の問題も無いもんな」

「つまり、だ。今回の競技会では、生徒会として裏方に徹して目立ってなかったから、最後のこの対抗リレーで東さんに良いとこ見せたいと、

そういうことなのかな？」

「見損なうなよ、嵐！俺がそんなちんけな漢に見えるのか？俺はなあ、俺は…東さんからバトンを受けたいだけなんだ！」

ああ、最低だよ、コイツ。

つまりこれは、生徒会選挙の時と同じパターンだ。

つまり、後戻りはもうできない。

僕は急ぎよ生徒会の面々、鞍馬さん・東さん・白井を招集し、事の次第を説明した。

案の定、メンバーの顔色はよろしくない。それどころか数名に至っては露骨に嫌な顔をしてる。

いや、気持は痛いほどわかるけど。

「はあー？アンタ馬鹿なの？何でそういうことを勝手に決めてんの？しんっんんじらんない」

「えとえと、落ち着いて紅ちゃん」

「これはもう鞍馬先輩に同意せざるを得ないですね。つーか、相変わらずのアホタレ会長はともかくとして、先輩は何やってたんですか？ぶん殴つてでも止めてくれればよかったのに」

大よそ予想通りともいうべき、三者三様の答えが返ってきた。

「ま、まあ、止められなかったのは確かに僕の落ち度だけだよ、こうなったらもうやることは一つしかないわけだよ」

「そうだね。わざわざ無理を言っつてエントリーさせてもらったのに今更やっぱり不参加じゃ、生徒会として示しがつかないもの」

流石は生徒会の天使、東さん。現状をすぐに理解してくれた。

「その通り。悲しいかな、それでも一応生徒の代表だからね。申し訳ないけど、覚悟を決めてひとつ走りするしかない」

僕の必死の訴えが通じたためか、皆やれやれと言った表情を浮か

べうなずいてくれた。

「しょーがねえですね。あーあ、このまま堂々とサボれると思ったのになー」

「はあー、ホント、何であんなのが会長なんだろ…でもま、やると決まったら勝ちにいくわよ！」

「ありがとう皆… え？ 鞍馬さん、本気で走るの？」

「何言ってるの花君、当然でしょ。例えこんなお遊び半分の競技でも、負けるのは嫌なのよ、アタシは」

どうやら鞍馬さんのスイッチが入ってしまったらしい。

これはもう、とりあえず適当に走って完走すればいいよね？ なんて、口が裂けても言えない。

「おうよ。分かってるじゃねーか鞍馬。我が生徒会に敗北の二文字はあり得ない」

「誰があんたの生徒会よ！ ふん、べつにアタシは単に負けるのが嫌なだけよ」

この二人、何だかんだで気が合うらしい。だからこそ、あんなポンコツ生徒会長でもやっていけると言っても過言ではない。

そんなことを考えながらも、にやにやと二人のやりとりを見守る僕。

と、東さんがそんな僕の様子に気がつき、ニコリと笑いかけてきた。… 成程、どうやらお互いに同じような事を考えていたらしい。

「ガキですね」

冷めた目で後輩ちゃんが一蹴する。

白井にとつてこの状況は厄介事以外の何物でもない様子。

こうなったら気が変わらないうちに、と僕は口火を開いた。

「それじゃ、早急に決めなきゃならない事があるんだ」

「分かってるぜ、嵐。誰が一番東さんに相応しいかってことだろ？」

「違う！ 全然違う！ しかもそのドヤ顔、非常に腹が立つ！ いか？ 走順だよ、走る順番」

落ち着け僕。

イタル如きにペースを握られてどうするんだ。

「ごほん。失礼、取り乱しました…で、どうする？」

「愚門だな。生徒会長足る俺が考えるに、最初は」

イタルが勢いよく片手を伸ばし、何か言いかけたその瞬間、東さんがおずおずと答えた。

「あのあの、私、皆さんの中で一番運動音痴だと思うから。出来れば最初がいいかな」

東さんがそう答えるや否や、全くめげないこの男は、今度は両手を天高くかざしながら言った。

「はいはいはいはいはいはいはいはい」

「五月蠅いイタル！」

「黙れ、バカ！」

気がつけば、僕と鞍馬さんは同時にツッコミと言う名の鉄拳制裁を加えていた。

「お、お前ら仮にも生徒会長である俺に向かって何てセリフを」

生徒会長は諦める気がさらさら無いらしく、鼻声になりながら熱弁を始めた。

「確かに、お前らの言う事も分かる。俺にアンカーを任せたいって事だろ？ だが、残念だったな。俺はもう、東さんからバトンを受けると、心に堅く誓っているのだ！ こればかりは例え蹴られようが殴られようが、矢が降ろうが、隕石が降ろうが、譲る気は毛頭ない！」

イタルは、実に清々しい表情で自分の欲望をさらけ切った。

ああ… この現代社会において、ここまで自分の欲望に忠実に従えるってのは大したもんだよ、イタル。

あまり認めたくは無いけど、やはり生徒会長の器としてはこれくらいの度量が必要なのだろうか？ … 内容はともかくとして。

とはいえ、流石の鞍馬さんもドン引き状態で言葉が出ない様子なので、ここはイタルの言い分を認めるしかない。

「分かった。イタルの無駄な情熱は嫌と言うほど伝わったからさ、

「先ず落ち着いてくれ。でもお前がアンカーをやらないとすると、やっぱり」

そう言っつて僕は鞍馬さんに視線を移した。

「いや、ごめん。アタシは無理」

ええええええ。さっきまであれほどやる気満々だったのに。何故だ、何故だ鞍馬さん。

「何か急に馬鹿らしくなっちゃって。だったら花君アンカーやっつてよ」

うええええええ。この僕がアンカー？ この僕が？

「ひゃっひゃっひゃ、そりゃいい。よし、嵐がアンカー決定な？」

「ぶぶぶ、先輩がアンカーですか。これはちよっと面白い事になっってきましたね」

ニヤリと嫌な笑みを向けてくる白井。

もつどうにでもなればいい。

こうして、なあなああのうちに対抗リレーの走順が決定した。

東さんから始まり、イタル、鞍馬さん、白井、そしてアンカーが僕。

他の部や委員会と比べて人数の少ない生徒会は、一人がトラック一周をする事となる。

そして、全員の準備が整ってすぐに競技開始時刻となった。

辺りを見回すと、それぞれの部活や委員会だと一目で分かる格好&バトン代わりにアイテムを持参している。

成程ね、ラケットやバット、ほうきや楽器、サッカーボール……待て、生徒会は？ 生徒会の場合は何をバトン代わりにすればいいんだ？

しまった、順番ばかりに気を取られていて全く考えてなかった。

「イタル！ バトンは？ バトンはどうする」

そんな慌てた様子の僕をあざ笑うかのように、イタルはにやけ顔で答える。

「落ち着けて風。言いだしっぺのこの俺が、それを考えていないわけがないだろう？ 安心しろ。ちゃんと用意してある」

そう言ってイタルが懐から取り出したもの、それは。

「きゃあああああああ」

「つて、なによコレは！」

東さんと鞍馬さんの悲鳴。白井の呆れ顔。

僕らの目の前には、「東さん型の等身大抱き枕」。

「おまつ、イタル、これ……」

「いいだろ？ 俺のお宝だぞ」

生徒会メンバーがドン引きする中、満面の笑みを浮かべるイタル。恐るべきメンタルである。

「生徒会の皆さん、準備をお願いします」

どうやら、僕らには文句を言う時間も残されていないようだった。涙ぐみながらも、自分自身の抱き枕片手にスタート位置につく東さん。なんだかシュールな光景である。

バーン！

「さあ、始めました部・委員会対抗リレー。ぶっちゃけクラス順位や、得点にはなんの関係のないこの競技ですが、それぞれの部や委員会で趣向を凝らした格好やバトンで観客を楽しませてくれる、毎年の目玉競技の一つでもあります。さあ、今年はどんな趣向で私たちを楽しませてくれるのでしょうか？」

とつとつ、対抗リレーが始まってしまった。

第一走者の東さんが懸命に走る。が、自身でそう答えていたように、運動オンチな東さん。

残念ながら、周りの走者からは大きく離されていた。

「現在トップは陸上部。当然ちゃー当然。というかガチです。バトンも普通の競技用バトンです。格好も競技用。ガッチガチです。一方最下位は生徒会。あははははは、これは一体どのような趣向なのでしょう？ 第一走者の東さんが自分自身の等身大の抱き枕を小脇に抱えております。本人の一生懸命さとは裏腹に、なんとも笑いを誘う光景です。これはもう間違いなく、生徒会長の趣味に違いありません」

最下位になりながらも、それでもなんとか、第二走者へとバトンをつなぐ東さん。

なんとというか、物凄く居た堪れない。間違いなく、今回一番の被害者は彼女だと思う。

「ご、ごめん、なさい。やっぱり、私、遅いから」

息も絶え絶えにそれだけを告げながら、バトン代わりの抱き枕をイタルへと手渡す。

「何言ってるんすかあずあず！ 素晴らしい走りでしたよ。俺は今、猛烈に感動しています！ そして、確かにバトンを受け取りましたからね」

うおっしやああああああ、という掛け声とともに一気に走りだすイタル。

「おーっと、生徒会第二走者の生徒会長堅氷イタル。歴代最低の生徒会長、変態野郎、バカボンボン等の通り名で知られる彼ですが、東さんの抱き枕をこれでもかとしっかり抱きしめながら、他の走者たちを次々と追い抜いていくー」

先ほどまで最下位だったのが嘘のように、次々とほかの走者を抜き、一気に上位へと躍り出た。

本々運動能力は高いうえに、東さんからのバトン&いいところを見せたいという私利私欲のため、本気になったイタルは、ガチだった。あつという間にトラックを一周。

第三走者である鞍馬さんへとバトンをつなぐ。

「うおら、鞍馬、こんだけ巻き返せばお前でも大丈夫だろ？」

「はあー？ いちいち力チンとくる言い草ね。見てなさい、このまま先頭に立ってみせるわ」

イタルから抱き枕を受け取った鞍馬さんが駆け抜けていく。

「エクセレント！ 生徒会長の女房役、副会長である鞍馬さんが、ここにきてガツチガチの陸上部を抜き去り何とトップへと躍り出た」

鞍馬さんの場合、かつて天狗の能力を自在に操っていたくらいのスベックの高さ。有言実行、その宣言通り、何と運動系の部活を追い抜き、本当にトップへと立ってしまった。

そして、第4走者、白井へとバトンをつなぐ。

「だーっつ、ほら、後輩ちゃん、後は頼んだわよ！」

「仕方ないですね、任せました」

自分より大きな抱き枕を片手に、懸命にトラックを駆け抜ける白井。

だがしかし、そんな彼女の頑張りも虚しく、一人また一人と彼女を追い抜いていく走者たち。東さんより運動能力は高いとはいえ、他の運動系部活の面々に比べたら雲泥の差。

イタルと鞍馬さんとで作ってくれたリードはあっという間に消化され、順位はすっかり半分より下。むしろビリから数えたほうが早いと言える。

「ここにきて順位は再び陸上部がトップ。次いで、野球部、サッカー部と続いています。先ほどまでの勢いはどこへ行ったのか？ 生徒会はずいぶんと後ろに下がってしまったんです！」

そして、対抗リレーもいよいよ終盤。

アンカーが次々と走り出す中、僕の目の前にも抱き枕を片手にした白井の姿が見えてきた。

「せ、先輩、この抱き枕、めっちゃくちや走りにくい！」

「だろうね。でもよく頑張ったよ白井。後は… 任せとけ！」

後輩の手前、そんな風にかっこつけて啖呵を切ってみたものの、具体的な策も、イタルや鞍馬さんのような運動能力があるわけでもなく。

必死になって走るものの、順位は一向に上がらない。そうこうするうちにトラックの半分が過ぎる。

「うおー、嵐。もっと本気だせやー。これまでの辛い修行の日々を思い出せー、あのデスマーチを思い出せやー」

してねーよ！ そんな修行も、デスマーチも。

「嵐さん、あのあの、私の事をよろしくお願いしますねー」

いやいやいや、東さん、それ、意味深に聞こえちゃうから。抱き枕をでしょ？ そうなんでしょ？

「せんぱい、中途半端はつまらないですからね、お願いしますよ？ 色々」

白井よ、どういう意味それ？ というか、普通に走っちゃいけないのかよ。

とはいえ、ここまで来たら僕だって何とかしたいと思う。でも、これが僕の限界。どうしたって運動部に勝てるはずもなく。

そうこうするうちにトラックを一周してしまった。

アンカーである僕はこのトラック二周してゴール。現在順位は半分よりちょっと後ろ。

別に、このままゴールしてもいいんじゃないだろうか？ 1位になったから何かがあるわけでもなければ、最下位になったら罰ゲームがあるわけでもない。

…………… 本当にこれでいいのか？

全身に漂う疲労感と、乱れた呼吸の中、ふいに僕の背中に急な違和感。

眩い光と、じんじんとした熱と痛みとともにあらわれたもの……………

それは、天使の翼だった。

「え？ えええええええ。何で？ 何で急に？ リンネもないし、伝承もないけりゃ、試練でもないのに。ただのリレーだぞこれ？ なのになんで？」

突如、僕の背中に出現した天使の翼。

最初の試練で大雨の中、春雨先輩を病院へと運んだときに出現したあの翼である。

が、前回とはわけが違う。なぜ急に生えてきたのかすらわからない。その上、制御のための天使のワツカは何故か現れない。

僕が混乱するさなか、僕の意味とは関係なく、翼が大きくはたらく。

「ちょ、ちょっとちょっと、全然僕の言うこと聞かないじゃないか。え、え、ええええええええ？」

暴走状態。

最後の直線に差し掛かった時、僕の翼は完全に暴走状態へと陥った。

僕の意味とは関係なく、背中の翼は一種のジェットエンジンと化し、僕を前へ前へと追いやる。

「うおおおお嵐。お前はやるときややる男だと思ってたぜ！」

「どうしたことでしょう！ ここにきて生徒会アンカー、書記の花嵐君が一気に加速。信じられないスピードで次々と先頭集団を追い抜いていきます！ … というかあれ、ちょっと浮かんでない？」

はい、浮いてます。

どうしよう、どうなるの？ この状況。

「せ、先輩、それって思いつきり天使の力じゃ」

自分自身、制御しきれない力に振り回される中、僕の目の前には、もはや他の走者の姿はなかった。

「ゴーーーーー。大波乱の対抗リレー。今年の一位は、何と飛び入り参加の生徒会！ この展開だれが予想できたでしょうか？」

「ゴールテープを切った直後、背中の翼が音も立てずに消えたのが分かった。」

「が、それと同時に、全身の力も抜け、僕は、自らの意識の手綱も一緒に手放してしまっただけで。」

「お嬢様、ワタクシとてお嬢様の事が憎くてこのような事を申し上げていくわけではございません」

「ウソだっ！ 本当はあたしの事なんて嫌いなんですよ？」

「お嬢様… お嬢様はあの方の御息女、受け継いだ力も人一倍強い。その御身に秘めた力は図り知れません。だからこそ、お嬢様にはその力を制御する力、自分のものとする力を身につけていただきたいのです。その分、お嬢様には辛い思い、苦しい思いをさせてしまうかもしれません。どうか、どうかワタクシ共の気持もご理解していただきたい」

「分かってるよ、そんな事。でも、何で、何であたしなのかな…」
「…お嬢様」

また、あの夢？

気がつくくと、僕は保健室のベッドで横たわっていた。

競技会はすっかり終わってしまったらしく、校庭には後片付けをする委員会の面々だけが動き回っていた。

「よっ、お目覚めか？ さっきは大活躍だったらしいじゃねーか？」

僕のベッドにぬっと顔を出した人物、それは五月雨先輩だった。

「五月雨先輩。もしかして、ここでずっとサボってたんですか？」

「ああ、もしかしなくても当然そうだな。あんなだるそうなもん、

アタシは出ない」

そうキツパリと男らしく言い切ったのち、自分のベッドへと戻っていく五月雨先輩。

外の景色はすっかりオレンジ色。僕は壁に掛けられた時計に目をやる。

「うげっ、6時？ 2時間以上も寝てたのか」

「もやし野郎のくせして頑張りすぎるからそうなるんだろ？ ああ、そうそう。他の生徒会の連中なら今頃後片付けだな。さっきまでここにいたんだが、アタシが追っ払っちまったぜ。あれだけの人数にここにいられたんじゃ、落ち着いて昼寝もできねーからな」

もしかして、先輩、僕のことずっと看ていてくれたのだろうか？

そのためにわざわざこんな時間まで残っていてくれたのだろうか？

「ありがとうございます。先輩。体は… すっかりよさそうです」

「そいつは良かった。ま、これに懲りたらあんま無理はしないことだ」

そう言っつて、ベッドから飛びのき、かばん片手に立ち上がる先輩。

「そんじゃーな、アタシは先に帰るぜ？」

片手をひらひらと振りながら、先輩は保健室を後にした。

そして、オレンジ色に照らし出される保健室に一人取り残される僕。

可笑しい。明らかに可笑しい。先ほどの天使の力の暴走、何度となく見せられるリンネの夢、体の変調。

僕の中で、何かが起ころうとしているのは明らかだった。

少なくとも、天使の翼の件については、リンネなら何かわかるかもしれない。そう考えた僕は、いつものように、心の中でリンネを呼ぶ。

いつもなら、ボンという派手な効果音とともにすぐにリンネが現れるはずなのに、どうしてなのか今日に限ってリンネは一向に姿を見せなかった。

結果、僕の疑心はより一層強いものへとなっていた。

僕は、リンネに真相を確かめるため、イタルにメールを入れた後、早々に学校を後にした。

後片付けや、急に倒れたことを謝りたいのはやまやまだけど、今は僕自身に起きつつある、変化の真相を探るほうが重要に思えた。これ以上、みんなに迷惑をかけないためにも。

「リンネ！」

僕は自分の部屋に入るなり、僕のパートナーである天使の名を叫んだ。

「どうしたの嵐？ そんなに慌てちゃって。お腹痛いの？ トイレ？」

「んなわけあるか！ 今日、学校で急に天使の翼が生えてきたんだ。それって君の仕業なのか？」

「ぼかん、と口を開けてただただ僕を見つめるリンネ。僕、そんなにおかしいこと言ったか？」

そんな風に反応されては、こちらもどうしていいのかわからない。「えっ、と。やっぱり何かまずいのか？ リンネの悪ふざけとかじやなかったってことなのか？」

「う、うん。それに関しては少なくともあたしはノータッチ。でも、そんなのあり得ないよ！ 天使の意思とは関係なく、その力をパートナーが単独で行使するなんて」

僕らの間に流れる長く重たい沈黙。どうやらリンネにも事の真相は分からないらしい。

「とりあえずさ、今は何ともないみたいだし。明日は休みだし。幸い次の試練の反応も無いみたいだし、暫くは様子を見てみよう」

競技会の疲れもあり、結局のところ何も解決しないまま、抜けない棘を抱えた僕の心情とは裏腹にこの日はあっという間に眠りにつ

いてしまった。

「例えばです。お嬢様は、仮にもこの天界の上に立つ存在。だからこそ、我々はあなたを特別扱いするわけにはまいりません。つまりですね、お嬢様にも他のテナタマ同様下界に出していただき、きちんと試練を受けていただく事になります」

「うん。別にいいよ？」

「… よろしいのですか？ 本当に？」

「なに、その顔は？」

「いえ。お嬢様の事ですから。もっと駄々をこねるかと身構えていたのですが」

「にやにやよう、失礼しちゃうなもー。あたしだって自分の立場くらい理解してるよー。それにね、楽しそーじゃん、下界って！」

「お嬢様、御立派になられて…。ワタクシ、大きく成長されたお嬢様に、再びお会い出来る日を心待ちにしておりますぞ」

「任せてよっ！」

もう何度目になるのか？ とある天使の夢。

とぎれとぎれの天使の記憶。それらは一体、僕に何を訴えているのか？

ふと、時計を睨むと時刻は午前6時。休日にしては随分と早く目が覚めてしまったようだ。

相変わらず全身がだるい。昨日天使の力を行使してからよりいっそうその傾向が強くなっていた。

僕は二度寝する気分にもなれず、部屋の片隅に目をやる。

彼女は、空中に浮かびながら気持ち良さそうに寝息を立てている。あの天使が僕の元にやってきて早半年。今となってはすっかり見慣れたいつもの光景。

この半年間は、僕にとって本当に長く、そしてあつという間の時間だった。

だが、そんな時間ももうすぐ一つの結末を迎えるような、そんな気がしていた。

・
・
・

ところで、あそこで寝ている天使の名前って、何だった？

「ふわぁー。むにゅううう、朝だー」

天使は、空中で大きく背伸びをした後、僕の視線に気がついた。

「はにゃ？ 嵐おはよー。なーに？ さっきからあたしの事見つめちゃって」

「うん、お早う。てんしさん」

いつもと違う僕の態度が気になるらしく、首をかしげる天使。

「なになに、ホントにどーしちゃったの？ 変な嵐ー」

どう切り出せばいいんだろう？

彼女の屈託のない笑顔を見ると、今から言うセリフが非常に申し訳なくなってくる。

それでも、このままの状態にいるわけにはいかない筈。たぶん。

僕は余計な感情を振り切り、思い切って言い放った。

「あのー、怒らないで聞いてほしいんだけど… 君の名前が、その、どうしても思い出せないんだ」

目の前の天使は、今まで見せた事がないような悲しい表情を浮かべながら、僕を見つめ返した。

「ご、ごめん。そんな顔をさせるつもりは無かったんだ。でも、ごめん。本当に思い出せない」

天使は何かを決意したかのように、先ほどまでとは打って変わって厳しい表情浮かべる。

「嵐、思い出せないのはあたしの名前だけ？　あたしと一緒にこれまで続けてきた試練の記憶はある？」

「あ、ああ。それは大丈夫。一番最初の雨守先輩達の雨女から、この間のゆーこの悪霊までばっちり覚えてる。問題ない」

「そっかあ、良かった」

そういつて安堵の表情を浮かべる天使。

先ほどの言葉通り、彼女と行ってきた試練の数々は事細かに覚えている。むしろそれは、僕にとって忘れよもの無いもの筈だった。それなのに、そのはずなのに、どうしても彼女の名前だけは思い出す事が出来なかった。

まるで、最初からその名前を聞いていないかのように、すっぽりとその記憶だけが抜け落ちていた。

「やっぱりアレ、なんだよね。これって」

「アレ？　アレって何？　心当たりでもあるのか？」

「ごめんね、嵐。実はあたし」

リンネがそう言いかけたその時、僕の部屋の隅で、唐突に何か光り始めた。

「何事？　何が光ってるんだ？」

僕らは急いでその発光元に近寄る。

これは、鉄板？　はて、この謎の鉄塊は何だったか？

揺らぐ記憶を揺さぶるように、僕は目の前の謎の物体Xについての記憶を探った。

……………　思い出した！

これは、月美ちゃん鞆にあったものだ。

懐かしさと同時に、当時の記憶が鮮明に蘇ってきた。

そつだ確かあれは、天使と出会った日の朝、月美ちゃんから没収したもの。

当時は、何故彼女の鞆にこんな無骨な鉄塊が入っているのかと、疑問に思ったのも確かだったけど。

そのまま僕の部屋の片隅で半年間も忘れ去られ現在に至るわけで。
(ぶっちゃけ、第0話参照)

「嵐、何であなたがあれを持っているの？ あれって天使の使う移動ツールの一種で、ゲートっていうんだけど」

「はああああああ？ 何故って言うか、月美ちゃんが持ってたんだよ、あれ」

「ルナが？ ってことは」

鉄板だと僕が勝手に思っていたそれは、どうやら扉だったらしく、観音開きに両サイドに扉が開き、その中からさらに光が漏れる。

中から現れた人影、それは勿論。

「っ、疲れた。これ、久しぶりに使ったけど、やっぱり、苦手、吐きそう」

開口一番、吐きそうとのたまうこの人物。否、天使。

僕も良く知るこの天使。

「もしかして、月美ちゃん？」

月美ちゃんは僕の顔をまじまじと見つめた後、にっこりと微笑みながら言った。

「久しぶり、だね、嵐。それに、XXも」

XX？

今、月美ちゃんは僕の隣の天使の名前を言った。確かに言った。が、不思議な事に、僕の耳にはその言葉だけ、その名前だけが入ってこなかった。

「ルナ！ ひっさしぶりー。まさかルナが来るとは思わなかったけ

ど、ごめんねー、わざわざあたしのために」

「問題、無い、よ。こちらの、都合でも、あつたから」

「ちよ、ちよつと待つてくれ。確かにさ、月美ちゃんと再会できたのは凄く嬉しいよ。言いたい事もたくさんある。でも、取り敢えず今はこの状況を説明してくれるとありがたいんだけどな」

天使と月美ちゃんは顔を見合わせ、あははと笑いあつた後、天使の方がその口を開いた。

「にはははは、ごめんごめん。つて、実のところ笑つてごまかせる状況じゃないんだけどね」

「それつてつまり？」

「嵐の今の状況、たぶんあたしのせいなの。あつても、嵐のせいでもあるんだよ？」

「僕のせい？」

天使のせいでもあり、僕のせいでもある。成程、さっぱり意味が分からない。

僕が難しい顔を浮かべていると、天使が慌てて言葉を続けた。

「順を追つて説明するね？ まず、嵐のその症状。体の倦怠感、あたしの記憶が夢として嵐の中へ流れ込んだこと、天使の力の暴走、そして、パートナー天使についての記憶障害。幸いな事に、どれもまだ初期症状何だけど。これらから導き出される答え、それはね…」

天人五衰病」

天人五衰病？ 病つてことは病気？

「病気だつたの？」

「うーん、嵐の知つてる病気とはちよつと違うかなー。天人五衰病はね、元々天使が掛かる病気なの。でも、ごく稀に天使のパートナーの人間が掛かる事もある。ほんとーにごく稀だけどね。だからあたしも最初、嵐がこの病気だつてなかなか気がつかなくつたし、断言が出来なかつたの。ま、いい訳だけどね」

衝撃的な登場から打つて變つて今まで黙つて成り行きを見守つていた月美ちゃんが、その口を開いた。

「天人五衰病に掛かる原因は、幾つか、あるけど。今回の場合、嵐の、天使としての才能と、X Xの力の大きさ、と修行不足、が原因」
僕の才能？ この平凡凡、普通代表を地でいくこの僕に？

「にゅふふ、嵐ってばいつも自分は普通だーなんて言ってるけどさ、実はこんな凄い才能があつたんだよ？ 知ってた？」

「なんつてこつた。ついに僕の時代到来か。で、その天使の才能って何？」

「簡単に言うと、天使との相性とか、適正とか適応度が優れてるってことね。だから天使の力をあれだけ使いこなせたの。後は、そうね、人間以外に好かれやすいとか、非日常を惹きつけやすいとか。」

「後半明らかに天使と関係ないよね？ ね？」

「それって、日常生活では役に立つどころかほぼマイナス的要因しかないじゃないか。」

いらねえ、そんな才能凄くいらねえ。

僕が、半べそ状態で虚空を見つめていると、慌ててフォローに入る天使。

「本当はもつと色々あるんだけど、たぶん嵐には理解できないと思うからにやー。今はあくまで一例だよ、一例」

「そ、そうなの？ 僕の才能なのに、僕が理解できないって一体…」「ぷぷぷつ。つとごほん。まー、嵐の才能については一旦置いておいて。それじゃ話を進めるね？」

天使は、どこから取り出したのか巨大なブラックボードを空中へと展開させた。

ふわふわと宙に浮く二人の天使、その下で正座をして上を見上げる僕。

シニールだ。

僕は、反射的に勢いよく手を挙げた。

「はい先生。さっきの月美ちゃんの話だと、先生の力？ にも原因があるってことでしたけど、それはどういうことでしょうか？」

名前が分からないというのは存外不便なもの。

いつまでも天使さんなんて呼ぶわけにもいかないこの状況で、彼女が黒板を取り出してくれたのは、僕にとって僥倖だった。

「良い質問だね、嵐君。はぁー、そうなんだよねー。嵐と同じでさ、あたしもこの天使の力ってやつが人一倍、天使一倍強いらいんだよね〜」

「当然と言えば、当然、だよ。だって、XXは、王女、だもん」

はははは。何だ、王女か。そりゃ血筋からして天使の力が強いってのも納得だよな。

そっか、王女かー……………は？

「王女？ 王女ってつまり、天使の王様の娘ってこと？」

「にやははは。実は」

「ええええええええええ。ぜんんんんんぜん、そうは見えない。むしろそんな高貴な空気はーミクロンも感じなかったぞ、僕は」

僕の発言にぶくーっとな頬を膨らませる先生。

「失礼だなー嵐。そりゃまあ、あたしなんて所詮は末っ子だし、王位継承権だつて下から数えた方が早いけどさ、一応これでもお嬢様なんだよ？」

ナンテコツタ。ナンテコツタ。

「嵐の才能にあたしの力。それが重なって天使病なんて結果を生んじやったのねー」

「最も、XXが、自分の力を、完璧に制御、出来ていれば、こんなことにはならなかった、かも」

ルナの発言に対し、テへと可愛らしく舌を出す僕のパートナー。

「いやー、痛いところを突いてくるにゃールナは。あたしって、昔からその力の制御がヘタクソなんだよねえー。面目にゃい」

「僕がその天使病に掛かった原因は分かったけど。具体的には今後そうすればいいの？ というか僕はどうなっちゃうの？」

今度は僕の発言に対し、浮かない表情で僕の顔をじつと見つめてくる僕のパートナー。

「あのね？ このままいくと嵐は人間じゃなくなる。そんでもってあたしのテナタマ試験は失敗ってとこだね」

実に重いボディーブローを喰らい、ふらつく僕。

人間じゃ無くなる？ それじゃあ僕は何になるんだ？ 人でなし？

いや、それよりテナタマ試験が失敗だって？

それは駄目だ。絶対に駄目だ。それってつまりかつてのルナと同じ、XXが墮天使になるってことじゃないか。一人でパニック寸前状態の僕。叩きつけられた現実、早々甘くない。

ちゅっ。

そんな僕の頬に軟かな感触。かつて一度だけ味わったことのあるピンク色の衝撃。

「な、な、な、何やってんの月美ちゃん。今、いま、僕に」

顔をほんのり赤く上気させながら、もじもじしている月美ちゃんが答える。

「うん。だから、私 came。嵐と、XXを助けるために。今度は、私が、二人を助ける番。だから、私が志願した」

「にやるほどー、だからルナ came だね？」

「うん。私は、この半年間で、かつての力を取り戻した。これは、私が再びテナタマ試験を受けるための、リハビリ兼最終試験、なの」
駄目だ、やっぱり二人の会話についていけない。結局、これってどういうこと？

「つまり、私も、嵐のパートナーに、なるってこと。これで、万事解決」

それは、実にシンプルな回答だった。

つまり、二人の話をまとめるところだ。

僕は、悲しいかな自らの良く分からない才能と、実は王女だった僕のパートナーの均制御できない力のせいで、天人五衰病なる本来天使がかかる病気になる。

人間が掛かった時の症状としては、様々なものがあるものの、最終段階としては、二つ。一つは自身が人間ではなくなる事、もう一つはパートナーとの記憶、絆の消失。それはつまり、テンタマ試験の失格を意味していた。

それを回避すべく現れたのがかつての僕の幼馴染十五夜月美こと、墮天使ルナ。ルナは天界でかつての天使としての力を取り戻すべく、再びテンタマ試験へと挑むべく日々リハビリに臨んでいた。

そこで僕のパートナーからの緊急コールに答えて現れたのが彼女。僕のパートナー自身も、まさかルナが来るとは想定外だったらしいが、復帰への最終試験としてや、かつての僕との関係を買われて今回彼女が抜擢されたらしい。

で、問題はここから。

この天人五衰病。一旦掛かってしまうと、人間の病気のように抜本的に治す薬やワクチンは無いらしい。

そこで今回とった選択がこれ。ルナが僕のパートナーになる事。

これは原因の一つである、僕の歪な才能の問題を解決するための処置。才能ってものはある意味無意識のもの。修行や鍛錬でどうこうなるものではない。が、この天使の才能に関して言えば、ある程度馴らす事が出来るようになるらしい。

それが何故ルナがパートナーになる事と結びつくかと言えば、もう一つの原因と関連する。

そのもう一つの原因。

それは元々の僕のパートナーの王女としての天使の力。ルナにき

つぱりと鍛錬不足と認定されてしまった彼女。上述通り、この天使病を解決するには、元となった原因を取り除く以外には無い。つまり、彼女が彼女自身の力を完全に制御できるようにする必要があるので。

そのため、彼女は一旦テンタマ試験を中断し、天界へと帰り再度、力の制御のための修行を積む事となった。

その間、僕の方の問題を解決するための要員として、ルナがピンチヒッターとして暫くの間、僕のパートナーを務めると言う事になったというわけ。

テンタマ試験ではないとはいえ、ルナが復帰するための試験の一回と言う事で、今までの試験同様の日々が続くらしい。

極々シンプルにかいつまんで言うと、パートナーが一旦ルナに変更になったということ。

僕の非日常な毎日、引き続き変わらないということ、らしい。

一通り説明し終え、きゅっきゅとブラックボードに書かれた文字を消していく二人の天使。

その背中を見つめていると、走馬灯のように今までの記憶が思い出された。

思えば、振り回されっぱなしの半年間だった。けど、悪くなかった。

手に着いたチヨークの粉をパンパンとはたき落としながら、僕のパートナーがにっこりと微笑んだ。

「と、言う事であたしは暫く実家に帰ります。嵐が寂しくないように、このルナを置いていきます。でも、あたしが居ない間浮気しちゃめーだよ、なんちって」

その刹那、彼女の足元が光を放ちながら少しずつ消えていく。これは、かつてのルナと時と同じ。

つまり、早くも別れの時、らしい。

「あつちやー、もう転送が始まつちやつたよ。相変わらずせつかちだなー天界つてやつは」

「もう、いつちやうのか？」

「にはははは、なーにしんみりとした顔しちやつてるのよ嵐。笑つて笑つて？ あたし達に、そんな別れ方は似合わないでしょ？」

「… そりゃそうだ。それに、今生の別れつてわけでもない。でもなー、こんなときに君の名前を呼べないつてのは我ながら情けないよ」

そう、これはあくまで前向きな解散。

僕と彼女の間、しみつたれた別れは似合わなかった。

「だよなー。あたしもさつきから違和感ありまくりだよ。でも安心して、今度嵐の前に姿を現すときは、ちゃんどあたしの名前を思い出させて見せるんだから！」

「ああ、分かつてるよ。ま、何十年先になるか分からんけどなー」

「ぶー。嵐つたらこの期に及んでまだそんな事言うのねー。覚えてるー、光の速さで終わらせてすぐに戻つて来てみせるから！」

「期待してるよ。天使さん」

そんなことを言いあい、僕らはハイタッチを交わした。

天使とハイタッチ。

「にはははは、まかせといて。あーそうそう、皆に宜しく言つてね？ 皆あたしがいなくなつてさびし」

バリツという音を最後に、完全にその姿を消した僕の元パートナ

ー。
その元、という文字が解消されるかどうかは今後の彼女と、そしてこの僕の頑張り次第。

「… 最後の最後まで元気な奴だったな。ま、どーせすぐに戻つてくるんだろうけどね」

気のせいかな、彼女の居なくなった部屋は酷く静かだった。それに、

いつもより広く見えた。

「って気のせいじゃない！ 月美ちゃん。月美ちゃんが居ない」

やけに静かだと思ったのは気のせいでも何でもなく、その実彼女が見当たらないからだった。

「相変わらずマイペースだよ、人間の時と何にも変わらない」

もしやと思い、僕は部屋の窓を開け、かつて「彼女の家」があった方角を見渡した。

案の定、月美ちゃんは空中に浮かびながら、今は何も無い空き地をただただ見つめていた。

「月美ちゃん…。君が天界へ帰った次の日には、もうこんな状態になってたんだ。でも、おじさんも月子さんもきつとどこかで元気に暮らしてると思う」

「うん。私も、そう思う」

「そう言えば月美ちゃん、喋り方は人間の時のままなんだね？ 確か、別れる直前は普通に喋ってたような気がしたけど」

僕のその問いかけに対し、ちよつとだけ照れ臭そうに笑いながら、月美ちゃんは答えた。

「うん。天使として本当は、人間だった時の癖は、直さなきゃいけない。でも、私は、十五夜月美が、好きだったから。嵐は、どつちが良いと思う？」

「そんなの決まってる。やっぱり僕は十五夜月美としての部分を残した君の方が…。その、うん、いいかな」

「うん」

それだけ言うと、月美ちゃんはふわふわと僕の部屋へと戻ってきた。

「嵐、改めて、これから私のパートナーとして、よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくね月美ちゃん…。ってやっぱりルナって呼んだ方が良いのかな？」

「別に。今まで通りで、いい、よ？」

「そっか。そう言えば月美ちゃんが僕の部屋にくるなんてどれくらいぶりかなー？ 小学校くらいまでは結構遊びに来たりしたよね？」

「たぶん、高校に入ってから、一度も無いと思う」

「そう言えば、そうかも」

ここでふと、ある思考が僕の頭を巡る。

待てよ、月美ちゃんがパートナーになったってことは… おいお

おい、この部屋で一緒に暮らすってことか？

はははは、いやいや待て待て、冷静になれ僕。

相手はもう人間じゃない、天使だぞ？

確かに幼馴染だが、今は天使だ。

いや、でも月美ちゃんは月美ちゃんなわけで…。

僕は、唐突に部屋の柱に頭を打ちつけながら叫んだ。

「うおっしやおらああああ、耐えろ、耐え抜け僕の理性！」

「嵐、嵐、どうしたの？ お腹痛いの？」

どうして天使ってやつは、お腹の心配ばかりするんだろう。それとも天界ではやってるギャグなのそれ？

その時、突然僕の部屋のドアが開かれ、鬼の形相の有須が部屋へと侵入してきた。

「兄さん！ 朝から何やってんですか、五月蠅いですよ！ やっぱ可笑しくなっちゃったんですか？ それともお腹痛いんですか？ お前もそれか。」

知らないうちに、どうやら僕は胃腸虚弱キャラにされてしまったらしい。

「… 嵐、全然変わってない」

そう言って嬉しそうに笑いながら、安堵の溜息を一つついた月美ちゃん。

「そう言えば月見ちゃん、これ言うのも変な感じなんだけど、一応誕生日おめでとう」

時刻は朝の9時。

外は快晴、雲一つない気持ちのいい秋晴れ。

僕にとって、ごく普通に騒がしい非日常な1日が始まるようになっていた。

今日は十五夜。この天気ならきっと、今夜は綺麗な月が見れるに違いない。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4645t/>

天使の溜息、108っ！

2011年6月23日22時10分発行